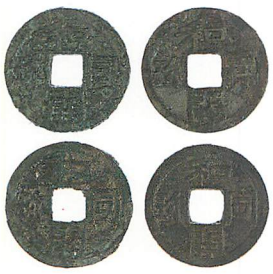
史跡 斎宮跡

平成14年度発掘調査概報

2004年3月

斎宮歴史博物館

第136次調査区全景（北から）



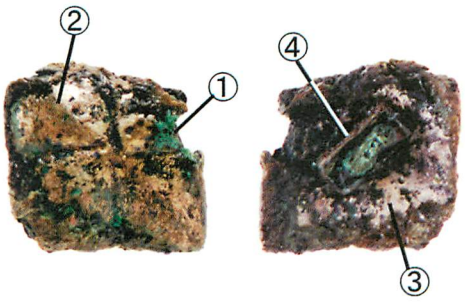
第130次調査出土和同開珎（表、2：3）

第130次調査出土和同開珎（裏、2：3）

第5次調査出土馬具（表、原寸）

第5次調査出土馬具（裏、原寸）

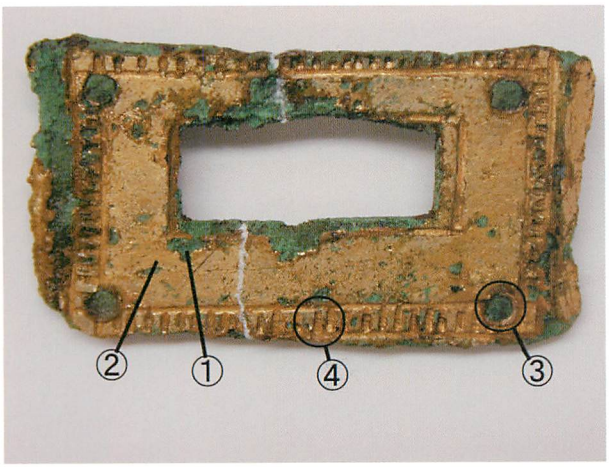
第133次調査出土釦処理前



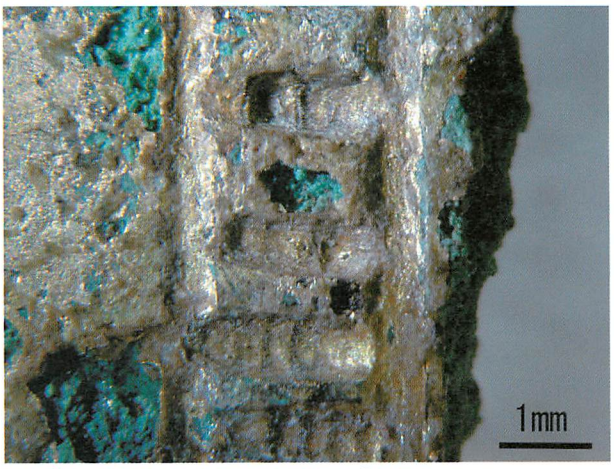
第133次調査出土釦処理後（数字はP143、144の本文に対応）

第137次調査出土毛彫馬具処理前（上：表、下：裏）

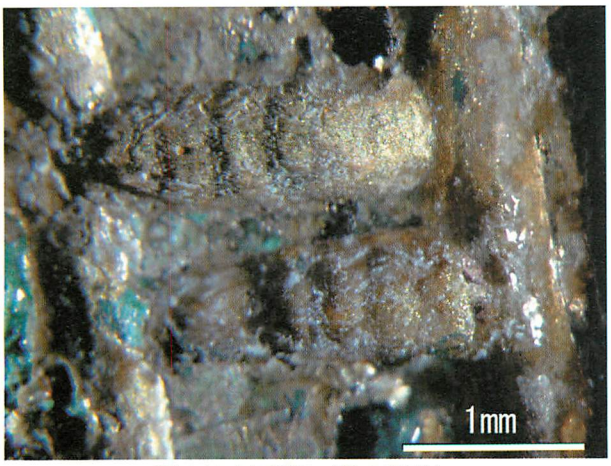
第137次調査出土毛彫馬具処理後（上：表、下：裏）



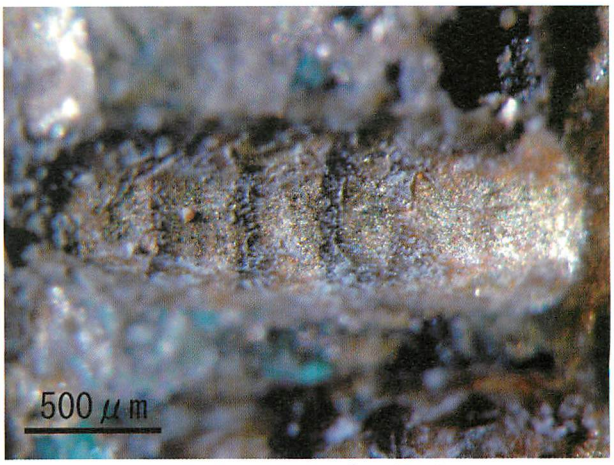
第137次調査出土毛彫馬具（数字はP144の本文に対応）



鏨痕拡大写真1（左④の部分）



鏨痕拡大写真2（④の部分）



鏨痕拡大写真3（④の部分）

序

史跡東部では、これまでの調査で平安時代を中心とした斎宮跡の様相が明らかとなっているのに対して、史跡西部では、飛鳥・奈良時代の斎宮跡が所在したと考えられていますが、その解明が進んでいませんでした。このため、飛鳥・奈良時代の斎宮跡（「初期斎宮」）の解明を、平安時代の斎宮跡解明に並ぶ当館の重点課題と位置づけ、その第一歩として、平成14年度から５ヵ年計画でトレンチ調査による範囲確認調査を開始しました。この第137次調査では、奈良時代の土坑から毛彫馬具が出土するなど、当時の様相を考える上で、貴重な成果があがっています。

このほか、平成14年度は２ヶ所の計画調査を実施しています。第136次調査は、史跡東部の寮庫区画南部の状況把握を目的としたものです。また、第139次調査は、奈良古道の範囲確認を目的としたものです。それぞれの成果については、本文のなかで各担当が述べておりますのでぜひ御一読ください。

これらの成果を見ますと、史跡斎宮跡ではかれこれ30年間余も発掘調査を継続しており、かなりのデータが蓄積されているわけですが、それでも毎年の調査によって新たな発見や疑問点が出てくることがよくわかります。地元明和町や三重県は言うまでもなく、日本国民共通の財産として、史跡斎宮跡に関する「知の情報」を提供し続け、この激動の時代においてもなお絶やすことのない、いや、このような時代だからこそ忘れてはならない「歴史に学ぶ姿勢」に、少しでも寄与できればと思います。

史跡斎宮跡の保存と調査研究・整備にあたりましては、地元明和町在住の方々、明和町および関係機関、斎宮跡調査研究指導委員をはじめとする諸先生方や文化庁から、有形無形の援助を頂いております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

2004(平成16)年　3月

斎宮歴史博物館
館　長　桂　川　　哲

例　　言

1　本書は、斎宮歴史博物館が平成14年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第136・137・139次調査）の概要をまとめたものである。

2　明和町教育委員会が、国庫補助金の交付を受け調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第138次調査報告書は、別途明和町教育委員会が刊行している。

3　遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、世界測地系の対応は、平成14年度については行っていない。方位は旧国土座標による座標北で示している。

4　遺構時期区分の指標となる土器の分類と時期認定については、「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ　斎宮歴史博物館　2001年）による。

5　遺構表示記号は次のとおりである。

　ＳＡ；柱列　ＳＢ；掘立柱建物　ＳＤ；溝　　ＳＥ；井戸　ＳＦ；道路　ＳＨ；竪穴住居
　ＳＫ；土坑　ＳＸ；土壙墓・墓　ＳＺ；落ち込み・その他

6　遺物実測図は実物の４分の１を基本とし、資料の性格に応じて変更したものもある。遺物写真はとくに指定した物以外は縮尺不同である。

7　出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（1995年版）に拠る。

8　遺物の文字表現には、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いている。

9　本書の執筆は、泉　雄二・伊藤裕偉・小濵　学・水橋公恵があたり、目次および文末に記した。編集は調査研究グループで行った。また、発掘調査および資料整理については、西村秋子・杉原泰子・八木光代のほか、次の学生諸氏の参加があった。

　服部英世・清野陽一・阿部美保・奥野絵美・竹内絵里奈・山田真靖・鈴木敦夫・大久保幸枝（以上、三重大学）、井上紗織（専修大学）

目　次

Ⅰ　前言 ……泉　雄二…… 1
Ⅱ　第136次調査 ……水橋公恵・伊藤裕偉…… 7
Ⅲ　第137次調査 ……小濵　学…… 37
Ⅳ　第139次調査 ……伊藤裕偉…… 87
Ⅴ　第７次調査 ……伊藤裕偉……103
Ⅵ　史跡斎宮跡出土資料の保存処理と自然科学的調査 ……山岡奈美恵・菅井裕子・渡辺智恵美
(財)元興寺文化財研究所……141

挿図目次

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図……2
第Ⅰ－２図　平成14年度発掘調査区位置図……3
第Ⅰ－３図　斎宮跡方格地割区画名称……5
第Ⅰ－４図　史跡斎宮跡における大地区（2002年）……6
第Ⅱ－１図　第136次調査区　位置図 ……7
第Ⅱ－２図　第136次調査区　大地区・グリット図……8
第Ⅱ－３図　第136次調査区　東壁土層図 ……8
第Ⅱ－４図　第136次調査区　平面図 ……9
第Ⅱ－５図　第136次調査区　掘立柱建物・柱列配置図 ……10
第Ⅱ－６図　第136次調査区　出土遺物実測図(1)……16
第Ⅱ－７図　第136次調査区　出土遺物実測図(2)……17
第Ⅱ－８図　第136次調査区　出土遺物実測図(3)……18
第Ⅱ－９図　第136次調査区　出土遺物実測図(4)……19
第Ⅲ－１図　第137次調査区　位置図……38
第Ⅲ－２図　第137次調査区　大地区・グリッド図……39
第Ⅲ－３図　第137次調査区　土層断面図(1)……40
第Ⅲ－４図　第137次調査区　土層断面図(2)……41
第Ⅲ－５図　第137次調査区　平面図(1)……42
第Ⅲ－６図　第137次調査区　平面図(2)……43
第Ⅲ－７図　第137次調査区　平面図(3)……44
第Ⅲ－８図　第137次調査区　SB8668・8674 平面・断面図 ……45
第Ⅲ－９図　第137次調査区　SB8669・8670・8671 平面・断面図 ……46
第Ⅲ－10図　第137次調査区　SB8668・8674 平面・断面図 ……47
第Ⅲ－11図　第137次調査区　SK8564、SH8576・8586 平面・断面図 ……48
第Ⅲ－12図　第137次調査区　SH8572・8574 平面・断面図 ……49
第Ⅲ－13図　第137次調査区　SH8573・8638 平面・断面図 ……50
第Ⅲ－14図　第137次調査区　SH8606･8607･8619･8641 平面・断面図 ……51
第Ⅲ－15図　第137次調査区　SH8604・8635 平面・断面図 ……52
第Ⅲ－16図　第137次調査区　SK8647、SX8575・8644、SZ8561平面・断面図……53
第Ⅲ－17図　第137次調査区　出土遺物実測図(1)……59
第Ⅲ－18図　第137次調査区　出土遺物実測図(2)……60
第Ⅲ－19図　第137次調査区　出土遺物実測図(3)……61
第Ⅲ－20図　第137次調査区　出土遺物実測図(4)……62
第Ⅲ－21図　第137次調査区　出土遺物実測図(5)……63
第Ⅲ－22図　第137次調査区　出土遺物実測図(6)……64
第Ⅲ－23図　SB8673と周辺の遺構……65
第Ⅲ－24図　馬具の部分名称……65
第Ⅲ－25図　第５次調査出土馬具の出土地点と遺物実測図…66
第Ⅳ－１図　第139次・第７次調査区　位置図 …87
第Ⅳ－２図　第139次調査区　平面・土層断面図……88
第Ⅳ－３図　第139次調査区　SH8685平面・断面図……91
第Ⅳ－４図　第139次調査区　SK8681平面・断面図……91
第Ⅳ－５図　第139次調査区　出土遺物実測図 …93
第Ⅳ－６図　第139次調査区　時期別道路遺構の変遷 ……95
第Ⅴ－１図　第７次調査区　地区割り図 ……103
第Ⅴ－２図　第７次調査区　平面図 ……104
第Ⅴ－３図　第７次調査区　道路遺構断面図 …106
第Ⅴ－４図　第７次調査区　出土遺物実測図(1)……111
第Ⅴ－５図　第７次調査区　出土遺物実測図(2)……112
第Ⅴ－６図　第７次調査区　出土遺物実測図(3)……113
第Ⅴ－７図　第７次調査区　出土遺物実測図(4)……114
第Ⅴ－８図　第７次調査区　出土遺物実測図(5)……115
第Ⅴ－９図　第７次調査区　出土遺物実測図(6)……116
第Ⅴ－10図　第７次調査区　出土遺物実測図(7)……117
第Ⅴ－11図　第７次調査区　出土遺物実測図(8)……118
第Ⅵ－１図　分析結果(1)……142
第Ⅵ－２図　分析結果(2)……142
第Ⅵ－３図　分析結果(3)……142
第Ⅵ－４図　分析結果(4)……142
第Ⅵ－５図　分析結果(5)……142
第Ⅵ－６図　分析結果(6)……142
第Ⅵ－７図　断面構造略図 ……143

写真図版目次

巻頭１　第136次調査区全景、和同開珎、馬具
巻頭２　釦、毛彫馬具
Ⅱ－１　第136次調査　遺構(1)……27
Ⅱ－２　第136次調査　遺構(2)……28
Ⅱ－３　第136次調査　遺構(3)……29
Ⅱ－４　第136次調査　遺構(4)……30
Ⅱ－５　第136次調査　遺構(5)……31
Ⅱ－６　第136次調査　遺物(1)……32
Ⅱ－７　第136次調査　遺物(2)……33
Ⅱ－８　第136次調査　遺物(3)……34
Ⅱ－９　第136次調査　遺物(4)……35
Ⅱ－10　第136次調査　遺物(5)……36
Ⅲ－１　第137次調査　遺構(1)……71
Ⅲ－２　第137次調査　遺構(2)……72
Ⅲ－３　第137次調査　遺構(3)……73
Ⅲ－４　第137次調査　遺構(4)……74
Ⅲ－５　第137次調査　遺構(5)……75
Ⅲ－６　第137次調査　遺構(6)……76
Ⅲ－７　第137次調査　遺構(7)……77
Ⅲ－８　第137次調査　遺構(8)……78
Ⅲ－９　第137次調査　遺構(9)……79
Ⅲ－10　第137次調査　遺構(10)……80
Ⅲ－11　第137次調査　遺構(11)……81
Ⅲ－12　第137次調査　遺物(1)……82
Ⅲ－13　第137次調査　遺物(2)……83
Ⅲ－14　第137次調査　遺物(3)……84
Ⅲ－15　第137次調査　遺物(4)……85
Ⅲ－16　第137次調査　遺物(5)……86
Ⅳ－１　第139次調査　遺構(1)……97
Ⅳ－２　第139次調査　遺構(2)……98
Ⅳ－３　第139次調査　遺構(3)……99
Ⅳ－４　第139次調査　遺構(4)……100
Ⅳ－５　第139次調査　遺構(5)・遺物(1)……101
Ⅳ－６　第139次調査　遺物(2)……102
Ⅴ－１　第７次調査　遺構(1)……131
Ⅴ－２　第７次調査　遺構(2)……132
Ⅴ－３　第７次調査　遺構(3)……133
Ⅴ－４　第７次調査　遺構(4)……134
Ⅴ－５　第７次調査　遺物(1)……135
Ⅴ－６　第７次調査　遺物(2)……136
Ⅴ－７　第７次調査　遺物(3)……137
Ⅴ－８　第７次調査　遺物(4)……138
Ⅴ－９　第７次調査　遺物(5)……139
Ⅴ－10　第７次調査　遺物(6)……140
Ⅵ－１　第５・130次調査遺物……145
Ⅵ－２　釦・馬具顕微鏡写真……146

表目次

第Ⅰ－１表　平成14年度発掘調査一覧……４
第Ⅱ－１表　第136次調査区遺構一覧……12
第Ⅱ－２表　第136次調査区掘立柱建物一覧……13
第Ⅱ－３表　第136次調査区緑釉陶器出土地点・破片数一覧……20
第Ⅱ－４表　第136次調査区出土遺物観察表(1)…24
第Ⅱ－５表　第136次調査区出土遺物観察表(2)…25
第Ⅱ－６表　第136次調査区出土遺物観察表(3)…26
第Ⅲ－１表　第137次調査区遺構一覧(1)……55
第Ⅲ－２表　第137次調査区遺構一覧(2)……56
第Ⅲ－３表　第137次調査区遺構一覧(3)……57
第Ⅲ－４表　第137次調査区竪穴住居一覧……57
第Ⅲ－５表　第137次調査区掘立柱建物一覧……58
第Ⅲ－６表　第137次調査区出土遺物観察表(1)…67
第Ⅲ－７表　第137次調査区出土遺物観察表(2)…68
第Ⅲ－８表　第137次調査区出土遺物観察表(3)…69
第Ⅲ－９表　第137次調査区出土遺物観察表(4)…70
第Ⅲ－10表　第137次調査区緑釉陶器出土地点・破片数一覧……70
第Ⅳ－１表　第139次調査区遺構一覧……96
第Ⅳ－２表　第139次調査区出土遺物観察表……96
第Ⅴ－１表　第７次調査区出土五輪塔一覧……110
第Ⅴ－２表　第７次調査区遺構一覧(1)……121
第Ⅴ－３表　第７次調査区遺構一覧(2)……122
第Ⅴ－４表　第７次調査区遺構一覧(3)……123
第Ⅴ－５表　第７次調査区掘立柱建物一覧……124
第Ⅴ－６表　第７次調査区出土遺物観察表(1)…125
第Ⅴ－７表　第７次調査区出土遺物観察表(2)…126
第Ⅴ－８表　第７次調査区出土遺物観察表(3)…127
第Ⅴ－９表　第７次調査区出土遺物観察表(4)…128
第Ⅴ－10表　第７次調査区出土遺物観察表(5)…129
第Ⅴ－11表　第７次調査区出土遺物観察表(6)…130

Ⅰ　前　言

1　調査の経緯と概要

史跡斎宮跡は、後に斎宮歴史博物館が建設された古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に発掘調査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国の史跡に指定された。県は史跡指定に伴い斎宮跡調査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年からは斎宮歴史博物館を建設し、史跡解明の計画調査を継続して実施している。

斎宮跡の発掘調査は、これまでの発掘調査成果の蓄積から、史跡東部に存在すると考えられる平安時代の斎宮跡の解明を中心として進められてきたが、史跡西部に所在すると想定されてきた飛鳥・奈良時代の斎宮跡を解明することも重要な課題として残っており、この課題解明のため平成13年度には第132次調査として面調査を実施している。

発掘調査

史跡東部の調査では、斎宮寮の中枢部である内院地区の可能性が強い牛葉・鍛冶山地区の調査、その最北端の寮庫推定区画について、これまでの数次にわたる調査で区画の解明がほぼ終了しているが、この両者の区画間の神殿推定区画については、西半部の解明が進んでいるものの、東半部については不明な点が多いため、平成13年度の第133次調査に引き続き、本年度は第136次調査を実施した。

史跡西部の飛鳥・奈良時代の斎宮跡の調査は対象地域が広いため、効率を考えてトレンチ調査による範囲確認調査を本年度から５カ年計画で開始することとなった。今年度は斎宮歴史博物館南側の旧竹神社周辺で第137次調査を実施した。なお、近鉄斎宮駅北側の「斎宮跡歴史ロマン広場」と斎宮歴史博物館を繋ぐ位置に存在する奈良古道についても不明な点が多いため、幅員を明らかにするための第139次調査を実施している。なお、各次数の調査内容については本文を参照されたい。

史跡整備

『史跡斎宮跡整備基本構想』に基づき、平成８年度から開始した近鉄斎宮駅北側での「斎宮跡ロマン広場」の整備は平成13年度に完了した。当該整備地の位置は、史跡東部で確認されている東西７区画・南北４区画の一辺120m程の方格地割の西北隅４区画の場所を占めている。この整備事業は、西北隅四区画の外周道路・溝等の整備のほか、平成11年度には体験学習施設「いつきのみや歴史体験館」、平成13年度には体験館の北側に1/10史跡全体模型を造成し、調査で区画の内容の判明している３区画については1/10建物模型を設置している。

平成14年度の整備は、前年度の「1/10史跡全体模型」内に設置した遺構の音声ガイダンス施設と同じ遺構の説明板（「内院」・「寮庫」・「古道」・「大溝」・「祓川」）を現地に設置し、1/10史跡全体模型と史跡の現地をリンクできるようにしたほか、近鉄斎宮駅前に史跡の案内板を１基設置した。

なお、平成14年10月2日に明和町総合体育館で第37回全国史跡整備市町村協議会大会が開催され、大会終了後、「斎宮跡歴史ロマン広場」および斎宮歴史博物館の視察を行った。

2　調査体制

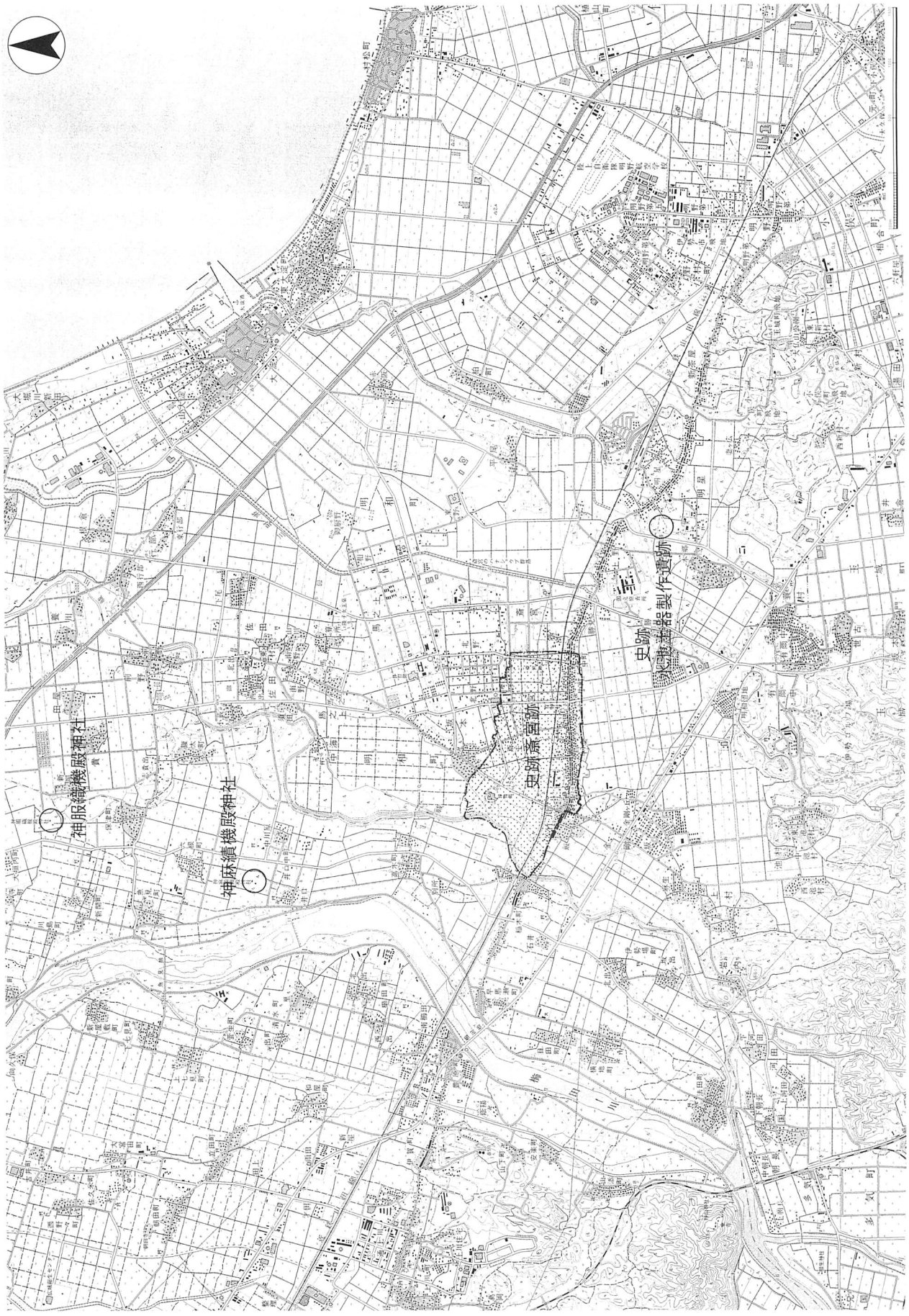
史跡斎宮跡の調査・整備に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究グループが担当した。当報告に関わる組織は以下の体制で行った。

平成14年度

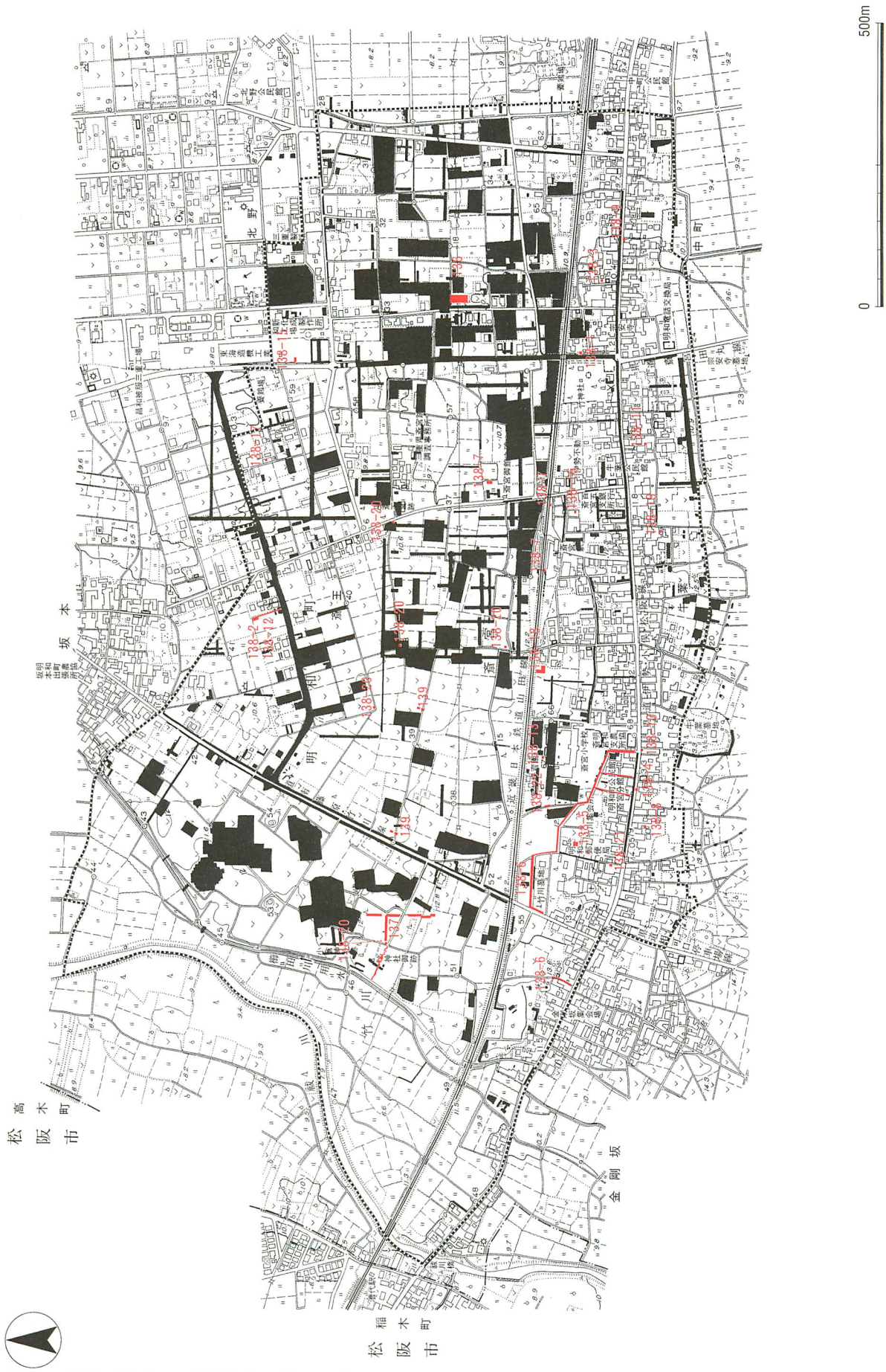
泉　雄二（主幹兼グループリーダー）・伊藤裕偉（技師兼学芸員）・小濵　学（主事兼学芸員）・水橋公恵（技師兼学芸員）

平成15年度

泉　雄二（主幹兼グループリーダー）・竹内英昭（主査）・伊藤裕偉（技師兼学芸員）・小濵　学（主事兼学芸員）



第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図（1：50,000）　国土地理院発行　1/25,000「松阪」「明野」（平成4年）より



第Ⅰ－２図　平成14年度発掘調査区位置図（1：10,000）

3　調査研究指導委員会議

斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、斎宮跡調査研究指導委員会議を実施している。平成14年度は、第１回を平成14年７月18日（木）、第２回を平成14年11月15日（金）に開催した。指導委員の方々は下記のとおりである（順不同・敬称略）。

上村喜久子（名古屋短期大学教授）
狩野　　久（京都橘女子大学教授）
北原　理雄（千葉大学教授）
佐々木恵介（聖心女子大学助教授）
鈴木　嘉吉（元奈良国立文化財研究所所長）
所　　京子（聖徳学園岐阜大学教授）
八賀　　晋（三重大学名誉教授）
町田　　章（奈良国立文化財研究所所長）
渡辺　　寛（皇學館大學教授）

なお、このほか本概報作成にあたり、下記の方々の助言を得た。（順不同・敬称略、所属は平成14年度当時）

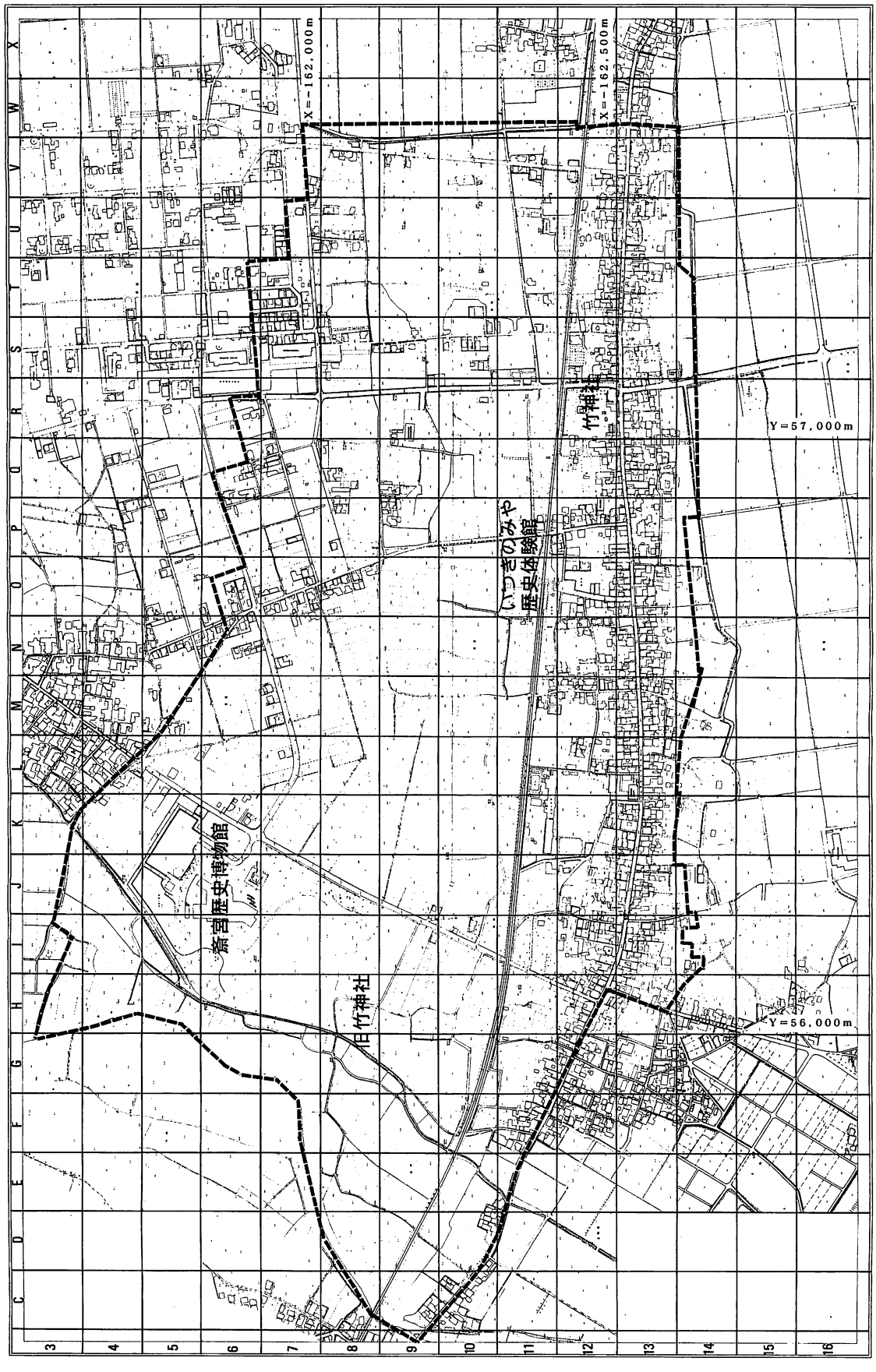
井上和人（奈良文化財研究所）、仁藤敦史（国立歴史民俗博物館）、藤田盟児（名古屋造形芸術大学）、平尾政幸（(財)京都市埋蔵文化財研究所）、古川義彦（関西文化財調査会）、上村安生（三重県生活部）、大川勝宏（三重県教育委員会）、尾野善裕（京都国立博物館）、木野本和之（亀山市教育委員会）、中野敦夫（明和町斎宮跡課）、贄　元洋（豊橋市教育委員会）、濵邊一機（北勢町教育委員会）、山中　章（三重大学）、渡辺博人（各務原市教育委員会）、大川操・萩原義彦（三重県埋蔵文化財センター）・角正芳浩（四日市教育委員会）・森川常厚（嬉野町教育委員会）、尾崎　誠・山岡奈美恵・菅井裕子・渡辺智恵美（(財)元興寺文化財研究所）

（泉　雄二）

調査次数	地　区	面積(㎡)	調査日時	位　　置	土地所有者	現状変更名	保存地区区分
136	S10	460.0	14.5.14～14.8.13	明和町斎宮字西加座	明和町	計画発掘調査	2
137	G8・9, H8・9	700.0	14.8.19～14.12.3	明和町竹川字中垣内	明和町・個人	計画発掘調査	1・2
139	J 9, L 9	92.0	15.2.4～15.2.12	明和町斎宮字塚山・字広頭ほか	明和町	計画発掘調査	1
138-1	S 12	9.0	14.4.15	明和町斎宮	個人	浄化槽設置	3
138-2	N 6	74.0	14.4.23～14.4.30	明和町斎宮字篠林	個人	住宅新築	3
138-3	T 12	4.5	14.4.18	明和町斎宮	個人	住宅新築	4
138-4	K 13	2.5	14.5.13	明和町竹川	個人	浄化槽設置	4
138-5	J 12	125.3	14.6.11～14.7.9	明和町竹川字東裏	竹川自治会	仮集会所建設	3
138-6	L 12・13	360.0	14.7.5～14.9.27	明和町斎宮	明和町	水道管改修	3
138-7	O 11, P 11	1.5	14.6.17	明和町斎宮字内山	近畿日本鉄道	支線設置	3
138-8	K 13	5.1	14.6.21	明和町竹川	個人	浄化槽設置	4
138-9	T 13	7.0	14.7.12	明和町斎宮	個人	浄化槽設置	3
138-10	K 13	3.4	14.7.19	明和町竹川字南裏	個人	浄化槽設置	3
138-11	Q 13	3.9	14.7.29	明和町斎宮	個人	浄化槽設置	4
138-12	L 7	0.8	14.8.2	明和町斎宮	明和町	水道管新設	3
138-13	K 11, L 11	11.0	14.8.20	明和町斎宮字広頭	明和町	斎宮小学校バリアフリー工事	4
138-14	P 10	22.0	14.8.21	明和町斎宮字御館	明和町	無料休憩施設建設	1
138-15	R 7	50.0	14.10.21～14.10.25	明和町斎宮字西前沖	個人	住宅建築	4
138-16	O 12, P 12	4.0	14.11.1	明和町斎宮字内山	個人	住宅改築	4
138-17	Q 6	6.0	15.1.17	明和町斎宮	個人	住宅建設	4
138-18	M 11	55.0	15.1.26～15.2.3	明和町斎宮字広頭	個人	住宅建築	3・4
138-19	O 13	4.5	15.1.21	明和町木葉山	個人	住宅増築	4
138-20	H 8, L 8, M 9, M 11, P 9	1.8	15.2.10	斎宮、竹川ほか	明和町	測量基準点の設置	1・2
138-21	I 13	3.7	15.3.10	明和町竹川	個人	住宅建設	4
138-22	J 11	4.9	14.9.27	斎宮336番１～334番１	明和町	水道管埋設	3

第Ⅰ－１表　平成14年度発掘調査一覧

第Ⅰ－３図　斎宮跡方格地割区画名称（1：5,000）



※太波線内が国史跡範囲、座標は日本測地系(旧国土座標第Ⅳ系)による

第Ⅰ－４図　史跡斎宮跡における大地区（2002年）

Ⅱ　第136次調査

（６ＡＳ10　西加座地区）

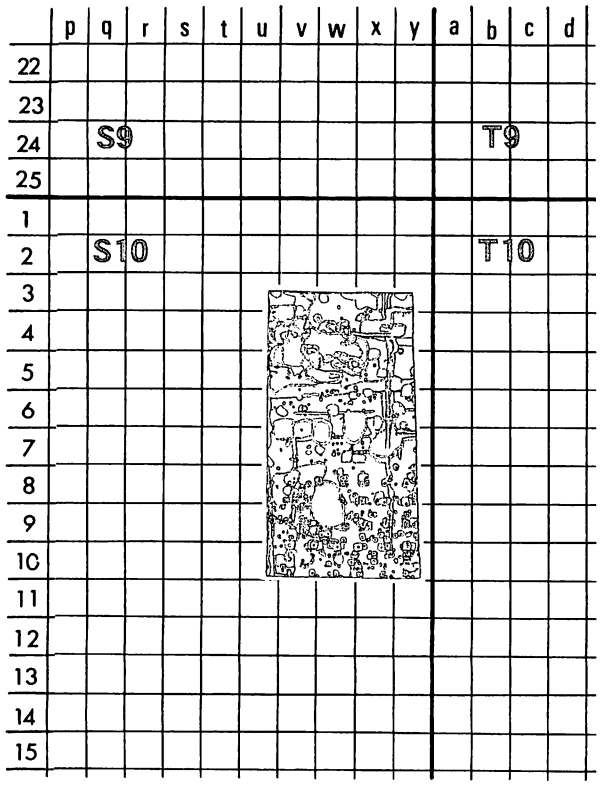
１　調査の契機と経過

第136次調査区は、史跡地内では東部にあたり、調査地の地番は、明和町斎宮字西加座2717－３・７番地である。現況は畑地である。

今回の調査は、奈良時代末期から平安時代初期に成立する斎宮の方格地割のうち、西加座南区画と呼ばれる区画[1]の東半北西部分を対象に実施した。これまでの発掘調査成果から、西加座南区画の西半は「神殿」、北側に隣接する西加座北区画は「寮庫」、南側の鍛冶山西区画は斎王が居住した「内院」に相当すると考えられている。しかし、西加座南区画東半については調査が進んでいなかったため、平成13年度に公開された斎宮跡歴史ロマン広場1/10模型でも建物等の復元がなされていない。このため、平成13年度以降の計画調査では、西加座南区画東半の空間構成を解明することに重点を置くこととなった。平成13年度の第133次調査では、南東部分を対象として調査を実施したので、平成14年度の第136次調査では、区画の北側の状況を明らかにするべく、西加座南区画東半の北西に発掘区を設定した。

調査は、平成14年５月14日に開始し、同年8月13日に終了した。最終調査面積は460㎡である。調査期間中、５月30日には斎宮小学校児童の体験発掘（参加者70名）を、6月2日には「斎王まつり」にあわせた中間報告を、7月21日には現地説明会（参加者84名）を、それぞれ行った。　（水橋公恵）

第Ⅱ－１図　第136次調査区　位置図（1：2,000）　※破線は想定される方格地割側溝の位置

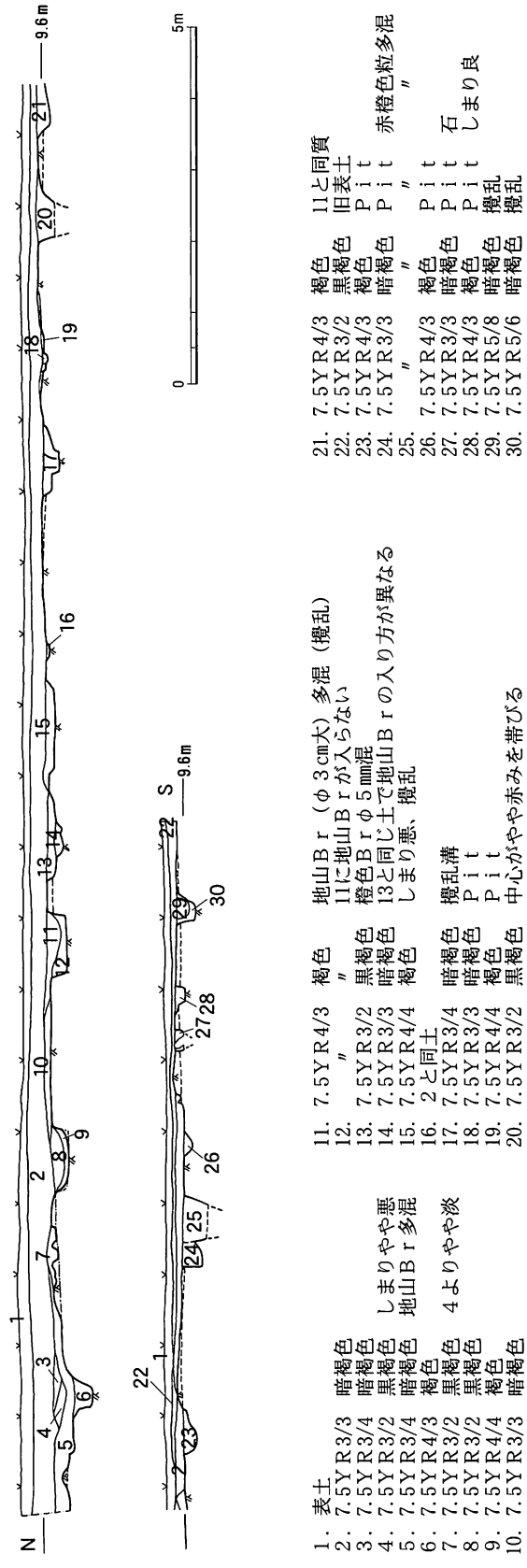


第Ⅱ－２図　第136次調査区　大地区・グリット図（1：800）

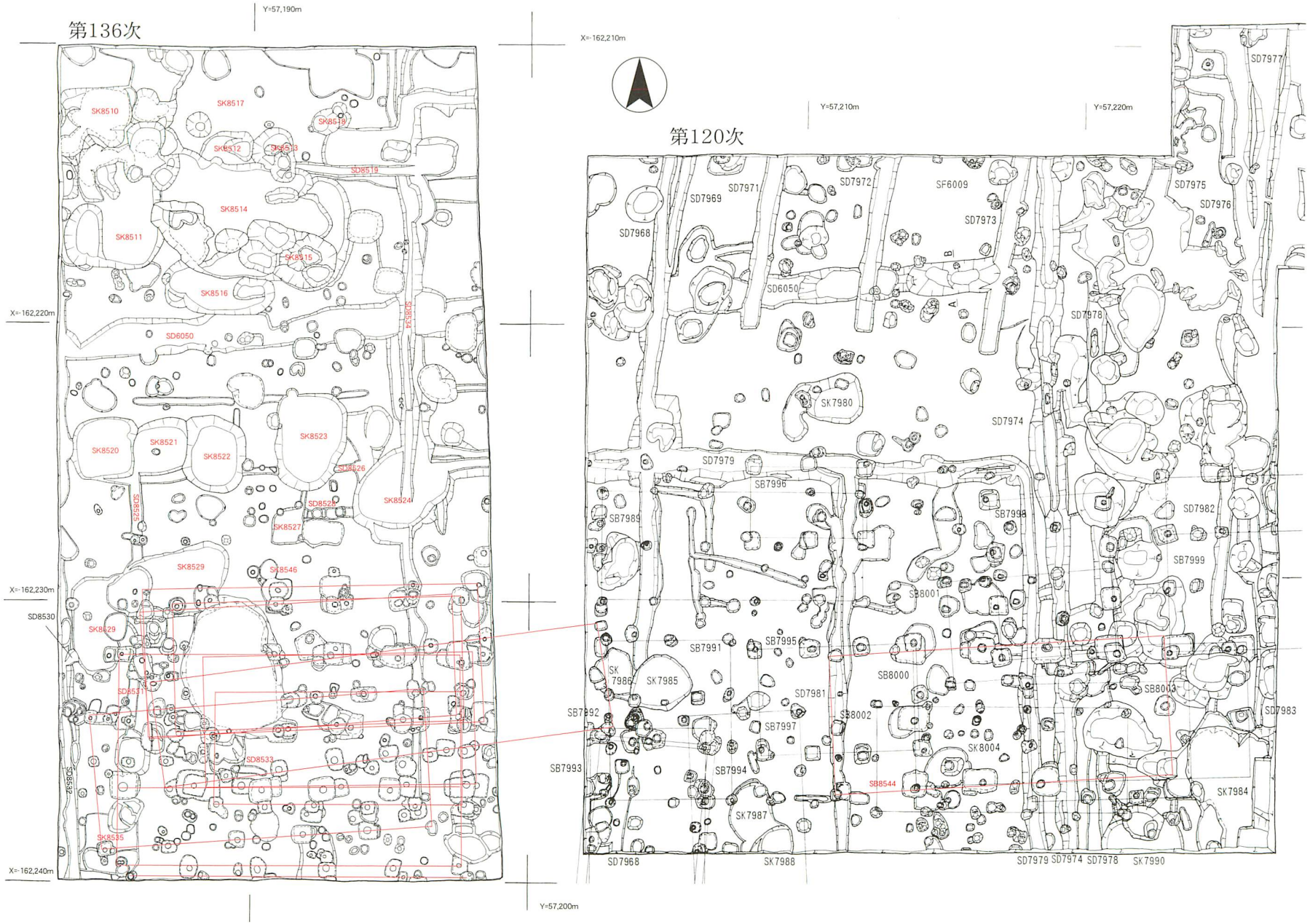
2　調査区の層位

調査区周辺一帯には過去畑地が広がっていたが、地元の古老の話によると、調査地点には一時期水田が営まれていたようである。

基本的な層序は、上から表土（耕作土）・旧耕作土・地山（橙色粘質土）である。現況の地表面は、調査区南端部で標高約9.9m、北端も同じく約9.9mでほぼ平坦であるが、地山は南から北へ向かって低くなっており、表土上面からの深さは南端で約25cm、北端で約65cmを計測した。遺構検出は地山上面で行った。　（水橋公恵）



第Ⅱ－３図　第136次調査区　東壁土層図（1：100）



第Ⅱ－４図　第136次調査区　平面図（1：200）　掘立柱建物の遺構番号は、第Ⅱ－5図に示した。座標は日本測地系（旧国土座標第Ⅵ系）による。

3　遺構

調査の結果、平安時代前半を中心とした時期の掘立柱建物８棟・柵（柱穴列）１列・区画溝１条・土坑多数のほか、近世以降の溝や現代の攪乱土坑などを検出した。以下、主な遺構について記述する。

(1) 掘立柱建物・柵（柱穴列）

調査区南半では多数の柱穴が集中して検出され、８棟分の掘立柱建物と柵（柱穴列）１条が復元できた。

ＳＢ8536　調査区南半の北寄り、Ｓ10区ｖ８・９～ｙ８・９グリッド付近で検出された東西５間（12.1m）×南北２間（約4.6m）の東西棟で、側柱建物である。主軸はＮ89°Ｅ。柱掘形は、一辺約50～70cmほどの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものが多い。柱穴の重複関係から、ＳＢ8539よりも新しく、ＳＢ8537・8540・8541よりも古いことが判明している。

ＳＢ8537　調査区南半の北寄り、Ｓ10区ｖ８・９～ｙ８・９グリッド付近で検出された東西５間（11.2m）×南北２間（4.5m）の東西棟で、側柱建物である。主軸はＮ87°Ｅ。柱掘形は、一辺約50～60cmほどの隅丸方形を呈するものが多い。南西隅の柱穴については、埋土の断ち割り調査を実施し、検出面からの深さが約70cmであることを確認した。柱穴の重複関係から、ＳＢ8536・8538よりも新しく、ＳＢ8540よりも古いことが判っている。

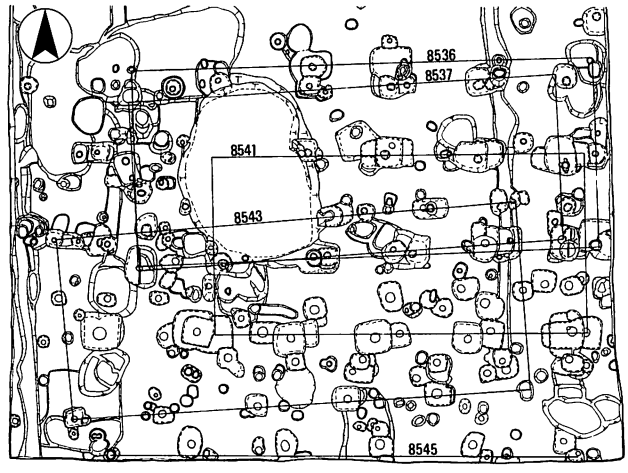
ＳＢ8538　調査区南半の北寄り、Ｓ10区ｖ８・９～ｙ８・９グリッド付近で検出された東西５間（10.5m）×南北２間（4.4m）の東西棟で、側柱建物である。主軸はＮ88°Ｅ。柱掘形は、一辺約50cmほどの隅丸略方形を呈するものが多い。柱穴の重複関係から、ＳＢ8537よりも古いことが確認できた。

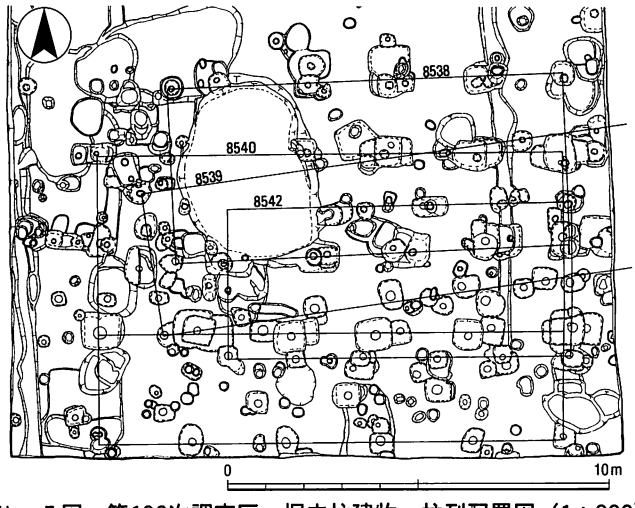
ＳＢ8539　調査区南半中央、Ｓ10区ｖ９・10～ｙ８・９グリッド付近で検出された東西６間（12.1m）以上×南北２間（3.8m）の東西棟で、側柱建物である。東側隣接地の第120次調査区には、このＳＢ8539の棟の延長線上に、柱間が類似する柱穴がある。この柱穴をＳＢ8539とみれば、東西８間（16.2m）になる。主軸はＮ82°Ｅ。柱掘形は、一辺約75cmほどの整った隅丸方形を呈するものもあるが、やや不整形のものが目立つ。

柱穴のひとつが、後述のＳＢ8543と重複関係にあり、ＳＢ8539のほうが古いように見受けられたが、重複部分が小さいため先後関係を誤認している可能性も残る。また、北東の柱穴の重複関係からは、ＳＢ8536よりも古いことを確認している。

ＳＢ8540　調査区南半中央、Ｓ10区ｖ９・10～ｙ９・10グリッド付近で検出された東西５間（12.3m）×南北２間（4.8m）の東西棟で、南に１間（3.0m）の庇が付く側柱建物である。主軸はＮ90°Ｓ。身舎部分の柱掘形は一辺約75～110cmほどの隅丸長方形、庇部分の柱掘方は50×80cmほどの隅丸長方形を呈する。柱穴の重複関係から、ＳＢ8537・8538・8541より新しく、ＳＢ8542・ＳＡ8545よりも古いと考えられた。

ＳＢ8541　調査区南半中央、ｗ９・10～ｙ９・10グリッド付近で検出された東西４間（9.7m）×南北２間（4.6m）の東西棟で、側柱建物である。主軸はＮ90°Ｓ。柱掘形は一辺約60～90cmほどの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈する。柱穴の重複関係から、ＳＢ8536よりも新しく、ＳＢ8540・8542よりも古いことが判っている。





第Ⅱ－５図　第136次調査区　掘立柱建物・柱列配置図（1：200）

ＳＢ8542　調査区南半南寄り、Ｓ10区ｗ９・10～ｙ９・10グリッド付近で検出された東西５間（9.0m）×南北２間（4.0m）の東西棟で、側柱建物である。主軸はＮ90°Ｓ。柱掘形は一辺約40～50cmほどの隅丸方形を呈するものが多い。柱穴の重複関係から、ＳＢ8540・8541よりも新しいことが確認できた。

ＳＢ8543　調査区南半南寄り、Ｓ10区ｖ９・10～ｙ９・10グリッドで検出された東西５間（12.0m）×南北２間（4.8m）の東西棟で、側柱建物である。主軸はＮ86°Ｅ。柱掘形は一辺約40～60cmほどの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものが多い。現代の攪乱に断ち切られた柱穴の断面観察によって、検出面からは約25cmの深さを有していることが知られた。柱穴の重複関係からＳＢ8542より古いことが判っている。ＳＢ8539とも切り合い関係にある。

ＳＡ8545　調査区南壁際、Ｓ10区ｖ10～ｙ10グリッドで検出された柱穴列。調査中には掘立柱建物の北辺部分に当たるのではないかと考えていたが、平成15年度に実施した隣接地の調査（第140次調査）で、南側へは続かないことが明らかになったので、建物ではなく柵である可能性が高いと思われる。Ｎ89°Ｅの方向性で、東西方向に５間分（12.3m）を確認している。調査区南端に位置していたため、ほとんどの柱穴の南半部分を検出するには至らなかったが、柱掘形は一辺約40cmほどの隅丸方形と考えられる。検出面からの深さは、約25～37cm。柱穴の重複関係から、ＳＢ8540よりも新しいことを確認している。

(2) 区画溝

ＳＤ6050　平成９年度に当調査区の東側隣接地において行われた第120次調査で検出された、西加座南地区の北限溝。調査区北半のｖ６～ｙ５グリッド付近でその西側延長部分を確認した。検出面での最大幅は1.3m、深さは約20cmで、断面は浅いＵ字形を呈する。Ｎ86°Ｅの方向性を有する東西溝で、ｗ５グリッドでＳＫ8516と切り合い関係にある。重複部分が僅かであるため断定しがたいが、ＳＤ6050が切られているように見受けられた。埋土は、黒褐色粘質土である。

遺物は小破片が多いが、北側へ開口部を向けて溝底に据え置いたような状態で、土師器竈１個体分（第Ⅱ-６図１）が出土したことが特筆される。

(3) 土坑

ＳＫ8510～8516　調査区北半、ＳＤ6050よりも北側のＳ10区ｖ４・５、ｗ４・５グリッド付近で検出された土坑群。東西10.5×南北6.0mの範囲に、大小いくつもの土坑が重なり合う。検出面から40cmほどの深さで底部が平らになるものや、深さ約110cmの擂鉢状のものなど、深さ形状ともバラエティーに富む。埋土は、基本的に下層が地山ブロックを含む明赤褐色土で、上層が黒褐色粘質土であるが、深い土坑については完掘していない。

遺物は、いずれも上層から比較的多く出土する一方で、下層からの出土はほとんど認められなかった。

ＳＫ8520～8522　調査区中央西半、Ｓ10区ｖ７・ｗ７グリッド付近で検出した重複する３基の土坑。ＳＫ8520は一辺2.2mの隅丸方形で、検出面からの深さ30cm。埋土は黒褐色粘質土。ＳＫ8522は2.8×2.3mの隅丸長方形で、同じく深さ30cm。埋土は上層が黒褐色粘質土で、下層が地山ブロック混じりの暗褐色粘質土。下層から遺物が多く出土した。ＳＫ8521は、西側をＳＫ8520に、東側をＳＫ8522に切られており、本来の東西方向の長さは不明だが、南北の長さ2.3m、検出面からの深さ約20cmである。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は少ない。

ＳＫ8523　調査区中央、Ｓ10区ｗ６・ｘ７グリッド付近で検出した不整楕円形を呈する土坑。平面規模は3.5m×2.5mで、検出面からの深さは約30cm。埋土は黒褐色粘質土で、ＳＫ8524の張り出し部を切っている。

ＳＫ8524　調査区中央東壁寄り、Ｓ10区ｘ・ｙ７グリッド付近で検出した土坑。長径3.8m×短径2.8mの不整楕円形で、北西側に張り出しを有する。張り出し部分は別遺構の可能性も考えられるが、埋土に顕著な差異が認められず、区分できなかった。検出面からの深さは、最深部で約40cm。埋土は黒褐色粘質土。

ＳＫ8529　調査区南半西壁寄り、Ｓ10区ｖ８グリッド付近で検出された不定形の土坑。平面規模は長辺約６m×短辺３mで、検出面からの深さ約20cm。中央西寄りで底部が10cm程くぼむ。黒褐色粘質土の埋土除去後、床面でＳＢ8536・8537・8538の柱穴が検出された。

通番遺構名	遺構の性格	次数	調査時遺構名	地区	グリット	時　期	斎宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SD　6050	区画溝	136	溝19	S10	v~y5・6	奈良末以降	Ⅰ-4以降	方格地割西加座南区画北辺道路側溝　竈出土
SK　8510	土坑	136	土坑28	S10	u・v4	平安前期頃	Ⅱ-2頃	北側土坑群　不定形　土器は小片のみ
SK　8511	土坑	136	土坑22	S10	u・v4・5	平安前期頃	Ⅱ-2頃	北側土坑群　不定形
SK　8512	土坑	136	土坑26	S10	w4	平安前期頃	Ⅱ-2頃	北側土坑群　不定形　土器は小片が多い
SK　8513	土坑	136	土坑27	S10	w4	平安前期頃	Ⅱ-2頃	北側土坑群　不定形
SK　8514	土坑	136	土坑23	S10	v・w4・5	平安前期頃	Ⅱ-2頃	北側土坑群　不定形・大形　土器は摩滅した小片が多い
SK　8515	土坑	136	土坑24	S10	w・x5	平安前期頃	Ⅱ-2頃	北側土坑群　不定形
SK　8516	土坑	136	土坑25	S10	v・w5	平安前期頃	Ⅱ-2頃	北側土坑群　不定形
SK　8517	土坑	136	土坑29	S10	v・w4	平安前期頃	Ⅱ-2頃	小土坑
SK　8518	土坑	136	土坑30	S10	x4	平安前期頃	Ⅱ-3頃	製塩土器出土
SD　8519	溝	136	溝20	S10	v~y4	近世以降		SK8511・8514より新　土器は小片のみ
SK　8520	土坑	136	土坑11	S10	v・w6・7	平安初期	Ⅱ-1	SK8521より新
SK　8521	土坑	136	土坑13	S10	v6・7	平安初期	Ⅱ-1	SK8520・8522より古
SK　8522	土坑	136	土坑12	S10	u・v6・7	平安初期	Ⅱ-1	SK8521より新
SK　8523	土坑	136	土坑10	S10	w・x6・7	平安初期	Ⅱ-1	
SK　8524	土坑	136	土坑16	S10	x6・7、y7	平安前期	Ⅱ-3	
SD　8525	溝	136	溝8	S10	v7	平安中期以降	Ⅱ-4以降	SK8520・8521より新　SD8531と同一か?
SD　8526	溝	136	溝18	S10	w7	不明	不明	土器は小片のみ
SK　8527	土坑	136	土坑17	S10	w7	平安以降	Ⅱ以降	
SD　8528	溝	136	溝15	S10	x7	平安以降	Ⅱ以降	小規模
SK　8529	土坑	136	土坑6・14	S10	v・w8・9	平安中期	Ⅱ-3~4	3基の土坑が重複か
SD　8530	溝	136	溝7	S10	v8	平安中期以降	Ⅱ-4以降	SK8529より新
SD　8531	溝	136	溝5	S10	v9	平安以降	Ⅱ以降	SD8525と同一か?
SD　8532	溝	136	溝1	S10	u5~10	近世以降		土器は摩滅した小片多い
SD　8533	溝	136	溝4	S10	w9・10	不明	不明	小規模　土器は小片のみ
SD　8534	溝	136	溝2	S10	x・y3~7	近世以降		土器は摩滅した小片多い
SK　8535	土坑	136	土坑3	S10	v10	平安前期	Ⅱ-3	SD8532より古　鉄滓あり
SK　8546	土坑	136	pit4	S10	w8	平安中期	Ⅱ-4	小土坑　土器一括

第Ⅱ－1表　第136次調査区遺構一覧

通番遺構名	整理時遺構名	地区	グリット	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模東西間(m)×南北間(m)	柱間(東西- 南北)	主軸	方位(N 基準)	備　考
SB8536	建物1	S10	v8	P11		Ⅱ-3?	5(12.1)×2(4.6)	2.4 −2.3	東西	N1° W	SB8539 より新 SB8537・8540・8541 より古
			v9	p37	p37 ‥‥Ⅱ以降						
			w8	p5・9							
			x8	p11・13							
			x9	p8	p8 ‥‥Ⅱ-2 以降						
			y8	p10・13							
			y9	p10・12	p10 ‥‥Ⅱ以降						
SB8537	建物2	S10	v8	p12		Ⅱ-3	5(11.2)×2(4.5)	2.2・2.4 −2.3	東西	N3° W	SB8536・8538 より新 SB8540 より古 全体にピットの土器多い v9-pit6 に製塩土器
			v9	p6・40	p6 ‥‥Ⅱ2・3						
			w8	p3・8	p8 ‥‥Ⅱ以降						
			w9	p5・6	p5 ‥‥Ⅱ以降						
			x8	p8・9	p8 ‥‥Ⅱ3						
			x9	p6・9							
			y8	p3・5							
SB8538	建物3	S10	v9	p7・24		Ⅱ-3?	5(10.5)×2(4.4)	2.1 −2.2	東西	N2° W	SB8537 より古
			w8	p7							
			w9	p4	p4 ‥‥Ⅱ2~						
			x8	p10・14							
SB8539	建物4	S10 T10	v9	p33		Ⅰ-4? Ⅱ-1?	8(16.2)×2(3.8)	2.0 −1.9	東西	N8° W	SB8536 より古 第120 次調査区に延びる 全体的に土器少ない
			v10	p19							
			w10	p15	p15 ‥‥Ⅱ以降						
			x10	p26							
			x8	p6							
			x9	p4・12・14							
			y8	p2 の一部・7	p2 ‥‥Ⅱ以降						
			y9	p9							
SB8540	建物5・9	S10	v9	p28・39		Ⅱ-3 頃	5(12.3)×2(4.8) 南面庇	2.4 −2.4・3.0	東西	N0°	SB8537・8538・8541 より新 SB8542・SA8545 より古
			v10	p14・17・20	p14 ‥‥Ⅱ2~ Ⅱ3						
			w10	p3・7							
			x9	p7・13	p13 ‥‥Ⅱ2~ Ⅱ3						
			x10	p3・14・18・19	p14 ‥‥Ⅱ 2~ Ⅱ 3						
			y9	p4・6							
			y10	p11・14	p11 ‥‥Ⅱ 2						
SB8541	建物 6	S10	w8	p6	p6 ‥‥Ⅱ	Ⅱ -3 頃	4(9.8) × 2(4.8)	2.4 − 2.4	東西	N0°	SB8540・8542 より古
			w9	p7							
			w10	p1・11	p11 ‥‥Ⅱ 3~						
			x9	p16							
			x10	p6・27							
			y9	p12	p12 ‥‥Ⅱ						
			y10	p17							
SB8542	建物 7	S10	w10	p2・9	p9 ‥‥Ⅱ 3・4	Ⅱ -4	5(9.0) × 2(4.0)	1.8 − 2.0	東西	N0°	SB8540・8541 より新
			x9	p9 or p10							
			x10	p9・10・13	p10 ‥‥Ⅱ 4?						
			y9	p4・8・14	p14 ‥‥Ⅱ 4						
			y10	p12 の一部							
SB8543	建物 8	S10	v9	p14・27		Ⅰ -4? Ⅱ -1?	5(12.0) × 2(4.8)	2.4 − 2.4	東西	N4° W	SB8542 より古
			v10	p8・11・22	p11 ‥‥Ⅱ以降						
			w9	p3							
			w10	p5							
			x9	p9 or 10	p10 ‥‥Ⅱ以降						
			x10	p11							
			y9	p5							
			y10	p6・7							
SB8544		T10					5(12.1) × 2(4.9)	2.4 − 2.4	東西	N4° W	第 120 次調査区内
SA8545	建物 10	S10	v10	p5	p5 ‥‥Ⅱ以降	Ⅱ -4?	5(12.3)~	2.5	東西	N1° W	SB8540 より新
			w10	p12	p12 ‥‥Ⅱ 1						
			x10	p9・16							
			y10	p10							

第Ⅱ－２表　第136次調査区掘立柱建物一覧

ＳＫ8535　調査区南西隅、Ｓ10区ｖ10グリッドで検出した土坑。平面形は長辺2.1m×短辺1.9mの隅丸方形を呈する。底部は南半が一段深くなっており、検出面からの深さは17cm。黒褐色粘質土の埋土除去後、床面でＳＢ8540・8543の柱穴が検出された。

（水橋公恵）

4　出土遺物

第136次調査区からの出土遺物は、整理箱に換算して約24箱である。内訳は、大部分が土器類で、少量の金属製品がある。

ここでは主立った遺物について記述する。古代の土器に関する分類・編年については、斎宮分類・編年[(2)]および平城・長岡・平安京における編年（以下、「都城編年」と呼称）[(3)]を参照した。

ＳＤ6050出土土器（１・２）　いずれも土師器である。１は竈形土器。高さ約34.7cmである。形態の基本は、口縁部径約46cm、底部径約24cm、高さ約34cmの鉢形を倒立させたものである。鉢形は輪積み成形で、口縁部と底部のみやや幅の広い素地を用いており、口縁部にヨコナデ、底部内面にヘラケズリが見られる。左右の把手は、鉢形の状態であれば通常の甑形土器の方向と共通する。以上のように、この土器の基本形は甑形土器の製作と同じであるといえる。焚口部分は、倒立させた鉢形の口縁部を半円形に切除し、上部に庇を作り付けている。焚口部の前面両裾には脚が取り付いている。２は甕Ａで、丸底になると考えられる。

これらの土器は、竈形土器の裾部形態から、斎宮Ｉ－４期に相当すると考えられる。

ＳＫ8515出土土器（３～５）　３は須恵器盤。摘部が輪状になる蓋と形態が類似する。内面調整に比べ、外面が丁寧であるため、その可能性もある。４は土師器杯Ａ１で、口縁部があまり外反しないものである。５は底が狭く、口縁部の長い杯である。これまでの報告では杯Ａに含めるものが多かったが、形態的には明らかに別であるため、ここでは杯Ａ３とする。口縁部外面に、弱いながらも２単位のヨコナデが見られる。

これらは、概ね斎宮Ⅱ－２期に相当するものである。

ＳＫ8516出土土器（６～８）　６は土師器椀Ａ。内面に暗文が無いものである。７は土師器杯Ａ１。８は須恵器で壷Ｇと考えられる。概ね斎宮Ⅱ－２期に相当するものである。

ＳＫ8511出土土器（９・10）　９は土師器椀Ａ。口縁部に油煙痕が付着しており、燈明皿として用いられたと考えられる。10は土師器杯Ａ１。口縁端部外面が凹線状に窪む。これらは、概ね斎宮Ⅱ－２期に相当するものであろう。

ＳＫ8514出土土器（11・12）　11は土師器皿Ａ２だが、口縁部は直線的に開いている。底部外面に墨書があり、筆跡から「木」と考えられる。破損部があるので、単漢字かどうかはわからない。12は須恵器で壷Ｇと考えられる。これらは概ね斎宮Ⅱ－２期に相当するものであろう。

ＳＫ8517出土土器（13）　13は志摩式製塩土器である。底部は残存していない。全体に、被熱で赤～青変している。斎宮Ⅱ期の範疇と考えられる。

ＳＫ8535出土土器（14～20）　14・15は土師器杯Ａ２。14は剥離が激しく、調整等は不明。15は口縁部外面に２段のヨコナデが観察できる。16～18は土師器皿で、16・17は皿Ａ１、18は皿Ａ２である。19は志摩式製塩土器。20は灰釉陶器椀である。

これらは、概ね斎宮Ⅱ－３期に比定できると考えられる。

ＳＫ8523出土土器（21～35）　21～23は須恵器。21は杯Ｂ蓋、22は杯Ａ、23は長頸壺の体部と考えられる。22はやや深手のもの。

24～35は土師器。24は椀Ａで、内面は粗雑な斜放射状暗文と、見込みに螺旋状暗文を施す。25も椀Ａで、やや小形のもの。26は杯Ａ２、27～30は杯Ａ１である。29はやや厚手で、口縁端部は内面を強くヨコナデすることで、窪ませている。内外面ともに「キ」字形のヘラ記号を焼成前に刻んでいる。27・28は、30よりも古い様相を残しており、同一遺構内の出土遺物中に時期差があるのかも知れない。31～33は皿Ａ１。

34は把手付の鍋で、斎宮では鍋Ｂに分類される。35は鉢で、口縁端部はやや内側に傾斜している。

これらの遺物は、概ね斎宮Ⅱ－１期に相当しようが、いくつかは古い様相を残しており、全体としてはその前半期と考えられる。

ＳＫ8522出土土器（36～59）　36・37は須恵器。36は皿Ｂ蓋で、美濃須衛産と考えられる。37は杯Ａ。

38～59は土師器。38は杯Ｇで、内面に暗文が施されないもの。39～47は杯Ａ１。40の内面には、「キ」字形のヘラ記号が焼成前に刻まれている。45～47はやや大形のもので、小形のものに比べて形態的に古い要素を残している。48・49は杯Ａ２。49の外面調整はヨコナデとヘラケズリである。50は椀Ａと杯Ａとの折衷的な形態をなすもので、ひとまず杯Ｃの系統としておく。精良な素地粘土を用いているようである。内面には斜放射状暗文と、見込みに螺旋状暗文を施している。51も同様に、杯Ｃとする。

52～54は皿Ａ１。53のみ口縁部が強く外反するが、底部は54のみが丸みを持っている。54は皿Ａ２とも共通するものである。

55～59は甕・鍋類。55は甕Ｂで、体部に１箇所の把手が取り付く。体部外面下半はハケメ、内面下半はケズリである。56・57は甕Ａ、58は長胴形となる甕Ｃである。59は鍋Ｂで、深手のものである。

これらの一群は、概ね斎宮Ⅱ－１期に相当するが、杯Ａに古い様相が認められるので、そのなかでも古相に相当するものであろう。

ＳＫ8520出土土器（60～65）　図示したのは、いずれも土師器である。60は椀Ａに類似するが、内外面に粗雑なヘラミガキを施すもので、あまり例を見ないものである。61は杯Ａ１、62は皿Ａ１である。

63は受口状の口縁部となるもので、底部は抜けており、内面外周をヘラケズリしている。内面には煤ないしは炭化物の付着が認められるので、製作手法的な特長は甑である。ただし、口縁部がやや波打った状態であるため、図は天地逆で、受口状の焚口笠部となる、少し変わったカマドである可能性もある。64は長胴形をなす甕Ｃ、65は甕Ａである。

これらは、概ね斎宮Ⅱ－１期に相当する時期のものであろう。

ＳＫ8529出土土器（66～90）　66～78は土師器杯Ａ。底が丸みを持ち、口縁部が弱く外反する形態となるもの。66～71は杯Ａ２、72～79は杯Ａ１の系譜と考えられる。80は、分類上は杯に含める他無く、杯Ａ２としておくが、全体的な手法は皿Ａ２にも類似する。類例が増加すれば、それらの折衷形として分離ができる。81も杯Ａ２の系統であろうが、やや大形のものである。82も同様に、杯Ａ１の大形のものとしておく。

83・84は土師器皿で、83は皿Ａ１の系統、84は系統的に追えないもので、皿Ａ３としておく。いずれも小形化しており、とくに83は、その後の小皿へとつながる形態であろう。85は土師器で台付皿。

86～88は灰釉陶器で、86は小椀、87・88は椀である。概ね齋藤孝正氏による編年[4]の折戸53号窯式頃に相当するものであろう。

89は土師器甕、90は灰釉陶器で短頸壺である。

これらは、斎宮Ⅱ－３期でも新しい一群に相当すると考えられる。

ＳＫ8518出土土器（91）　91は土師器で、杯Ａ２である。斎宮Ⅱ－３期に相当する。

ＳＤ8534出土土器（92）　92は灰釉陶器椀。美濃産と思われ、東山72号窯式に併行するものであろう。ただし、ＳＤ8534は近世以降の遺構と考えられるので、この土器は混入と思われる。

ＳＫ8546出土土器（93～99）　土師器類のみであるが、出土状況から一括性の高いものである。93～97は杯Ａで、95は杯Ａ１、97は杯Ａ３、他は杯Ａ２の系統であろう。98は台付皿。高台が高く大きいが、それに比して皿部は小さい。99は椀。全体に薄手で、外面は整形の後にハケメを施している。

これらは、斎宮Ⅱ－４期に相当するものである。

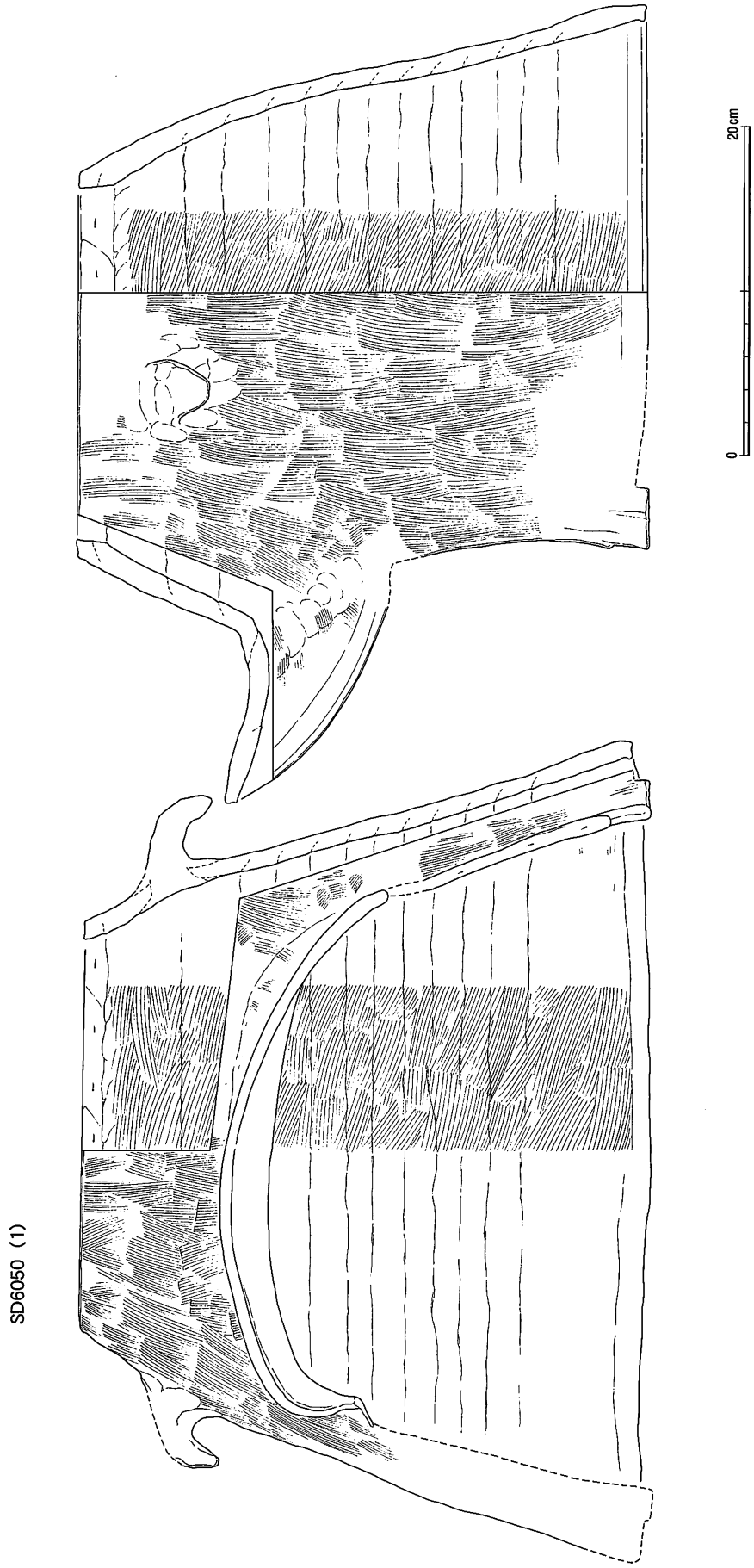
ＳＢ8540出土土器（100）　100は須恵器杯Ｂ蓋である。摘部は腰高な宝珠形をなす。斎宮Ⅱ－２期頃のものであろうか。

ＳＢ8537出土土器（101）　101は土師器椀Ａないしは杯Ａ２である。斎宮Ⅱ－３期頃のものであろう。

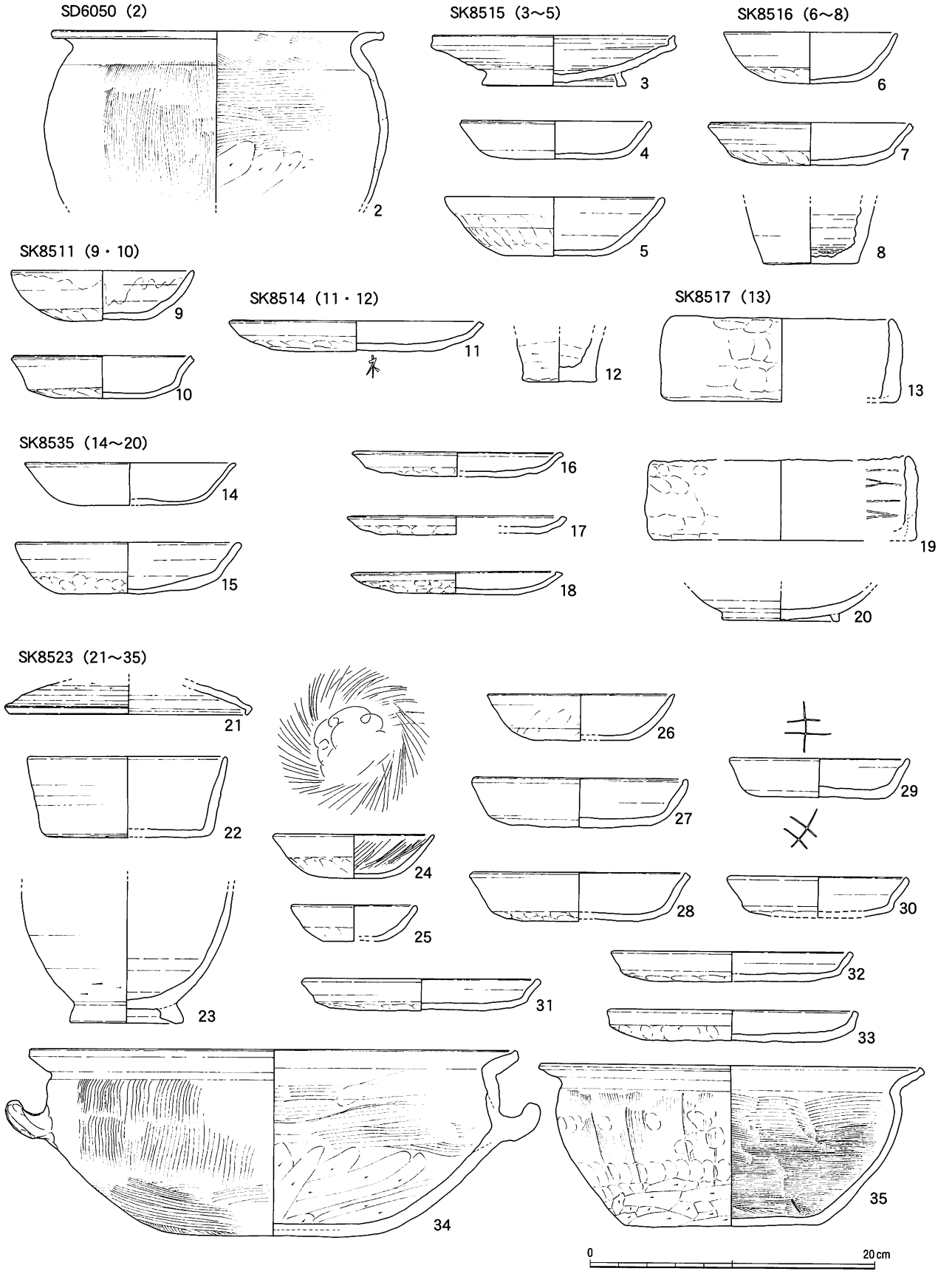
ＳＢ8543出土土器（102）　102は土師器杯Ａ１である。斎宮Ⅱ－１期のものであろう。

ＳＢ8542出土土器（103・104）　103・104は灰釉陶器椀である。折戸53号窯式２型式から東山72号窯式にかけてのものであろう。104の高台内面には「衆」の墨書が見られる。

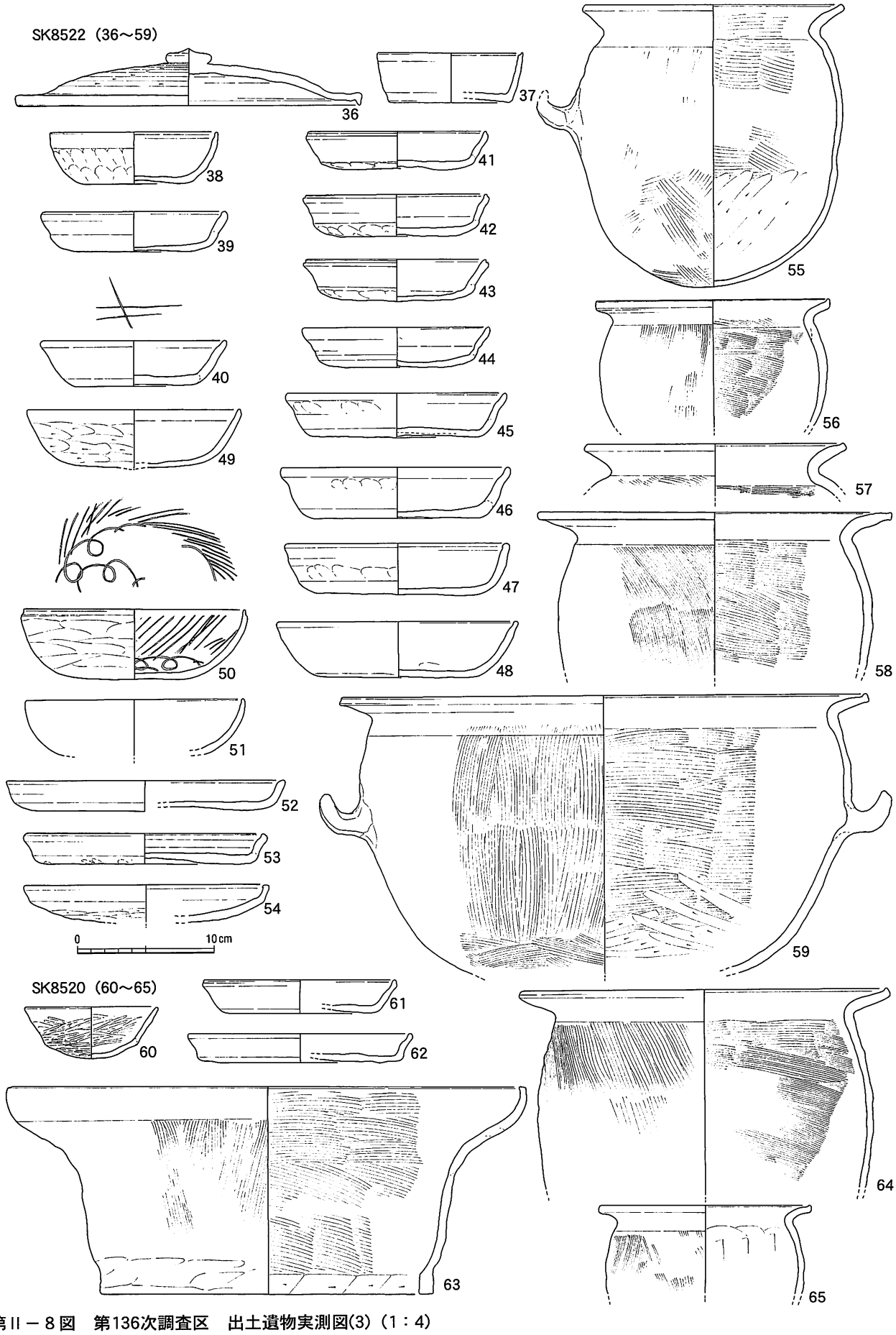
その他ピット出土土器（105～115）　建物としてまとまらないピットから出土した土器をここにまとめた。105は須恵器杯Ｂ蓋、106～110は土師器で、106・107は杯Ａ１、108は小皿、109は杯Ａ２、110は皿Ａ



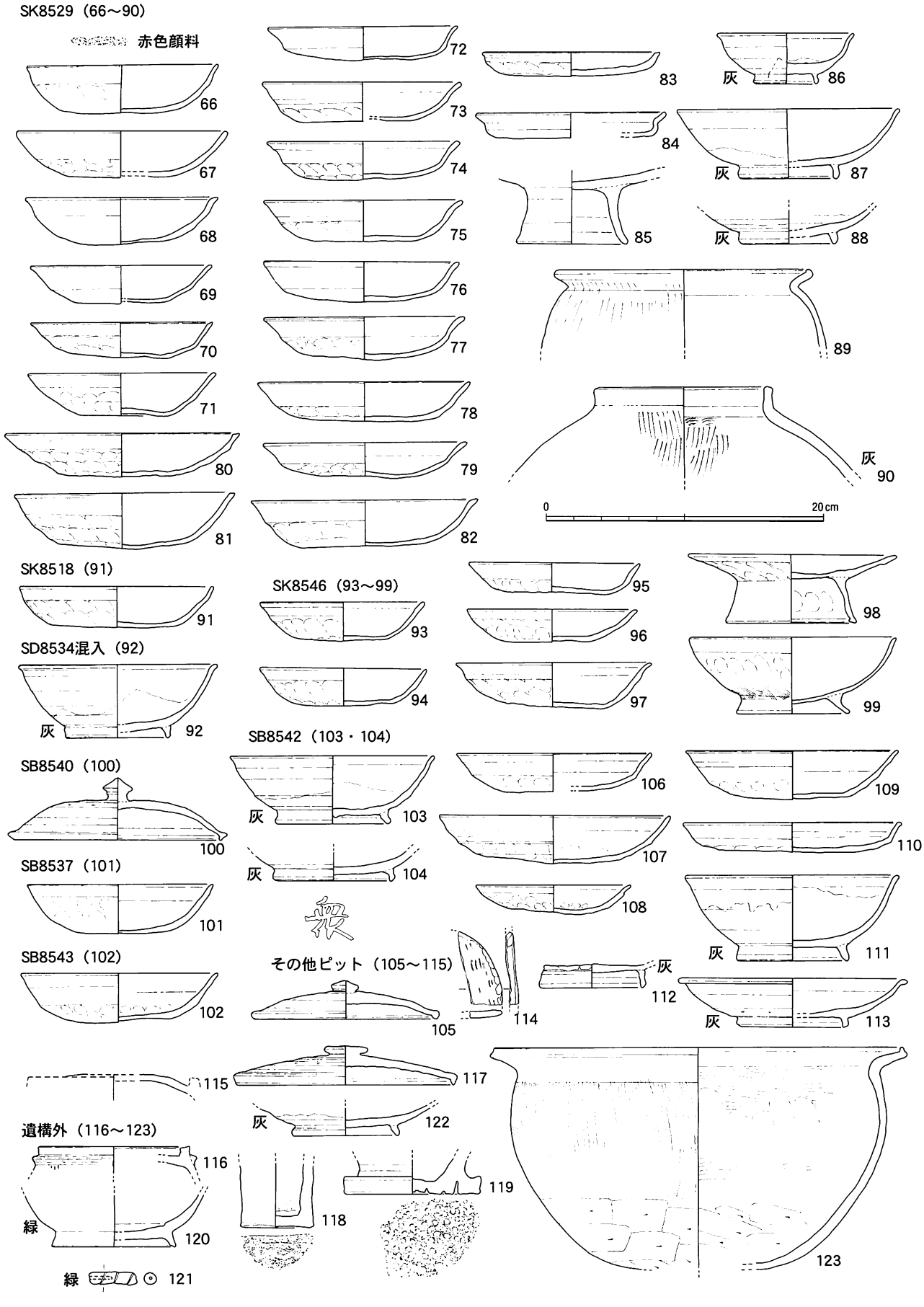
第II－6図　第136次調査区　出土遺物実測図(1)（1：4）



第Ⅱ－７図　第136次調査区　出土遺物実測図(2)（1：4）



第Ⅱ－８図　第136次調査区　出土遺物実測図(3)（1：4）



第Ⅱ－９図　第136次調査区　出土遺物実測図(4)（1：4）

１である。106と107、および109と110はそれぞれ同一ピットから出土した。111～113は灰釉陶器椀・皿類。114は硯で、いわゆる「猿面硯」である。海部に同心円当て具痕が見られ、外側縁は研磨されている。115は須恵器で、円面硯の海部である。墨痕がよく残っている。

遺構外出土土器（116～123）　遺構に伴わずに出土した遺物をまとめた。116は須恵器円面硯、117は須恵器杯Ｂ蓋である。118は須恵器壷Ｇ、119は須恵器捏鉢で、底部外面には貫通しない刺突をランダムに施している。

120は緑釉陶器の椀で、全面に施釉が見られる。121は円管状のもので、貫通しない穿孔が中央に見られる。外面には螺旋状の凹線が巡っており、そこに緑釉の付着が認められることから、緑釉陶器の何らかの破片と考えられる。素地は軟質である。

123は土師器鍋Ｂと考えられる。破片のため、把手部は、遺存していかなった。

その他の出土遺物　その他の特徴的な遺物には、軽石（ＳＫ8529)、平瓦片（ＳＫ8516)、記載内容不明の墨書土器片（ＳＫ8515）などがある。また、土錘が10個体ほど出土している。

鉄器・鉄製品類では、ＳＫ8535から鉄滓が、ＳＫ8522からは鉄釘のほか、用途不明の鉄器片が出土している。

第136次調査区における緑釉陶器片の出土状況は、第Ⅱ－３表にまとめた。総破数は37点である。これまでの調査区と比べて、当調査区での量はとくに多いというわけではない。　（伊藤裕偉）

次数	地区	グリット	遺構・層名	緑釉破片数	備　　考
136	S10	v5	包含層	1	
136	S10	v7	包含層	2	円管状の破片（第Ⅱ－９図121）
136	S10	v8	SK8529	3	
136	S10	v9	pit6	2	
136	S10	v9	SK8529	1	
136	S10	w4	包含層	1	輪花あり
136	S10	w5	包含層	6	
136	S10	w6	包含層	2	
136	S10	w7	包含層	1	
136	S10	w9	包含層	1	
136	S10	x10	pit5	1	
136	S10	x10	pit26	1	
136	S10	x5	溝２	1	
136	S10	x5	溝２	1	
136	S10	x6	溝２	1	
136	S10	x7	溝２	1	
136	S10	x8	pit9	1	輪花あり
136	S10	x8	溝２	1	
136	S10	y10	pit1	2	
136	S10	y5	包含層	1	
136	S10	y5	溝２	1	
136	S10	y8	pit1	1	
136	S10	y9	pit12	1	
136	不明	不明		3	うち１点は図示（第Ⅱ－９図120）

第Ⅱ－３表　第136次調査区緑釉陶器出土地点・破片数一覧

5　まとめと検討

第136次調査区の成果と課題をまとめておく。

(1)　地形の状況

今回の調査区は、調査区南端部の標高が9.7m（遺構検出面）で、北端はそれよりも約50cm低い9.2mである。今回の調査区からは南東にあたる、平成13年度に実施した第133次調査区では、北端が9.8m、南端が9.1mである。第133次調査区の南端は、方格地割西加座南ブロック南辺の区画溝（道路側溝）に近い。このことから、西加座南ブロックの南北断面は、南北端の区画溝（道路側溝）が低く、ブロックの中央部分が高い状態にあることがわかる。

第133次調査区の南部では、黒色土の堆積が確認でき、水脈が近い状況を確認していることから、元々地形的に低い部分に道路が設定されたと考えられる。それに対し、今回の第136次調査区では水脈が近いような状況は確認されていない。方格地割内部への水被害を防ぐために、西加座南ブロック北部の道路部分をやや下げるといった工夫がなされている可能性が考えられよう。

（伊藤裕偉）

(2)　方格地割道路内土坑群

西加座南ブロックの北辺となる区画溝ＳＤ6050の北部に、ＳＫ8511をはじめとした不定形土坑群が存在する。調査当初、これらの土坑は斎宮寮に関係しない時期の遺構かと想定したが、近世の遺構埋土であれば間違いなく含まれる基盤層のブロック土が見られず、黒色土を基本としたものであったことや、まとまった出土遺物こそ見られないものの、斎宮寮廃絶以後の遺物が全く見られないことなどから、斎宮寮機能時期に相当する遺構である可能性が高いものと判断している。

この土坑群から出土している土器類は、斎宮Ⅰ－４期を嚆矢にⅡ－１～３期を中心としたものである。つまり、出土遺物の状況からは、斎宮Ⅱ－２期頃にはこれら遺構の開削がなされていると考えられるのである。斎宮における方格地割の形成時期は、斎宮Ⅰ－４期と考えられているので、成立後間もなく、道路敷に土坑群が開削されたことになる。

方格地割道路敷が、成立後それほど時間を経ずに機能停止している状況は、第133次調査でも確認されている。方格地割の存在は、史跡斎宮跡を特長付ける重要な要素として公表されているが、その実態がいかなるものであったのかは未だ明確にはなっていないといえる。当調査区で確認された土坑群は、それを考察する上で非常に重要な資料となろう。

（伊藤裕偉）

(3) 掘立柱建物の変遷

今回の調査では、掘立柱建物８棟と柵（柱穴列）１列を確認した。８棟の掘立柱建物は、どの２棟を選んでも、必ず平面的に重複部分を有しているため、柵１列を除いて、複数棟の同時存在はありえないと言える。したがって、この点を建物変遷検討に際しての前提とすることができるだろう。

さて、調査区内で検出された建物の新旧関係については先述したが、改めて建物どうしの切り合い関係から、先後関係を確定できる分についてまとめると、次のようになる。

ＳＢ8536・8538→8537→8540→8542・ＳＡ8545
（ＳＢ8536・8538は同時存在ではないが、先後関係不明）

では、残るＳＢ8539・8541・8543はどこに位置付けられるだろうか。まず、ＳＢ8541について考えてみたい。既に述べたように、ＳＢ8541については柱穴の切り合いから、ＳＢ8536→8541→8540という先後関係を確認できた。問題はＳＢ8538・8537との新旧関係が明らかでないことだが、ＳＢ8536・8538・8537は、規模と主軸方位の共通性が極めて高く、ほぼ同一位置で検出されていることを考えると、連続して建て替えられた建物ではないかと考えられる。一方、ＳＢ8541と8540の間には、東西に柱間一間分位置的なずれがあり、庇の有無といった相違点も認められるが、柱間間隔や主軸方位が非常に似通っている点に、連続性の高さを見出すことができそうに思われる。したがって、若干の不安要素を含みつつも、ＳＢ8536の柱穴を切ると見られるＳＢ8541は、ＳＢ8537よりも新しいと考えられ、先に示した建物変遷の順序にＳＢ8541を加えて、次のように考えることができる。

ＳＢ8536・8538→8537→8541→8540
→ＳＢ8542・ＳＡ8545

つぎにＳＢ8539・8543についてだが、ＳＢ8539の柱穴はＳＢ8536に切られているので、ＳＢ8536・8538・8537が連続的な建て替えであるならば、ＳＢ8536・8538のいずれよりも古いことになる。

では、最後に残ったＳＢ8543については、どのように考えられるだろうか。かなりの不安要素を孕みつつも、遺構検出時にはＳＢ8539がＳＢ8543に切られているように見受けられたので、一応ＳＢ8539より新出の建物と考えたいが、他の建物との先後関係を遺構の切り合いから説明することは困難である。しかし、Ⅱ－３期に位置付けられるＳＫ8535の埋土除去後、その床面でＳＢ8543の柱穴が検出されていることが、この建物の時期を考える手がかりとなりそうである。

そこで、柱穴出土の遺物から、各建物の時期を検討してみる。ただし、調査区内での遺構の重複は非常に激しく、調査時に、一部新しい時期の遺構埋土を掘り残したまま切り合い関係にある古い柱穴の埋土を掘削している可能性も否定できないので、１・２点の小片での時期決定には慎重を期す必要がある。

ＳＢ8539　小片ばかりなので細かく時期を絞り込めないが、土師器はⅡ－３期以前と考えられ、灰釉陶器が小片も認められないことを踏まえれば、Ⅱ－１期にまで遡ることも考えられる。

ＳＢ8536・8538・8537　図示していないが、いずれからも灰釉陶器片が出土しており、施釉方法と高台の形状が判るものは、いずれも刷毛塗りの三日月高台である。過去の調査事例から、こうした特徴を有する灰釉陶器はⅡ－３期の土師器に伴う可能性が高いと考えられ、これは伴出の土師器（第Ⅱ－９図101）とも矛盾しない。

ＳＢ8541　小片ばかりなので細かく時期を絞り込めないが土師器はⅡ－３期以前と考えられ、灰釉陶器片が出土している。

ＳＢ8540　図示した須恵器蓋（第Ⅱ－９図100）は、Ⅱ－３期以前のものと考えられるが、土師器杯の小片の中には白くて薄手のⅡ－４期的な要素をもつものが認められ、Ⅱ－３期～Ⅱ－４期の過渡期頃に位置付けられる可能性が高い。

ＳＢ8542　図示した灰釉陶器のうち103（第Ⅱ－９図）は灰釉が漬け掛けされており、過去の調査事例から、こうした施釉方法の灰釉陶器は平安時代中期以降の土師器に伴うことが知られている。また、伴出の土師器には白くて薄手の杯が多く、こうした特徴もこの建物を平安時代中期に位置付けることと矛盾しない。

以上、ＳＢ8543をのぞく掘立柱建物の時期を、柱穴出土の遺物から検討してみたが、遺構の切り合いから想定した建物変遷との間に大きな矛盾はないことが判った。また、ＳＫ8535とＳＢ8536・8538・8537はいずれもⅡ－３期に位置付けでき、ほぼ同時期の遺構であると考えられ、これはＳＫ8535とＳＢ8536・8538・8537の間に重複関係が認められないこととも矛盾しない。したがって、ＳＫ8535に柱穴を切られるＳＢ8543は、ＳＢ8536・8538・8537よりも古い可能性が高いと考えられる。さらに、時期的な形態変化の乏しい器形であるため、細かく時期を絞り込みにくいものの、ＳＢ8543の南西隅柱穴から出土した土師器椀Ａの類品を、Ⅱ－１期やⅡ－２期に位置付けられる土器群の中に比較的容易に見出しうることは、この推測の傍証となるだろう（ちなみに、ＳＢ8543の柱穴のひとつから灰釉陶器椀の口縁部の小片が出土しているが、これは先にも触れたように調査時の遺物取り上げのミスかと思われる）。

すなわち、ここまでの検討結果をまとめると、第136次調査で検出された建物については、次のような変遷順序を想定できる。

ＳＢ8539→8543→8536・8538→8537→8541
→8540→8542・ＳＡ8545

（ＳＢ8536・8538は先後関係不明で同時共存せず、ＳＢ8542とＳＡ8545は同時共存する可能性あり。）

以上のことから、調査区内の建物変遷は大きく次の４時期に区分することが可能ではないかと考えられる。

第１期　建物の主軸方位が、真北と直交する東西線から４～８度ほどずれているＳＢ8539・8543の時期。出土遺物からの時期決定が難しいが、Ⅱ－２期以前に遡る可能性を有する。

第２期　建物の主軸方位が、真北と直交する東西線とほぼ一致しており、ほとんど同一の場所で同規模（５間×２間）の建物が連続的に建て替えられている時期。ＳＢ8536・8538・8537がこの時期の建物。柱穴出土の遺物から、Ⅱ－３期と推定される。

第３期　建物の主軸方位は第２期とほとんど変わらないが、建物の位置がやや南にずれる時期。この時期の建物としては、ＳＢ8541・8540が該当する。出土遺物からみて、Ⅱ－３期の終わり頃からⅡ－４期にかかる時期かと思われる。

第４期　建物の主軸方位も位置も第３期と大きく変わらないが、柱間間隔が狭くなり、建物の平面規模が急速に小型化する時期。ＳＢ8542とＳＡ8545が、この時期に属する。出土遺物から、Ⅱ－４期と考えられる。

さて、改めてこの変遷から気付くことは、第１期と第２期の間で建物の主軸方位が大きく変化していることである。残念ながら、第１期の建物ＳＢ8543とＳＢ8539がいつまで遡るかを示す直接的な証拠がないため、この変化が起きた時期については一部推測を交えざるをえないが、Ⅱ－３期以前であることはまず間違いない。そして、Ⅱ－３期の幅の中で、度々建物の建て替えが行われているらしいことを考えれば、第Ⅱ期の始まりがⅡ－３期に大きく食い込むことは考えにくい。したがって、建物主軸方位の変化を伴う第１期から第２期への転換は、Ⅱ－２期もしくはそれ以前のことではないかと考えられる。これが、ちょうど斎宮の離宮院への一時移転時期と一致する可能性があることは注目に値する。つまり、建物の主軸方位の変化は離宮院へ移転する前と、当地に帰ってきた後の違いと評価できる可能性がある。

こうした建物主軸方位の変化は、今回の狭い調査区で確認されるだけの現象ではないことである。以前からこのような変化の方向性についての指摘はな

されており、今回の調査区周辺に限っても、同じ西加座南区画の第133次調査[5]では、同様の方向性での建物主軸方位の変化が報告されているし、西側の第120次調査[6]や同地区東半の第86次調査[7]などでもその傾向を読み取ることができる。こうした事例の多さから考えると、今後斎宮の研究を進める上で建物主軸方位の検討が更に重要な課題となることが予想されるが、詳細な検討はいずれ刊行される予定の正式報告書に委ねることとし、ここでは問題点の指摘にとどめておきたい。

（水橋公恵）

(4)　ＳＢ8543とＳＢ8544の関係

第136次調査区で確認されたＳＢ8543は、2001年度に実施した第133次調査の概報[8]で指摘した、“「寮庫」区画に類似する建物群”の１棟に相当する。第Ⅱ－４図には、第120次調査区で検出されていた、同じくこれに該当する建物を「ＳＢ8544」として表示した。これは、第120次調査区の概報作成段階では、掘立柱建物としてまとめられていなかったものである。

ＳＢ8543とＳＢ8544は、方格地割西加座南区画東半部における当該建物群のなかで、東西２棟が並列する状況が明確に認識できる、現状では唯一の地点である。そのため、前年度の概報を補う意味で、この２棟の関係を見ておく。

まず、ＳＢ8543と区画溝ＳＤ6050との関係は、ＳＤ6050の溝底中心からＳＢ8543の北側柱列までの間が約1,350cmで、１尺≒30cm前後と見た際の45尺にあたる。これは、ＳＢ8544とＳＤ6050溝底中心との間の数値と同様である。

つぎにＳＢ8543東側柱列とＳＢ8544西側柱列との間は約1,490cmで、尺換算では49.7尺となることから、50尺を基準にしたと考えられる。ただし、「寮庫」と推定されている西加座北区画では、同様な２棟間の間隔はまちまちである。一定の計画性があるとしても、それほど厳密なものではない可能性がある。

ＳＢ8543は、前述のように時期的にはⅡ－２期以前と指摘できるにとどまるが、西加座南区画東半部に、西加座北区画の「寮庫」と同じ時期に同様の区画が形成される時期のあることは認めてよいと考えられる。

（伊藤裕偉）

＜註＞

(1)過去の報告書等では西加座南地区と呼ばれることが多かったが、単に調査地点の字名をさす場合もあり、若干の混乱が認められる。方格地割の単位については、地区以外にブロックとも呼ばれており、統一された呼称ではないが、ここでは、区画という名称を使用する。

(2)駒田利治・泉　雄二・倉田直純「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ　斎宮歴史博物館　2001年）

(3)都城編年については、奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』XⅣ（1993年）のほか、古代の土器研究会編『古代の土器１　都城の土器集成』（1992年）を参照した。

(4)齋藤孝正「猿投窯出土の灰釉・緑釉陶器碗・皿類の変遷」（『日本の美術』No.409　越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器　2000年　至文堂）以下、灰釉陶器についてはこの文献に拠る。

(5)斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡　平成13年度発掘調査概報』（2003年）

(6)斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡　平成９年度発掘調査概報』（1999年）

(7)斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡　平成２年度発掘調査概報』（1991年）

(8)斎宮歴史博物館編註(5)文献に同じ。

No.	出土遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
1	S10-w6 SD 6050	土師器 竈形	口縁 器高	23.5～25.1 34.7	裾：ヨコナデ、外：ハケメ、内：ハケメ、把手挿入付加	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 8/12	内面下半に煤	028-1
2	S10-x6 SD 6050	土師器 甕A	口縁	23.6	口：ヨコナデ、外：ハケメ、内：(上)ハケメ、(下) ケズリ	やや密	やや良	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁 1/12		023-2
3	S10-x5 SK 8515	須恵器 盤B	口縁	17.4	口～内：回転ナデ、外：回転ケズリ、ツマミ貼付ヨコナデ	密	堅緻	黄灰 2.5Y6/1	口縁 3/12		021-1
4	S10-w5 SK 8515	土師器 杯A 1	口縁 器高	13.6 2.7	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	密	良	橙 5YR6/8	口縁 5/12	剥離	021-3
5	S10-w5 SK 8515	土師器 杯A 3	口縁 器高	15.6 4.2	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	密	良	黄橙 7.5YR7/8	口縁 6/12		021-2
6	S10-w5 SK 8516	土師器 椀A	口縁 器高	12.2 3.6	底外：オサエナデ、以外剥離	粗	軟	橙 5YR6/8	口縁 11/12	剥離	021-4
7	S10-w5 SK 8516	土師器 杯A 1	口縁 器高	14.4 3.0	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	密	良	橙 7.5YR7/6	口縁 5/12		021-5
8	S10-w5 SK 8516	須恵器 壺G	底	6.8	体外：回転ナデ、底外：糸切り、内：回転ナデ	密	堅緻	灰 N6/0	底 4/12	底外面に布らしき圧痕	021-6
9	S10-v5 SK 8514	土師器 椀A	口縁 器高	13.0 3.6	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	密	良	橙 5YR6/8	口縁 6/12	口縁部に油煙痕	020-2
10	S10-v5 SK 8514	土師器 杯A 1	口縁 器高	13.0 3.0	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	密	良	橙 2.5YR6/8	完形		020-1
11	S10-w4 SK 8514	土師器 皿A 2	口縁 器高	18.0 2.2	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	密	良	橙 5YR6/8	口縁 2/12	底部外面に墨書「木」	020-3
12	S10-w5 SK 8514	須恵器 壺G	底	5.2	体外:粗いナデ (ケズリ状)、底外:糸切り、内：ナデ	粗～4㎜の小石	堅緻	青灰 5BG5/1	底部 12/12		020-4
13	S10-w4 SK 8517	土師質 製塩土器	口縁 器高	16.8 6.0	内・外：オサエ・ナデ	粗 小石多	軟	橙 5YR6/6	口縁 2/12	志摩式製塩土器	021-7
14	S10-v10 SK 8535	土師器 杯A 2	口縁 器高	15.0 3.0	調整不明	並	軟	橙 7.5YR7/8	口縁 4/12	剥落顕著	001-5
15	S10-v10 SK 8535	土師器 杯A 2	口縁 器高	16.0 4.0	口～内：ヨコナデ、外：ナデオサエ	並	軟質	灰黄褐 10YR4/2	口縁 4/12		001-1
16	S10-v10 SK 8535	土師器 皿A 1	口縁 器高	15.0 1.7	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	並	軟	橙 7.5YR7/6	口縁 2/12		001-4
17	S10-v10 SK 8535	土師器 皿A 1	口縁 器高	15.5 1.2	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	並	軟	橙 5YR6/8	口縁 3/12		001-3
18	S10-v10 SK 8535	土師器 皿A 2	口縁 器高	15.0 1.5	口～内：ヨコナデ、外：ナデオサエ	並	軟	橙 5YR6/8	口縁 3/12		001-2
19	S10-v10 SK 8535	土師質 製塩土器	口縁 器高	18.6 5.6	内・外：オサエ・ナデ	並 小石多	並	褐灰 7.5YR5/ 1	口縁 1/12	志摩式製塩土器 二次的な被熱あり	001-6
20	S10-v10 SK 8535	灰釉陶器 椀	高台	8.3	外：ロクロケズリ後ロクロナデ、底外：ヘラ起こし後ロクロケズリ後ロクロナデ、内：ロクロナデ	やや密	硬	灰白 N8/0	高台 6/12	内外面に自然降灰か？ 内面にトチン痕	001-7
21	S10-w6 SK 8523	須恵器 杯B蓋	口縁	17.6	口～内：回転ナデ、外：回転ケズリ	並	硬	灰 10Y5/1	口縁 1/12		008-5
22	S10-w6 SK 8523	須恵器 杯A	口縁 器高	14.2 5.7	体外～内：回転ナデ、底外：回転ヘラケズリ	密 白粒	堅緻	オリーブ灰 2.5GY6/1	口縁 1/12		009-3
23	S10-w6 SK 8523	須恵器 長頸壺	高台	8.1	体外：回転ナデ(裾：ケズリ)、底外：回転ケズリ	密 白粒 乳白粒	堅緻	灰オリーブ 5Y6/2	高台 12/12	体部内面に自然釉	009-4
24	S10-w7 SK 8523	土師器 椀A	口縁 器高	11.4 3.1	口：ヨコナデ、外：オサエナデ、内：放射状と螺旋暗文	精緻	軟	橙 5YR6/8	口縁 9/12	灯明皿使用 四方に油煙	008-3
25	S10-w7 SK 8523	土師器 椀A	口縁 器高	9.0 (2.5)	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	並	軟	黄橙 7.5YR7/8	口縁 4/12	粗製	008-4
26	S10-w7 SK 8523	土師器 杯A 2	口縁 器高	13.2 3.2	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	並	軟	橙 5YR6/8	口縁 3/12		007-5
27	S10-w7 SK 8523	土師器 杯A 1	口縁 器高	15.2 3.5	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ、板状圧痕	並	軟	橙 5YR6/8	口縁 11/12	底部に黒化部あり	007-2
28	S10-w7 SK 8523	土師器 杯A 1	口縁 器高	15.5 3.4	口～内：ヨコナデ、外：ユビオサエ	並	軟	橙 5YR6/8	口縁 3/12		007-3
29	S10-x7 SK 8523	土師器 杯A 1	口縁 器高	12.7 2.8	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	並	軟	橙 5YR6/8	口縁 11/12	内外面に「キ」字形のヘラ記号 口縁部に一部被熱 外面に煤付着	007-1
30	S10-w7 SK 8523	土師器 杯A 1	口縁	12.9	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	並	軟	橙 5YR6/8	口縁 4/12		007-4
31	S10-w7 SK 8523	土師器 皿A 1	口縁 器高	16.9 2.2	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	並	軟	橙 5YR6/8	口縁 4/12		008-2
32	S10-w7 SK 8523	土師器 皿A 1	口縁 器高	17.0 2.1	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	並	軟	橙 5YR6/8	口縁 4/12		008-1
33	S10-x7 SK 8523	土師器 皿A 1	口縁 器高	17.6 2.2	口～内：ヨコナデ、体外：オサエナデ、底外ユビオサエ	密	やや堅	橙 5YR6/8	口縁 6/12		009-2
34	S10-x7 SK 8523	土師器 鍋B	口縁 器高	34.6 13.2	口:ヨコナデ、外:ハケメ、内:(上) ハケ、(下) ケズリ、把手：ナデ	密 白粒 乳白粒	良	浅黄橙 7.5YR8/6	口縁 5/12	口縁部に歪み	010-1
35	S10-w7 SK 8523	土師器 鉢	口縁 器高	27.1 11.7	口:ヨコナデ、体外:(上) タテハケ後ユビオサエナデ、(下) タテハケ後ケズリ、底外：ナデ、体内：ハケ、底内：ナデ	密	やや軟	橙 5YR6/8	口縁 8/12		009-1
36	S10-vw7 SK 8522 SK 8526	須恵器 皿B蓋	口縁 器高	25.4 4.1	口～内：回転ナデ、外：回転ケズリ、ツマミ貼付回転ナデ	密	堅緻	灰白 N8/0	口縁 1/12		017-4
37	S10-w7 SK 8522	須恵器 杯A	口縁 器高	10.7 3.6	体外～内：回転ナデ、底外：回転ケズリ	密	堅緻	灰 N6/0	口縁 2/12		017-5
38	S10-w7 SK 8522	土師器 杯G	口縁 器高	12.3 3.8	口：ヨコナデ、外：オサエナデ、内：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 3/12		016-2
39	S10-w7 SK 8522	土師器 杯A 1	口縁 器高	13.6 2.9	口～内：ヨコナデ、体外：オサエナデ、底外：ナデ	やや密 白粒 黒粒	やや堅緻	橙 5YR8/6	口縁 4/12	内面に「キ」字形のヘラ記号	015-2
40	S10-w7 SK 8522	土師器 杯A 1	口縁 器高	13.6 3.3	口：ヨコナデ、内外：ナデ	やや密 白粒 乳白粒	やや堅緻	橙 5YR6/8	口縁 5/12	色調の違う２片が接合	015-1
41	S10-w7 SK 8522	土師器 杯A 1	口縁 器高	13.4 2.8	口：ヨコナデ、内外：ユビオサエ	密	良	橙 5YR6/8	口縁 8/12		013-4

第Ⅱ－４表　第136次調査区出土遺物観察表(1)

No.	出土遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
42	S10-w7 SK 8522	土師器 杯A 1	口縁 器高	13.6 3.0	口～内：ヨコナデ、外：ユビオサエ	密	良	橙 5YR6/8	口縁 6/12		015-5
43	S10-w7 SK 8522	土師器 杯A 1	口縁 器高	13.6 3.0	口～内：ヨコナデ、外：軽いオサエナデ	密	良	橙 5YR7/8	口縁 5/12		015-4
44	S10-w7 SK 8522	土師器 杯A 1	口縁 器高	13.6 2.9	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	密	良	橙 5YR6/8	口縁 8/12		015-3
45	S10-w7 SK 8522	土師器 杯A 1	口縁 器高	16.2 3.2	口：ヨコナデ（一部オサエナデ）	粗 長石	良	橙 5YR7/6	口縁 9/12	内面剥離	013-6
46	S10-w7 SK 8522	土師器 杯A 1	口縁 器高	16.9 3.6	口：ヨコナデ（一部オサエナデ）、内外：ユビオサエ	密	良	橙 5YR6/6	口縁 8/12		013-5
47	S10-w7 SK 8522	土師器 杯A 1	口縁 器高	16.4 3.8	口：ヨコナデ、体外：ナデ、底外：ユビオサエ、内：ナデ	やや 密	良	橙 7.5YR7/6	口縁 11/12		013-1
48	S10-w7 SK 8522	土師器 杯A 2	口縁 器高	17.6 4.1	口：ヨコナデ、外：剥離、内：ナデ	密	良	橙 5YR6/8	口縁 5/12	外面剥離	016-1
49	S10-vw7 SK 8522	土師器 杯A 2	口縁 器高	15.6 4.2	口：ヨコナデ、体外：弱いケズリ	粗	良	橙 5YR6/8	口縁 5/12		013-3
50	S10-w7 SK 8522	土師器 杯C	口縁 器高	16.4 7.1	口：ヨコナデ、ヘラ、外：ナデ、内：ナデ、暗文	粗 内一部 しまる	良	橙 5YR6/8	口縁 10/12		014-1
51	S10-w7 SK 8522	土師器 杯C	口縁	16.1	内外：ナデ	粗	良	橙 5YR7/8	口縁 1/12		013-2
52	S10-w7 SK 8522	土師器 皿A 1	口縁 器高	20.3 2.2	口：ヨコナデ、外：オサエナデ、内：ナデ	密	良	橙 5YR6/6	口縁 3/12		016-4
53	S10-w7 SK 8522	土師器 皿A 1	口縁 器高	17.8 2.2	口：ヨコナデ、外：ユビオサエ、内：ナデ	密 白粒少	良	橙 2.5YR6/8	口縁 2/12		015-6
54	S10-w7 SK 8522	土師器 皿A 1	口縁	17.8	口：ヨコナデ、体外：ナデ、底外：板ナデ風のケズリ、内：ナデ	密	良	橙 5YR6/8	口縁 4/12		016-3
55	S10-w7 SK 8522	土師器 甕B	口縁	19.0	口：ヨコナデ、外：(上) ハケメ、ナデ (下) ハケメ、内：(上) ハケメ、(下) ケズリ、把手付加挿入オサエナデ	粗	良	灰白 2.5Y8/2	口縁 8/12	把手は1ヶ所のみ 外面に煤付着	019-1
56	S10-w7 SK 8522	土師器 甕A	口縁	17.0	口：ヨコナデ、内外：ハケメ	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 4/12		017-2
57	S10-w7 SK 8522	土師器 甕A	口縁	19.0	口：ヨコナデ、内外：ハケメ	やや密 白粒	良	にぶい褐色 7.5YR5/4	口縁 3/12	外面に煤付着	017-1
58	S10-w7 SK 8522	土師器 甕C	口縁	25.8	口：ヨコナデ、内外：ハケメ	粗 小石多	良	橙 7.5YR7/6	口縁 3/12	外面に薄く煤付着	017-3
59	S10-w7 SK 8522	土師器 鍋B	口縁	38.8	口：ヨコナデ、外：(上) タテハケ、(下) ヨコハケ、内：(上) ハケメ、(下) ケズリ、把手：挿入ナデオサエ	粗	良	橙 5YR7/8	口縁 4/12	把手付鍋	018-1
60	S10-v7 SK 8520	土師器 椀A	口縁 器高	9.7 3.8	口～内：ヨコナデ後ミガキ、外：ユビオサエ後ミガキ	密	良	橙 5YR6/8	口縁 6/12 底部 11/12	ヘラミガキを用いるが、粗雑	011-3
61	S10-v7 SK 8520	土師器 杯A 1	口縁 器高	14.1 2.4	口～内：ヨコナデ、外：ケズリ	密	良	橙 2.5YR6/6	口縁 4/12		011-1
62	S10-v7 SK 8520	土師器 皿A 1	口縁 器高	16.4 2.1	口～内：ヨコナデ、体外：ユビオサエ、底外：ナデ	密	良	橙 5YR6/6	口縁 1/12 底部 4/12		011-2
63	S10-v7 SK 8520	土師器 異形甑	口縁 器高	38.1 15.3	口：ヨコナデ、外：(上) ハケメ、(下) オサエナデ、内：ハケメ、(裾) ケズリ	粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁 3/12 底部 4/12	内面に煤ないしは炭化物付着	012-2
64	S10-v7 SK 8520	土師器 甕C	口縁	27.0	口：ヨコナデ、内外：ハケメ	粗	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁 2/12		012-1
65	S10-v7 SK 8520	土師器 甕A	口縁	15.5	口：ヨコナデ後ミガキ、外：ユビオサエ、ハケメ、内：ユビオサエ、板ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁 2/12		011-4
66	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 2	口縁 器高	14.2 3.5	口～内：ヨコナデ、外：ユビオサエ	並	軟	橙 7.5YR7/6	口縁 3/12	内面に赤色顔料による記号？ (明赤褐 2.5YR5/8)	004-5
67	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 2	口縁 器高	15.4 (3.4)	口～内：ヨコナデ、外：ユビオサエ	並	軟	橙 5YR6/6	口縁 4/12		004-8
68	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 2	口縁 器高	14.1 3.4	口：ヨコナデ、以外不明	並	軟	橙 5YR6/8	口縁 9/12	内外面剥落	004-4
69	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 2	口縁 器高	13.2 2.6	調整不明	並	軟	橙 7.5YR7/6	口縁 3/12	内外面剥落	004-6
70	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 2	口縁 器高	13.2 2.5	口～内：ヨコナデ、外：ユビオサエ	並	軟	橙 10YR7/6	口縁 9/12		004-1
71	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 2	口縁 器高	13.6 3.1	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	並	軟	橙 7.5YR7/6	口縁 4/12		002-2
72	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 1	口縁 器高	13.7 2.5	口～内：ヨコナデ、外：ユビオサエ	並	軟	橙 7.5YR7/6	口縁 12/12	内外面摩滅顕著	005-2
73	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 1	口縁 器高	14.5 2.9	口～内：ヨコナデ、外：ユビオサエ	並	軟	明黄褐 10YR7/6	口縁 3/12	口縁部に油煙痕　口縁部歪み 外面摩耗	005-5
74	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 1	口縁 器高	14.0 2.8	口～内：ヨコナデ、体外：ユビオサエ、底外：不明	並	軟	橙 7.5YR7/6	完形		003-4
75	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 1	口縁 器高	14.5 3.0	口～内：ヨコナデ、外：ユビオサエ	並	軟	橙 5YR7/8	口縁 9/12		004-3
76	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 1	口縁 器高	14.2 2.9	口～内：ヨコナデ、外：ユビオサエ	並	軟	橙 5YR6/6	口縁 5/12		005-1
77	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 1	口縁 器高	14.5 3.1	口～内：ヨコナデ、外：ユビオサエ	並	軟	橙 5YR7/6	口縁 7/12		005-3
78	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 1	口縁 器高	15.4 2.9	口～内：ヨコナデ、外：不明（ユビ痕）	並	軟	橙 7.5YR7/6	口縁 5/12	外面摩滅	005-4
79	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 1	口縁 器高	14.8 2.5	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	並	軟	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 7/12		003-1
80	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 2	口縁 器高	17.0 3.2	口～内：ヨコナデ、体外：ユビオサエ、底外：オサエナデ	並	軟	橙 7.5YR7/6	口縁 8/12		003-2
81	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 2	口縁 器高	16.0 4.0	口～内：ヨコナデ、体外：ユビオサエ、底外：オサエナデ	並	軟	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 10/12		003-3
82	S10-v8 SK 8529	土師器 杯A 1	口縁 器高	16.4 3.4	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	並	軟	橙 10YR7/6	口縁 11/12	内外面剥落	004-2

第II－5表　第136次調査区出土遺物観察表(2)

No.	出土遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
83	S10-v8 SK 8529	土師器 皿A 1	口縁 器高	12.8 1.7	口～内：ヨコナデ、外：オサエナデ	並	軟	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 12/12		003-5
84	S10-v8 SK 8529	土師器 皿A 3	口縁 器高	13.8 1.8	口～内：ヨコナデ、外：不明	良 赤色粒	軟	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 8/12		005-6
85	S10-v8 SK 8529	土師器 台付皿	高台	8.1	ヨコ方向のナデ	精緻	軟	明黄褐 10YR7/6	高台 11/12		004-7
86	S10-v8 SK 8529	灰釉陶器 小椀	口縁 高台 器高	9.9 4.3 3.7	体外～内：ロクロナデ、底外：ロクロケズリ	並	硬質	灰黄 2.5Y7/2	口縁 4/12 高台 11/12	灰釉漬け掛け 底部ヘラ起こし	002-3
87	S10-v8 SK 8529	灰釉陶器 椀	口縁 高台 器高	16.2 6.8 5.0	口～内：ロクロナデ、体外：(上) ロクロナデ、(下) ロクロケズリ後ロクロナデ、底外：ロクロケズリ	並	硬質	灰白 2.5Y8/1	口縁 1/12 高台 4/12	灰釉漬け掛け 内面は全面灰釉	002-5
88	S10-v8 SK 8529	灰釉陶器 椀	高台	7.2	体外：ロクロナデ、底外：ロクロケズリ、内：ロクロナデ	やや粗 黒粒	硬質	黄褐 2.5Y5/3	高台 4/12	灰釉漬け掛け 底部ヘラ起こし 内面摩耗	002-4
89	S10-v8 SK 8529	土師器 甕	口縁	18.6	口：ヨコナデ、外：ハケメ、内：不明	やや 粗	軟	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 2/12		002-1
90	S10-v8 SK 8529	灰釉陶器 短頸壺	口縁	12.8	口：ヨコナデ、外：タタキ、内：あて具痕	密	堅緻	灰白 2.5Y7/1	口縁 2/12	口縁～外面に灰釉 口縁部歪み	002-6
91	S10-x4 SK 8518	土師器 杯A 2	口縁 器高	14.1 3.1	口：ヨコナデ、外：オサエナデ、内：ナデ	密	良	黄橙 10YR8/6	口縁 8/12		021-8
92	S10-y9 SD 8532	灰釉陶器 椀	口縁 高台 器高	14.5 7.6 5.3	体外～体内：ロクロナデ、底外：糸切り、底内：ナデ	やや 密	やや 良	灰白 N8/0 釉：灰白 10Y7/2	口縁 5/12 高台 4/12	美濃産か歪みあり	023-4
93	S10-w8 SK 8546	土師器 杯A 2	口縁 器高	11.9 2.9	口：ヨコナデ、外：オサエナデ、内：ナデ	やや粗 ～2.8 mm小石	良	橙 7.5YR7/6	口縁 3/12		026-3
94	S10-w8 SK 8546	土師器 杯A 2	口縁 器高	12.1 2.7	口：ヨコナデ、外：オサエナデ、内：ナデ	やや密 ～2.4 mm小石	良	淡黄 2.5Y8/3	口縁 11/12		026-2
95	S10-w8 SK 8546	土師器 杯A 1	口縁 器高	12.3 2.1	口：ヨコナデ、外：オサエナデ、内：ナデ	やや粗 ～2mm 小石	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁 8/12		026-1
96	S10-w8 SK 8546	土師器 杯A 2	口縁 器高	12.3 2.4	口：ヨコナデ、内外：オサエナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁 10/12		026-6
97	S10-w8 SK 8546	土師器 杯A 3	口縁 器高	14.2 3.2	口：ヨコナデ、内外：オサエナデ	やや密 ～1mm 小石		にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 6/12	内面焼き膨れ	027-3
98	S10-w8 SK 8546	土師器 台付皿	口縁 器高	15.0 5.1	体外：工具ナデ、底外：ナデ、内：ナデ、脚：ヨコナデ（一部オサエ）	密	良	浅黄橙 7.5YR8/6	口縁 3/12 高台 8/12		026-5
99	S10-w8 SK 8546	土師器椀	口縁 高台 器高	14.9 8.2 5.5	口：ヨコナデ、体外：(上) オサエナデ、(下) 高台貼付後ハケメ、底外：ナデ、内：ナデ	粗 ～2.6 mm小石	良	浅黄橙 7.5YR8/6	口縁 12/12 高台 12/12		026-4
100	S10-x9 SB 8540 pit13	須恵器杯 B蓋	口縁 器高	15.9 4.4	口～内：回転ナデ、外：回転ケズリ、ツマミ貼付ナデ	密 ～0.5 mm小石	良	灰 N6/	口縁 1/12		024-3
101	S10-y8 pit3 SB 8537	土師器椀A or 杯A 2	口縁 器高	13.5 3.5	口：ヨコナデ、外：オサエナデ、内：ナデ	やや密 ～0.5 mm小石		橙 7.5YR7/6	口縁 8/12		025-5
102	S10-v10 pit22 SB 8543	土師器 杯A 1	口縁 器高	14.3 3.5	口：ヨコナデ、内外：ナデオサエ	密 小石		にぶい黄橙 10YR6/4	口縁 10/12	内外面剥落	025-2
103	S10-y9 pit4 SB 8542	灰釉陶器 椀	口縁 高台 器高	14.8 4.9 8.4	体外～内：ロクロナデ、底外：回転ケズリ	密	やや 不良	灰白 2.5Y8/2 釉：浅黄 2.5Y7/3	高台 3/12		024-4
104	S10-w10 pit9 SB 8542	灰釉陶器 椀	高台	8.8	体外：ケズリ風、底外：ロクロケズリ後ロクロナデ	やや粗 1mmの 小石	良	灰白 N7/0	高台 8/12	施釉痕なし 底外面に墨書「衆」	024-1
105	S10-w10 pit12	須恵器 杯B蓋	口縁 器高	13.6 2.8	口～内：ロクロナデ、外：ロクロケズリ、ツマミ貼付ナデ	密 ～0.5 mm小石	良	灰 7.5Y6/1	完形		027-6
106	S10-v8 pit14	土師器 杯A 1	口縁 器高	14.1 2.7	口：ヨコナデ、外：ナデオサエ、内：ナデ	密 ～0.5 mm小石		浅黄橙 7.5YR8/6	口縁 12/12	内外面剥落	025-3
107	S10-v8 pit14	土師器 杯A 1	口縁 器高	16.8 3.4	口：ヨコナデ、体外：(上) ナデオサエ、(下) ユビオサエ、底外：ナデオサエ、内：オサエナデ	やや密 ～0.5 mm小石		橙 5YR6/6	口縁 10/12		025-4
108	S10-x10 pit22	土師器 小皿	口縁 器高	11.1 1.9	口～内：ヨコナデ、外：ナデオサエ、体内ナデ、底内：オサエ	密		浅黄橙 10YR8/4	口縁 12/12	内外面摩耗・黒変	027-2
109	S10-v10 pit21	土師器 杯A 2	口縁 器高	15.3 3.6	口～内：ヨコナデ、外：ナデオサエ、内：ナデ	やや密 砂粒 小石		橙 7.5YR7/6	口縁 12/12	内外面摩耗 底外面黒変	027-5
110	S10-v10 pit21	土師器 皿A 1	口縁 器高	15.7 2.1	口～内：ヨコナデ、内外：ナデオサエ	やや密 ～0.5 mm小石		橙 5YR7/6	口縁 11/12	内外面摩耗 底外面黒変	027-4
111	S10-v8 pit7	灰釉陶器 椀	口縁 高台 器高	15.4 8.1 6.2	体外～内：ロクロナデ、底外：糸切り	密	良	灰白 5Y7/1	口縁 3/12		027-1
112	S10-y9 掘方 pit11	灰釉陶器 椀	高台	7.7	ロクロナデ、高台貼付	密	良	灰白 5Y7/1	底部 12/12	内面に自然釉	024-5
113	S10-v9 pit5	灰釉陶器 皿	口縁 高台 器高	16.0 8.0 3.6	口～内：ロクロナデ、体外：(上) ロクロナデ、(下) ケズリ、底外：ロクロケズリ後ナデ	やや密 小石少	良	灰白 2.5Y7/1	高台 4/12		024-2
114	S10-v8 pit7	須恵器 猿面硯	—	—	硯面：あて具痕、裏面：タタキ＋ケズリ、側面：ミガキ	並	並	灰白 N7/0	小片	須恵器甕を転用 硯面：墨痕、摩耗	025-1
115	S10-w8 SK 8546	須恵器 円面硯	—	—	外：(心) ロクロケズリ、(周) ロクロナデ、内：ロクロナデ	並	堅緻	灰白 N7/0	硯面 3/12	外面に墨痕、海部摩耗 内面自然降灰	006-1
116	S10-w6 包含層	須恵器 円面硯	口縁	11.1	ロクロナデ、鍔：貼付、線刻	やや 密	やや 良	灰白 N7/0	縁		022-3
117	S10-y6 撹乱坑	須恵器 杯B蓋	口縁 器高	16.2 2.8	口～内：ミガキ、外：回転ケズリ、回転ナデ、ツマミ貼付	やや 密	やや 良	灰白 N7/0 釉：暗灰 N3/0	口縁 2/12		023-3
118	S10-v5 包含層	須恵器 壺G	底	5.2	体外：回転ナデ、底外：糸切り、内：ヨコナデ	やや 密	やや 良	灰 N4/0 断面：橙 2.5YR6/6	底部 6/12		023-5
119	S10 排土	須恵器 捏鉢	底	10.0	回転ナデ、底部は棒状工具によるランダムな刺突	やや 密	やや 良	灰白 N8/0	底部 6/12		022-4
120	S10 排土	緑釉陶器 椀	高台	9.0	ロクロナデ、高台貼付、全面施釉	密	良	灰白 N7/0	高台 3/12		022-5
121	S10-v7 包含層	緑釉陶器 器種不明	直径	0.9	螺旋状の沈線がめぐる未貫通の穿孔あり	精緻	軟質	浅黄橙 10YR8/3	—	外面は全面緑釉	023-1
122	S10-w9 包含層	灰釉陶器 皿	高台	7.8	体外：ロクロナデ、底外：糸切り痕、内：ロクロナデ	やや 密	やや 良	灰白 N8/0	高台 9/12	底内面に重ね焼痕	022-2
123	S10-w8 包含層	土師器 鍋B	口縁	30.0	口：ヨコナデ、外：(上) ハケメ、(下) ケズリ、内：(上) ナデ、ハケメ、(下) ケズリ	やや 粗	やや 良	浅黄橙 10YR8/3	口縁 4/12	把手は遺存せず	022-1

第Ⅱ－6表　第136次調査区出土遺物観察表(3)

全景（北から）

南部掘立柱建物集中部分（西から）

SD6050（西から）

SK8514付近（西から）

SK8514土層（南から）

SK8510土層（南から）

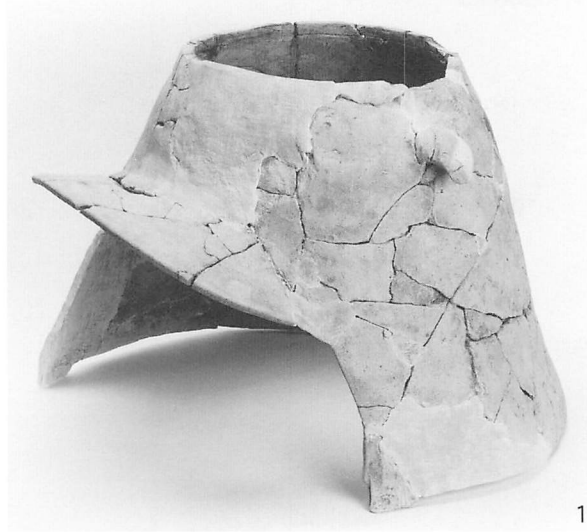
SK8529（南東から）

SK8529　土師器杯類集中部分（東から）

SK8522（南から）

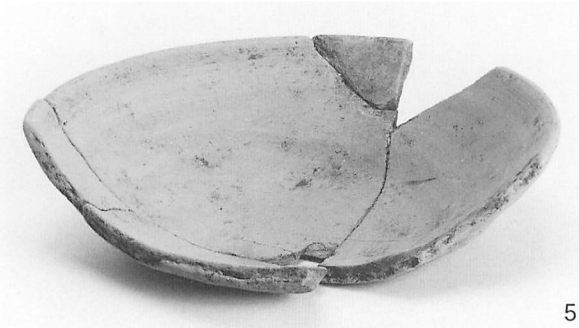
SK8546（東から）

1


1

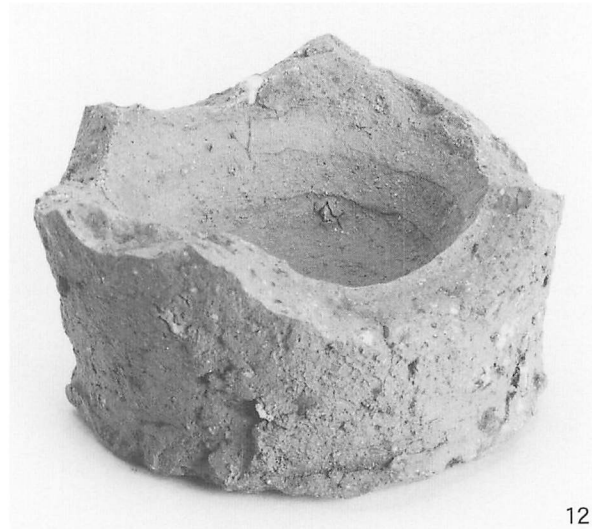
裏側　3

9


5

10

6


12

24

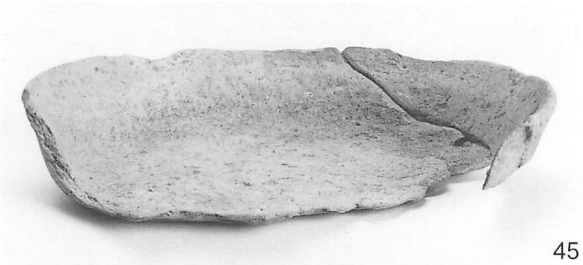
27

29

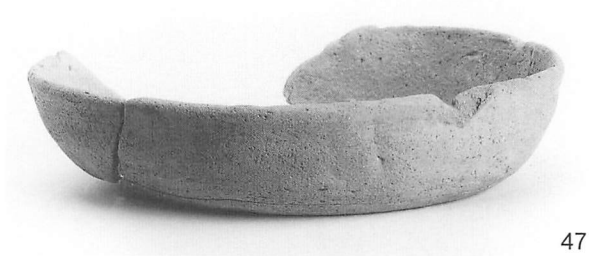
34

35

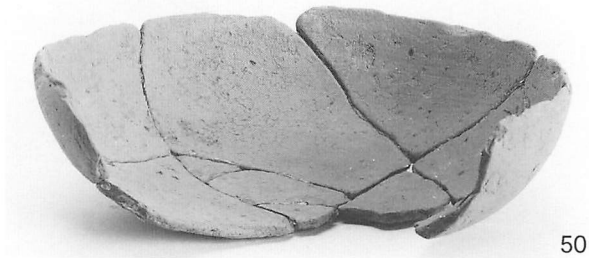
44


45

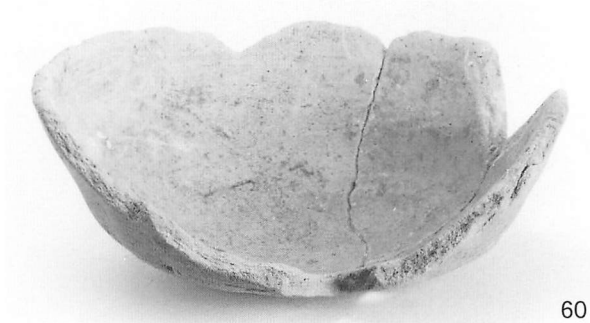
46

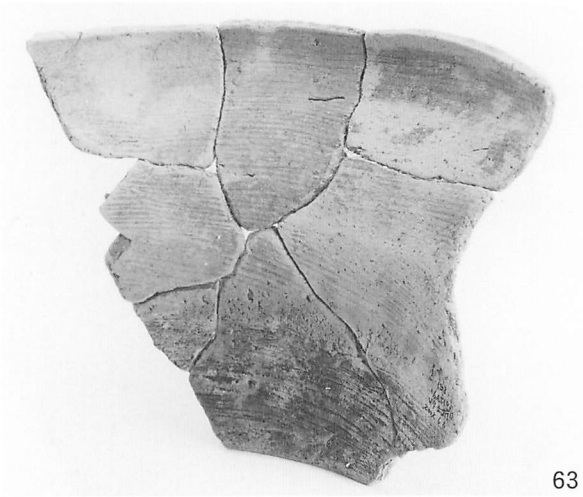

47

49

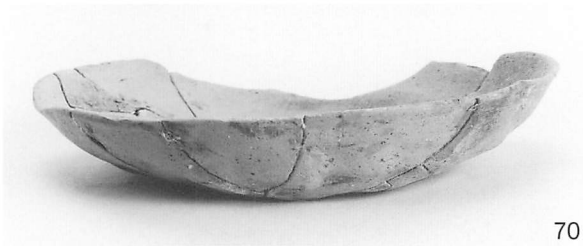

50

55


60

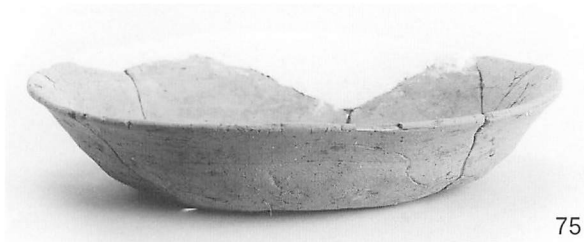

63

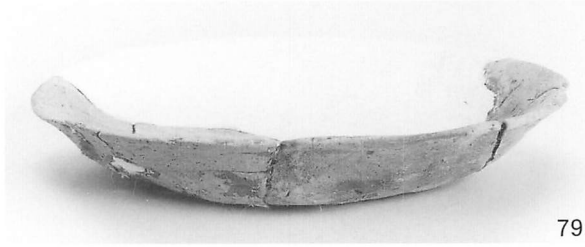
68

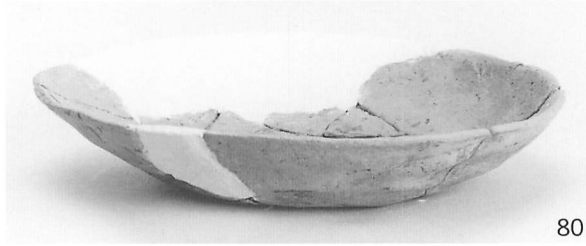

70

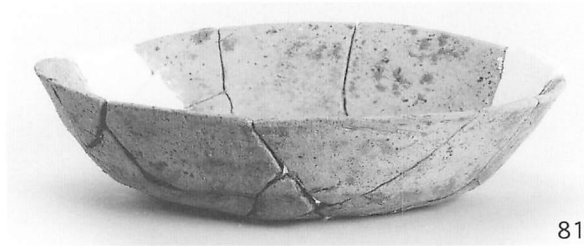
71

74


75


79

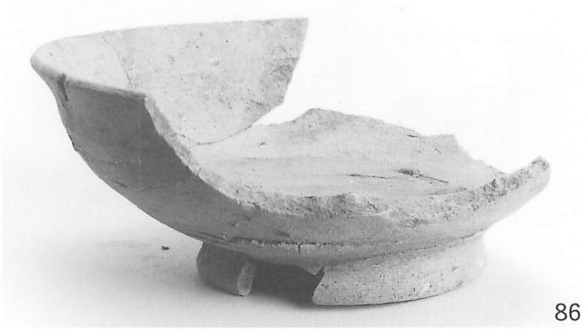

80


81

82

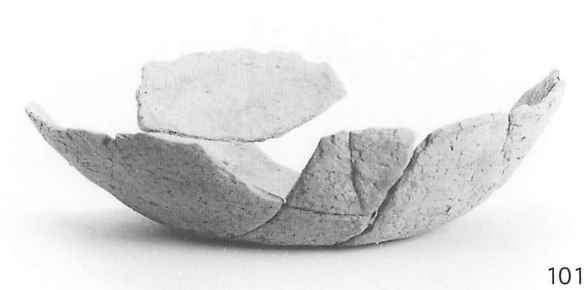
83

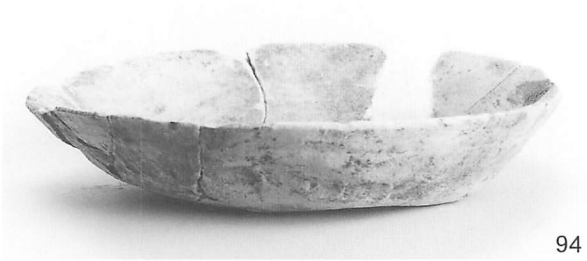
85


86

99

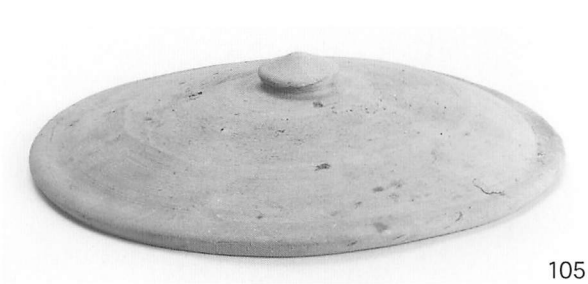
91


101


94

102

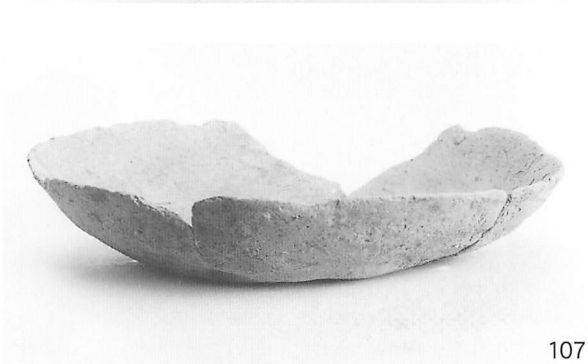
95


105

96

106

98


107

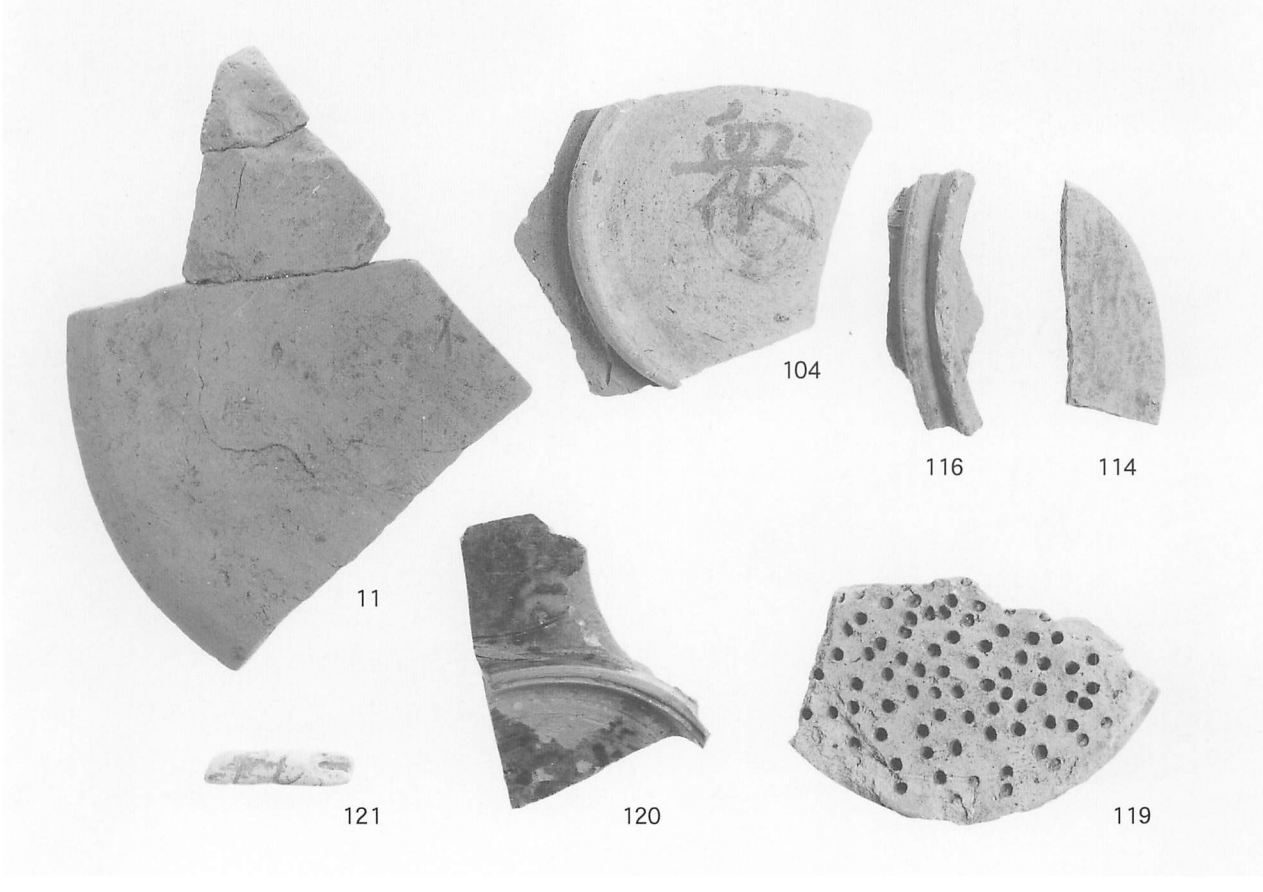
108

111

109

110

112



Ⅲ　第137次調査

（6AG8・H8・H9・Ｉ９　中垣内地区）

１　調査の経緯と経過

第137次調査は、多気郡明和町竹川字中垣内地内で史跡斎宮跡の西部地域に位置している。調査区の周辺では、斎宮跡発見の端緒となった古里遺跡Ｂ地区（第３次調査）や飛鳥時代のものと考えられる東西の方向に延びる柵が検出された第100次調査などが行われているものの、史跡西部については、未だ解明の途上といえよう。

史跡西部の解明のために、平成14年度を皮切りに５年の予定で、これまで調査の入っていない部分を基本として、幅４ｍのトレンチを入れることとした。斎宮跡で設定している旧国土座標に乗った地区に沿って調査は設定した。なお、旧竹神社周辺については、立木の制約があり任意に調査区を設定した。調査面積は700㎡、調査は平成14年８月19日に開始し、同年12月3日に現地作業は終了した。現地説明会は同年11月２日に行い、150名の一般参加があった。

２　調査区の層位

基本的には、表土あるいは耕作土を除去後、上から褐灰色土（5YR4/1)、黒褐色土（10YR3/1・遺物包含層)、橙色土（7.5YR7/6・遺構検出面）となる。場所によっては、橙色土に褐灰色土（10YR4/1）が混入している状況であった。調査区の東側ほど遺構検出面への到達が深くなるようである。周辺の地形をみても、谷地形と考えられる部分が調査区の東側である。

橙色土上面において、多くの遺構を検出した。この層は明確に遺構が検出できる層位であって、この層より上の黒褐色土上面での検出も可能と思われる。しかしながら、遺構検出面と遺構埋土が、黒褐色の同系統の色調であるため、黒褐色土上面での検出を、一部で実施したが判別は困難であった。

３　遺構

今回の調査区では、飛鳥時代から近世のわたる遺構群を確認した。ここでは、主だったものを紹介する。紹介しなかった遺構については、後掲の遺構・掘立柱建物・竪穴住居の一覧表（第Ⅲ－１～５表）を参照願いたい。

（１）古代の遺構

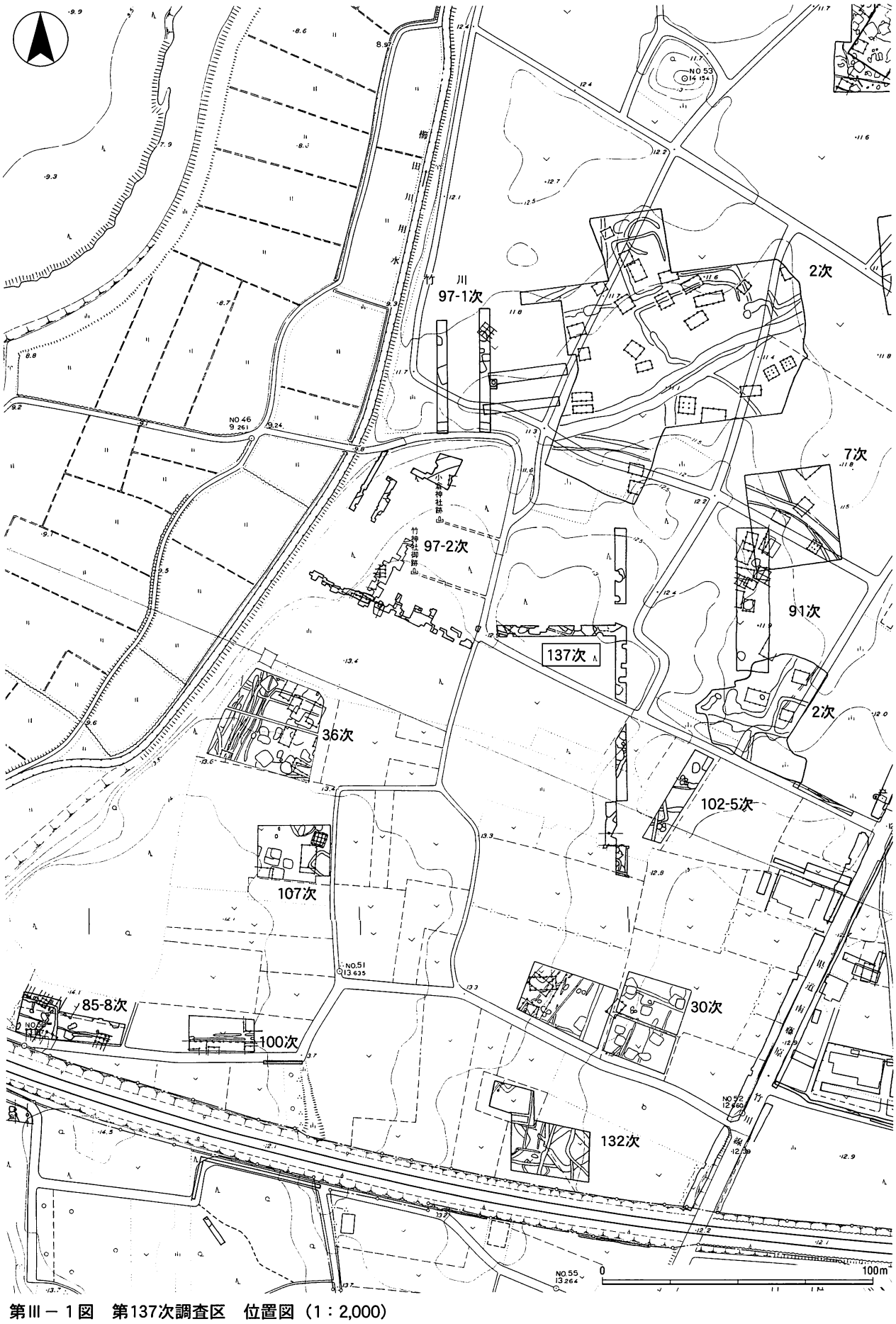
ａ　掘立柱建物・柱列

ＳＢ8668　調査区南部分内で、南側については柱列東西２間分が確認でき、北側部分については柱穴１ヶ所を確認した。この柱穴全体を検出できていて、柱掘形が長辺95cm、短辺75cmの隅丸方形を、柱痕跡は長辺31cm、短辺19cmの楕円形を呈している。調査区外に延びていくようで、南北２間、東西２間以上の掘立柱建物が想定できよう。建物の方向はＮ３°Ｗであった。柱穴出土遺物は小片ばかりで判断に苦しむが、斎宮Ｉ期前半のものと思われる。

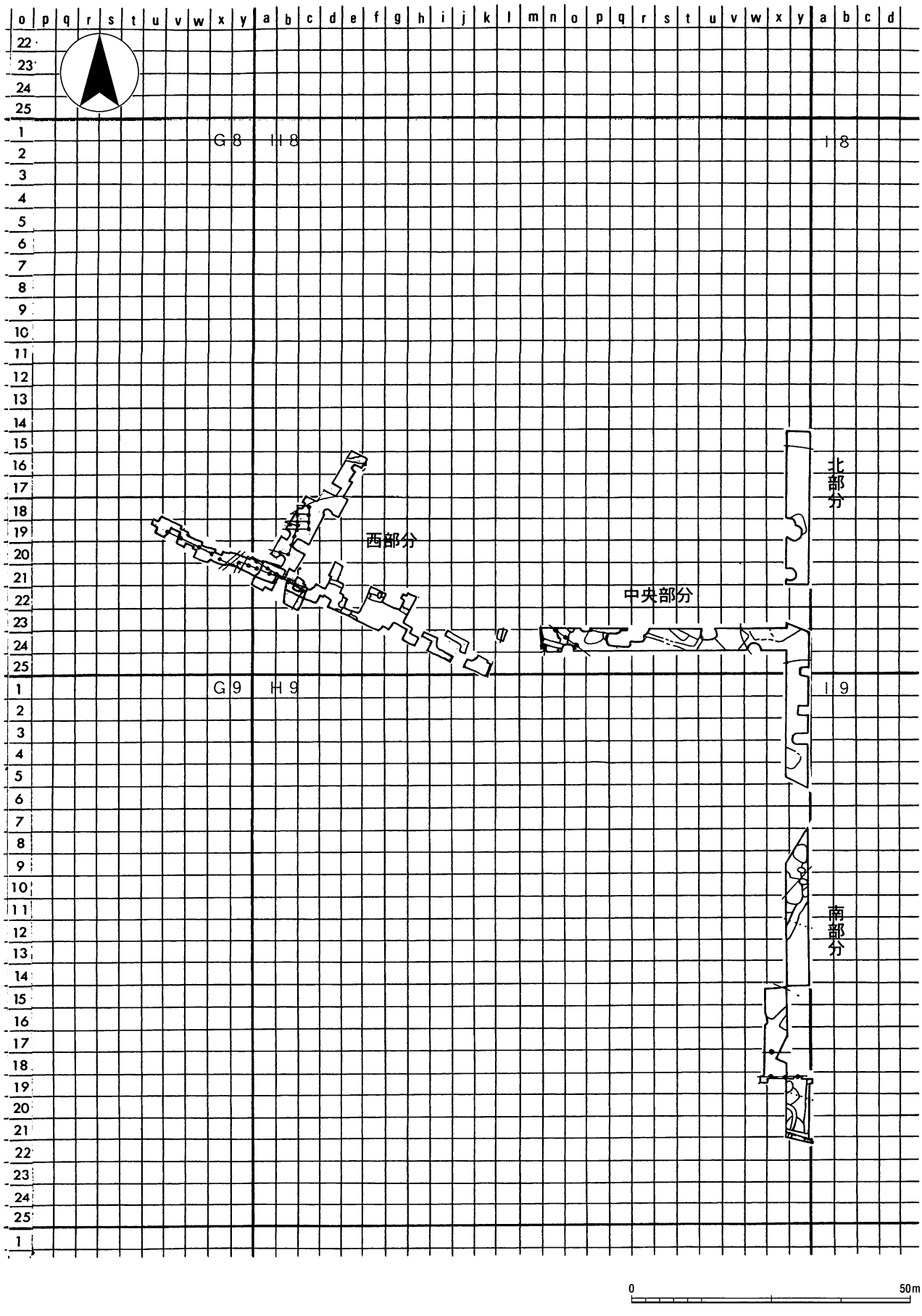
ＳＢ8669　調査区西部分内では東西１間分の柱列を確認した。柱穴のすべてを確認できたものは１ヶ所で、柱掘形が長辺84cm、短辺78cmの不整円形を呈し、柱痕跡は確認することができず、もう一つの柱穴では確認することができ、長径25cm、短径20cmの楕円形を呈している。掘立柱建物ならば調査区外の北に延びていくものと考えられる。建物の方向はＮ０°であった。柱穴からの出土遺物が小片ばかりで判断に苦しむが、斎宮Ｉ期前半のものと思われる。

ＳＢ8670　調査区西部分内では東西２間分確認した。柱穴全体を確認できたものは１ヶ所で、柱掘形が長径1.1ｍ、短径0.65ｍの楕円形を呈し、柱痕跡は、径22cmの円形を呈している。調査区外の南北どちらかに延びていき、掘立柱建物になると思われる。建物の方向はＮ29°Ｅであった。柱穴からの出土遺物が小片ばかりで判断に苦しむが、斎宮Ｉ期前半のものと思われる。

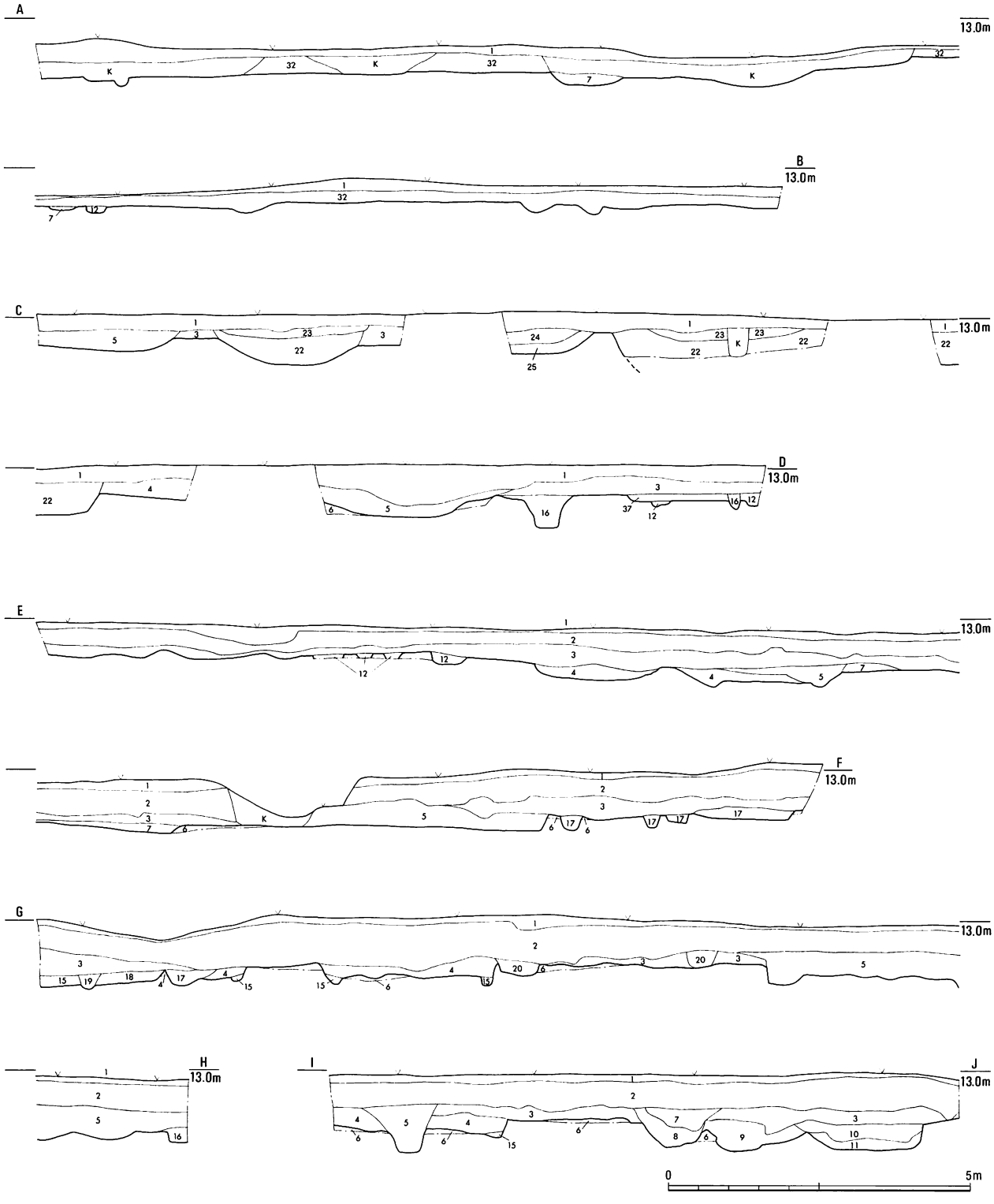
ＳＢ8671　調査区西部分内では東西２間分の柱列を確認した。柱穴全体を確認できたものは２ヶ所あり、柱掘形が長辺60～70cm、短辺55～65cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は１ヶ所で検出することができ、径12cmの円形を呈している。調査区外の南北どちらか



第Ⅲ－１図　第137次調査区　位置図（1：2,000）

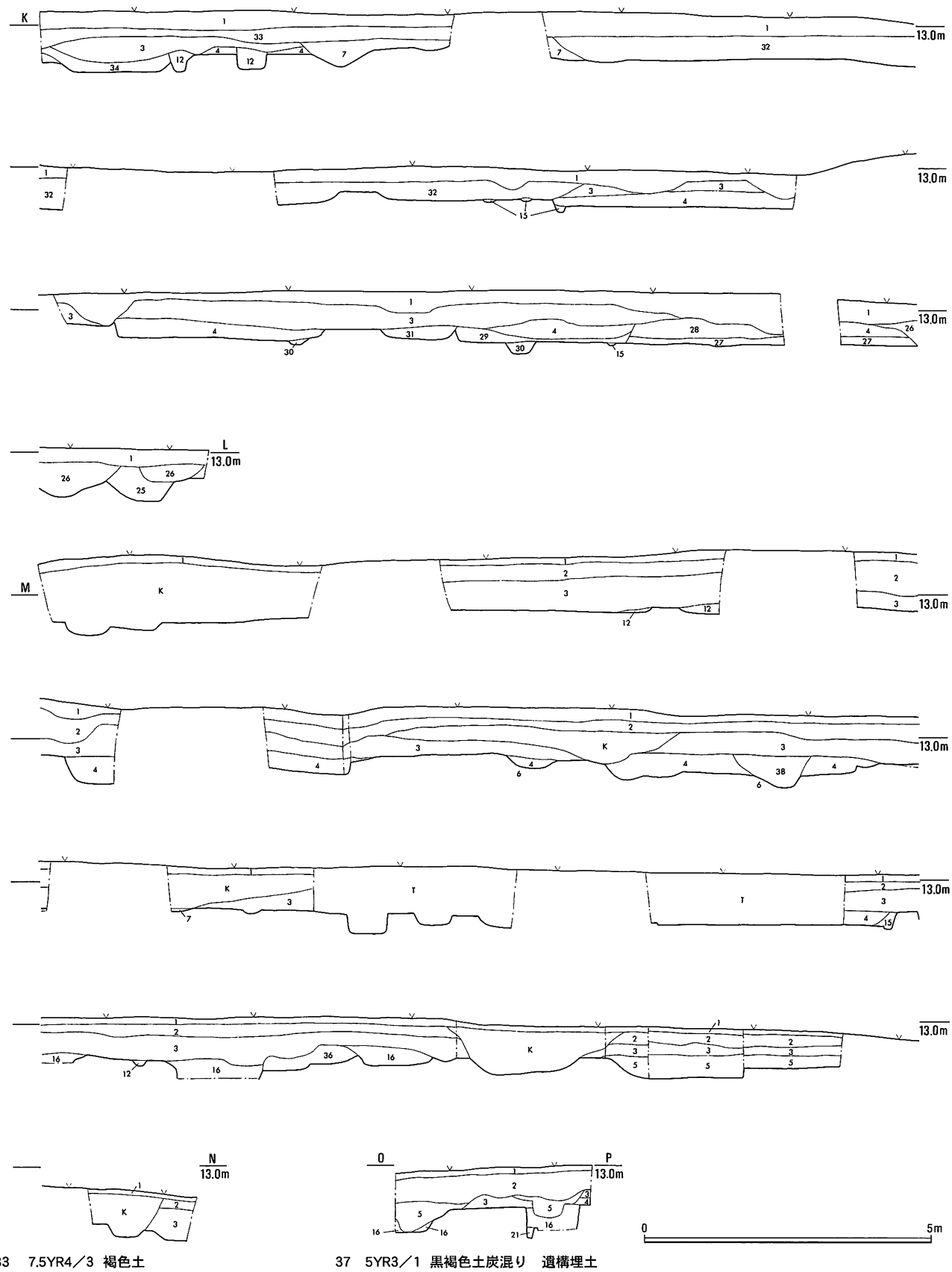


第Ⅲ－２図　第137次調査区大地区・グリッド図（1：1,000）



1 表土
2 5YR4／1 褐灰色土　土器混入
3 10YR3／1 黒褐色土　包含層
4 10YR2／2 黒褐色土　遺構埋土
5 2.5Y5／1 黄灰色土　遺構埋土
6 7.5YR7／6 橙色土に 10YR4／1 褐灰色土が混じる、遺構検出面
7 5Y5／1 灰色土　遺構埋土
8 5Y4／1 灰色土　遺構埋土
9 10YR4／1 褐灰色土に 7.5Y7／6 橙色土が混じる、遺構埋土
10 10YR4／2 灰黄褐色土に 7.5Y7／6 橙色土が混じる、遺構埋土
11 10YR5／2 灰黄褐色土に 7.5Y7／6 橙色土が混じる、遺構埋土
12 7.5YR4／1 褐灰色土　遺構埋土
13 7.5YR3／1 黒褐色土　遺構埋土
14 7.5YR5／3 暗褐色土　遺構埋土
15 7.5YR1.7／1 黒色土　遺構埋土
16 7.5YR2／1 黒色土　遺構埋土
17 10YR4／3 にぶい黄褐色土　遺構埋土
18 10YR4／4 褐色土　遺構埋土
19 10YR3／4 暗褐色土　遺構埋土
20 10YR5／3 にぶい黄褐色土　遺構埋土
21 10YR2／2 黒色土　遺構埋土
22 7.5YR4／4 褐色土
23 10YR5／6 黄褐色砂混土
24 2.5Y3／2 黒褐色土
25 2.5Y3／1 黒褐色土
26 10YR5/4 にぶい黄橙色土に7.5YR6/8 橙色土混入
27 10YR2／3 暗褐色土　遺構埋土
28 10YR7／1 黒色土　遺構埋土
29 7.5YR5／3 にぶい褐色土
30 7.5YR5／4 にぶい褐色土
31 10YR4／6 褐色土
32 2.5Y4／4 オリーブ褐色土

第Ⅲ－３図　第137次調査区　土層断面図(1)（1：100）



33　7.5YR4／3　褐色土

34　5YR3／2 黒褐色土 検出面と同じ土が混じる

35　7.5YR2／2 黒褐色土

36　5YR2／1 黒褐色土

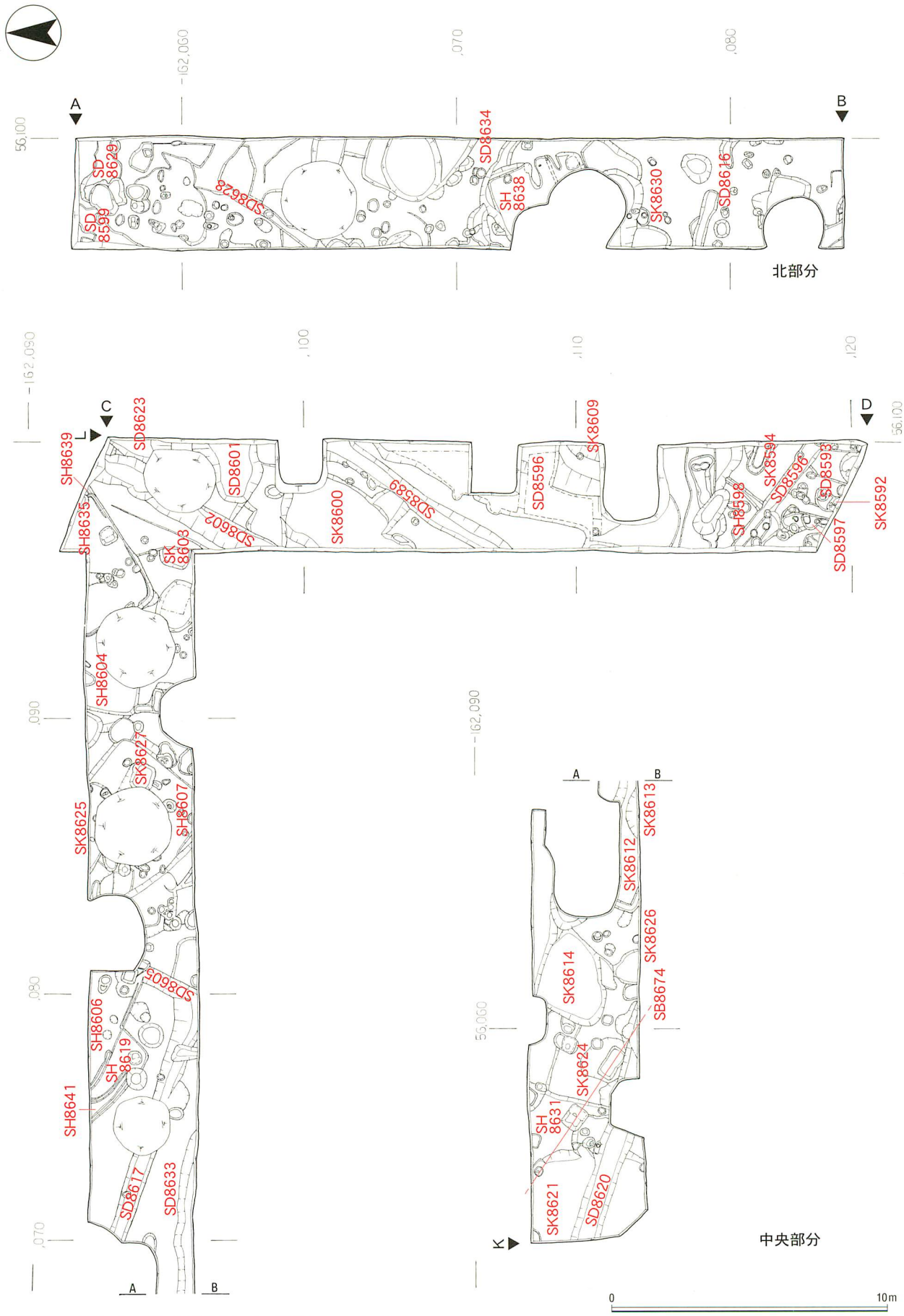
37　5YR3／1　黒褐色土炭混り　遺構埋土

38　7.5YR3／2 黒褐色土

K　撹乱

T　以前の調査の埋戻し土

第Ⅲ－４図　第137次調査区　土層断面図(2)（1：100）

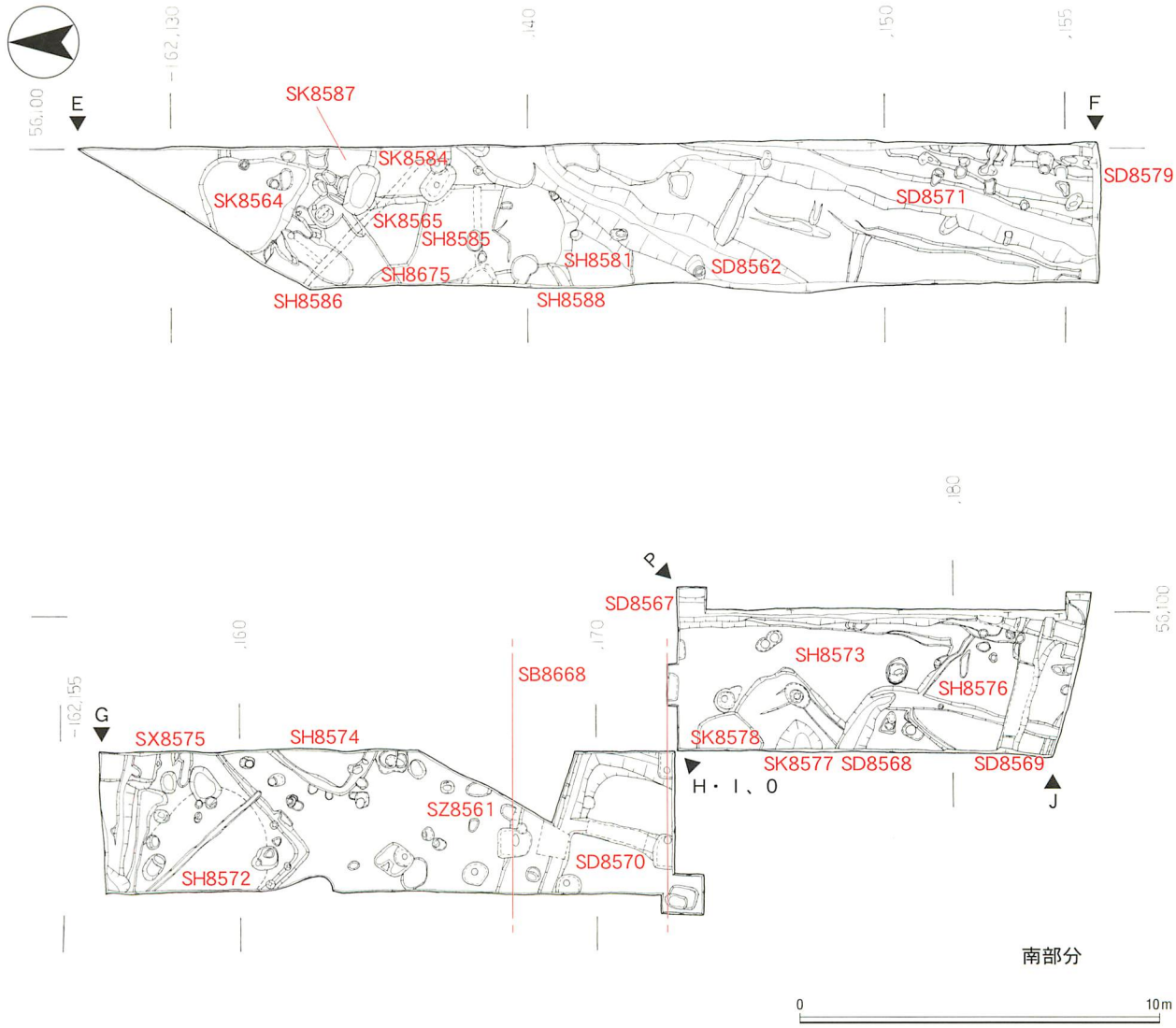


第Ⅲ－５図　第137次調査区　平面図(1)（1：200）

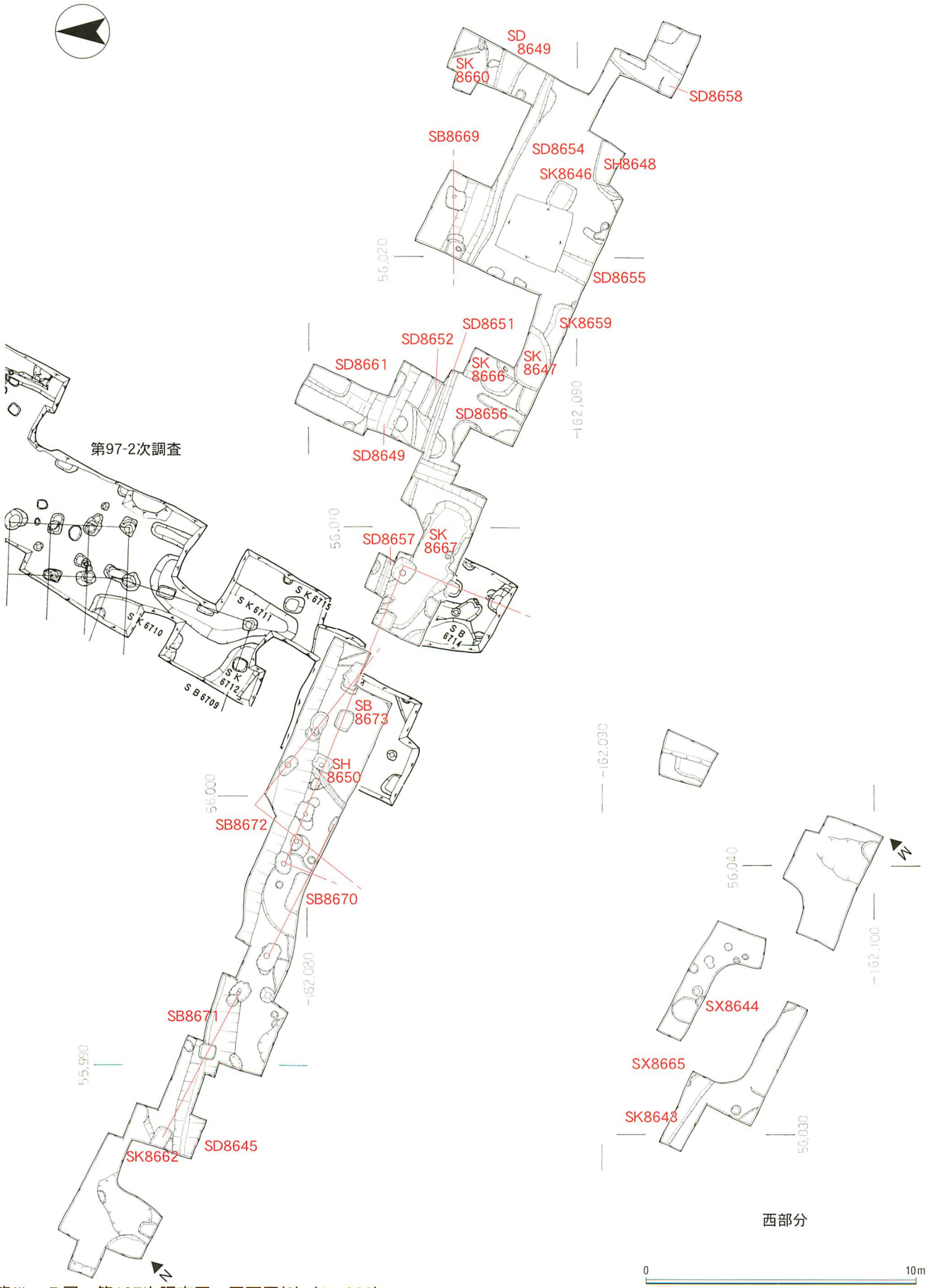
に延びていき、掘立柱建物になると思われる。建物の方向はN20°Eであった。柱穴出土遺物が小片ばかりで判断に苦しむが、斎宮Ⅰ期前半のものと思われる。

ＳＢ8672　調査区内では柱列を東西２間分は確認することができた。第97－２次調査で確認された柱穴２ヶ所と今回確認できたＨ８ａ21pit１がそれである。その柱列の方向を北西に延長し、今回の調査で確認することができたＧ８ｙ21pit３に向かって南へ曲がっていくようである。今回確認できた部分については、柱掘形が長辺64～83cm、短辺45～55cmの楕円形を呈し、柱痕跡は径18～21cmの円形を呈している。南北に２間以上、東西２間以上の掘立柱建物が想定できよう。建物の方向はN37°Eであった。柱穴出土遺物が小片ばかりで判断に苦しむが、斎宮Ⅰ期前半のものと思われる。

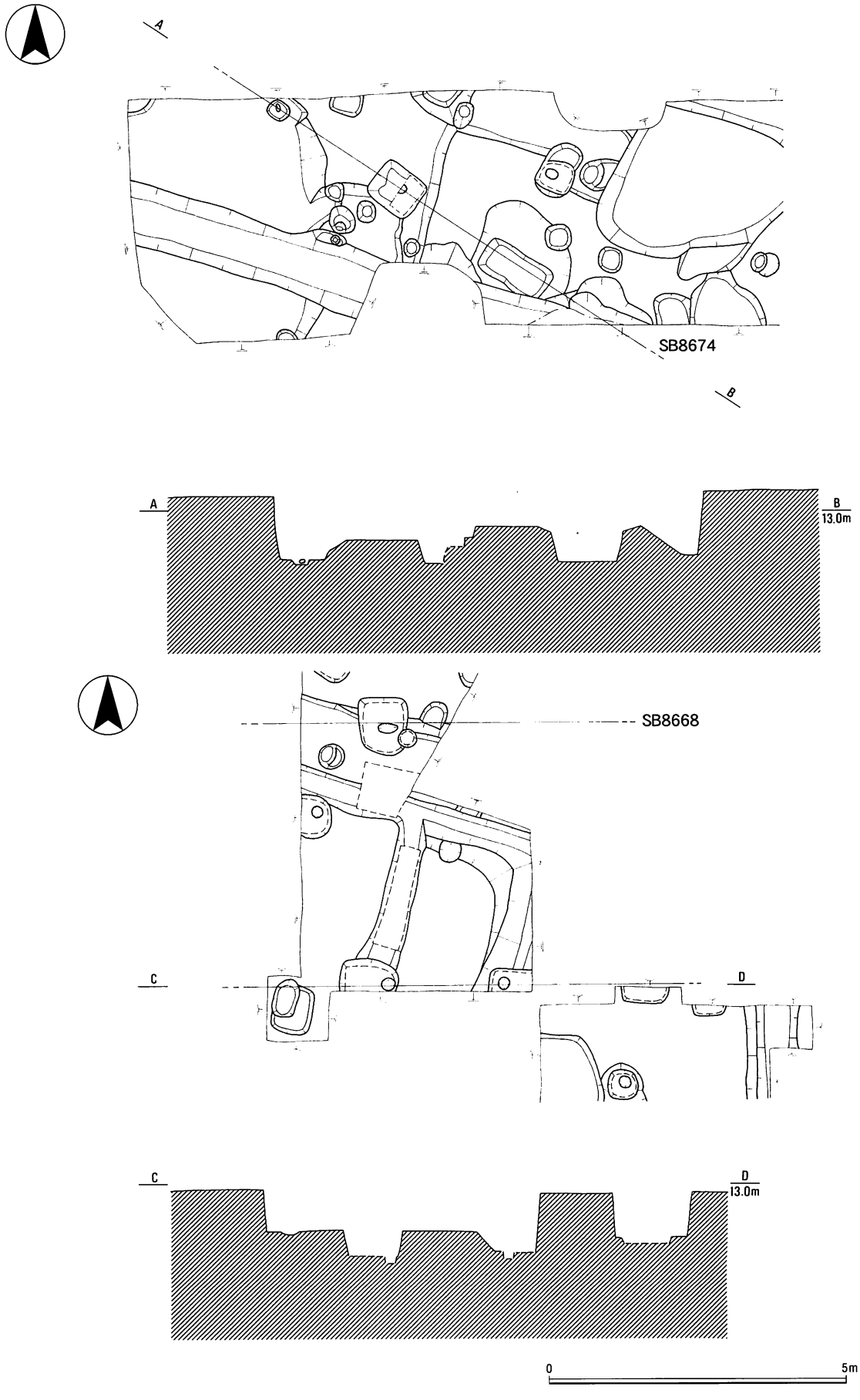
ＳＢ8673　調査区西部分内で東西６間、南北２間以上を確認することができた。建物の方向はN20°Eであった。東西方向のものについては、第97－２次調査で確認された柱穴４ヶ所と今回確認できた柱穴３ヶ所がそれである。南北方向のものについては、第97－２次調査で確認された柱穴２ヶ所と今回確認できた柱穴１ヶ所がそれである。今回確認できた部分については、柱掘形が長辺71～93cm、短辺60～65cmの楕円形または隅丸方形を呈し、柱痕跡は径18～21cmの円形を呈している。柱穴からの出土遺物が小片ばかりで判断に苦しむが、斎宮Ⅰ－２期のものと思われる。



第Ⅲ－６図　第137次調査区　平面図(2)（1：200）



第Ⅲ－７図　第137次調査区　平面図(3)（1：200）



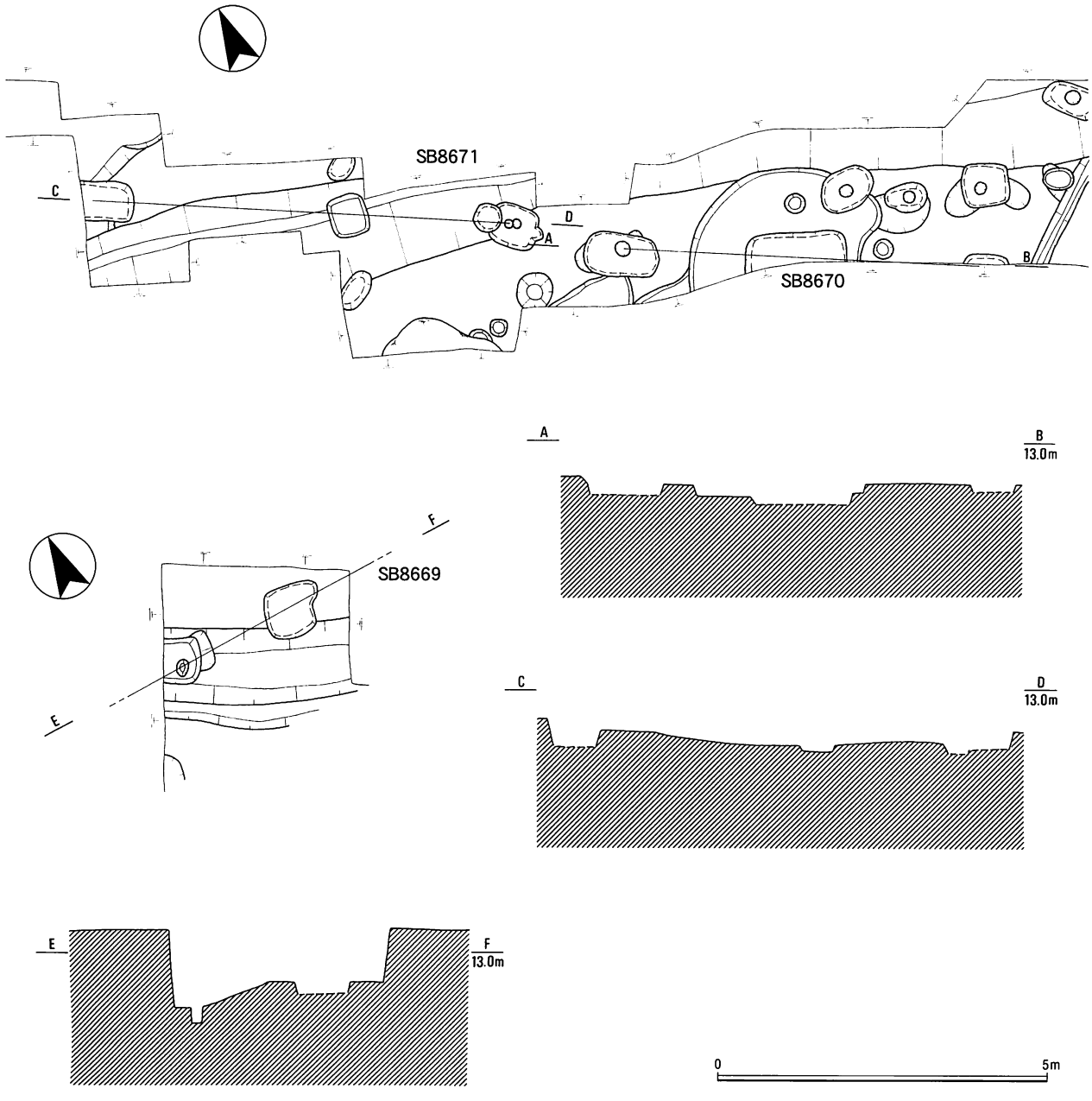
第Ⅲ－８図　第137次調査区　ＳＢ8668・8674平面・断面図（1：100）

ＳＢ8674　調査区の制約もあり、東西２間分の柱列を確認した。柱穴のすべてを検出できていて、柱掘形が長辺85cm、短辺75cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は径15cm以上の円形のものと考えられる。掘立柱建物と思われる。建物の方向はN36°Ｅであった。柱穴のひとつの柱掘形から斎宮Ｉ－１期と考えられる土師器杯が出土していて、その時期以降の建物と考えられる。

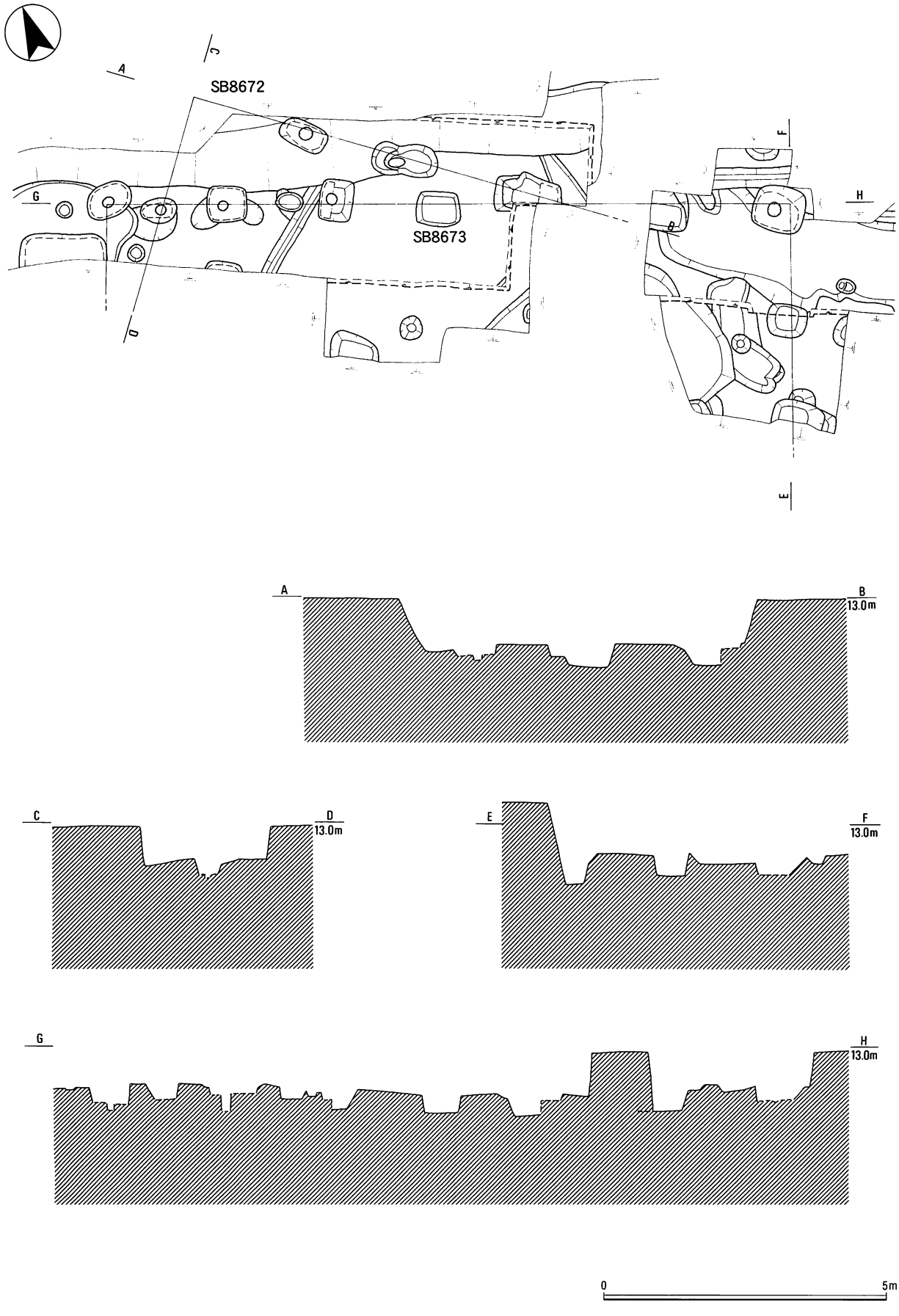
ｂ　竪穴住居

ＳＨ8572　調査区の制約やＳＸ8575あるいは中近世の溝に切られているため遺構の全容は判然としないが、調査区北端で住居跡のコーナーと思われる部分が確認することができたので、隅丸方形の竪穴住居が想定できよう。東西4.0m、南北4.2m、深さは遺構検出面から10～15cmであった。壁周溝は、途中で途切れるものの幅14～30cm、深さは床面から５～８cmを確認することができた。建物の方向はN44°Ｗであった。床面の中央あたりは貼り床になっていて硬化していた。埋土は黒褐色土の１層で、遺物の出土は確認することができなかった。隣接するＳＨ8574と、建物の方向がほぼ揃っている。同時期のものであろうか。

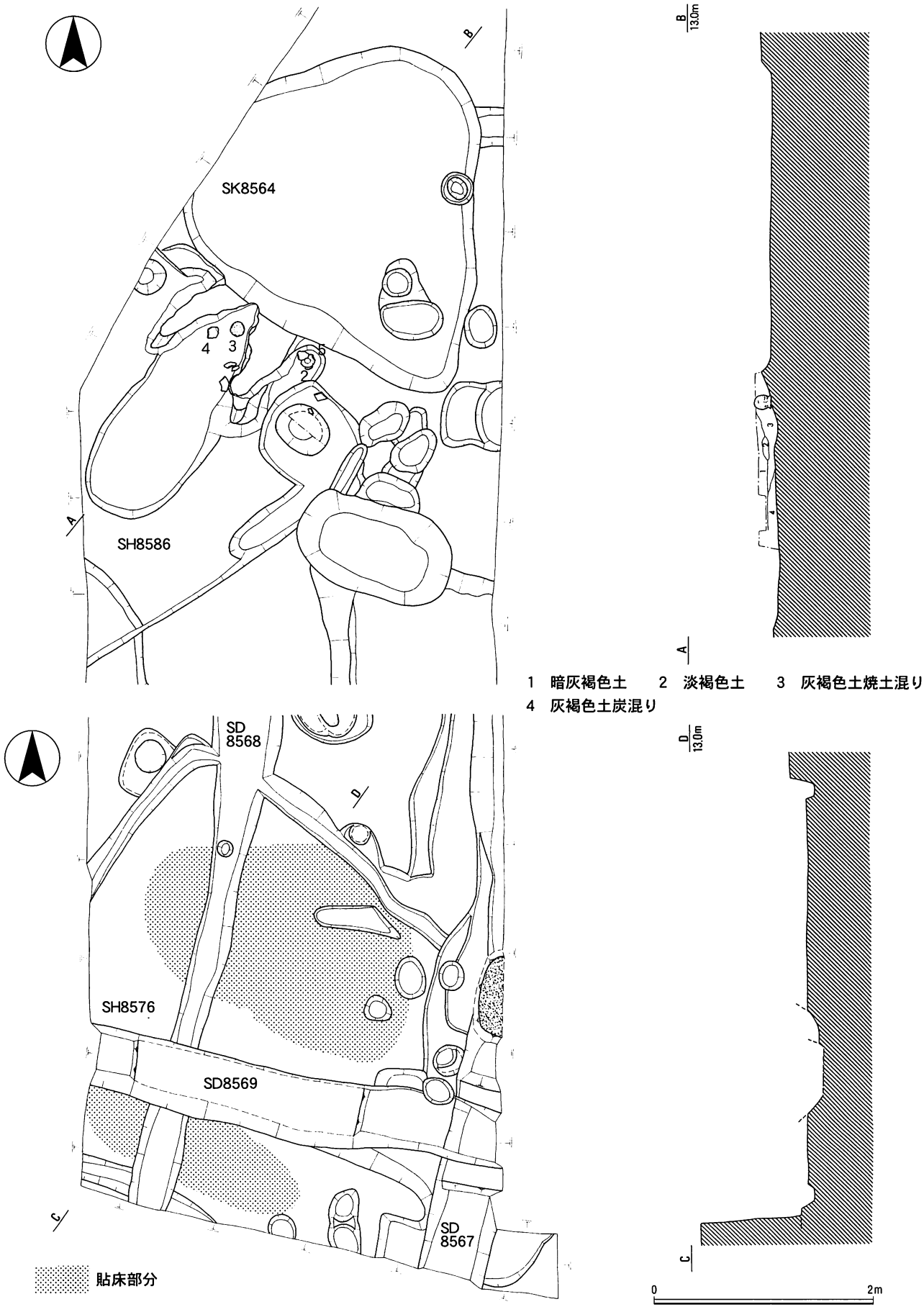
ＳＨ8573　調査区の制約があるため遺構の全容は判然としないものの、隅丸方形の竪穴住居と想定でき



第Ⅲ－９図　第137次調査区　ＳＢ8669・8670・8671平面・断面図（1：100）



第Ⅲ－10図　第137次調査区　ＳＢ8668・8674平面・断面図（1：100）



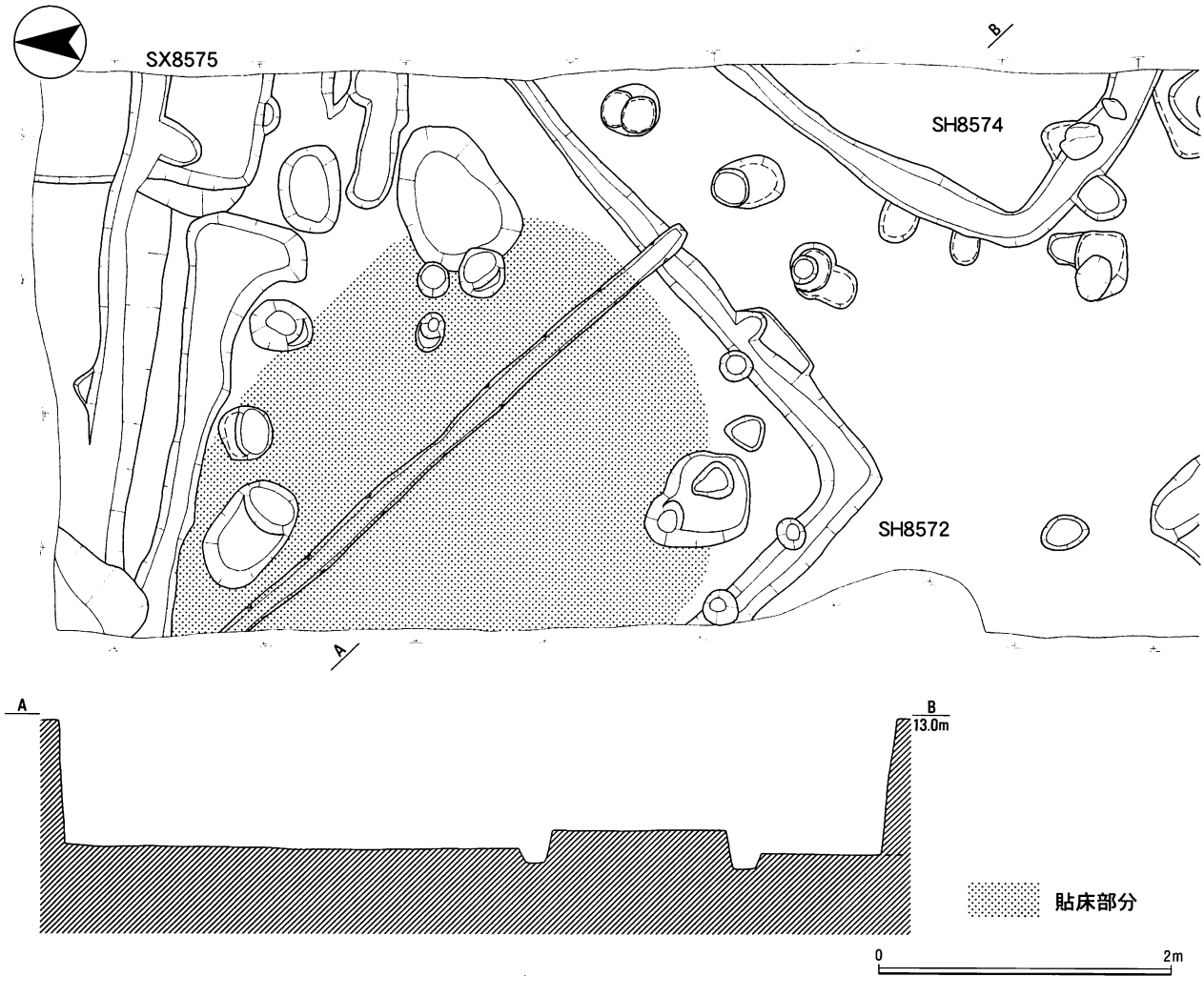
第Ⅲ－11図　第137次調査区　ＳＫ8564、ＳＨ8576・8586平面・断面図（1：50）

よう。ＳＤ8568・8569に切られ、ＳＫ8577・8578と重複している。調査区内で確認できるもっとも長い部分で3.3mを数え、深さは20cmであった。壁周溝は、途中で途切れるものの幅38～41cm、深さは床面から２～３cmを確認することができた。建物の方向はN45°Ｅ。床面の中央あたりは貼床になっていて硬化していた。ＳＤ8567と重複する調査区東側に焼土塊がみられたが明確に竈跡とはいえない。埋土からは、斎宮Ｉ－２期と思われる土師器甕・鍋の出土を確認した。

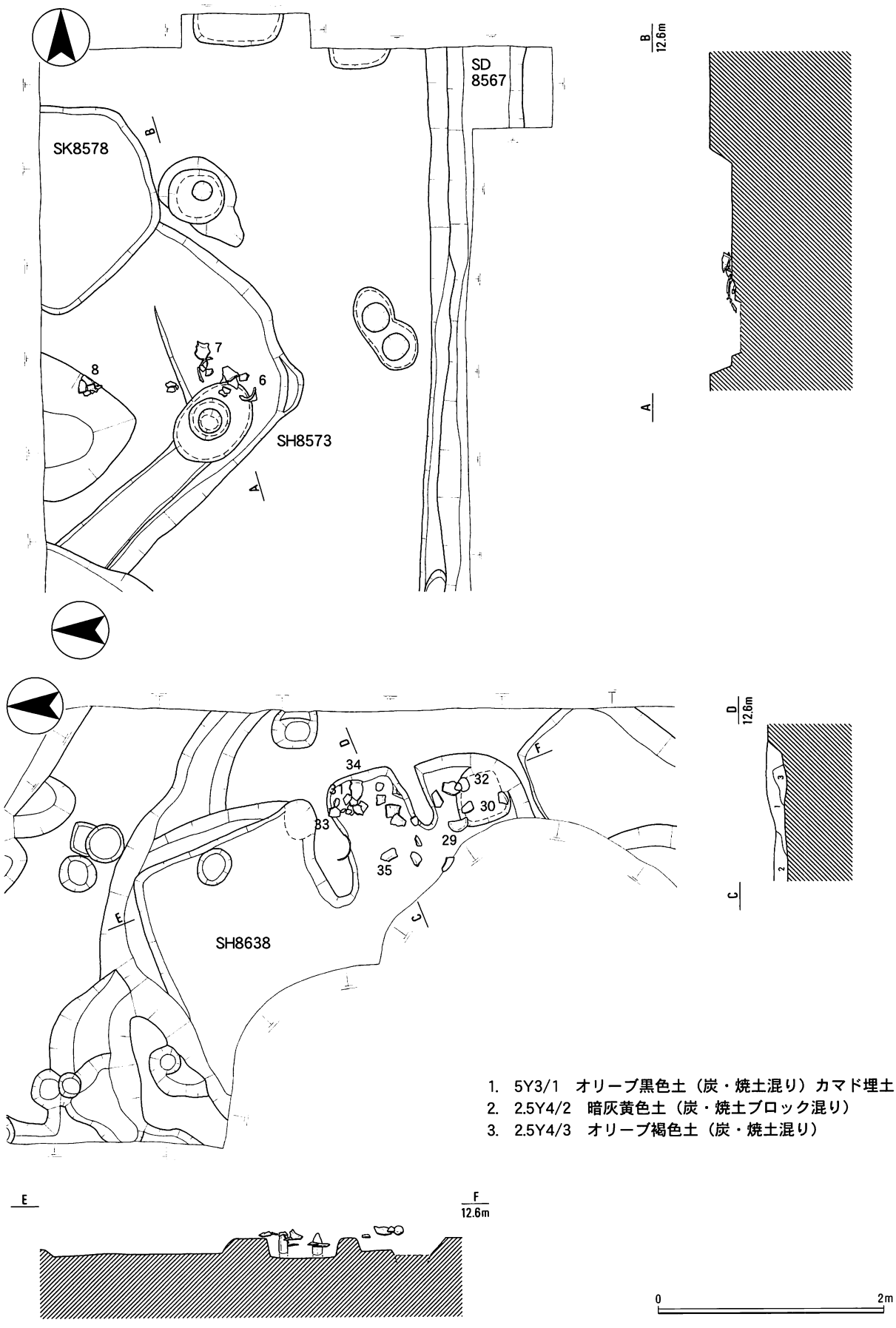
ＳＨ8574　調査区の制約もあり、遺構の全容は判然としないが、隅丸方形の竪穴住居と考えられる。東西1.6m以上、南北2.6m以上、深さは遺構検出面から18～22cmであった。壁周溝は、途中で途切れるものの幅15～33cm、深さは床面から７～11cmを確認することができた。建物の方向はN31°Ｅであった。埋土は黒褐色土の１層で、土師器甕小片の出土を確認することができた。

ＳＨ8576　埋土は黒褐色土１層であった。ＳＤ8567に切られている部分から調査区の南端部分にいたるまで壁周溝は巡っていて、幅17～26cm、深さは床面から１～５cmの規模であった。この部分ならば、一辺が4.0mの隅丸方形の規模が想定できるが、遺構の東側がＳＤ8568に切られていて全容は判然としない。深さは遺構検出面より16～23cmで、建物の方向はN41°Ｅであった。ＳＤ8569に切られている部分以外は、床面が貼り床になっていて硬化している部分を確認した。竈跡を確認することはできなかったが、ＳＤ8567と重複する調査区東側に焼土塊がみられたが明確に竈跡とはいえない。埋土からは、斎宮Ｉ－２期と考えられる土師器杯・甕を、少量ではあるが確認した。

ＳＨ8585　ＳＨ8581・8586・8588や溝、柱穴が重複し錯綜しているため遺構の形態など判然としない。



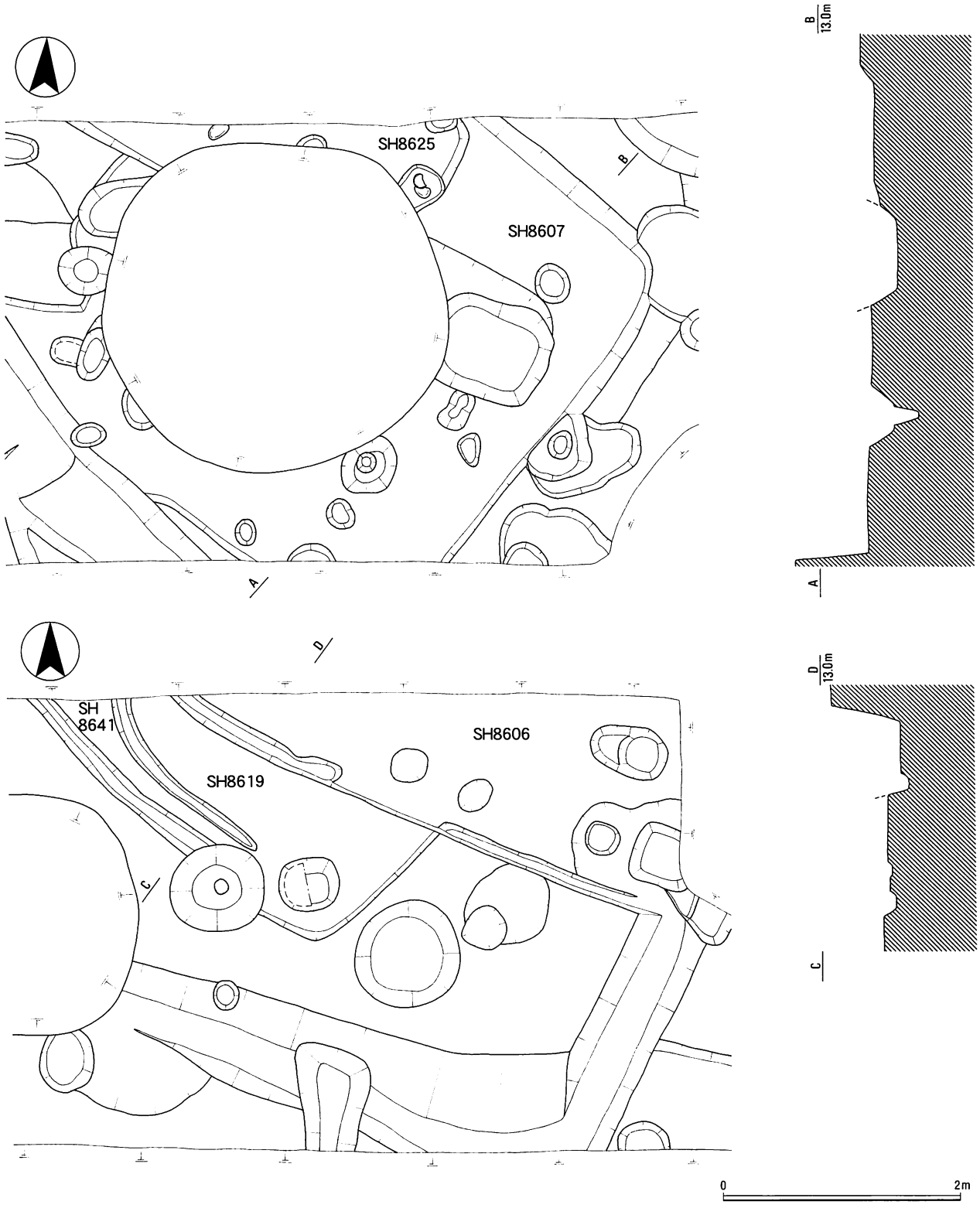
第Ⅲ－12図　第137次調査区　ＳＨ8572・8574平面・断面図（1：50）



第Ⅲ－13図　第137次調査区　ＳＨ8573・8638平面・断面図（1：50）

切り合い関係からＳＨ8586よりは新しくなるようである。土師器皿・小形甕・甑などが埋土から出土した。これらは、斎宮Ｉ－2～3期のものと考えられる。

ＳＨ8586　調査区の制約やＳＨ8581・8585・8588との重複のため遺構の全容は判然としない。北東辺に、東側の基底部の端部は土師器甑片により補強され、ほぼ中央には小形の土師器甕が逆位に据えられていた竈跡を確認することができた。逆位の土師器甕は支柱石と同様の機能であったと考えられる。また、竈跡の前方には幅0.9m、長さ1.5m、深さ床面から



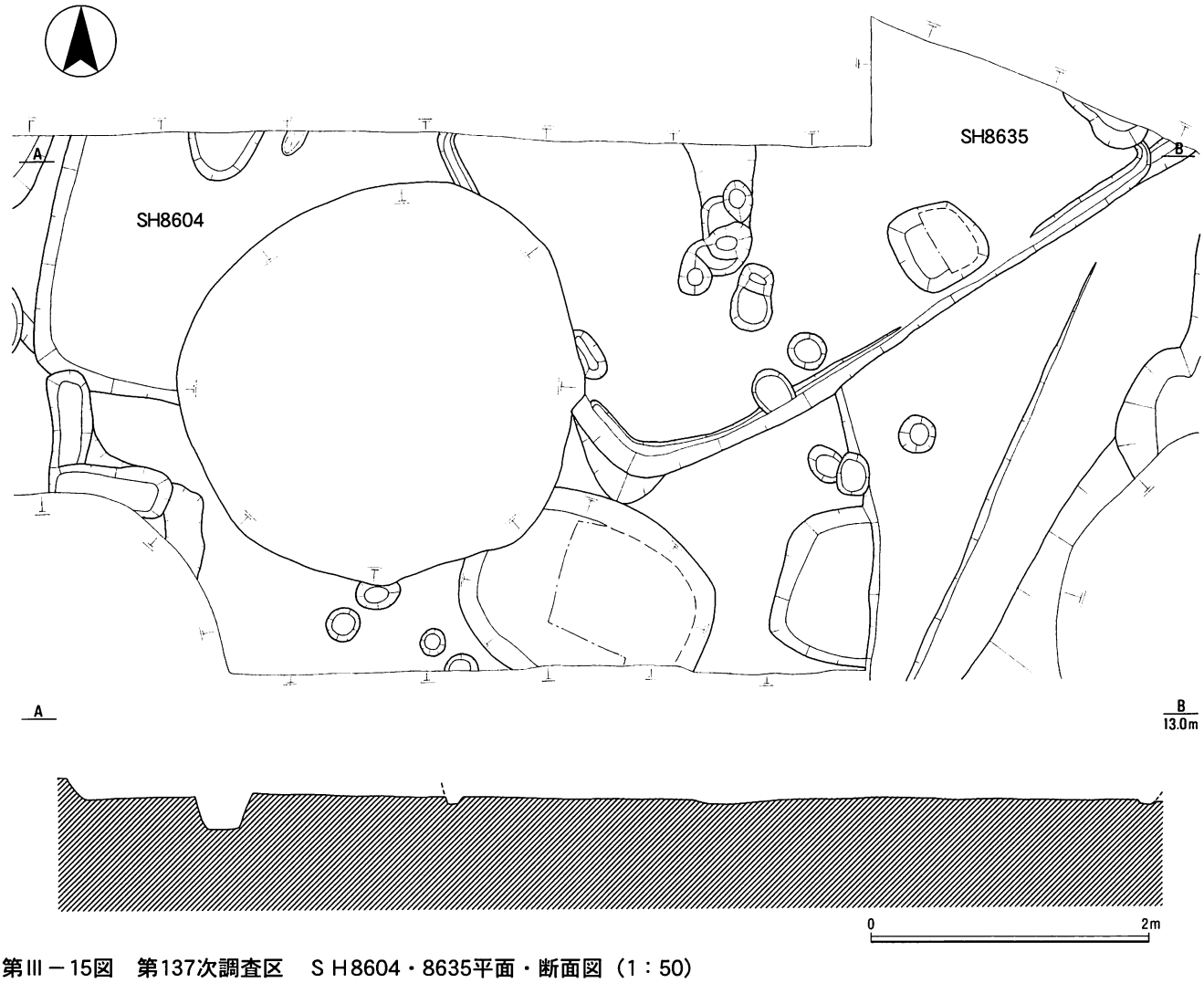
第Ⅲ－14図　第137次調査区　ＳＨ8606・8607・8619・8641平面・断面図（1：50）

２～３cmの浅い掘り込みを確認した。竈跡の東側で住居跡のコーナーと思われる部分が確認することができたので、隅丸方形の竪穴住居であることが想定できよう。東西3.0m以上、南北3.0m以上、深さは遺構検出面から12～15cmであった。壁周溝は、途中で途切れるものの幅30cm、深さは床面から15～25cmを確認することができた。建物の方向は、N45°Eであった。竈跡周辺に遺物が集中していて、土師器杯・小形甕・高杯が出土した。これらの時期は、斎宮Ⅰ－１～２期に比定できよう。

ＳＨ8588　調査区の制約もあり遺構全体は把握できない。調査区の西端に焼土塊とコーナー部分と壁周溝の一部とみられるものを確認した。焼土塊は竈跡と思われ、調査区西端であったので、掘削は行っていない。調査区内に検出できた部分は、東西0.8m以上、南北3.6m、深さ17cmであった。建物の方向はN11°Wであった。埋土から、斎宮Ⅰ－２～３期と考えられる土師器皿・杯・甕・甑、須恵器杯蓋が出土した。

ＳＨ8606　調査区の制約があるため遺構の全容は判然としないものの、隅丸方形の竪穴住居と想定できよう。ＳＤ8605に切られ、ＳＨ8619・8641と重複している。調査区内で確認できるもっとも長い部分で4.6mを数え、深さは17cmであった。壁周溝は途切れるものの幅13～17cm、深さは床面から４～13cmを確認することができた。建物の方向は、N26°Eであった。埋土からは、斎宮Ⅰ－２～３期と思われる土師器杯・甕の出土を確認した。ＳＨ8619では壁周溝を、ＳＨ8641では住居跡のコーナー部分と途切れるものの壁周溝を確認した。ともにＳＨ8606よりも掘り込みが浅くなっている。切り合い関係については判然としない。

ＳＨ8607　調査区の制約があるため遺構の全体を確認することができなかったが、隅丸方形の竪穴住居

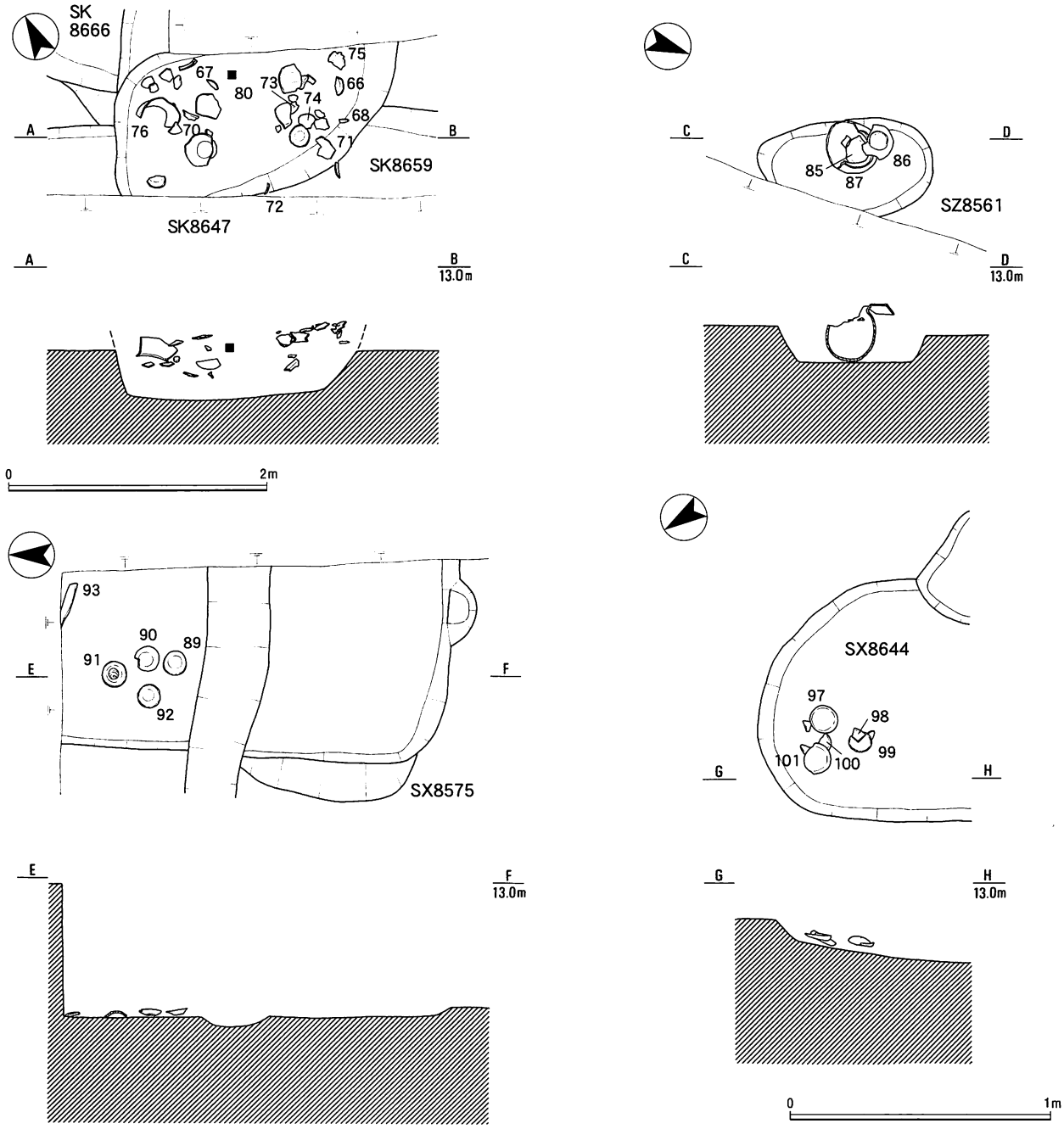


第Ⅲ－15図　第137次調査区　ＳＨ8604・8635平面・断面図（1：50）

と想定できよう。ＳＤ8611に切られ、ＳＫ8625と重複している。調査区内で一辺4.3mであることが確認でき、深さは14～24cmであった。建物の方向はＮ37°Ｅであった。壁周溝は確認することができなかった。埋土から遺物の出土は確認できなかったが、重複する遺構の出土遺物から判断して時期は斎宮Ｉ期のものと思われる。

ＳＨ8635　調査区の制約があるため遺構の全体を確認することができなかったが、隅丸方形の竪穴住居と想定できよう。ＳＨ8604と重複している。東西4.4m、南北3.0m以上、深さは36～38cmであった。途中で途切れてはいるものの、幅16～23cm、深さは床面から３～４cmの壁周溝を確認することができた。埋土から遺物の出土は確認できなかったが、遺構の時期については形状から判断して斎宮Ｉ期のものと思われる。

ＳＨ8638　調査区の制約もあり遺構の全体は確認できないが、調査区内の形状から隅丸方形の竪穴住居跡と想定できよう。ＳＫ8630やＳＤ8634に切られているようである。東西3.6m、南北2.9m以上、深さ13～23cmの規模であった。西側の基底部の端部は土師器甕片により補強されていて、中央には平行する



Ⅲ－16図　第137次調査区　ＳＫ8647、ＳＸ8575・8644、ＳＺ8561平面・断面図（1：25、1：50）

ように２ヶ所の支柱石がすえられていた竈跡を確認することができた。南東隅には貯蔵穴と考えられる柱穴がみられる。壁周溝は確認することはできなかった。埋土からは、斎宮Ⅰ－３期と考えられる土師器皿・杯・高杯・甕・鍋、須恵器杯蓋・壷小片が出土した。

c　土坑

ＳＫ8564　長辺3.16m、短辺2.78m、深さ８～14cmの不整円形を呈している。ＳＨ8586と重複している。埋土からは、土師器皿・杯・高杯・甕・鍋、須恵器杯・杯蓋の出土を確認した。これらは、斎宮Ⅰ－１～３期に属すると考えられる。

ＳＫ8565　ＳＨ8585・8586、ＳＫ8587と重複し錯綜している状況なので、遺構の全容については判然としない。埋土からは、土師器皿・杯・甕・鍋、須恵器杯の出土を確認した。これらは、斎宮Ⅰ－２期に属すると考えられる。

ＳＫ8584　ＳＨ8585・8586、ＳＫ8587と重複し切り合いが錯綜している状況なので、遺構の全容については判然としない。埋土からは、斎宮Ⅰ－２期に属すると考えられる土師器杯の出土を確認した。

ＳＫ8621　調査区の制約もあり遺構の全体は確認できなかった。ＳＨ8631・ＳＤ8620・ＳＢ8570に切られているようである。長辺3.4m、深さは52～55cmの規模である。埋土からは、斎宮Ⅰ－２期と考えられる土師器皿・杯・高杯・甕、須恵器杯蓋・壷が出土した。調査区が狭小であるため、土坑としたが、溝となる可能性も否定はできない。

ＳＫ8647　長径2.5m、短径1.4m、深さ41～62cmの長楕円形を呈している。埋土からは、斎宮Ⅰ－２期と考えられる土師器皿・杯・甕・鍔付円筒土器、須恵器杯蓋、毛彫馬具が出土した。出土状況としては、土坑底部より遺物が浮いている状況である。投棄行為が行われたと考えられなくもない。南にはＳＫ8659、北にはＳＫ8666があり、土層断面の観察からこの２つ遺構より新しい時期のものと考えられる。ＳＫ8659との切り合い付近には焼土がみられた。

ＳＫ8659　ＳＫ8647に切られている。長辺4.33m、短辺0.52m以上、深さは26～33cmの規模があり、遺構の形態から竪穴住居である可能性もある。ＳＫ8647との切り合い付近にある焼土は竈の破壊された跡とも考えられる。埋土からは、斎宮Ⅰ－１～２期と考えられる土師器皿・杯・高杯・甕、須恵器甕が出土した。

ＳＫ8666　ＳＫ8647に切られている。長辺1.95m以上、短辺0.92m以上、深さは21～39cmの規模が調査区内であり、埋土からは、斎宮Ⅰ－１～２期と考えられる土師器片、須恵器片、轡に関連する馬具が出土した。

d　溝

ＳＤ8658　幅1.1m、深さ21～39cmの溝と思われる。ＳＢ8673の建物方向とほぼ同一であることから、区画溝のような機能があったのかもしれない。埋土からは、斎宮Ⅰ－２期と考えられる土師器皿・杯・甕、須恵器杯・甕が出土した。

ＳＤ8567　上面の幅が1.0m、深さ50cm、断面形が箱状になっている溝である。南北の調査区外に延びていくようである。埋土からの遺物は少なく、山茶椀、土師器類、緑釉陶器小片の出土が確認できた。

e　墓・地鎮遺構

ＳＸ8665　調査区の北壁に土師器長胴甕底部が顔を出した状況で検出した。取り上げてみるともう一個体が口縁部をあわせた形で横位に埋設されていたようであった。合口の土器棺と思われる。調査区外ということもあり完掘することは不可能であった。土器は斎宮Ⅰ－２期に比定できよう。切り合いからＳＫ8643より新しい時期と考えられる。

ＳＺ8561　長径0.66m、短径0.38m、深さ10～14cmの楕円形の土坑内に、若干斜位となった土師器甕の口縁部の内側に正位で土師器皿を入れ込み、その上から土師器椀を逆位に被せたものと考えられる。逆位の土師器椀は口縁部と一部重なるもののずれた状況で出土した。埋まっていく過程でずれてしまったのだろうか。第95次調査ＳＸ6666や第99次調査ＳＸ6900のような地鎮遺構であろうか。地鎮遺構とするならば斎宮跡で最も新しい時期のものといえよう。これらの土器は斎宮Ⅲ－１期のものと考えられる。

（２）中世の遺構

ＳＸ8575　長辺1.45m以上、短辺0.78m以上、深さは13～17cmの土壙墓と思われる。隅の丸い長方形になると考えられる。調査区が途切れる部分に４個の陶器皿、通称「山皿」が、最も北にある１個が底部

通番遺構番号	性格	次数	調査時遺構名	地区	グリッド	時期	斎宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SZ 8561	土坑	137	SK8561	H9	x17	平安後～	Ⅲ－3	地鎮関連か。
SD 8562	溝	137	SD8562	H9	y11～12	中世		黒色土器片あり。ＳＤ 8563 より新しい。
SD 8563	溝	137	SD8563	H9	y11～12	中世		斎宮Ⅲ期から室町までの土器が出土。
SK 8564	土坑	137	SK8564	H9	y8～9	奈良前～	Ⅰ－1～3	土師器杯･皿・高杯・甕･鍋、須恵器杯蓋・杯が出土。
SK 8565	土坑	137	SK8565	H9	y9～10	奈良前～	Ⅰ－2	暗文が施された土師器皿。
SD 8566	溝	137	SD8566	H9	x17～19	平安後～	Ⅲ－2～	内側に巻き込むような口縁端部をもつ土師器甕。
SD 8567	溝	137	SD8567	H9	y19～y21	平安～	Ⅲ	断面箱状。斎宮Ⅰ－2以降の土器が出土。緑釉。
SD 8568	溝	137	SD8568	H9	y20～21	近世		山茶椀７型式以降。
SD 8569	溝	137	SD8569	H9	y21	近世～		遺物なし。ＳＤ 8568・8569 より新しい。
SD 8570	溝	137	SD8570	H9	x18	不明		土師器片少量。ＳＤ 8566 掘削後検出。
SD 8571	溝	137	SD8571	H9	y14.x15	近世		斎宮Ⅰ期以降の土器が出土。
SX 8575	土壙墓	137	SX8575	H9	x15	鎌倉		山皿（藤沢編年５型式）、４個並んで出土。刀子も出土。
SK 8577	土坑	137	SK8577	H9	y19	奈良～		遺物なし。ＳＨ 8573 より新しい。
SK 8578	土坑	137	SK8578	H9	y19	奈良～		遺物なし。ＳＨ 8573 より新しい。
SD 8579	溝	137	SD8579	H9	y13～14	近世～		陶器片など。
SD 8580	溝	137	SD8580	H9	y11	奈良	Ⅰ	土師器、須恵器小片。ＳＨ 8588 より新しい。
SK 8582	土坑	137	SK8582	H9	y10	奈良	Ⅰ	土師器片少量。
SK 8583	土坑	137	SH8583	H9	y14	奈良	Ⅰ	土師器片少量。
SK 8584	土坑	137	SK8584	H9	y9～10	奈良前	Ⅰ－2～3	遺物なし。ＳＨ 8565 掘削後検出。
SK 8587	土坑	137	SK8587	H9	y9	不明		遺物なし。ＳＨ 8565 掘削後検出。
SD 8589	溝	137	ＳＤ 8589	H9	y1～2	中世後期		南伊勢系土師器鍋、羽釜中心。
SD 8590	溝	137	SD8590	H9	y5	中世～		陶器片など。
SD 8591	溝	137	SD8591					欠番。
SK 8592	土坑	137	SK8592	H9	y5	不明		遺物なし。ＳＤ 8593 掘削後検出。
SD 8593	溝	137	SD8593	H9	y5	不明		遺物なし。
SK 8594	土坑	137	SK8594	H9	y5	中世～		斎宮Ⅰ期から中世までの遺物が混じる。
SD 8595	溝	137	SD8595	H9	y4	室町～		山茶椀（藤沢編年７型式）出土。青磁片あり。
SD 8596	溝	137	SD8596	H9	y1～3	室町～		土師器皿、南伊勢系土師器鍋。
SD 8597	溝	137	SD8597	H9	y5	不明		
SD 8599	溝	137	SD8599	H8	y15	中世～		土師器小片、陶器小片出土。
SK 8600	土坑	137	SK8600	H8	y25	室町～		斎宮Ⅰ期から薄手の土師器皿、南伊勢系土師器鍋、山茶椀出土。
SD 8601	溝	137	SD8601	H8	y25	室町～		薄手の土師器皿、南伊勢系土師器鍋・羽釜、山茶椀出土。
SD 8602	溝	137	SD8602	H8	y24	不明		遺物なし。
SK 8603	土坑	137	SK8603	H8	x24	不明		土師器小片出土。
SD 8605	溝	137	SD8605	H8	t24	室町～		南伊勢系土師器鍋出土。
SK 8608	土坑	137	SK8608	H8	y24	室町～		斎宮Ⅰ期から薄手の土師器皿、南伊勢系土師器鍋、山茶椀出土。
SK 8609	土坑	137	SK8609	H9	y3			
8610		137	SK8610	H8	y24			ＳＨ 8635 に。
SD 8611	溝	137	SD8611	H8	u24	奈良～		弥生中期から奈良の土器出土。
SK 8612	土坑	137	SH8612	H8	q24	奈良前期～	Ⅰ－2～3	土師器杯・甕、須恵器片出土。弥生土器入る。
SK 8613	土坑	137	SK8613	H8	q24	室町～		南伊勢系土師器鍋出土。ほとんどが土師器片。

第Ⅲ－１表　第137次調査区遺構一覧(1)

通番遺構番号	性格	次数	調査時遺構名	地区	グリッド	時期	斎宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SK 8614	土坑	137	SK8614	H8	p24	奈良前期～	Ⅰ－2～3	土師器杯･皿・甕･竈、須恵器杯・甕が出土。
SK 8615	土坑	137	SK8615	H8	y21	室町～		南伊勢系土師器鍋出土。ほとんどが土師器片。
SD 8616	溝	137	SD8616	H8	y20	室町～		南伊勢系土師器鍋出土。ほとんどが土師器片。
SD 8617	溝	137	SD8617	H8	r24.s24	室町～		南伊勢系土師器鍋出土。須恵器片も入る。
SK 8618	土坑	137	SK8618	H9	y1	奈良		土師器甕･、須恵器片が出土。
SD 8620	溝	137	SD8620	H8	p24	不明		遺物なし。
SK 8621	土坑	137	SK8621	H8	n24	奈良前期～	Ⅰ－2～3	土師器杯･杯蓋･皿･高杯･甕、須恵器杯･杯蓋･壺が出土。溝の可能性あり。
SK 8622	土坑	137	SK8622	H8	y25	室町～		斎宮Ⅰ期から南伊勢系土師器鍋、山茶椀出土。
SD 8623	溝	137	SD8623	H8	y24	中世～		薄手の土師器皿出土。ほとんどが土師器。
SK 8624	土坑	137	SK8624	H8	o24	奈良～		弥生中期から奈良の土器出土。ＳＫ 8600、ＳＤ 8601 掘削後検出。
SK 8625	土坑	137	ＳＫ 8625	H8	v24	奈良前期	Ⅰ－2	土師器杯・甕出土。
SK 8626	土坑	137	SK8626	H8	p24	奈良		土師器皿・甕、須恵器杯出土。
SK 8627	土坑	137	SK8627	H8	v24			遺物なし。
SD 8628	溝	137	SD8628	H8	y16	中世～		南伊勢系土師器鍋出土。
SD 8629	溝	137	SD8629	H8	y15	室町～		南伊勢系土師器鍋出土。
SK 8630	土坑	137	SK8630	H8	y20	奈良前期～	Ⅰ－2～3	弥生後期から斎宮Ⅰ期の土器が出土。
SK 8632	土坑	137	SK8632	H8	y24	不明		弥生土器片あり。ＳＨ 8635 掘削後検出。
SD 8633	溝	137	SD8633	H8	s24	中世～		陶器片あり。
SD 8634	溝	137	SD8634	H8	y18	中世～		斎宮Ⅰ期の土器から山茶椀までが出土。炭多く入る。
SD 8636	溝	137	SD8636	H8	w24	不明		遺物なし。
SK 8637	土坑	137	SK8637	H8	x24	鎌倉～		山茶椀、陶器甕片が出土。
SK 8639	竪穴住居	137	SH8639	H8		奈良		遺物なし。ＳＨ 8638 と重複
8642		137	SH8642	H8	j25	不明		掘削中に消滅。
SK 8643	土坑	137	SK8643	H8	h24	奈良前期	Ⅰ－2	ＳＸ 8665 より古い。
SX 8644	土壙墓	137	SX8644	H8	j24	室町～		斎宮Ⅰ期から薄手の土師器皿が出土。
8645		137	SD8645	H8	y21			撹乱。
SK 8646	土坑	137	SK8646	H8	f23	奈良		土師器皿・甕出土。
SK 8647	土坑	137	SH8647	H8	d22	奈良前期	Ⅰ－1～2	ＳＫ 8657・8666 より新しい。毛彫馬具出土。
SD 8649	溝	137	SD8649	H8	f22～l24	室町～		土師器小皿出土。
SD 8651	溝	137	SD8651	H8	d22	平安？		土師器甕・皿出土。
SD 8652	溝	137	SD8652	H8	d22	不明		土師器甕・皿出土。
SD 8653	溝	137	SD8653	H8	g22・23			ＳＤ 8649 と同一。
SD 8654	溝	137	SD8654	H8	g23	不明		遺物なし。
SD 8655	溝	137	SD8655	H8	e23	奈良		土師器甕出土。
SD 8656	溝	137	SD8656	H8	d22	不明		土師器片、須恵器甕出土。
SD 8657	溝	137	SD8657	H8	b21	不明		土師器片出土。
SD 8658	区画溝	137	SK8658	H8	g24	奈良前期～	Ⅰ－2～3	土師器杯・皿・甕片、須恵器甕出土。
SK 8659	土坑	137	SK8659	H8	e23	奈良前期	Ⅰ－1～2	土師器杯（赤彩あり）・皿・甕片、須恵器甕出土。
SK 8660	土坑	137	SK8660	H8	g22	奈良前期～	Ⅰ－2～3	土師器杯蓋・甕片、須恵器杯・壺出土。
SD 8661	溝	137	SD8661	H8	d21	奈良？		埋土は SD8658 と同じ。
SK 8662	土坑	137	SK8662	G8	v 20	奈良？		土師器甕出土。

第Ⅲ－２表　第137次調査区遺構一覧(2)

通番遺構番号		性格	次数	調査時遺構名	地区	グリッド	時期	斎宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SK	8663	土坑	137	SK8663	G8	x21	奈良？		土師器杯・甕出土。
SK	8664	土坑	137	SK8664	G8	x21	奈良？		土師器甕・甑出土。
SX	8665	土器棺墓	137	SX8665	H8	i24	奈良前期	Ⅰ－1～2	合口。ＳＫ 8643 より新しい。
SK	8666	土坑	137	SK8666	H8	e・d22	奈良前期	Ⅰ－1～2	土師器杯・皿・甕片、須恵器片、轡部分の馬具出土。
SK	8667	土坑	137	土坑 1	H8	b・c 22	不明		遺物なし。第 97 - 2 次調査で検出し、番号は付いていない。
	8676		137						欠番。
	8677		137						欠番。
	8678		137						欠番。
	8679		137						欠番。
	8680		137						欠番。

第Ⅲ－３表　第137次調査区遺構一覧(3)

通番遺構番号	調査時番号	地区	グリッド	規模（m）（東西×南北）	建物方向（N 基準）	深さ（m）	柱穴	カマド	時期	斎宮編年	特記事項
SH 8572	SH8572	H9	x15～16	4.0　×4.2	N 44° W	0.10～0.15	－	－	奈良		遺物なし。
SH 8573	SH8573	H9	y19	3.0＋×2.6＋	N 45° E	0.20	－	－	奈良前	Ⅰ - 2	土師器片少量。
SH 8574	SH8574	H9	x16	1.6＋×2.6＋	N 31° E	0.18～0.22	－	－	奈良	Ⅰ	土師器片少量。
SH 8576	SH8576	H9	y20～21	3.0＋×1.4＋	N 41° E	0.16～0.23	－	－	奈良	Ⅰ	土師器片少量。
SH 8581	SH8581	H9	y10～11	1.0＋×＊	N 1° W	0.11～0.17	－	－	奈良末	Ⅰ - 3～4	土師器片少量。
SH 8585	SH8585	H9	y9～10	1.2＋×＊	N 1° E	0.13～0.15	－	－	奈良中	Ⅰ - 2～3	土師器片少量。ＳＨ 8581 と重複。
SH 8586	SH8586	H9	y9	3.0＋×3.0＋	N 45° E	0.12～0.16	－	北東	奈良前	Ⅰ - 1～2	土師器杯・皿・高杯・甕が出土。
SH 8588	SH8588	H9	y10～11	0.8＋×3.6＋	N 11° W	0.17	－	東	奈良末	Ⅰ - 2～3	土師器杯・皿・甕・甑、須恵器杯蓋が出土。ＳＨ 8581・8585・8675 より新しい。
SH 8598	SH8598	H9	y4～5	1.2＋×2.6＋	N 35° E	0.06～0.10	－	－	奈良	Ⅰ	土師器甕、須恵器小片出土。
SH 8604	ＳＨ 8604	H8	w・x 24	1.0＋×1.8＋	N 9° E	0.26～0.32	－	－	奈良		遺物なし。
SH 8606	SH8606	H8	t24	4.4＋×1.9＋	N 26° E	0.17	－	－	奈良中	Ⅰ - 2～3	土師器杯・甕出土。
SH 8607	SH8607	H8	v24.w24	4.3　×4.3	N 37° E	0.14～0.24	－	－	奈良		遺物なし。
SH 8619	SH8619	H8	t24	1.8＋×＊	N 41° E	0.06～0.07	－	－	奈良		ＳＨ 8606 に切られている。遺物なし。
SH 8631	SK8631	H8	o24	＊　×2.4＋	N 15° E	0.18～0.25	－	－	奈良		遺物なし。ＳＫ 8621 より古い。
SH 8635	SH8635	H8	y24	4.4　×3.0＋	N 23° W	0.32～0.38	－	－	奈良		ＳＨ 8610 と同一。
SH 8638	SK8638	H8	y19	3.6　×2.6＋	N 18° W	0.13～0.23	－	北東	奈良中	Ⅰ－3	土師器杯・杯蓋・皿・高杯・甕・鍋、須恵器杯蓋・壺が出土。竈跡に２ヶ所の支柱石。
SH 8641	SH8641	H8	s・t24	3.4＋×1.4＋	N 45° E	0.05	－	－	奈良		遺物なし。
SH 8648	SH8648	H8	f23	2.6＋×0.6＋	N 11° E	0.12～0.30	－	－	奈良	Ⅰ	土師器甕・須恵器片出土。ほとんど調査区外。
SH 8650	SH8650	H8	a21	1.8＋×＊	N 39° E	0.12～0.15	－	－	奈良		遺物なし。一部検出。床面硬化。第 97 - 2 次では検出されていない。
SH 8675	ＳＨ 8675	H9	y 9・10	＊　×1.0＋	N 0°	0.02～0.07	－	－	奈良		遺物なし。ＳＨ 8586・8588 より古い。

第Ⅲ－４表　第137次調査区竪穴住居一覧
（規模のデータで「＋」の表記は「以上」、「＊」は未確認であることを表す。）

を上にして出土した。調査区北端の壁に突き刺さった状態で、刀子が顔を出していた。出土した陶器皿については、藤沢編年５型式に相当しよう。

ＳＸ8644　長辺1.7m以上、短辺1.6m、深さは14～17cmの土壙墓と思われる。長楕円形か隅丸の長方形になるものと考えられる。遺構の北東端で４～５個体の土師器皿が集中して、底部より少し浮いた状態で出土している。埋土からは、先述の13世紀代と考えられる土師器皿や斎宮Ｉ期のものと考えられる皿・甕も出土した。

ＳＫ8600　調査区に制約があるため土坑としているが溝である可能性も否定できない。長辺4.4m、短辺2.8m、深さ25～39cmであった。埋土からは、斎宮Ｉ期の土師器高杯・甕、須恵器杯・甕、山茶椀・南伊勢系土師器鍋など中世後期の遺物も出土した。

ＳＤ8568　幅0.41～0.76m、深さ26～38cmを調査区内で確認した。溝と考えられる。調査区西端から東南方向へ延び、調査区中央で、緩やかに90度近く南西方向に曲がり調査区外へ伸びていく。西側部分が深くなっていた。埋土からは、藤沢編年７型式に相当する通称「山茶椀」や陶器甕が出土を確認した。

4　遺物

第137次調査区からの出土遺物は整理箱で50箱程度である。内訳は、ほとんどが土器類である。金属製品が若干出土した程度である。ここでは、主だったものを紹介する。なお、遺物の観察については、後掲の遺物観察表（第Ⅲ－６～９表）に譲りたいと思う。参照されたい。

遺物の所属時期については、古代の土器の関する分類・編年は、斎宮分類・編年[1]及び平城・長岡京における編年[2]を参照した。

（１）古代の遺物

ＳＢ8674出土遺物（１）　１は土師器杯Ａ。土器外面の調整については磨耗など判然としないが、かすかにヘラミガキであることがわかる。斎宮Ｉ－１期に相当しよう。

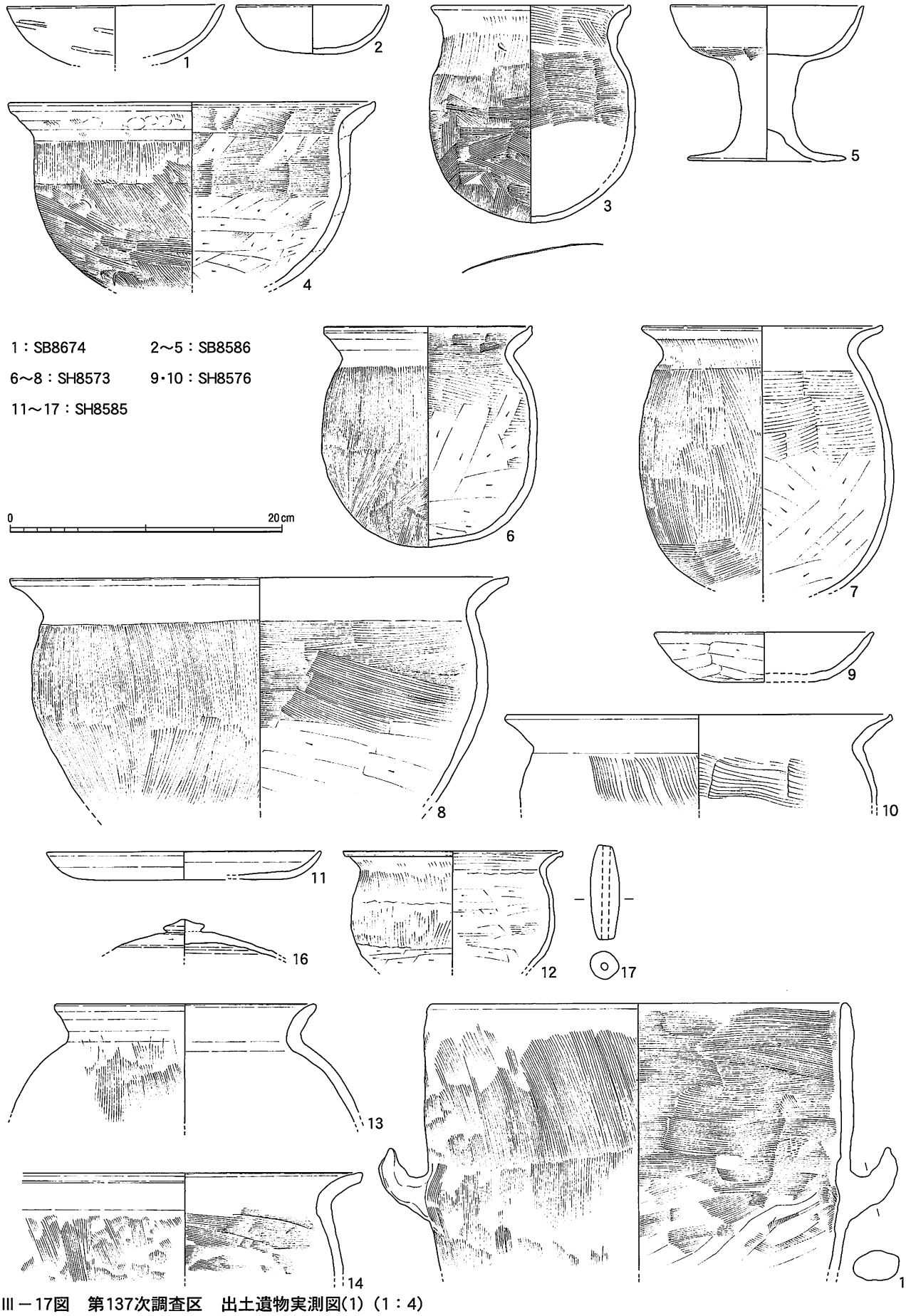
ＳＨ8586出土遺物（２～５）　２は底部から口縁部に向かい内弯気味に立ち上がる土師器杯Ｇ。３は口縁端部に面取りがみられ、丸底を呈する底部外面には直線状のヘラガキが１条施されている土師器甕Ａである。４は口縁部が外反し底部が若干の丸底になる土師器鍋Ａである。５は杯Ａを杯部に、中実の脚部に、裾部が水平に延びる土師器高杯である。１～４は斎宮Ｉ－１期に比定できよう。５は斎宮Ｉ－２期の範疇であろう。

ＳＨ8573出土遺物（６～８）　６は口縁端部が面取りされ凹み、球形の器形の土師器甕Ａである。７は口縁部が大きく外反し体部が丸く張り出す丸底の土師器甕Ａである。６より細長い器形のものである。８は口縁部が外反し、底部が平らになる土師器鍋と思われる。これらは、斎宮Ｉ－２期に相当するものであろう。

ＳＨ8576出土遺物（９・10）　９は土師器杯Ａ。土

通番遺構名	整理時遺構名	地　区	グリット	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模 東西間(m)×南北間(m)	柱間 (東西－南北)	主軸	方位 (N 基準)	備　考
SB8668	SB8555	H9	x17	p9	Ｉの範疇	Ｉ	2+(4.4)×2(4.4)	2.2－2.2	東西	N3°W	
			x18	p3・4							
			y19	p3							
SB8669	SB8556	H8	f22	p1	Ｉの範疇	Ｉ	1+(2.0)×＊	2.0－＊	東西	N0°	
SB8670	SB8557	G8	x20	p2	Ｉの範疇	Ｉ	2+(5.4)×＊	2.7－＊	東西	N29°E	
			x21	p4							
			y21	p5							
SB8671	SB8558	G8	x20	p1	Ｉの範疇	Ｉ	2(6.0)×＊	2.4・3.6－＊	東西	N20°E	
SB8672	SB8559	G8	y21	p3	Ｉの範疇	Ｉ	3+(6.0)×1+(2.0)	2.0－2.0	東西	N37°E	
		97・2次	R8	p2・3							
SB8673	SB8560	G8	y21	p1・2	Ｉの範疇	Ｉ－２	6(12.0)×2+(4.0)	2.0－2.0	東西	N20°E	
		H8	c22	p1							
		97・2次	R8	p1・4・5	p1: Ｉ－２						
			R9	p1・SK9	SK9: Ｉ－２						SB6713は掘立柱建物にならない。
			S9	SK6							
SB8674	SB8570	H8	o24	p3・5	Ｉ－１	Ｉ－１以降	2+(4.8)×＊	2.4－＊	東西	N36°E	

第Ⅲ－５表　第137次調査区掘立柱建物一覧
（規模のデータで「＋」の表記は「以上」、「＊」は未確認であることを表す。）

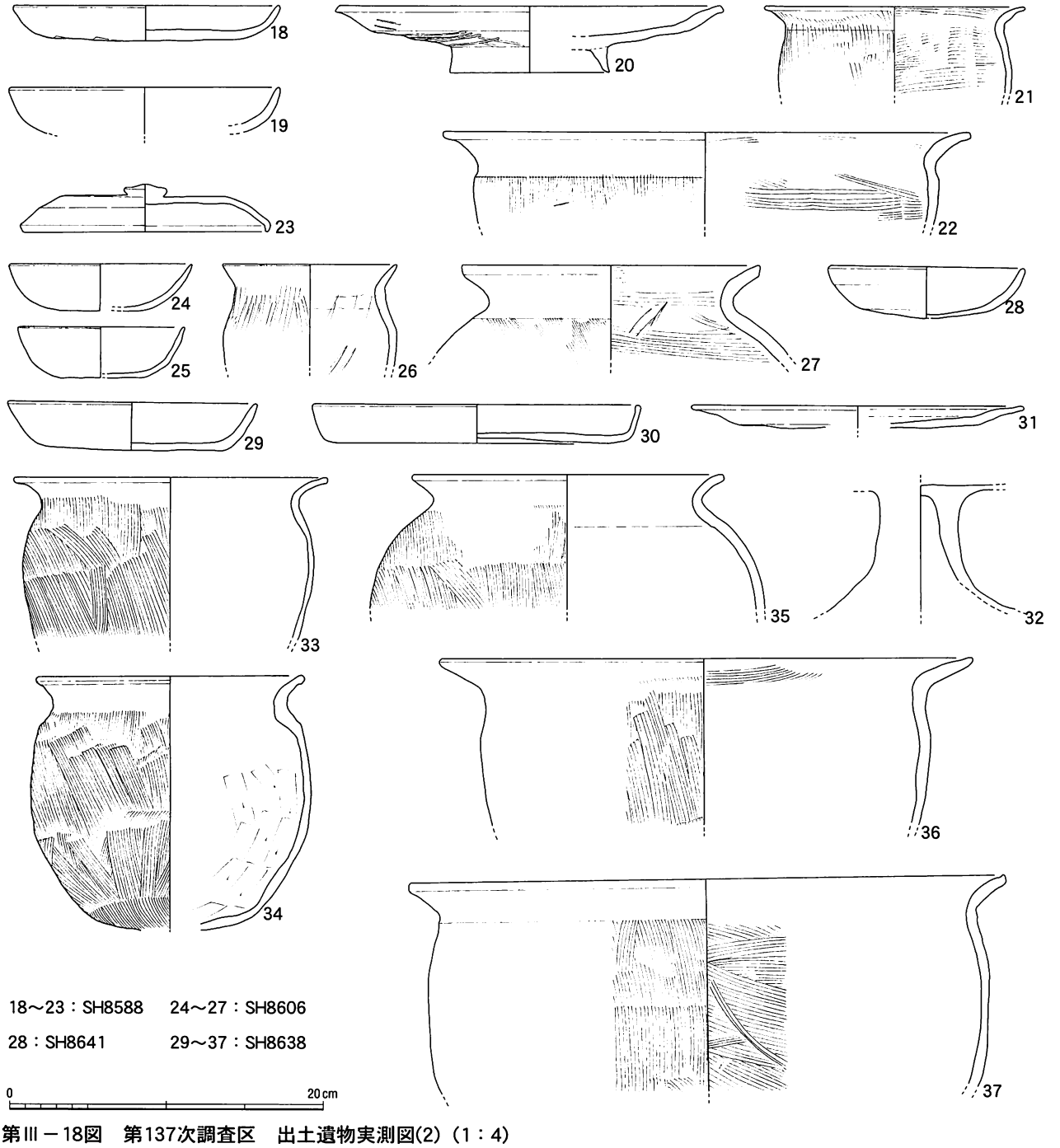


第Ⅲ－17図　第137次調査区　出土遺物実測図(1)（1：4）

器外面はヘラケズリが施される。10は口縁端部がつまみ上げられている土師器甕Ａである。斎宮Ｉ－３期に比定できよう。

ＳＨ8585出土遺物（11～17）　11は口縁部が外傾気味の土師器皿Ａか。高杯杯部の可能性も否定はできない。12は小形の土師器甕Ａ。13は口縁部が大きく外反し体部が丸く張り出す丸底の土師器甕Ａである。14は口縁端部に面取りがみられる土師器鍋であろうか。15は土師器甑。把手部分が２ヶ所残存している。16は須恵器蓋。宝珠つまみは残存しているものの口縁部が残存しておらず口縁部形態は不明である。これらは、斎宮Ｉ－２期に相当しよう。17は土製土錘である。

ＳＨ8588出土遺物（18～23）　18・19は口縁部が外傾気味の土師器皿Ａ。20は大きく外傾した口縁部をもつ土師器皿Ｂである。21は口縁部が大きく外反する小形の土師器甕Ａ。22は口縁部が大きく外反し、頸部から体部にかけて段状になるほどのヨコナデがみられる土師器鍋である。23は須恵器蓋。扁平な宝珠つまみをもつ天井部とカエリがない口縁部が残存



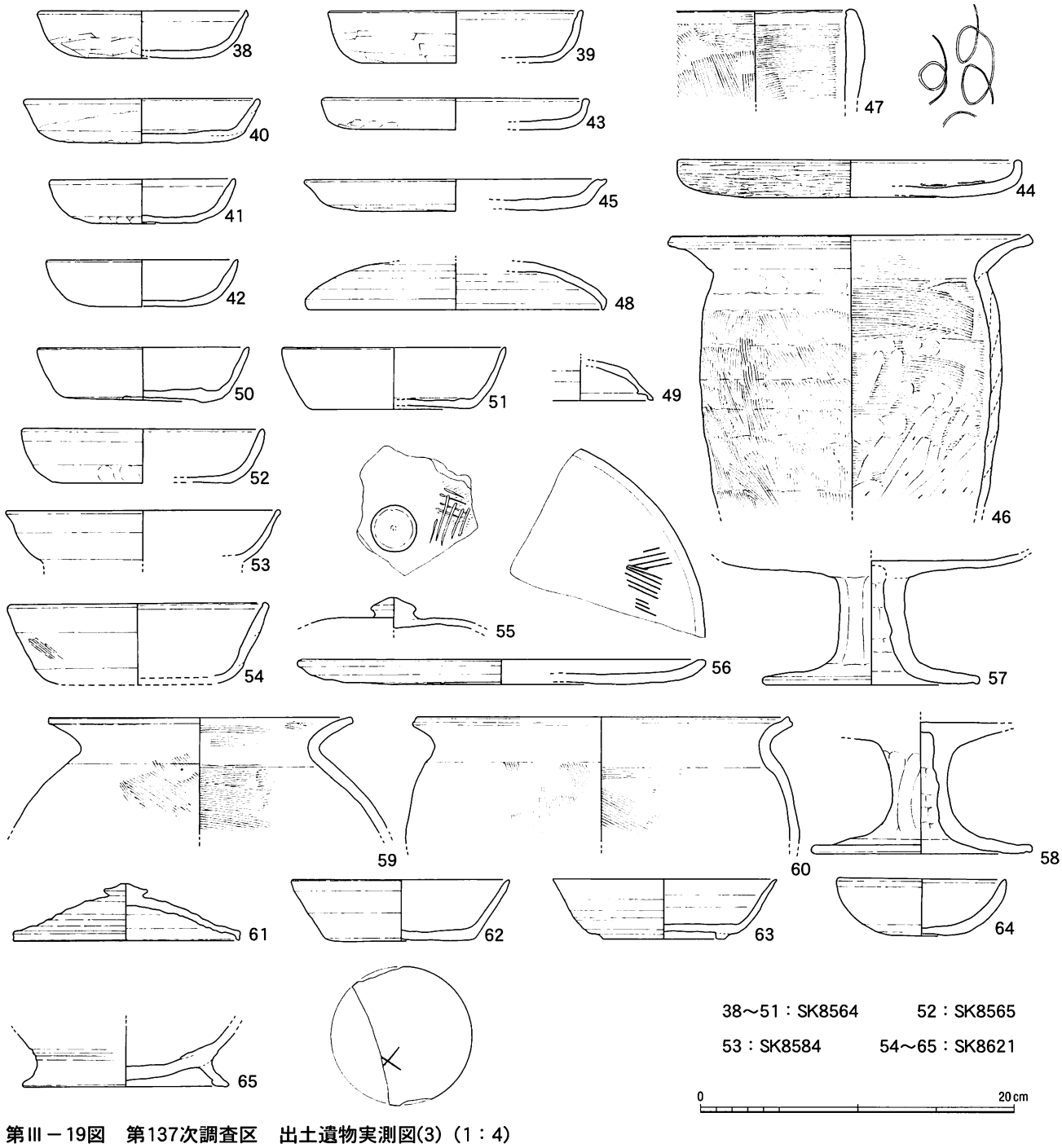
第Ⅲ－18図　第137次調査区　出土遺物実測図(2)（1：4）

する。18～20・23は斎宮Ⅰ－２期に比定できよう。21・22は斎宮Ⅰ－３期に相当するものか。

ＳＨ8606出土遺物（24～27）　24・25は底部から口縁部が内弯気味にたちあがる土師器杯Ｇ。26は小形の土師器甕Ａ。口縁部の屈曲はそれほど強くない。27は大型の土師器甕Ａである。これらは、斎宮Ⅰ－２～３期に相当しよう。

ＳＨ8641出土遺物（28）　28は底部から口縁部が内弯気味にたちあがる土師器杯Ｇ。斎宮Ⅰ－２期に比定できよう。

ＳＨ8638出土遺物（29～37）　29は口縁部が外傾する土師器皿Ａである。30は口縁端部が巻き込むように肥厚している土師器皿Ａである。31は高杯杯部である。口縁部が大きく外反するもので、内面には漆状のものの付着がみられる。32は土師器高杯脚部である。脚内は中空で、裾部は水平に延びるようである。33・34は口縁部が大きく外反し、体部が球形の小形の土師器甕Ａである。35は球形に近い器形の大形の土師器甕Ａ。36・37は口縁端部に面取りがみられる土師器鍋Ａである。これらは、斎宮Ⅰ－３期に



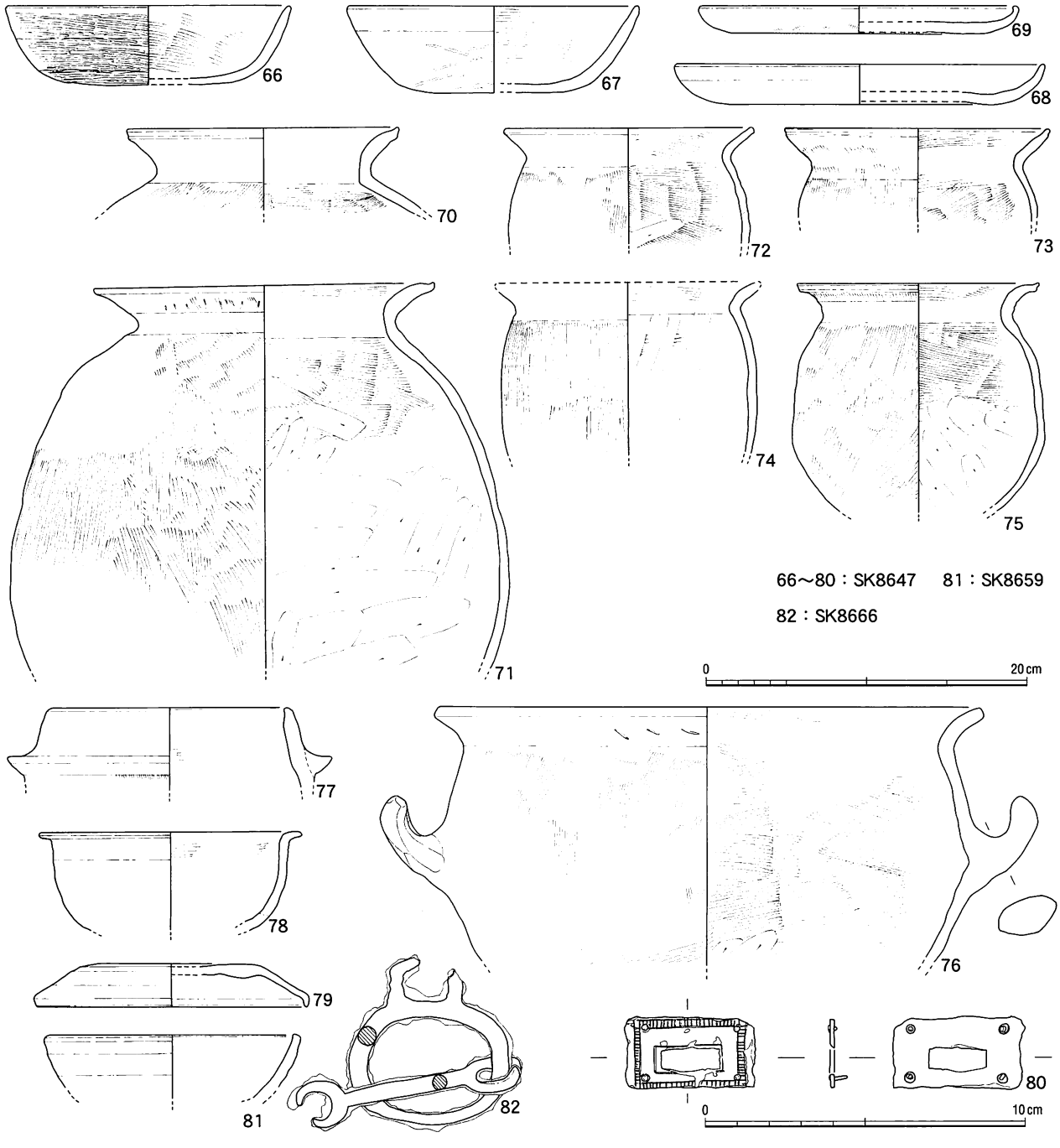
第Ⅲ－19図　第137次調査区　出土遺物実測図(3)（1：4）

比定できよう。

ＳＫ8564出土遺物（38～51）　38～42は土師器杯Ａ。38は外傾する口縁部の端部に面取りがみられる。43・44は口縁端部が内側に巻き込むように肥厚している土師器皿Ａである。44は土器外面にはヘラミガキ、内面には二重に螺旋状暗文が施されている。45は口縁端部が水平に延びる土師器高杯の杯部と考えられる。46は口縁部が大きく外反し、端部には面取りがみられる土師器甕Ｃである。47は土師器甑の口縁部小片であろう。48は天井部が残存していない須恵器杯Ｂ蓋であろう。49は口縁部にカエリがみられる須恵器杯Ａであろう。50・51は底部から直線的に口縁部が延びる須恵器杯である。49は斎宮Ｉ－１期に、44・46～48・50・51は斎宮Ｉ－２期、38～43・45は斎宮Ｉ－３期に比定できるものと考えられる。

ＳＫ8565出土遺物（52）　52は口縁部が外傾気味の土師器杯Ａである。これらは斎宮Ｉ－２期に相当しよう。

ＳＫ8584出土遺物（53）　53は口縁部が外傾気味の須恵器盤である。これらは、斎宮Ｉ－２期に相当す



第Ⅲ－20図　第137次調査区　出土遺物実測図(4)（1：4　※80・82は1：2）

るものと思われる。

ＳＫ8621出土遺物（54～65）　54は口縁部が外傾気味の土師器椀Ａ。55はつまみをもつ天井部分だけ残存している土師器蓋である。56は深さがあまりない土師器高杯杯部。57・58は面取りされた脚部をもつ土師器高杯Ａである。59は大形の土師器甕Ａ。60は土師器甕Ｃと考えられる。61は天井部には宝珠ツマミ、口縁部にはカエリがみられない須恵器杯Ｂ蓋である。62は須恵器杯Ａ。底部から直線的に口縁部が延びる。また、底部外面には「×」のヘラガキがみられる。63は62と同器形のもので高台が付く須恵器杯Ｂである。64は口縁部が少し内弯気味の須恵器杯Ａであろう。65は須恵器壺の底部高台部分である。これらは、斎宮Ｉ－２期に比定できよう。

ＳＫ8647出土遺物（66～80）　66・67は土師器杯Ａ。ともに土器外面にはヘラミガキ、内面には暗文が施されている。68は口縁部が外傾する土師器皿Ａである。69は口縁端部が内側に巻き込むように肥厚している土師器皿Ｂである。高台部分が剥離したものなのだろう。70・71は、口縁端部が面取りされ上方につまみあげられたような形状、外反する口縁をもつ大形の土師器甕Ａである。72～75は、口縁端部が面取りされ、外反する口縁、丸底になる小形の土師器甕Ａ。76は体部が最も張り出す部分に把手を２ヶ所もつ土師器鍋Ｂである。77は鍔付円筒形土器である。78は口縁部が水平に延び、鍋のように底部に向かい曲線を描くものである。土師器鉢であろうか。79は口縁部にカエリがない須恵器杯Ｂ蓋である。天井部分は残存していない。これらは、斎宮Ｉ－２期に比定できよう。80は毛彫馬具。帯飾金具と考えられる。面懸、胸懸、あるいは尻懸の革帯に装着されていたものであろう。帯に留めるための鋲部分４ヶ所や鍍金部分が残る。材質や製作技法については、自然科学分析編に詳細に述べられているのでそちらに譲ることとする。

ＳＫ8659出土遺物（81）　81は土師器椀Ａ。外傾する口縁部の端部に面取りがみられる。内外面には赤色顔料が一部残存している。斎宮Ｉ－１期に比定できよう。

ＳＫ8666出土遺物（82）　82は面懸の轡部分に関連する馬具である。銜の一部分か手綱と繋がる部分と考えられる。

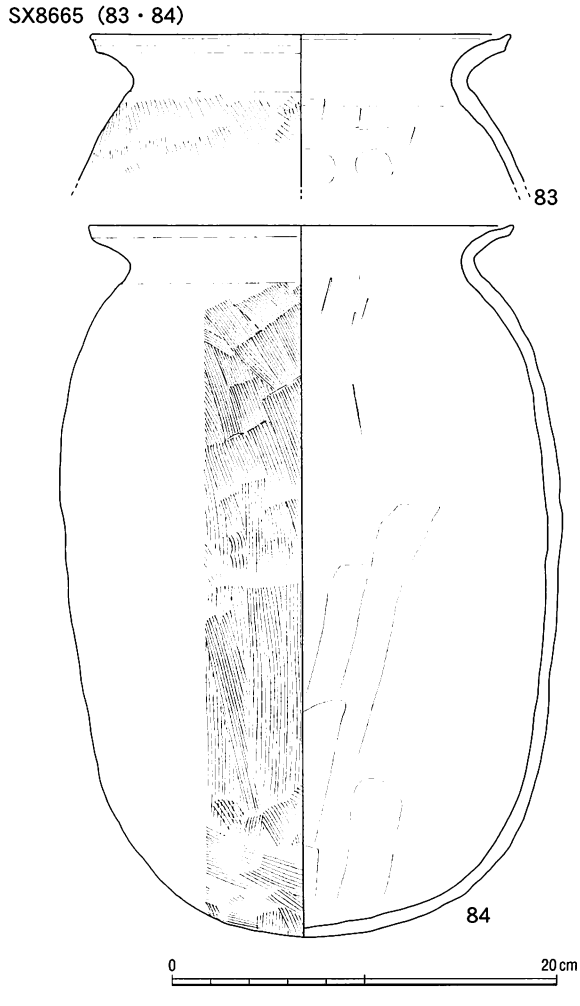
ＳＸ8665出土遺物（83・84）　83・84は、口縁端部が面取りされ上方につまみあげられたような形状、外反する口縁をもつ土師器甕Ｃである。土器棺として使用されていたと考えられる。これらは、斎宮Ｉ－２期に比定できよう。

ＳＺ8561出土遺物（85～87）　85・86はロクロ土師器皿である。底部から口縁部にかけて直線的に延びている。87は口縁端部が内側に巻き込むように肥厚している土師器甕である。これらは、斎宮Ⅲ－１期に相当しよう。

ＳＤ8567出土遺物（88）　88は口縁端部が少し外反する緑釉陶器椀である。

（２）中世の遺物

ＳＸ8575（89～93）　89～92は底部から口縁部にかけて直線的に外反する通称「山皿」といわれている



第Ⅲ－21図　第137次調査区　出土遺物実測図(5)（1：4）

陶器小皿である。89の底部外面には「上」と墨書されている。これらは、藤沢編年５型式[3]に相当しよう。93は刀子の切先部分である。木質のものが一部に付着しており、鞘の一部と考えられる。

ＳＫ8600（94～96）　94・95は底部から口縁部にかけて内弯している土師器皿である。器壁が非常に薄いものである。96は、粗製の土師器小皿。これらは、伊藤編年Ⅲａ期[4]に相当しよう。

ＳＸ8644（97～101）　97は底部から口縁部にかけて内弯している土師器皿である。器壁が非常に薄いものである。98～101は、粗製の土師器小皿。伊藤編年Ⅱｂ期に相当しよう。

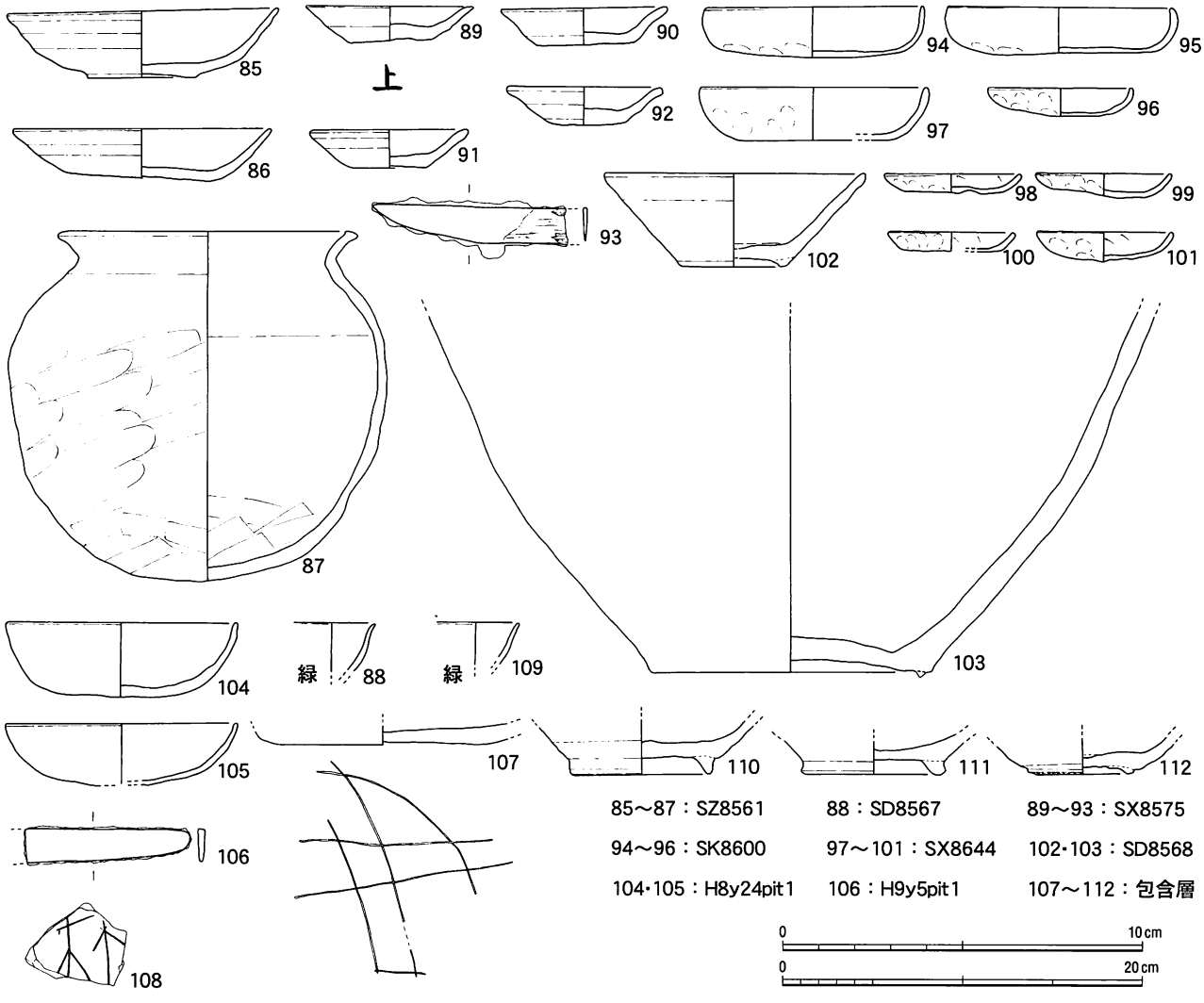
ＳＤ8568（102・103）　102は底部から口縁部にかけて直線的に外反する通称「山茶椀」といわれている陶器椀である。藤沢編年７型式に相当しよう。103は陶器大甕の底部片である。

柱穴出土遺物（104～106）　104・105は底部から口縁部が内弯気味にたちあがる土師器杯Ｇ。これらは、斎宮Ⅰ－２～３期に相当しよう。106は小刀の茎である。中世のものと考えられる。

包含層出土の遺物（107～112）　107は底部外面に「ドーマン」とも考えられる[5]ヘラガキが施されたものである。108は底部外面に「林」と考えられるヘラガキが施されたものである。土師器皿か杯と考えられる。土師器皿か杯と思われる。109は口縁端部が少し外反する緑釉陶器椀である。これらは古代の遺物と考えられる。Ⅱ－３～４期のものか。110～112は通称「山茶椀」といわれている陶器椀の底部片である。111については底部内面に赤色顔料の付着がみられる。これらは中世前半のものであろう。

5　まとめと検討

ここでは、遺構・遺物について列記し、まとめとしたい。



第Ⅲ－22図　第137次調査区　出土遺物実測図(6)（1：4　※93・106は1：2）

（1） 遺構の検出状況

第137次調査では、掘立柱建物７棟、竪穴住居20棟、土坑40基、溝39条、土壙墓３基、土器棺墓１基、地鎮関連遺構１基を確認することができた。

a 掘立柱建物

掘立柱建物については、出土遺物から斎宮Ｉ期前半の属すると考えられ、掘立柱建物は、現在の旧竹神社の部分に集中しているようである。確認した建物群のなかでは、ＳＢ8673が注目できる。今回の調査と第97-２次調査の成果から、南北２間以上、東西６間の、東西棟の建物であることが想定できる。柱間は2.0mの等間であった。柱穴から出土の遺物から、斎宮Ｉ期前半の建物と考えられる。規模からみれば、斎宮跡の当該期の掘立柱建物としては最大級の規模のものと考えられる。また、今回の調査で検出したＳＤ8658・8661は、ＳＢ8673の建物方向とほぼ平行で、埋土からの出土遺物もほぼ同時期である。２つの溝が区画溝的な性格を持つとすれば、第137調査区を含む一帯に一つの区画があった可能性が指摘できよう。斎宮に関連するものか、あるいは、それ以外例えば郡衙のような官衙に関連するものなのか、今後様々な可能性を探っていくべきものと考える。第137次調査区と第36次調査区の間に存在する未調査の部分が注目に値しよう。今後の調査の進捗に期待したいと思う。

b 竪穴住居

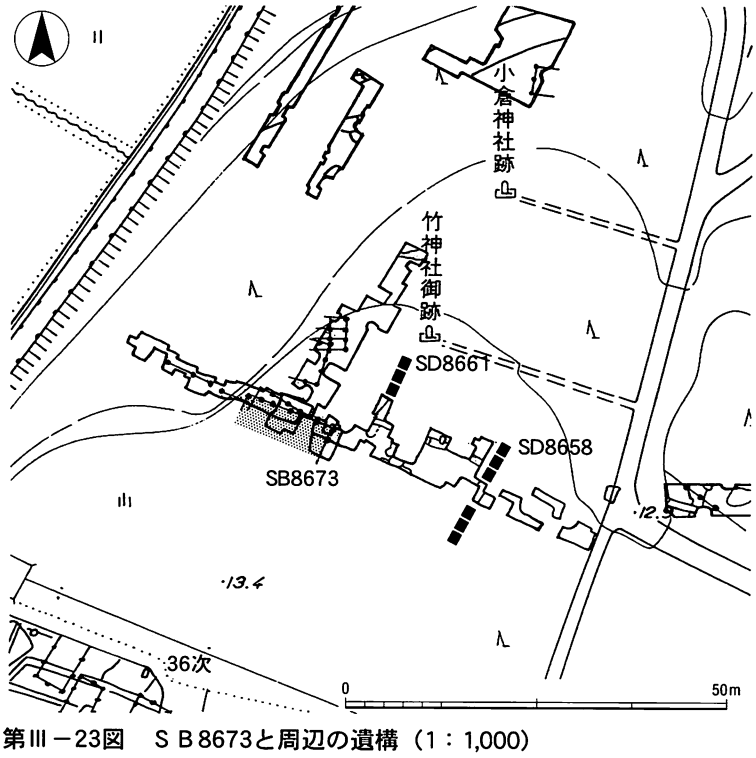
調査区全体で偏ることなく分布している。これらのなかでも、調査区の北側部分で検出したＳＨ8638が注目できよう。竈は北東辺のほぼ中央に築造されていて、内部には支柱石が２ヶ所あった。このような竈の形態は、支柱石が１ヶ所のものについては斎宮跡でも多くみられるが、あまり類例はないようである。第137次調査においても、竈内の施設が違っている状況がある。このことから、仮にではあるが、斎宮を造営するにあたり、徴用されてきた人々の出身地域の違いが出ているのかもしれない。今後の検討課題としたい。

（2）遺物の出土傾向

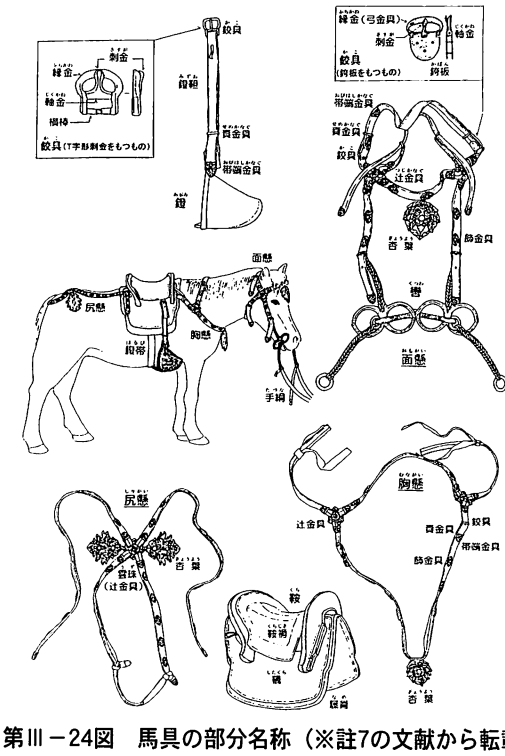
遺物全体の出土をみてみると、土師器類がほとんどで、須恵器類が若干、緑釉陶器はごく少数、金属製品が少量という状況であった。時期については、斎宮Ｉ期から中世までのものを確認している。中世遺物は、南伊勢系[6]のものを中心に出土した。

a 毛彫馬具

ＳＫ8647から毛彫馬具が出土した。毛彫馬具は、表面に毛彫りが施された金銅製馬具の総称である。毛彫馬具の中でも、帯飾金具と考えられる。面懸、胸懸、あるいは尻懸の革帯に装着されていたものと考えられる。６世紀前葉あたりが初現といわれていて、使用年代の下限は、平城京八条一坊十三・十四



第Ⅲ－23図　ＳＢ8673と周辺の遺構（1：1,000）



第Ⅲ－24図　馬具の部分名称（※註7の文献から転載）

坪において出土が確認されているので、奈良時代中頃には使用されなくなったと考えられている。[7] 今回の調査で出土した毛彫馬具も、共伴する土器群が斎宮Ⅰ－２期であったので、先述の使用の下限とも一致している。

時期は９世紀に下がるが、『続日本後紀』承和九年五月乙未条には、五位以上の官人に鞍と馬飾に金銀を用いるのを許したとある。[8] また、隣接するＳＫ8666では轡部分の馬具が出土しているし、ＳＢ8674の建物方向とほぼ平行のＳＤ8658らに囲まれたと考えられる部分にある土坑からの出土でもあるので、その他の馬具や掘立柱建物との関連についても興味深いものがある。

（３）第５次調査出土の馬具

第137次調査時には、斎宮跡において飾金具の馬具の出土は初例と考えられていた。整理の過程で、第５次調査（古里Ｄ地区）においても出土していたことが判明したので改めて紹介する。[9] ラベルには、「８ＦＦＳ－Ｄ　21Ｉ13　73.11.22」とあり、包含層出土と考えられる（第Ⅲ-25図参照）。第137次調査出土資料と同様の形態を示している。全体の形としては長方形で、長方形の窓を作っている。窓の下部分が欠失していた。窓の外側に２ヶ所に鋲がみられ、１ヶ所は鋲自体が欠失している。本来は４ヶ所あったものと思われる。残存していた部分は、長辺3.5cm、短辺2.2cm、厚さ0.05cm程度であった。

（小濵　学）

<註>

(1)駒田利治・泉　雄二・倉田直純「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ　斎宮歴史博物館、2001年）を参照した。

(2)『平城宮発掘調査報告』ⅩⅣ（奈良国立文化財研究所、1993年）や『古代の土器１　都城の土器集成』（古代の土器研究会、1992年）に詳しい。

(3)藤沢良祐「山茶碗と中世集落」『尾呂』（瀬戸市教育委員会、1990年）、「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第３号三重県埋蔵文化財センター、1994年）を参照した。

(4)伊藤裕偉「Ⅵ　調査のまとめと検討」（『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター、1996年）を参照した。

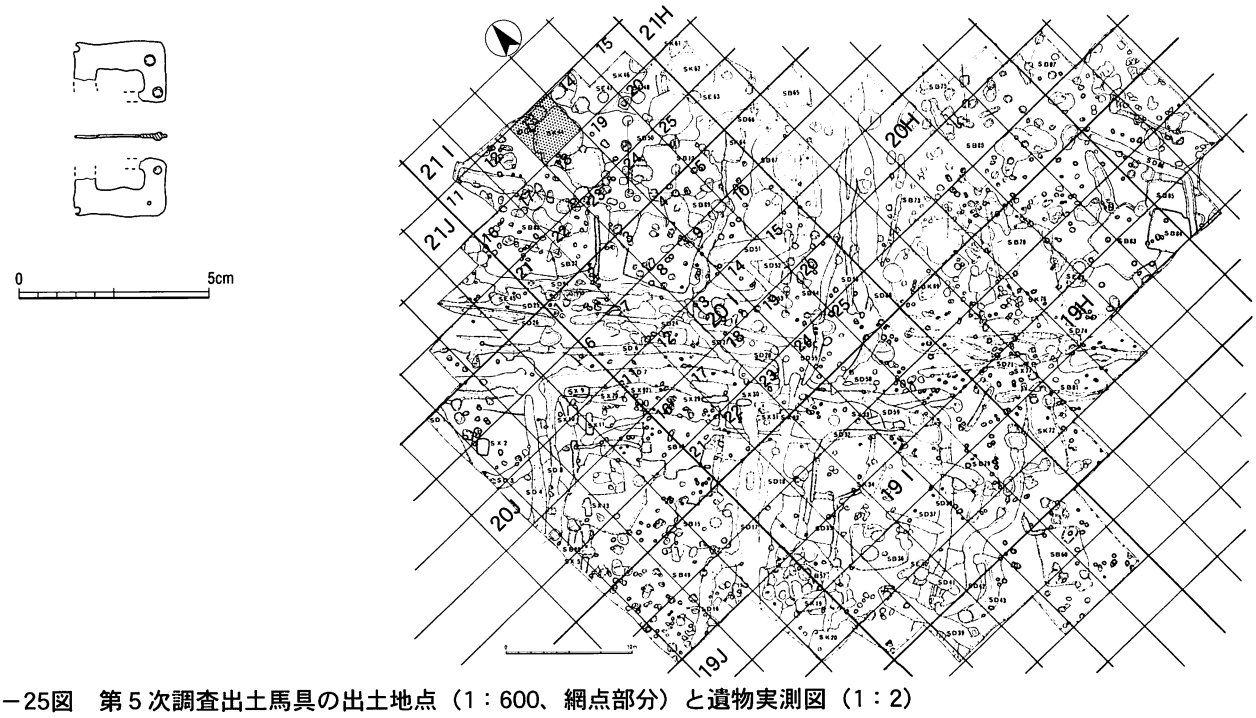
(5)平川　南「墨書土器とその字形」（『国立歴史民俗博物館研究報告』国立歴史民俗博物館、1991年）に詳しい。

(6)伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海をみる」（『鍋と甕－そのデザイン－』東海考古学フォーラム、1996年）を参照した。

(7)冨永里菜「馬具の革金具」（『銙帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所、2002年）に詳しい。

(8)「五月甲午朔乙未。勅。五月五日供節。四衛府六位官人巳下装束。除二甲冑飾一之外。不レ得レ用二金銀及薄泥一。五位巳上走馬之鞍并馬飾。不レ論二新舊聴レ用金銀一。但薄泥不レ在二聴限一。」とある。

(9)県下では、伊勢市塚山古墳群においてまとまった出土例がみられる。岩中淳之『隠岡遺跡発掘調査報告』（伊勢市教育委員会、1987年）



第Ⅲ－25図　第５次調査出土馬具の出土地点（1：600、網点部分）と遺物実測図（1：2）

No.	出土遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
1	H8-o24 Pit5 SB8674	土師器 杯A	口縁	16.0	外：ヨコナデ→オサエ・ナデ、一部ヘラミガキ 内：ナデ	やや密	やや良	橙 5YR6/6	1/2		002-04
2	H9-y9 SH8586	土師器 杯G	口縁	11.2	外・内：ヨコナデか？摩滅激しい	やや密	良	橙 5YR6/6	ほぼ完形		018-02
3	H9-y9 SH8586	土師器 甕A	口縁	14.6	外：ハケメ・ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ	密	良	浅黄橙 10YR8/4	ほぼ完形		018-05
4	H9-y9 SH8586	土師器 鍋A	口縁	26.8	外：ヨコナデ→オサエ・ナデ・ハケメ 内：ハケメ→ケズリ	やや粗	やや不良	外：橙 5YR7/6 内：橙 5YR6/8	口 3/12		036-03
5	H9-y9 SH8586	土師器 高杯	口縁 底径	14.2 11.6	外：ヨコナデ→ハケメ・ナデ 内：ナデ・オサエ	やや密	良	灰白 2.5Y8/2	杯部 1/4 脚部ほぼ完存		018-04
6	H9-y19 SH8573	土師器 甕A	口縁 器高	15.0 16.1	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ→ケズリ	やや密	やや良	浅黄橙 10YR8/4	口 5/6		029-02
7	H9-y19 SH8573	土師器 甕A	口縁	17.2	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ→ケズリ	やや密	やや良	浅黄橙 7.5YR8/4	口 3/4		029-01
8	H9-y19 SH8573	土師器 鍋	口縁 器高	30.6 16.4	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→ハケメ→ケズリ	やや密	やや良	浅黄 2.5Y8/3	口完存		046-01
9	H9-y20 SH8576	土師器 杯A	口縁	16.0	外：ヨコナデ→ヘラケズリ 内：摩滅で？	粗	良	外：橙 2.5YR6/8 内：橙 2.5YR6/8	口 1/8		002-02
10	H9-y20 SH8576	土師器 甕A	口縁	28.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ	密	良	明黄褐 7/6	1/4		005-02
11	H9-y10 SH8585	土師器 皿A	口縁 器高	20.0 2.1	外：ヨコナデ→ミガキ 内：ナデ	密	やや良	橙 5YR6/8	口 3/12		032-01
12	H9-y10 SH8585	土師器 甕A	口縁	16.0	外：ヨコナデ→ハケメ→ケズリ 内：ヨコナデ→ハケメ→ケズリ	密	やや良	外：にぶい橙 5YR7/4 内：浅黄橙 7.5YR8/4	口 3/12		033-02
13	H9-y10 SH8585	土師器 甕A	口縁	19.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ナデ	やや密	やや良	浅黄橙 10YR8/3	口 4/12		032-02
14	H9-y10 SH8585	土師器 鍋			外：ヨコナデ→ハケメ→ナデ 内：ハケメ→ナデ	密	やや良	内：橙 7.5YR7/6 外：橙 5YR7/6			033-01
15	H9-y10 SH8585	土師器 甑	口縁	30.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ→ケズリ	密	やや良	橙 7.5YR7/6	口 3/12		035-01
16	H9-y10 SH8585	須恵器 蓋			外：回転ナデ→ヘラケズリ 内：回転ナデ	密	良	外：灰黄 2.5Y6/2 内：灰白 2.5Y7/1	天井部完存		003-02
17	H9-y10 SH8585	土師質 土錘	重量	28.41 g	指ナデ	やや密	不良	にぶい橙 7.5YR7/4			026-04
18	H9-y11 SH8588	土師器 皿A	口縁 器高	17.0 2.2	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ	密	良	橙 2.5YR6/6	1/6		019-02
19	H9-y10 SH8588	土師器 皿A	口縁	17.2	外：ヨコナデ→ナデ 内：ナデ	密	良	橙 5YR6/6	口 1/8		019-03
20	H9-y10 SH8588	土師器 皿B	口縁	24.8	外：ヨコナデ→ミガキ 内：ヨコナデ	密	良	橙 2.5Y6/6	1/6		019-04
21	H9-y11 SH8588	土師器 甕A	口縁	16.5	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ	やや密	良	にぶい橙 5YR7/4	口 1/4	内：煤	019-05
22	H9-y10 SH8588	土師器 鍋	口縁	33.6	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ	やや密	良	にぶい橙 7.5YR7/4			019-07
23	H9-y11 SH8588	須恵器 蓋	口縁 器高	15.9 3.0	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	密	良	灰白 7.5Y7/1	ほぼ完形		019-01
24	H8-t24 SH8606	土師器 杯G	口縁	11.6	外：ヨコナデ→ナデ 内：ナデ	密	良	橙 2.5YR6/8	1/2		021-02
25	H8-t24 SH8606	土師器 杯G	口縁 器高	10.6 3.2	外：ヨコナデ→ナデ 内：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	1/6		021-01
26	H8-t24 SH8606	土師器 甕A	口縁	11.0	外：ヨコナデ→ナデ 内：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	1/2		021-03
27	H8-t24 SH8606	土師器 甕A	口縁	19.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口 1/6		021-04
28	H8-d23 SH8641	土師器 杯G	口縁 器高	12.2 3.2	外：ヨコナデ→ナデ 内：ナデ	密	良	橙 2.5YR6/8	3/8		039-03
29	H8-y19 SH8638	土師器 皿A	口縁 器高	16.0 3.0	外：ヨコナデ→ナデ 内：ナデ	やや粗	良	橙 5 Y 7/6	1/2		014-02
30	H8-y19 SH8638	土師器 皿A	口縁 器高	21.0 2.45	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	良	橙 5YR7/6	2/3		014-01
31	H8-y19 SH8638	土師器 高杯	口縁	21.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	良	橙 5 Y 7/6	口 1/4	内面に漆付着	014-03

第Ⅲ－6表　第137次調査区出土遺物観察表(1)

No.	出土遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
32	H8-y19 SH8638	土師器 高杯	脚部	12.0	外：ケズリ 内：ナデ	密	良	橙 5Y7/6	脚 9/10		014-04
33	H8-y19 SH8638	土師器 甕A	口縁	20.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ナデ	やや粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	1/10		014-05
34	H8-y19 SH8638	土師器 甕A	口縁	17.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ナデ→ケズリ	やや粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3		外：煤	016-01
35	H8-y19 SH8638	土師器 甕A	口縁	20.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ナデ	やや密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	1/10		015-01
36	H8-y19 SH8638	土師器 鍋A	口縁	34.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ナデ	やや密	良	橙 5YR7/6	1/10		015-02
37	H8-y19 SH8638	土師器 鍋A	口縁	38.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口 1/12	外：煤	017-01
38	H9-y9 SK8564	土師器 杯A	口縁 器高	13.6 3.0	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ	密	良	橙 10YR7/6	1/6		020-05
39	H9-y8 SK8564	土師器 杯A	口縁 器高	16.4 3.3	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ	密	良	橙 5YR6/6	口 1/12		020-07
40	H9-y8 SK8564	土師器 杯A	口縁 器高	18.0 2.85	外：ヨコナデ→オサエ・ナデ 内：オサエ・ナデ	やや密	良	橙 5YR6/6			036-01
41	H9-y8 SK8564	土師器 杯A	口縁 器高	11.8 2.8	外：ヨコナデ→オサエ・ナデ 内：ナデ	やや粗	不良	灰白 10YR8/2	2/12		036-02
42	H9-y8 SK8564	土師器 杯A	口縁 器高	12.4 2.95	外：ヨコナデ→ナデ・オサエ 内：ナデ	やや密	やや良	浅黄橙 10YR8/3	1/3		020-04
43	H9-y8 SK8564	土師器 皿A	口縁 器高	17.2 2.0	外：ヨコナデ 内：ナデ	密	良	橙 7.5YR7/6	口 1/12		020-06
44	H9-y9 SK8564	土師器 皿A	口縁 器高	21.4 2.4	外：ヨコナデ→ナデ・ヘラミガキ 内：ナデ	密	良	明赤褐 2.5YR5/6	口 2/12		036-04
45	H9-y8 SK8564	土師器 高杯	口縁	19.4	外：ヨコナデ→ケズリ、内：ナデ	密	良	橙 7.5YR7/6	口 1/5		020-08
46	H9-y8 SK8564	土師器 甕C	口縁	22.6	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ・ヨコナデ→ケズリ→ナデ	やや粗	不良	浅黄橙 10YR8/3	頸 3/12		037-01
47	H9-y8 SK8564	土師器 甑			外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ	やや密	不良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁小片		037-02
48	H9-y9 SK8564	須恵器 杯B蓋	口縁	18.4	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	密	良	灰 10Y5/1	口 1/6		020-01
49	H9-y8 SK8564	須恵器 杯A			外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	密	良	灰 10Y6/1	口縁小片		020-09
50	H9-y8 SK8564	須恵器 杯	口縁 器高	13.6 3.5	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良	灰 10Y6/1	2/3		020-02
51	H9-y8 SK8564	須恵器 杯	口縁 器高	14.4 3.9	外：回転ナデ→ケズリ 内：回転ナデ	密	良	灰 10Y6/1	1/4		020-03
52	H8-y10 SK8565	土師器 杯A	口縁 器高	15.3 3.45	外：ヨコナデ→ナデ・オサエ 内：ヨコナデ	やや粗	不良	灰白 10YR8/2	口 2/12		026-02
53	H9-y9 SK8584	須恵器 盤	口縁	17.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良	灰 N5/0	2/12		026-01
54	H8-o24 SK8621	土師器 椀A	口縁 器高	16.4 5.2	外：ヨコナデ→ヘラミガキ・ナデ 内：ヨコナデ	やや密	不良	橙 5YR6/8	口 8/12		025-02
55	H8-o24 SK8621	土師器 蓋			外：ナデ・格子暗文→ハケメ 内：ナデ	やや密	不良	橙 5YR6/6	頭頂部のみ		025-01
56	H8-o24 SK8621	土師器 高杯	口縁 器高	25.5 1.6	外：ヨコナデ→ケズリ・ナデ 内：ヨコナデ	密	不良	橙 5YR6/8	口 5/12		025-04
57	H8-o24 SK8621	土師器 高杯A	脚部	13.8	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ	密	やや良	外：橙 2.5YR6/8 内：橙 5YR7/8	底 7/8		034-01
58	H8-N24 SK8621	土師器 高杯A	脚部	14.0	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ	密	やや良	外：橙 5YR7/8 内：橙 5YR7/6	裾部ほぼ完形		034-02
59	H8-o24 SK8621	土師器 甕A	口縁	19.2	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ	やや密	やや良	浅黄橙 10YR8/3	口 1/8		031-01
60	H8-o24 SK8621	土師器 甕C	口縁	23.7	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ	やや粗	やや良	にぶい黄橙 10YR7/4	口 1/8		031-02
61	H8-o24 SK8621	須恵器 杯B蓋	口縁 器高	14.6 3.7	外：回転ナデ→ヘラケズリ 内：回転ナデ	密 1㎜石英	良	灰 10Y6/1	口 1/3		005-01
62	H8-o24 SK8621	須恵器 杯A	口縁	14.0	外：回転ナデ→ヘラ切り 内：回転ナデ	密 1～3㎜長石	良	外：灰 5Y6/1 内：灰白 5Y7/2	口 1/2	底外：ヘラ記号	002-03

第Ⅲ－7表　第137次調査区出土遺物観察表(2)

No.	出土遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
63	H8-o24 SK8621	須恵器 杯B	口縁	14.8	外：回転ナデ 内：回転ナデ	粗 0.5～2.5㎜長石	良	外：青灰 6/1Hue5B 内：緑灰 6/1Hue5G	口 1/10		001-01
64	H8-o24 SK8621	土師器 杯A	口縁 器高	10.6 3.6	外：ヨコナデ→オサエ・ナデ 内：ヨコナデ	やや密	不良	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい橙 5YR7/4	3/12		025-03
65	H8-o24 SK8621	須恵器 台付壺	高底	13.0	外：回転ナデ→糸切痕・貼り付け後ナデ、 内：回転ナデ	やや密	やや良	灰 N6/0	高台 3/8		031-03
66	H8-e23 SK8647	土師器 杯A	口縁	17.6	外：ミガキ 内：ハケメ→ナデ	やや密	良	橙 5YR6/6	1/4		039-02
67	H8-e23 SK8647	土師器 杯A			外：ヨコナデ→ヘラミガキ 内：ハケメ→ナデ	やや密	やや良	橙 2.5YR6/8			030-02
68	H8-e23 SK8647	土師器 皿A	口縁	11.4	外：ヨコナデ→ナデ 内：ナデ	やや密	良	橙 2.5YR7/8	口 1/8		039-04
69	H9-d23 SK8647	土師器 皿B	口縁	19.8	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ナデ	密	良	橙 2.5YR6/8	口 1/8		039-05
70	H8-e23 SK8647	土師器 甕A	口縁	16.8	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ	やや密	やや良	浅黄橙 10YR8/3	口小片		030-01
71	H8-e23 SK8647	土師器 甕A	口縁	21.2	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ→ケズリ	密	良	浅黄橙 10R8/3・8/4	口 1/7		027-01
72	H8-e23 SK8647	土師器 甕A	口縁	15.4	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ→ケズリ	やや密	良	橙 2.5YR7/6	口 9/10		038-01
73	H8-e23 SK8647	土師器 甕A	口縁	16.4	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口 1/4		038-04
74	H8-e23 SK8647	土師器 甕A	頸部	14.2	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	頸部 1/4		038-03
75	H8-e23 SK8647	土師器 甕A	口縁	15.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ→ケズリ	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	口 1/2		038-02
76	H9-d23 SK8647	土師器 鍋B	口縁	33.6	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ→ケズリ	粗	良	浅黄橙 10YR8/3	口 1/2		028-01
77	H9-d23 SK8647	土師器 甕	口縁	14.8	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ハケメ→ナデ	やや密	良	淡黄 2.5Y8/3	口 1/4		039-01
78	H8-e23 SK8647	土師器	口縁	16.0	外：ヨコナデ→ナデ 内：ハケメ→ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	口 1/6	鍔付円筒形土器	038-05
79	H8-e23 SK8647	須恵器 杯B	口縁	17.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ	粗	良	灰白 5Y7/1	口 1/8		039-06
80	H9-e23 SK8647	毛彫馬具								金銅製、鍍金、飾り金具	007-01
81	H8-e23 SK8659	土師器 椀A	口縁	15.3	外：ヨコナデ→ヘラミガキ 内：ミガキ	密	不良	橙 2.5YR6/8	口 1/12	内・外面：赤彩	026-03
82	H8-d22 SK8666	馬具								轡部分	011-01
83	H8-h24 SK8643	土師器 甕C	口縁	21.6	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ナデ→オサエ	密	良	黄橙 7.5YR7/8	口 1/3		028-02
84	H8-h24 SK8643	土師器 甕C	口縁 器高	22.0 37.3	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→ケズリ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	ほぼ完形		024-01
85	H9-x17 SZ8561	ﾛｸﾛ土師器 皿	口縁 器高	15.0 3.8	外：ロクロナデ→糸切り痕 内：ロクロナデ→ヨコナデ	やや粗 1㎜石英	良	浅黄橙 7.5YR8/6	口 1/3		003-03
86	H9-x17 SZ8561	ﾛｸﾛ土師器 皿	口縁 器高	14.4 2.9	外：ロクロナデ→糸切り痕 内：ロクロナデ→ヨコナデ	やや粗	良	浅黄橙 10YR8/4	口 1/2		004-02
87	H9-x17 SZ8561	土師器 甕	口縁 器高	16.6 19.4	外：ヨコナデ→オサエ 内：ナデ→ケズリ	密 1～2㎜石英長石	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口 1/2		001-03
88	I9-a19 SD8567	緑釉陶器 椀				密	良	豌豆緑 836	口縁小片		023-02
89	H9-x15 SX8575	陶器皿	口縁	9.4	外：ロクロナデ→貼りつけ高台→糸切り痕 内：ロクロナデ	密	良	にぶい黄 2.5Y6/3	完形	山皿 底外面に墨書「上」	002-01
90	H9-x15 SX8575	陶器皿	口縁 器高	9.4 1.9	外：ロクロナデ→貼りつけ高台→糸切り痕 内：ロクロナデ	やや粗	良	灰白 2.5Y7/1	口 3/4	山皿	004-03
91	H9-x15 SX8575	陶器皿	口縁 器高	8.8 2.1	外：ロクロナデ→貼りつけ高台→糸切り痕 内：ロクロナデ	やや粗	良	灰白 2.5Y7/1	完形	山皿	004-01
92	H9-x15 SX8575	陶器皿	口縁 器高	8.6 2.1	外：ロクロナデ→貼りつけ高台→糸切り痕 内：ロクロナデ	やや粗	良	外：灰黄 2.5Y7/2 内：浅黄 2.5Y7/3	完形	山皿	003-01
93	H9-x15 SX8575	刀子								鞘の木質部分が付着。	009-01

第Ⅲ－８表　第137次調査区出土遺物観察表(3)

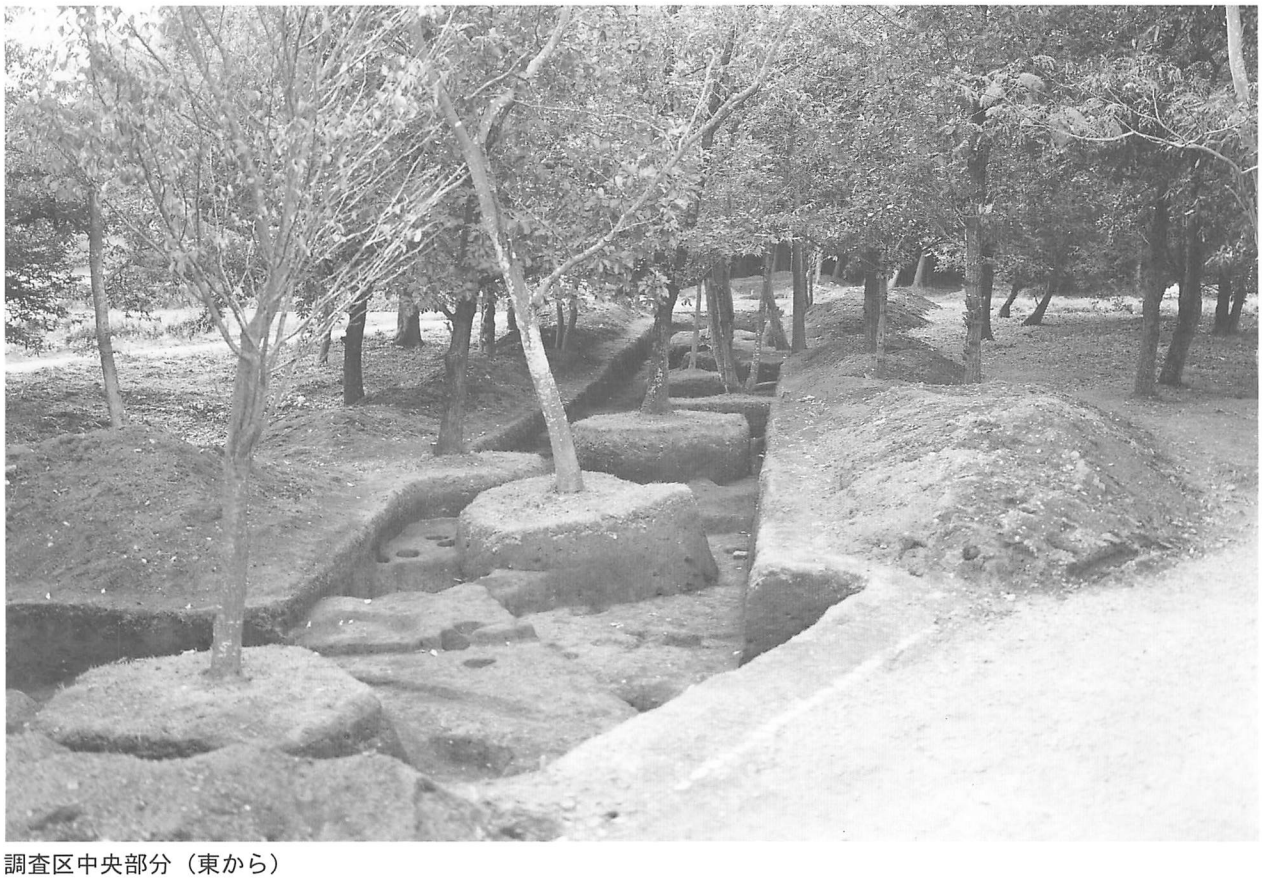
No.	出土遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
94	H8-y25 SK8600	土師器 皿	口縁 器高	11.8 2.5	外：ヨコナデ→オサエ・ナデ 内：ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/4	口完存	伊藤編年Ⅲa	040-01
95	H8-y25 SK8600	土師器 皿	口縁 器高	12.3 2.6	外：ヨコナデ→オサエ・ナデ 内：ナデ	やや密	良	浅黄橙 10YR8/4	口 5/8	〃	040-02
96	H8-y25 SK8600	土師器 皿	口縁 器高	7.8 1.6	外：ヨコナデ→オサエ・ナデ 内：ナデ	やや密	やや良	にぶい黄橙 10YR7/3	口 1/2	〃	040-05
97	H8-i24 SX8644	土師器 皿	口縁 器高	12.4 2.95	外：ヨコナデ→オサエ・ナデ 内：ナデ	やや密	やや良	灰白 10YR8/2	口 1/8	伊藤編年Ⅱb	040-03
98	H8-i24 SX8644	土師器 皿	口縁 器高	7.4 1.1	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	やや粗	やや良	淡黄 2.5Y8/3	口 5/8	〃	040-08
99	H8-i24 SX8644	土師器 皿	口縁 器高	7.4 1.1	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	やや密	やや良	浅黄橙 10YR8/3	口完存	〃	040-09
100	H8-i24 SX8644	土師器 皿	口縁 器高	6.7 1.1	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	やや密	やや良	淡黄 10Y8/3	口 1/5	〃	040-07
101	H8-i24 SX8644	土師器 皿	口縁 器高	7.3 1.7	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	やや密	やや良	淡黄 2.5Y8/3	口 3/4	〃	040-06
102	H9-y21 SD8568	陶器 椀	口縁	14.6	外：ロクロナデ→貼りつけ高台→糸切り痕 内：ロクロナデ	粗 0.5～1.5㎜小石	良	外：灰白 7/1Huc2.5 Y 内：灰白 7/1Huc5Y	口 1/5	山茶椀 藤澤編年 7 型式	001-02
103	H9-y20 SD8568	陶器 甕	底	15.6	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良	暗赤 7.5R4/3	底 1/8	底部石付着 常滑？	022-01
104	H8-y24 Pit1	土師器 杯 G	口縁	12.8	外：ヨコナデ→ナデ 内：ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR7/4	ほぼ完形		018-03
105	H9-y5 Pit1	土師器 杯	口縁	12.8	外：ヨコナデ→ナデ 内：ナデ	やや密	良	橙 7.5YR7/6	2/3		018-01
106	H9-y5 Pit1	小刀								茎部分	010-01
107	H8-g22 包含層	土師器 皿			外：ケズリ、内：ナデ	密	良	にぶい橙 5YR7/4	底部のみ	底部線刻「ドーマン」の一種か。	023-01
108	H9-y9 包含層	土師器 皿			外：ケズリ、内：ナデ	密	良	橙 2.5YR6/8	小片	ヘラ描き「林」？	023-05
109	H8-g22 包含層	緑釉陶器 椀				密	良	苔 837	口縁 小片		023-03
110	H8-j25 包含層	陶器 椀			外：ロクロナデ→貼りつけ高台→糸切痕・ナデ、内：ロクロナデ	密	良	灰黄 2.5 Y 7/2	底 9/12	山茶椀	026-06
111	H8-v24 包含層	陶器 椀			外：ロクロナデ→貼りつけ高台→糸切痕・ナデ、内：ロクロナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	底部のみ	山茶椀。内面全面に赤色顔料。 高台部に籾殻圧痕。	023-04
112	H8-s24 包含層	陶器 椀			外：ロクロナデ→貼りつけ高台→糸切痕・ナデ、内：ロクロナデ	やや粗	不良	灰黄 2.5 Y 6/2	底 10/12	山茶椀。籾殻圧痕。	026-05

第Ⅲ－９表　第137次調査区出土遺物観察表(4)

次数	地区	グリット	遺構・層名	緑釉破片数	備考
137	Ｉ９	Ａ19	ＳＤ8567	1	
137	Ｈ８	Ｇ22	包含層	1	

第Ⅲ―10表　第137次調査区緑釉陶器出土地点・破片数一覧

調査区南部分（南から）



調査区中央部分（東から）

調査区北部分（南から）

調査区西部分（西から）

調査区中央部分南（南から）

SB8672・8673（西から）

SB8668（西から）

SB8674・SH8631（西から）

SH8572・8574（南西から）

SH8585・8586・8588（北から）

SH8586竈（北西から）

SH8573・8576（南東から）

SH8635（北東から）

SH8638（北西から）

SH8638竈（西から）

SH8607（北東から）

SK8647（北西から、串部分は毛彫馬具出土地点）

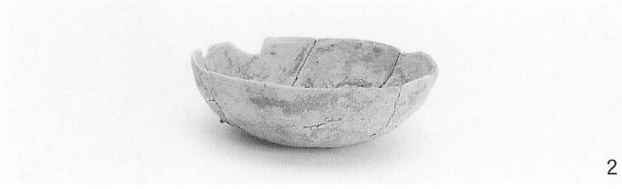
SK8621（南から）

SK8643、SX8665（北西から）

SZ8561（西から）

SX8575（西から）

SX8644（西から）


2

3

3底部

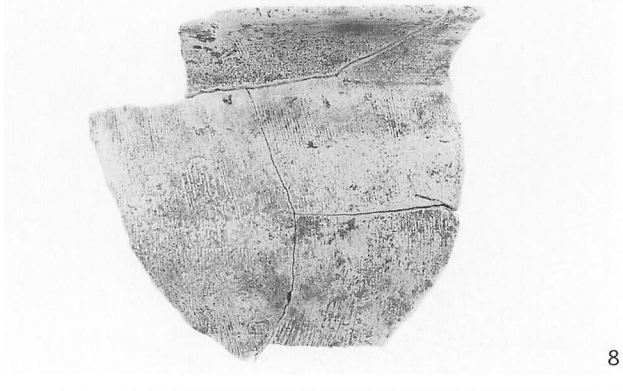
7

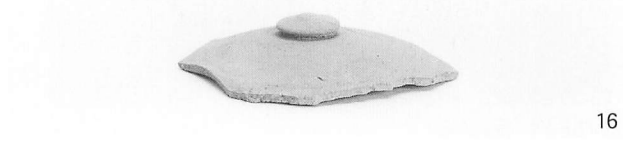
11

4

5

6


8


16

12

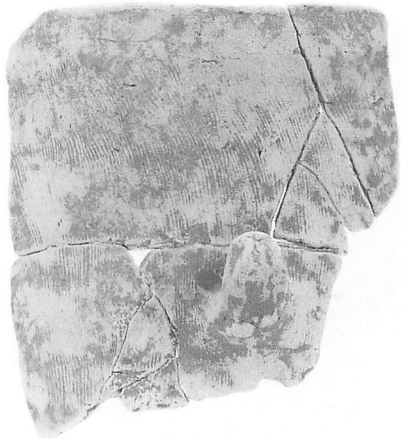
14

23

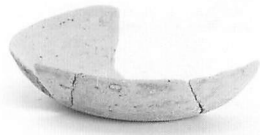
26

32

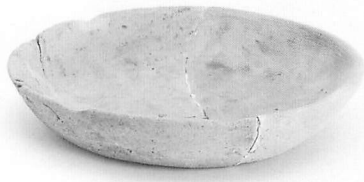
34



15

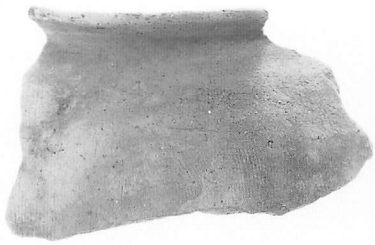


24

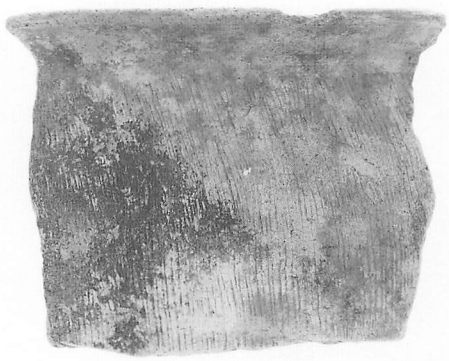


28

30

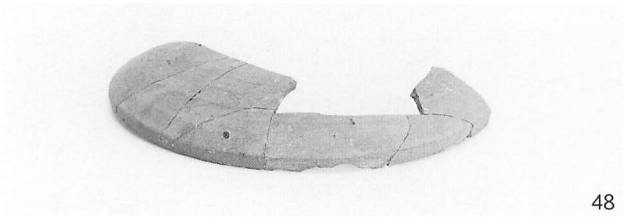


35

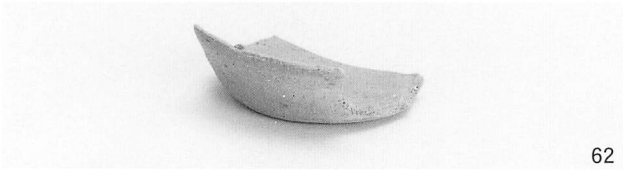


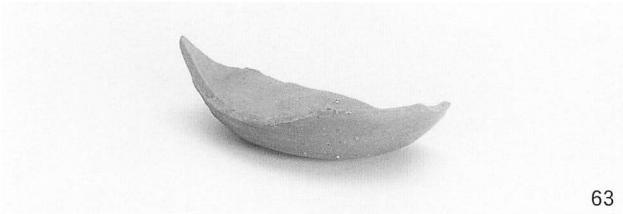
37

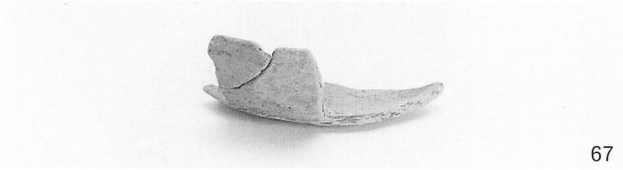
39


48

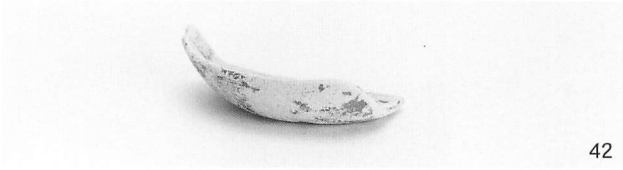
58


62

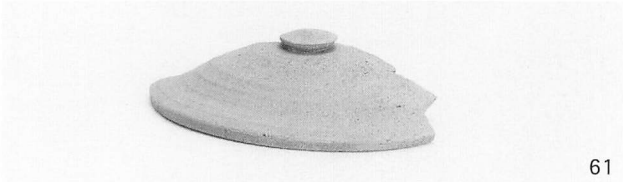

63

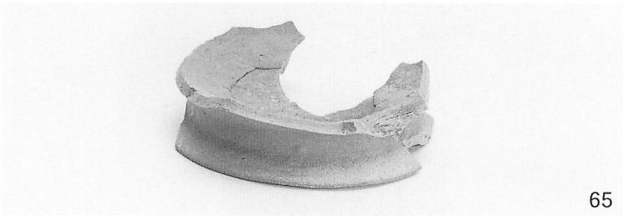

67

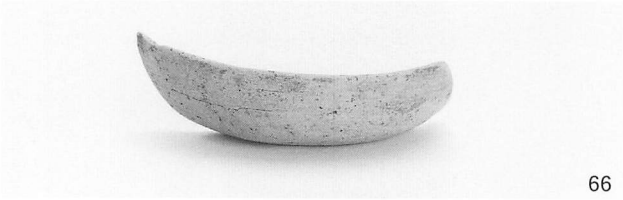
75


42

57


61

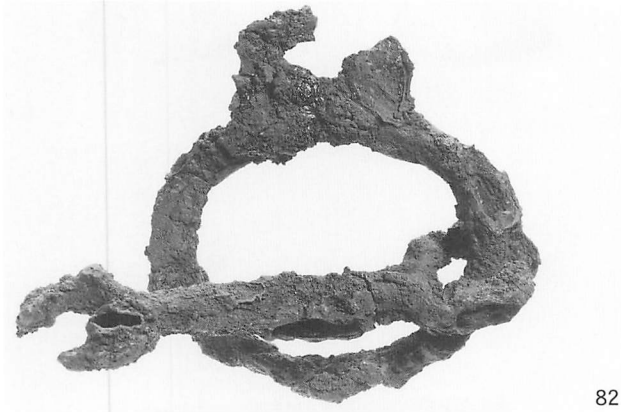

65

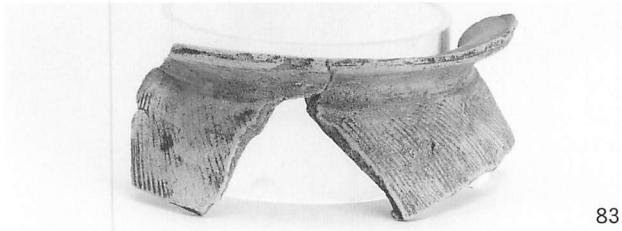

66

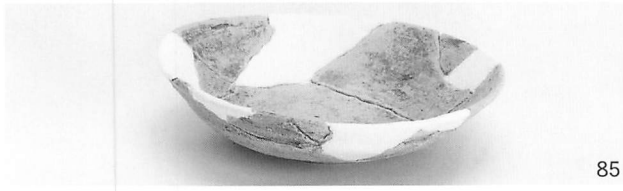
72

76

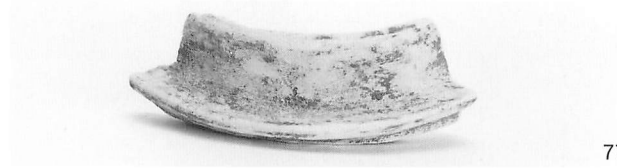
71

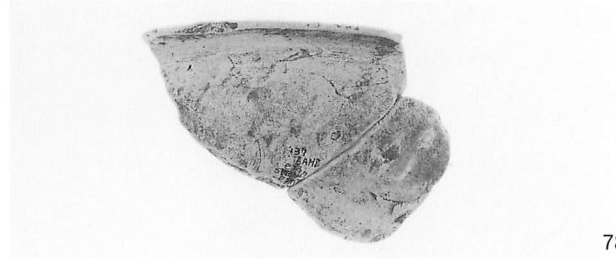

82

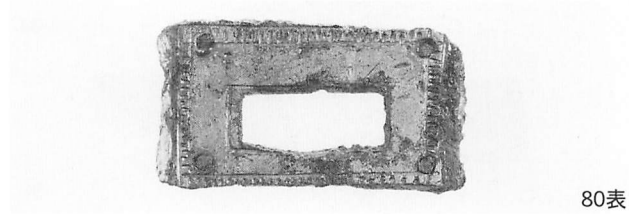

83

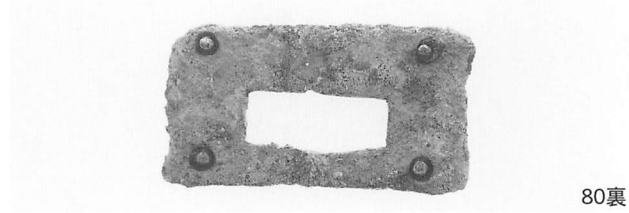

85

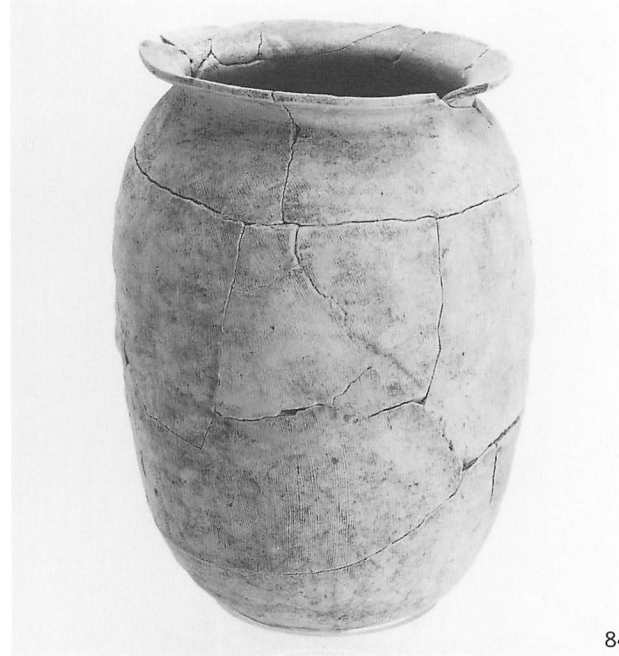
87


77


78


80表

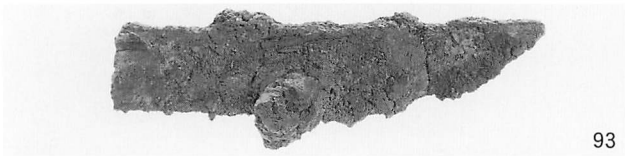

80裏


84

86

89

92


93

95

102

104

105

111

90

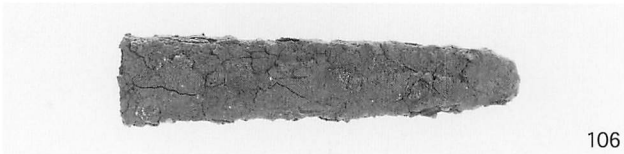
94

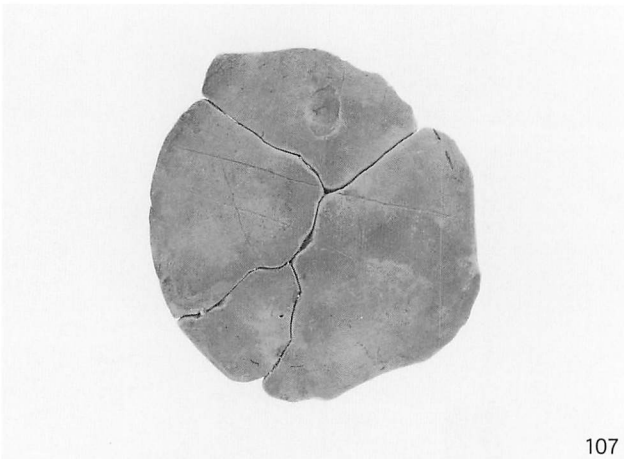
96

99

98

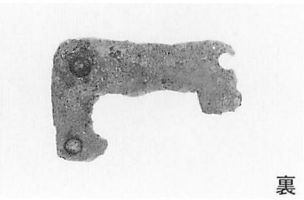
101


106


107

第5次調査出土馬具

表


裏

Ⅳ　第139次調査

（６ＡＪ９・Ｌ９　塚山・広頭・東裏地区）

１　調査の経緯と経過

第139次調査区は、斎宮歴史博物館の南東部にある、通称「奈良古道」沿いに設定された調査区である。この調査は、「奈良古道」の幅員およびその時期的な変遷を見るために設定されたものである。

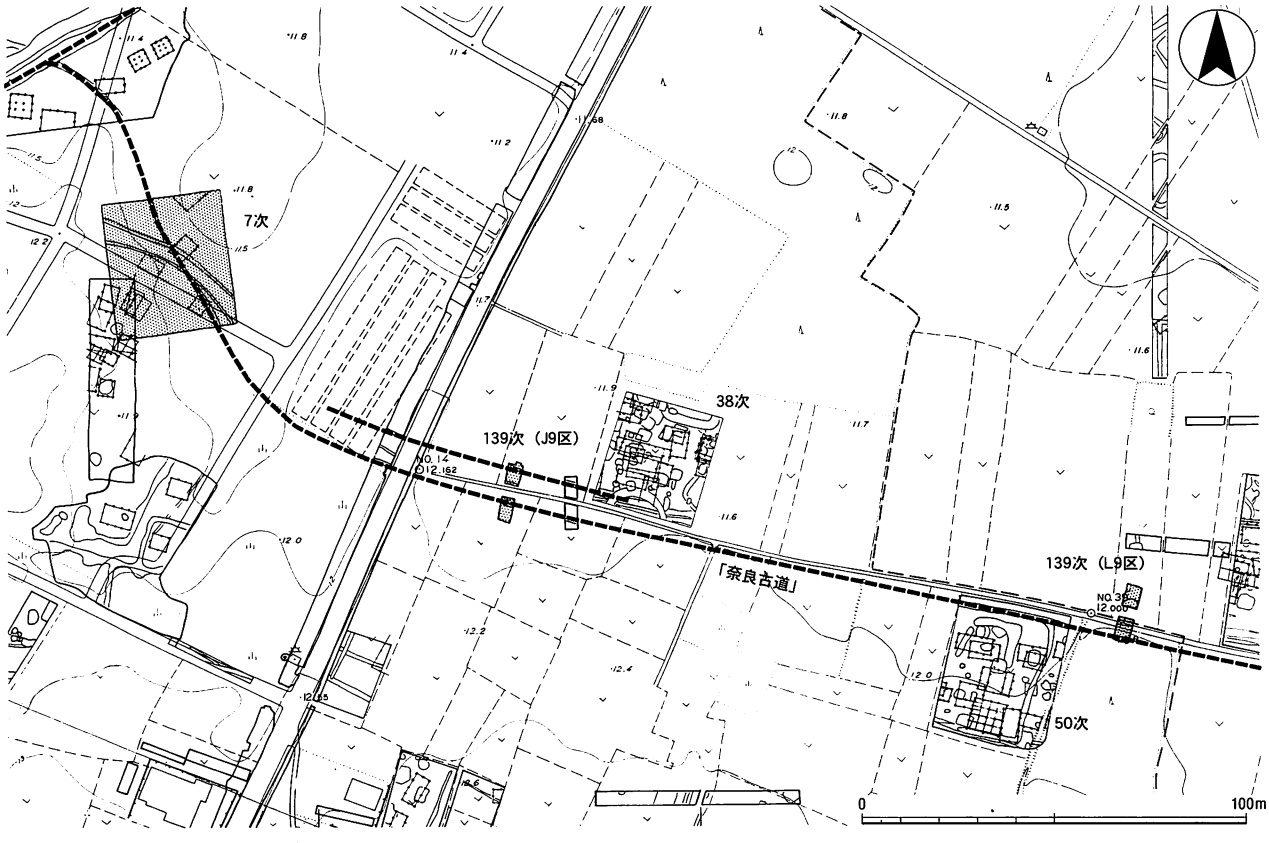
「奈良古道」は、これまでにも数回の調査で確認されている。杉谷政樹氏によってまとめられた成果[1]から、道路方向は概ねＥ15°Ｓ（Ｎ75°Ｗ）を示し、史跡地内を横断して史跡地外東部にまで及ぶと推測されている。西側は、足利健亮氏の研究で飯高駅家まで直線道となることが指摘されている[2]。これは飯野郡条里方向に合致した方向である。

この道路は、史跡地内東部に方格地割が成立する８世紀第４四半期までは伊勢神宮へと至る官道として機能し続けており、方格地割成立後に改変されると考えられている。しかし、道路南側側溝に比べて北側側溝が不明瞭なこと、あるいは、方格地割成立以後も現在に至るまで、農道として機能し続けていることなどから、成立期の幅員やその後の変遷を追うこと、などが課題として残されていた。

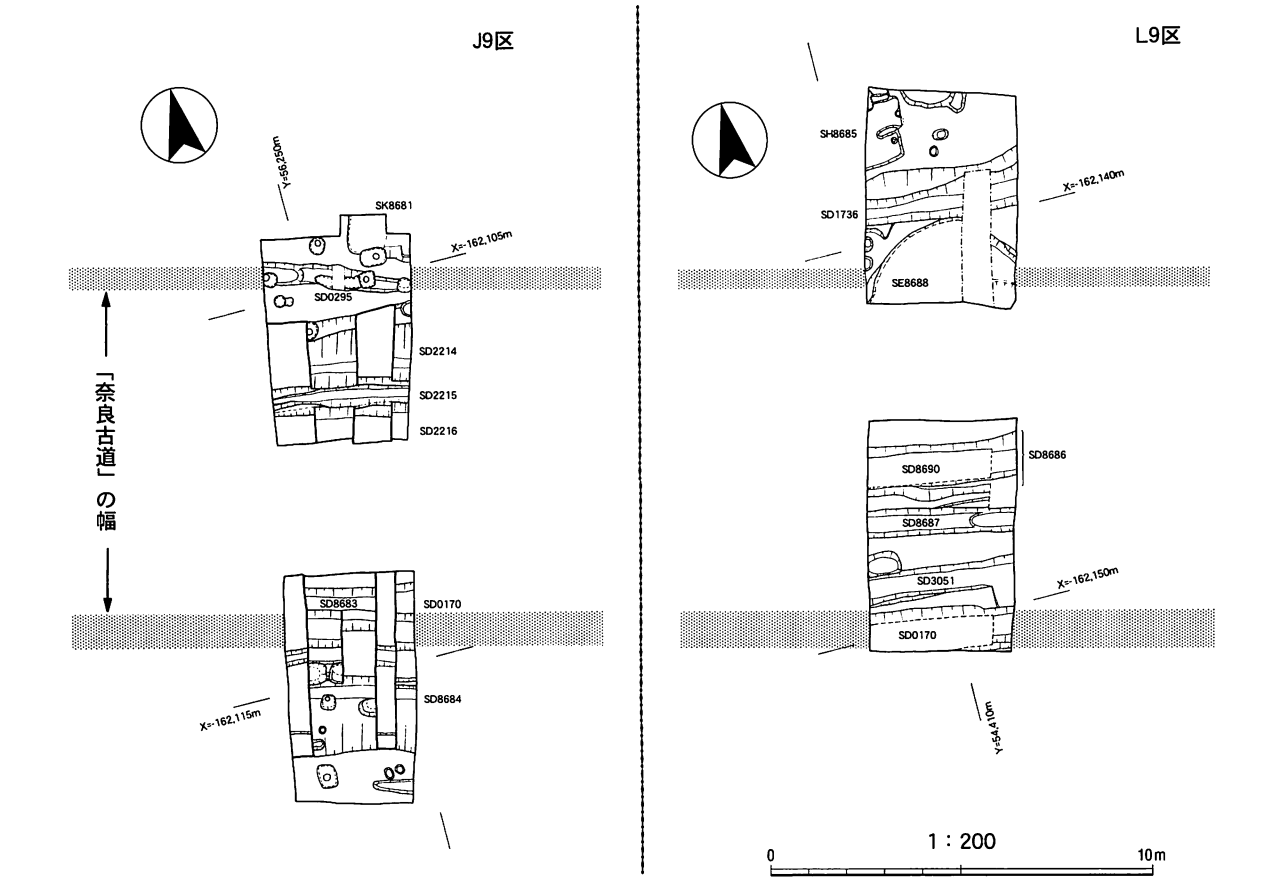
調査地は、古道想定地を挟む形で２箇所に調査区を設定して実施した。西調査区はＪ９地区にあたり、調査区北部が斎宮字塚山3,310番地、南部が竹川字東裏314番地にあたる。東調査区はＬ９地区にあたり、調査区北部が斎宮字塚山3,326番地、南部が斎宮字広頭3,370番地に相当する。調査は2003年２月４日から開始し、同年２月12日に埋め戻しが完了した。最終調査面積は約92㎡であった。

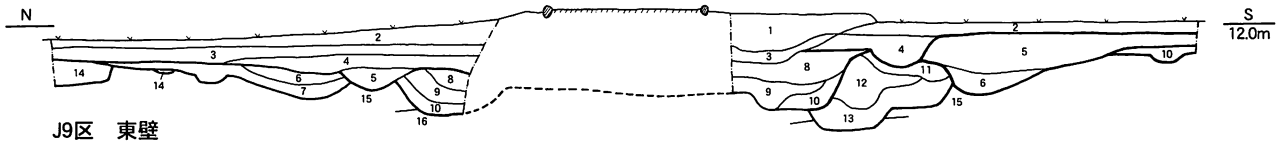
２　調査区の層位

調査区の現況は畑地である。現状での標高は、西部・東部調査区いずれも約12.0mである。全体的な地形としては南高北低である。



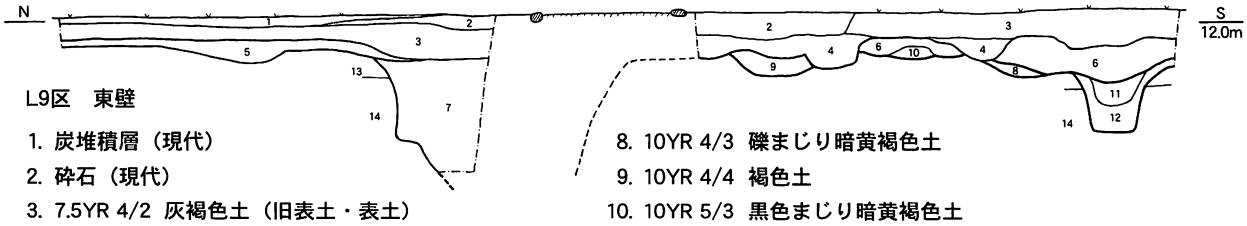
第Ⅳ－１図　第139次・第７次調査区　位置図（1：2,000）





J9区　東壁

1. 砕石（現代）
2. 7.5YR 5/1 褐灰色土（表土）
3. 7.5YR 4/2 灰褐色土（旧表土）
4. 7.5YR 4/3 褐色土
5. 7.5YR 5/3 黄橙色まじりにぶい褐色土
6. 7.5YR 4/4 褐色土
7. 7.5YR 4/3 褐色土
8. 10YR 4/4 褐色土
9. 10YR 4/6 褐色土
10. 10YR 2/3 黒褐色土、しまり悪い
11. 10YR 3/3 暗褐色土
12. 10YR 4/4 褐色土
13. 10YR 2/3 黒褐色土
14. 7.5YR 2/2 黒褐色土
15. 7.5YR 7/8 黄橙色粘土（基盤層）
16. 7.5YR 6/6 橙色礫層



L9区　東壁

1. 炭堆積層（現代）
2. 砕石（現代）
3. 7.5YR 4/2 灰褐色土（旧表土・表土）
4. 10YR 3/2 黒褐色土
5. 7.5YR 4/2 明褐まじり灰褐色土
6. 10YR 3/3 礫まじり暗褐色土
7. 7.5YR 3/3 礫まじり暗褐色土
8. 10YR 4/3 礫まじり暗黄褐色土
9. 10YR 4/4 褐色土
10. 10YR 5/3 黒色まじり暗黄褐色土
11. 10YR 3/2 黒褐色土、土器多い
12. 10YR 2/3 黒褐色土
13. 7.5YR 5/8 明褐色土（基盤層）
14. 7.5YR 6/6 橙色礫層

0　1：100　5m

第Ⅳ－２図　第139次調査区　平面・土層断面図

西調査区（Ｊ９区）　ここでは表土下に暗褐～灰褐色系土が見られ、近世以降の遺構面および遺構埋土を形成している。調査区南北端では標高11.5m程度で橙～黄橙色系土の基盤層（地山）に達する。現道を挟んだ調査区の中央部分は、古代～近世の道路側溝に相当すると考えられる溝が錯綜している。

東調査区（Ｌ９区）　ここでは表土・盛土下に、旧表土と考えられる灰褐色系土が見られる。その直下が近世の遺構面に相当する。標高約11.5mで明褐色土の基盤層（地山）にあたり、この面で古代～中世の遺構が確認される。基盤層以下は、標高約11.2mで段丘礫層にあたっていた。

3　遺構

今回の調査区では、古代～近世の遺構を確認している。ここでは主立った遺構を採り上げるので、それ以外の遺構については第Ⅳ－１表に示した遺構一覧を参照されたい。

(1)西調査区（Ｊ９区）の遺構

ＳＤ0295　ｍ・ｎ２グリット付近で検出した。幅約50cm、深さ約10cm程度の浅い溝である。第８－11次調査区で検出されているＳＤ0295と同一遺構と判断した。３基ほどのピットが溝埋没後に掘削されている。後述のＳＫ8681と埋土の状況が近似しており、関連遺構と見ることもできる。

後述の溝ＳＤ0170と平行関係にあり、「奈良古道」に関係した遺構と考えられる。ＳＤ0170との間は、溝の心々で約10mである。

出土遺物は微量である。Ⅱ－１期頃の土師器甕口縁部片があるが、これは重複するピットを正確に検出する前に出土したものであるため、ピットに伴っていたものなのかも知れない。いずれにしても、Ⅱ－１期以前に埋没した遺構と見てよい。

ＳＤ0170　Ｌ・ｍ４グリット付近で検出した遺構である。ＳＤ0170の続きはＬ９区でも検出している。

Ｊ９区では、中近世の溝が重複しており、遺構の上端はそれによって撹乱されている。溝の幅は約1.9mで、北部がやや深くなっており、本来は２条の溝かも知れないが、明確にはできなかった。深い部分の幅は約1.1mである。遺構の深さは、深い部分で30cmであるが、後世の削平を考慮すると、本来は深い部分で約１m、浅い部分でも約70cmはあったものと考えられる。遺構埋土は黒褐色系土である。

出土遺物は多くないが、概ねⅠ期の範疇である。

ＳＤ2216・8683　ＳＤ2216はｍ・ｎ３グリット付近で、ＳＤ8683はＬ・ｍ４グリットでそれぞれ検出した遺構である。「奈良古道」に沿う溝で、道路側溝に相当すると考えられる。ＳＤ2216が北側溝、ＳＤ8683が南側溝にあたる。この２遺構を同一時期の道路側溝と考えたのは、遺構の形状と埋土の状況が類似することによる。

ＳＤ2216は北側の肩部を検出したのみで、規模は不明。検出面からの深さは約60cmで、断面逆台形を呈すると考えられる。最下層埋土には礫を含む。ＳＤ8683は幅約1.2m、検出面からの深さ約70cmの断面逆台形を呈するものである。北肩部は南肩よりも50cmほど低く、ＳＤ2216間の路床面が周囲よりも低くなっていることを示すのであろう。ＳＤ2216とＳＤ8683が同じ規模とすれば、路床面の幅は約3.4m、溝心々間で約4.6mである。

出土遺物は少ない。ＳＤ2216からは鎌倉後半～室町期の土師器皿が出土した。ＳＤ8683からは、土師質土器（ロクロ土師器）のほか、鎌倉後半頃の土師器皿が出土している。このことから、当該遺構は鎌倉～室町時代頃の遺構と考えられる。

ＳＤ2214・8684　ＳＤ2214はｍ・ｎ２グリット付近で、ＳＤ8684はＬ・ｍ４～５グリットでそれぞれ検出した遺構である。前述遺構と同様、「奈良古道」に沿っている。この２遺構を同一時期の道路側溝と考えたのは、前記ＳＤ2216・8683と同様、遺構形状と埋土の類似による。

ＳＤ2214・8684は推定幅約1.6～2.0m、深さ約50～60cmである。いずれも路面側の法面が急で、反対側は緩い。ＳＤ2214とＳＤ8684間は、溝心々間で約8.8mとなる。この間を道路と考えることもできるが、遺構埋土は旧耕作土と考えられる褐色系土であり、道路に隣接する土地の区画を主目的に掘削された溝と考えられる。

いずれの遺構からも、埋土内から近世の遺物が出土しており、その頃のものと考えられる。ＳＤ2214はこれまで室町期とされていたが、ここで訂正する。

ＳＤ2215・8682　ＳＤ2215はｍ・ｎ２グリット付近で、ＳＤ8682はＬ・ｍ４グリットでそれぞれ検出した。前述遺構と同様、「奈良古道」に沿っている。この２遺構を同一時期の道路側溝と考えたのは、前記と同様、遺構形状と埋土の類似による。

ＳＤ2215・8682は幅約1.0m、深さ約30～40cmである。ＳＤ2215は西側で細く深い部分を持つ。ＳＤ2215とＳＤ8682間は、溝心々間で約７ｍとなる。この間を道路と考えることもできるが、ＳＤ2214とＳＤ8684の関係と同様、道路に隣接する土地の区画を主目的に掘削された溝と考えられる。

ＳＤ2215は、重複関係からＳＤ2214よりも新しい遺構である。したがって、近世以降の遺構と考えられる。ＳＤ2215はこれまで鎌倉期の遺構とされていたが、ここで訂正する。

ＳＫ8681（第Ⅳ－４図）　ｍ・ｎ２グリット付近で検出した。遺構の一部を確認したのみで全体形は不明であるが、東西２ｍ以上、南北１ｍ以上で、平面形は隅丸方形を呈している。埋土は、全体が黄色ブロックを含む黒褐色土で、意図的に埋め戻されていると考えられる。その埋土中から、ほぼ完形の土師器長胴甕や、土師器竈・須恵器台付大形甕が出土している。

出土土器から、Ｉ－２期に相当する遺構と考えられる。

ピット群　調査区が狭いために掘立柱建物としてまとまらないが、明らかに掘立柱建物の柱穴と考えられるピットが調査区北側・南側にある。これらのピット群は、北側ではＳＤ0295やＳＫ8681の廃絶後に穿たれている。南側では、ＳＤ0170の南肩部に重複して見られる。状況から見て、ＳＤ0170・0295よりも新しいことは確実である。ｍ２－ｐｉｔ２からはⅡ－１～２期と考えられる灰釉陶器瓶が出土していることから、斎宮Ⅱ期が中心と考えられる。

(2)東調査区（Ｌ９区）の遺構

ＳＤ0170　Ｌ９区では、ｂ・ｃ12グリット付近で確認した。ここでは、溝南肩が検出されたのは東端部分のみで、西側では調査区外に及んでいる。遺構は、検出面での幅約1.2m、深さ約80cmで、遺構の重複による削平を考慮すれば、本来の深さは１ｍ以上と考えられる。断面逆台形で、埋土は黒褐色系土である。

Ｌ９区では、埋土下層部分からＩ－３期相当の土器類が多く出土している。埋土上層部分には11世紀後半代と考えられる瓦器椀が見られるので、下層埋土形成後、かなりの長期にわたって窪み状の場所として存続していたものと考えられる。

ＳＤ8690・3051　ＳＤ8690はｃ・ｄ11グリット付近で、ＳＤ3051はｃ12グリット付近で検出した遺構である。ＳＤ3051は第50次調査区で検出したＳＤ3051の延長部分と考えられる。この２条間が道路面になると考えられる。この２遺構を同一時期の道路側溝と考えたのは、遺構形状と埋土の類似のほか、ほぼ同じ時期の井戸ＳＥ8688が、ちょうどＳＤ8690の北にあたることも挙げうる。

ＳＤ8690は幅約１ｍ、深さ約40cmで、断面Ｕ字形を呈する。上部は近世の溝ＳＤ8686によって撹乱されている。ＳＤ3015は幅約80cm、深さ約20cmで、断面逆台形を呈する。両溝間は、溝心々で3.2m、路床面幅は2.2mである。いずれの遺構埋土中からも、平安後期～鎌倉期の遺物が出土している。

ＳＤ8687　ｃ・ｄ11グリット付近で確認した。ＳＤ3051とＳＤ8686の間にある。埋土には黒色系のブロックが入る。溝状を呈しているが浅い落ち込み状である。ＳＤ3051とＳＤ8690間の路床の一部である可能性がある。

出土遺物は少なく、遺構の時期を特定できないが、上述のことから、ＳＤ3051と同じ頃の遺構と考えておく。

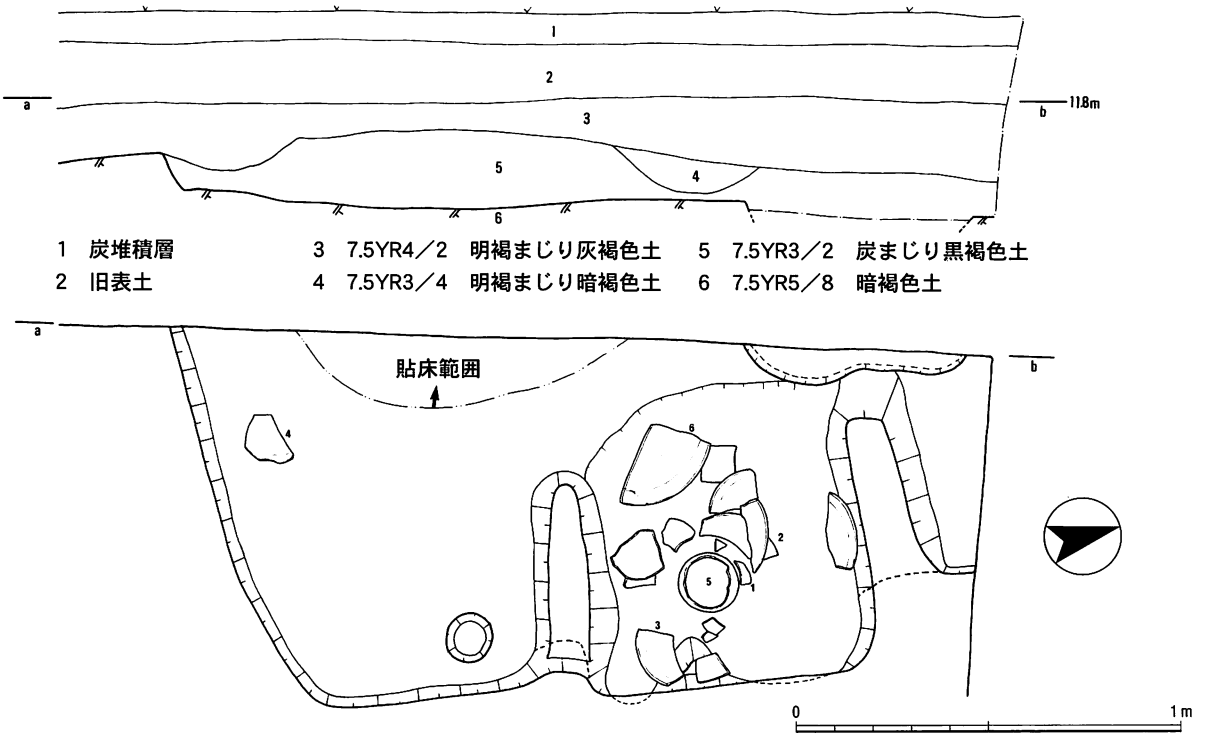
ＳＤ1736　ｃ・ｄ９グリットで検出した。第32次調査区からの一連の溝と考えた。灰褐色系の埋土である。法面は、北側が緩く、南側がやや急なもので、先述のＳＤ2214・8684と同様の形態である。

埋土中からの出土遺物は、近世のものを含んでおり、その頃に埋没したものであろう。

ＳＤ8686　ｃ・ｄ11・12グリットで検出した溝で、表土直下で確認できた遺構である。埋土中からは近世～近代の遺物が出土した。

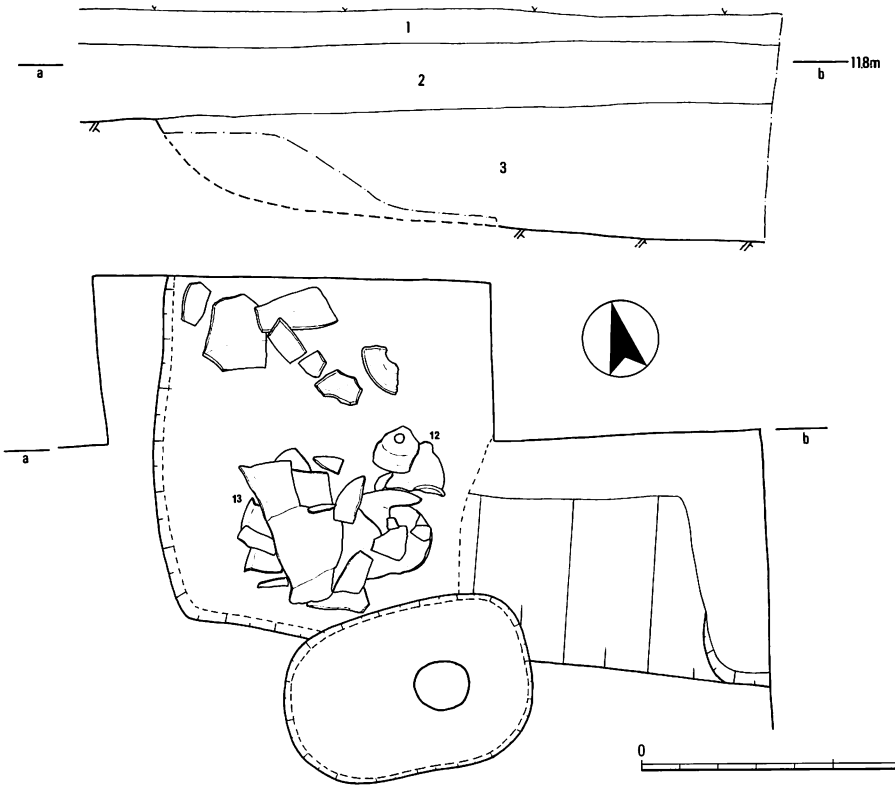
ＳＨ8685（第Ⅳ－３図）　Ｌ９区ｃ９グリット付近で検出した。方形の竪穴住居跡で、その南東辺の一部が確認された。

東辺のやや南寄りと思われる位置にカマドがある。



1　炭堆積層　　3　7.5YR4／2　明褐まじり灰褐色土　　5　7.5YR3／2　炭まじり黒褐色土
2　旧表土　　4　7.5YR3／4　明褐まじり暗褐色土　　6　7.5YR5／8　暗褐色土

第Ⅳ－３図　第139次調査区　ＳＨ8685平面・断面図（1：20）



1　表土
2　7.5YR4／2 灰褐色土
3　7.5YR2／2 黄色ブロック多い
　　黒褐色土

第Ⅳ－４図　第139次調査区　ＳＫ8681平面・断面図（1：20）

カマドは、燃焼部分を壁面から若干掘り込み、袖部の壁際は基盤層がそのまま残っていた。このことから、住居設計段階でこの位置にカマドを作成することがあらかじめ決められていたものと考えられる。カマドの中央には、小形の土師器甕が倒立して置いてあり、中には焼けた土が充満していた。支脚として用いられたと考えられる。なお、カマドに向かって右手には貯蔵穴のある場合が多いが、この竪穴住居にはそれが見られない。

カマド近隣から、床面に接するような状態で、須恵器・土師器類がまとまって出土した。これらの土器類から、Ⅰ－２期には廃絶した住居と考えられる。

ＳＥ8688　ｃ・ｄ10グリット付近で確認した遺構である。円形掘形の一部を確認した。掘形の推定直径はおよそ４ｍである。調査区東壁際のみ、遺構面下約1.6ｍまで掘削した。掘形北側には、この高さでテラスがある。

掘形内から中世Ⅰ期に相当する土師器小皿が出土しているので、時期的にはおよそ12世紀後半頃のものと考えられる。

4　出土遺物

第139次調査区からの出土遺物は、整理箱に換算して約６箱である。内訳は大部分が土器類で、少量の金属製品がある。

ここでは主立った遺物について記述する。古代の土器に関する分類・編年については、斎宮分類・編年[3]および平城・長岡・平安京における編年（以下、「都城編年」と呼称）[4] を参照し、部分的に今回観察した所見を交えて追加・変更している。

ＳＨ8685出土土器（１～６）　竪穴住居のカマドおよびその周辺からまとまって出土したもので、廃棄時の同時性は、カマド支柱であった甕（５）以外は高い。土師器（１～５）・須恵器（６）がある。

１は杯Ｇ。２は脚台の付く皿で、通常の皿Ｂよりも外反が強く、高杯の杯部との折衷的な形態である。３・４は皿Ａで、いずれも底部にヘラケズリを施す。３の内面には螺旋状の暗文が見られる。６は須恵器皿で、都城分類では皿Ａ１に相当する。極めて丁寧な整形で、美濃須衛産と考えられる。

これらの土器類は、斎宮ではＳＫ5102併行でＩ－２期にあたり、都城編年では平城Ⅲに併行する一群と考えられる。

ＳＤ0170出土土器（７～11）　「奈良古道」の南側溝にあたる。図示したものはいずれもＬ９区から出土した。７は上層、８～11は下層にあたる。

７は瓦器椀。内面に斜放射状暗文が見られる。大和型に相当し、川越俊一氏による編年[5]のＩ段階Ｃ型式に相当する。

８は土師器で台付皿。都城分類で皿Ｂとされる典型的なものとは形態が異なる。内面には斜放射状暗文が見られる。外面には粗雑なヘラミガキがある。９・10は土師器甕。口縁部が外反しながら開き、端部は外側に面をなす。11は須恵器で短頸壺。都城分類の壺Ａに相当する。肩部に環状の四耳を持つ。

下層の一群は、斎宮ではＩ－２期を中心に、Ⅰ－３期までの間に相当するものであろう。

ＳＫ8681出土土器（12・13）　遺構内からまとまって出土した。２点のみであるが、両者の廃棄時における同時性は明確である。他に、竈形土器の破片がある。

12は須恵器瓿。筒状の頸部から大きく開く口縁部で、高台を有している。口縁部内面には、淡緑色の綺麗な自然釉が掛かる。13は土師器長胴甕。口縁部中ほどの器壁が厚くなり、口縁端部は外側に面をなすものである。

これらは、斎宮ではＩ－２～３期に相当する時期のものと考えられる。

ＳＤ3051出土土器（14）　回転成形による土師質土器（ロクロ土師器）を１点図示した。高い輪高台の小皿と考えられる。この形態は斎宮跡を含めた南伊勢地域の遺跡ではあまり見られず、北伊勢地域で稀に見られるものである[6]。時期的には斎宮Ⅲ－２期頃に相当する。

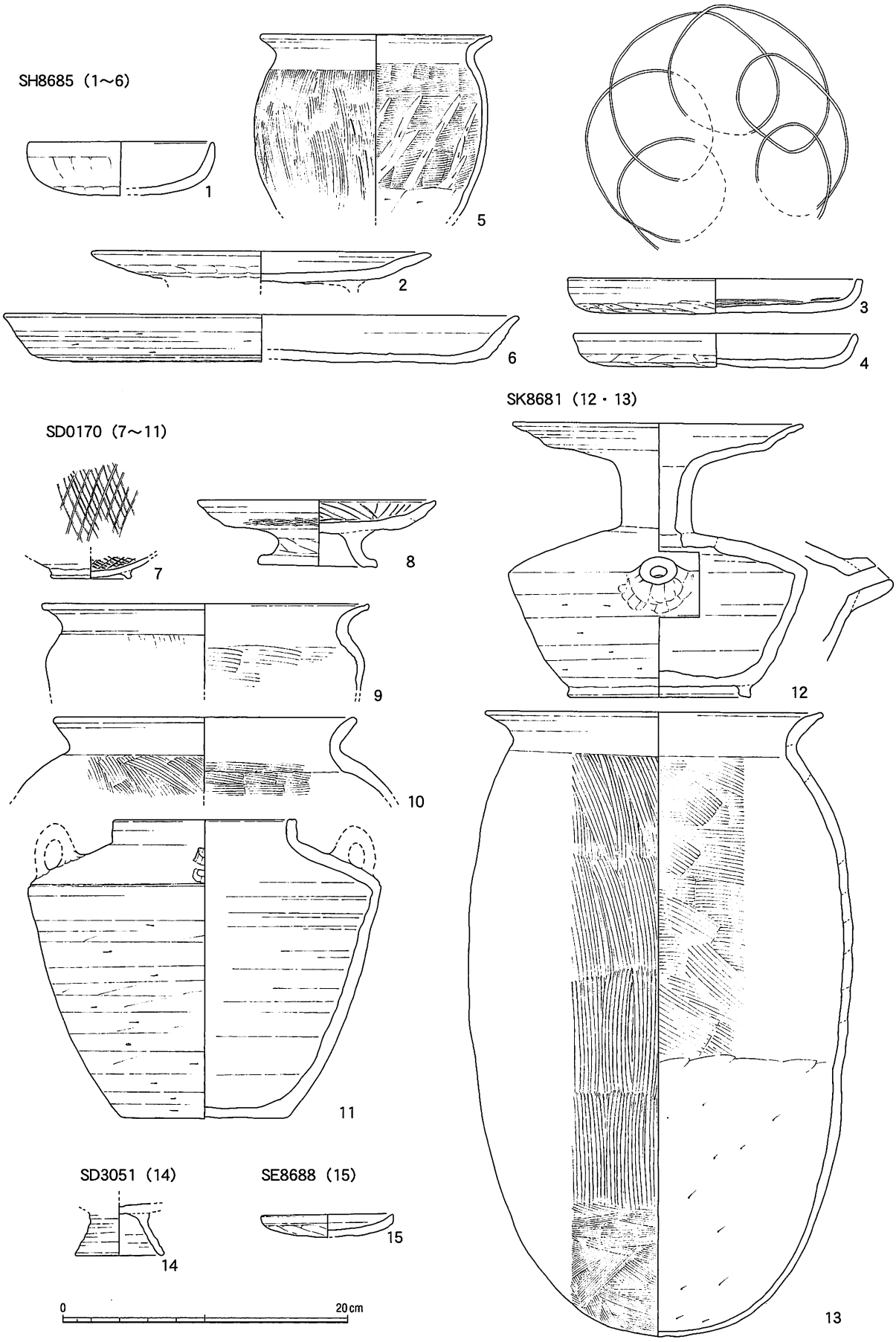
ＳＥ8688出土土器（15）　土師器小皿を１点図示した。口縁端部の外側に面をなすものである。斎宮Ⅲ－３期以降、中世Ⅰ期[7]のものと考えられる。

5　まとめと検討

～「奈良古道」とその周辺～

a　「奈良古道」の幅員

「奈良古道」は、ＳＤ0170とＳＤ0295を側溝とした範囲と考えられる。両溝の心々間距離は約9.0ｍである。



第Ⅳ－５図　第139次調査区　出土遺物実測図（1：4）

「奈良古道」の南側溝は、これまでにも確認されているＳＤ0170と考えられる。今回の調査区でのＳＤ0170は、検出面での上端幅約１ｍ、深さ約１ｍである。周辺の竪穴住居跡などの遺存状況から推定される奈良時代の地表面は、ほぼ現地表面に近いと推測されることからすると、ＳＤ0170の地表面からの掘削深度は1.4ｍほどとなり、かなり大規模なものであるといえる。ただし、東側のＬ９区では１条の溝であるが、西側のＪ９区では２条の重複か、あるいは南側にテラスを有したような状態となっている。これは、この溝がＪ９区以西で大きく北側に屈曲することと関連を持ち、そのために数回の掘削が伴っている可能性も考えられるが、今のところ明確にはできない。

北側溝は、これまでも明確ではなかったが、今回の調査では、ＳＤ0295をそれと判断した。ＳＤ0295は、遺構埋土が締まった黒褐色系土で、ＳＤ0170の類似しているが、幅約50㎝、深さ約10㎝と小規模で歪な形状を呈しているため、ＳＤ0170と対になる溝と断定することに若干の躊躇はある。しかし、先述した掘削当時の地表面（≒現地表面高）から見れば開削深度は40㎝ほどはあったと考えられる。このため、ＳＤ0295を北側溝と判断した。

なお、ＳＤ0295が確認できたのはＪ９調査区のみで、Ｌ９調査区では後世の遺構によって破壊されており、確認できていない。

ｂ　側溝規模の差

南側溝が深く、北側溝が貧弱な点については、当地の地形との関係と、道路設計基準を見ること、の２点から考える必要があろう。当地の地形は、南西から北東にかけて順次下降している。当調査地から南北それぞれ100ｍ離れた地点の標高を見ると、北側で12.9ｍ、南側で11.5ｍと、その差約1.4ｍある。水流は南から北に向かって流れることになるため、南側溝を深く保つことによって、道路以北への浸水を防ぐ機能を与えたものと考えることができる。

なお、今回調査を行った東西２箇所の調査区は、直線距離で約170ｍ離れているが、溝底のレベルは東調査区の方が約５㎝低い程度で、その差はほとんど無い。したがって、水の排出はあまり考慮されていないようである。東西いずれの調査区でも溝底は段丘礫層に達しており、ＳＤ0170に入った水は、溝内部で漸次吸収されていったものと考えられる。

ｃ　埋没時期の問題

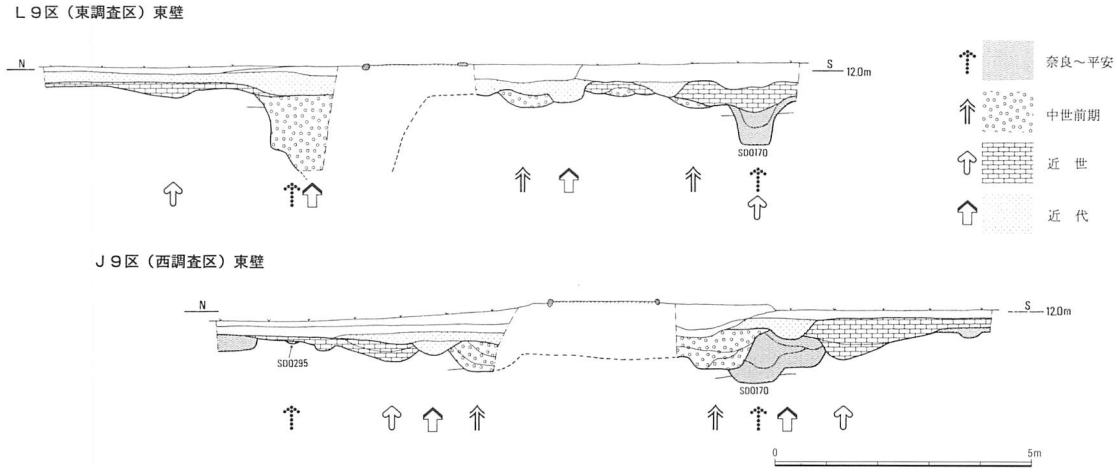
ＳＤ0170からは、斎宮Ｉ－３期、都城編年では平城Ⅲ併行期以降の土器類が出土する。出土する土器は、第７次調査区（古里Ｅ地区）のＳＤ8736（ＳＤ0170の延長と考えられる。第Ⅴ章参照）でも、完形品を含むかなりまとまった出土が見られる。また、平安期（斎宮Ⅱ期）に属するであろうピットの存在からは、この時期に「道路」内へ浸食した建物の建築が見られることになる。

以上をまとめると、「８世紀の中頃にこの道は廃絶し、土器が遺棄され、建物も旧道路敷に及んだ」という表現になる。開削・機能時期は、斎宮Ｉ－３期以前の、おおよそ奈良時代前半以前と考えられる。しかし「奈良古道」は、時期によって幅員の変化はあるものの、現在まで連綿と「道」として機能してきた。つまり、ＳＤ0170の埋没が道路の終焉を意味していないことは明らかである。一見矛盾するように見えるこの状況をどう解釈するのかは難しいが、ＳＤ0170は、土器などが投棄されて本来の機能が停止した後も、地割の基準ないしは側溝の無い道路として用いられ続け、それが中世前期に至り、改めて側溝が開削された、と考えておく。

なお、これまであまり重視されていないが、「奈良古道」の方向（Ｅ15°Ｓ）が飯野郡条里型地割の東西軸に一致するという点は注意するべきであろう。条里型地割の付設時期については各種の議論があり、未だ定見は無いのかも知れないが、「奈良古道」の場合は条里型地割と密接な関係を有している。一方、斎宮は多気郡にある。したがって、「奈良古道」と斎宮が関係するのであれば、「奈良古道」と多気郡条里型地割、あるいは多気郡条里型地割と斎宮とが有機的な関係を持つ可能性が高いといえる。今後の課題として提示しておきたい[8]。

ｄ　「奈良古道」その後

調査区からは、「奈良古道」以後に継続する道の遺構も確認されている。第Ⅳ－６図には、遺構埋土埋土から見た変遷を模式図的に表現した。これを見ると、奈良・平安時代頃の幅員約９ｍの後、中世前期には３～４ｍ程度にまで細くなるが、近世には再



第Ⅳ－６図　第139次調査区　時期別道路遺構の変遷（1：150）SD0170を基準とする。

度９ｍほどの広さとなり、近代にはまた狭くなり、現代に至っていることがわかる。つまり、古代と近世に、道路の規模が大きくなることが指摘できる。道路の維持管理は一般に為政者の関与が強い。「奈良古道」がその後の時期にどれほど重視された道であったのかは残念ながら不明であるが、国家権力が安定する古代・近世といった時期に幅員の広い道路が存在していることは注目できる。

（伊藤裕偉）

＜註＞

(1)杉谷政樹「古代官道と斎宮跡について」（『研究紀要』第６号　三重県埋蔵文化財センター　1997年）

(2)足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」（『探訪古代の道』第１巻　法蔵館　1988年）

(3)斎宮歴史博物館『斎宮の土器・みやこの土器』（国史跡斎宮跡発掘30周年記念特別展「器は語る700年」記念シンポジウム資料　2000年）および講演記録（『斎宮歴史博物館研究紀要』10　2001年）

(4)都城編年については、奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』ⅩⅣ（1993年）のほか、古代の土器研究会編『古代の土器１　都城の土器集成』（1992年）を参照した。

(5)川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　1983年）

(6)例えば、員弁郡北勢町の上惣作遺跡や塚原遺跡がある。角正芳浩『上惣作遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　2001年）、濵邊一機『塚原遺跡』（北勢町教育委員会　2002年）

(7)中世の区分については、伊藤裕偉『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第３分冊　楠ノ木遺跡（三重県埋蔵文化財センター　1991年）

(8)このことに関しては、拙稿「斎宮寮・伊勢道・条里」（『斎宮歴史博物館研究紀要』13　2004年）も参照されたい。

通番遺構名	遺構の性格	次数	調査時遺構名	地区	グリット	時期	斎宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SD 0170	道路側溝	139	SD0170	J9	l・m4	奈良	Ⅰ-3~Ⅱ	
				L9	c・d12	奈良~	Ⅰ-3~Ⅱ	上層は11世紀代
SD 0295	溝	139	SD0295	J9	m・n2	奈良	~Ⅱ－1	遺物は小片のみ
SD 1736	溝	139	SD1736	L9	c・d9	近世以降		
SD 2214	溝	139	SD2214	J9	m・n2	近世		
SD 2215	溝	139	SD2215	J9	m・n2	近世以降		SD2214より新
SD 2216	道路側溝	139	SD2216	J9	m・n3	鎌倉~室町	Ⅲ－2以降	埋土下層に礫を含む
SD 3051	道路側溝	139	SD3051	L9	c12	中世Ⅰ	Ⅲ－2~	土師質土器(ロクロ土師器)、山茶椀4型式
SK 8681	土坑	139	土坑1	J9	m・n2	奈良	Ⅰ－2	土器良好
SD 8682	溝	139	溝2	J9	l・m4	近世以降		
SD 8683	道路側溝	139	溝3	J9	l・m4	中世?		山茶椀4型式~
SD 8684	溝	139	溝4	J9	l・m4・5	近世?		SD8682より古　南伊勢系鍋4b含む
SH 8685	竪穴住居	139	竪穴住居5	L9	c9	奈良	Ⅰ－4	カマド東面　土器良好
SD 8686	溝	139	溝6	L9	c・d11	近世		近世の南伊勢系焙烙あり
SD 8687	溝	139	溝7	L9	c・d11	奈良~平安		黒褐ブロック混入
SE 8688	井戸	139	井戸8	L9	c・d10	平安末期	(中世Ⅰ)	平安末~鎌倉初　山茶椀5型式
SD 8689	溝	139	溝9	J9	m5	奈良~平安		
SD 8690	溝	139	溝10	L9	c・d11・12	近世~		

第Ⅳ－1表　第139次調査区遺構一覧

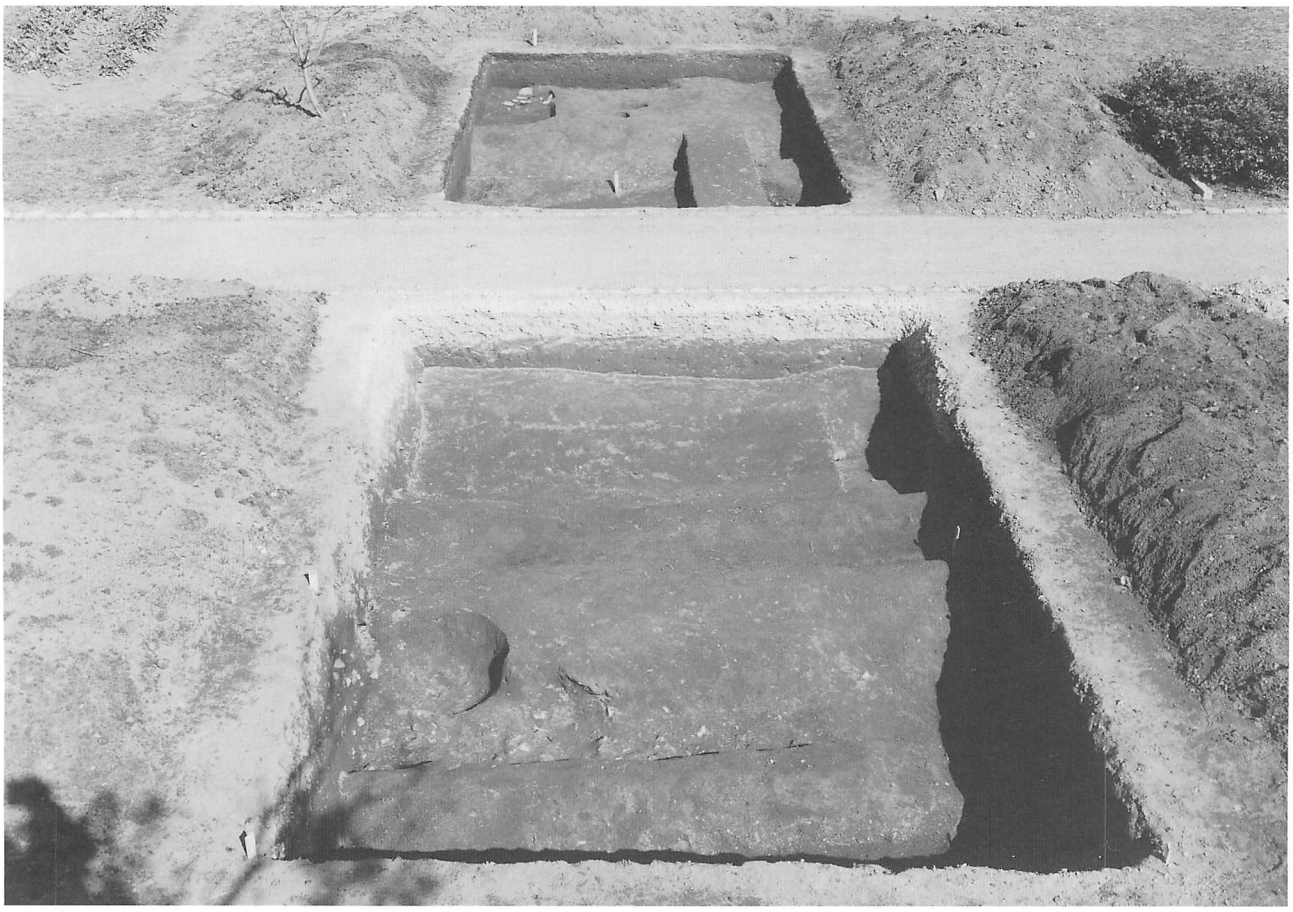
No.	出土遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
1	L9-c9 SH8685	土師器 杯G	口縁 器高	13.2 3.7	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	良	橙 7.5YR7/6	口縁 1/12		003-01
2	L9-c9 SH8685	土師器 高杯 or 皿B	口縁	23.8	外:オサエ・ナデ→高台貼付・ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→暗文(不鮮明)	密	良	橙 5YR6/8・5YR7/6	口縁 11/12	暗文不鮮明脚部は低いと想定	004-02
3	L9-c9 SH8685	土師器 皿A	口縁 器高	17.4 2.5	外:オサエ・ナデ→ケズリ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ→螺旋暗文	密	良	橙 5YR6/8	口縁 9/12	破損後に煤の付く破片あり	004-01
4	L9-c9 SH8685	土師器 皿A	口縁 器高	13.6 2.7	外:オサエ・ナデ→ケズリ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR7/65YR6/8	口縁 2/12	剥離・摩滅顕著	003-03
5	L9-c9 SH8685	土師器 甕A	口縁	16.4	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	粗	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁 12/12	外面のハケメは下方が新 カマド支柱に使用	003-02
6	L9-c9 SH8685	須恵器 皿C	口縁 器高	36.3 3.3	外:回転ナデ→回転ケズリ(丁寧) 内:回転ナデ	密	堅緻	灰白 N8/0	口縁 3/12	美濃須衛	003-04
7	L9-c12 SD0170 上層	瓦器 椀	高台	5.7	外:ナデ→ヨコナデ、高台貼付 内:ナデ→格子目暗文	密	良	外面:灰 N5/0 素地:灰白 N8/0	高台 12/12	大和(伊賀)	002-04
8	L9-c12 SD0170	土師器 皿B	口縁 器高	16.8 4.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内:ナデ→ヨコナデ→斜放射+螺旋暗文	密	良	橙 5YR6/8	口縁 4/12 高台 9/12	内面の螺旋暗文はかすかに見えるのみ	002-01
9	L9-c12 SD0170	土師器 甕A	口縁	23.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	粗	良	橙 7.5YR6/6	口縁 2/12	外面に煤付着	002-02
10	L9-c12 SD0170	土師器 甕A	口縁	21.3	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ヨコナデ	粗	良	黄橙 10YR8/6	口縁 3/12		002-03
11	L9-c12 SD0170	須恵器 壷A	口縁 器高 底	12.9 15.9 11.8	外:回転ナデ→回転ケズリ・耳4方向 内:回転ナデ	密	堅緻	灰 N6/0	口縁 3/12 底 12/12	口縁部に自然釉無し(蓋をした状態で焼成)	001-01
12	J9-m2 SK8681	須恵器 瓶	口縁 器高 高台	20.3 19.3 12.8	外:回転ナデ→回転ケズリ・注口付加 内:回転ナデ	密	堅緻	灰白 2.5Y7/1	口縁 2/12 頸部 12/12 底 12/12	注口部は素地付加の後にまとめて穿孔 頸部は回転成形の後に円盤貼付・穿孔し、それに合わせて頸部を付ける	005-01
13	J9-m2 SK8681	土師器 甕C	口縁 器高	23.6 44.0	外:ハケメ→ヨコナデ 内:ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	粗 小石多	軟	淡黄 2.5Y8/3	口縁 7/12	外面に煤付着　外面のハケメは下方ほど新　内面のケズリ以下は接合痕見えず(型作りか?)	006-01
14	L9-c12 SD3051	土師質土器 台付小皿	高台	6.3	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	良	橙 7.5YR7/6	高台 11/12		002-06
15	L9-c12 SE8688	土師器 小皿	口縁 器高	9.4 1.6	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 6/12		002-05

第Ⅳ－2表　第139次調査区出土遺物観察表

西調査区（J9区）（北から）

西調査区（J9区）（南から）

東調査区（L9区）（北から）



東調査区（L9区）（南から）

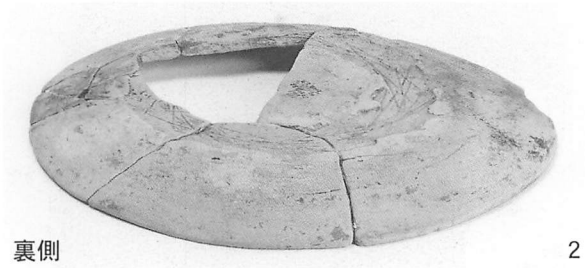
SH8685（南から）

SH8685竈・支柱（土師器甕）（南から）

東調査区SD8687付近（西から）

東調査区北部（南西から）

SK8681（南西から）



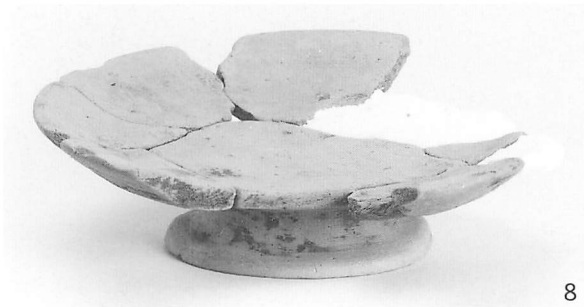
裏側　2

3

5

7

6


8

12

11

13

14

Ⅴ　第７次調査

（古里Ｅ地区）

１　報告の経緯

第７次調査は、1974年に「古里遺跡Ｅ地区」として調査された。調査面積は1,000㎡である。周知のように、斎宮跡解明の端緒となったのが、1970年代に実施された古里地区における一連の調査で、Ｅ地区はその一部である。

第７次の調査成果については昭和49年度に小冊子で公表されている[1]が、遺構図や出土遺物が公表されていなかった。平成14年度には、第137次調査で古里地区近隣を、第139次調査で「奈良古道」関連の調査を実施している。そのため、これらと関連の深い第７次調査区の概要をここで報告することとした。

２　調査方法と層位・遺構の状況

ａ　調査の方法

第７次調査は、４ｍ×４ｍを１グリットとして調査されているため、遺構に伴わない遺物でも、グリット単位での把握ができる。ただし、第７次調査のグリット表示方法は、現行とは異なるため、遺物の照合には注意が必要である（第Ⅴ－１図）。

遺構図は、調査段階では国土座標を用いた測量がされていないが、平成３年に実施した第91次調査は、第７次調査区の一部と重複する状況で調査区を設定している。今回の遺構平面図は、それを援用して座標を合わせた。ただし、第91次調査区と第７次調査区の重なりは少なく、その突き合わせについては、感覚に頼らざるを得なかった。そのため、第Ⅴ－２図に示した座標表示は、近年の調査区平面図よりも精度がかなり落ちるものとして扱う必要があることを明記する。

ｂ　遺構

(1)概略

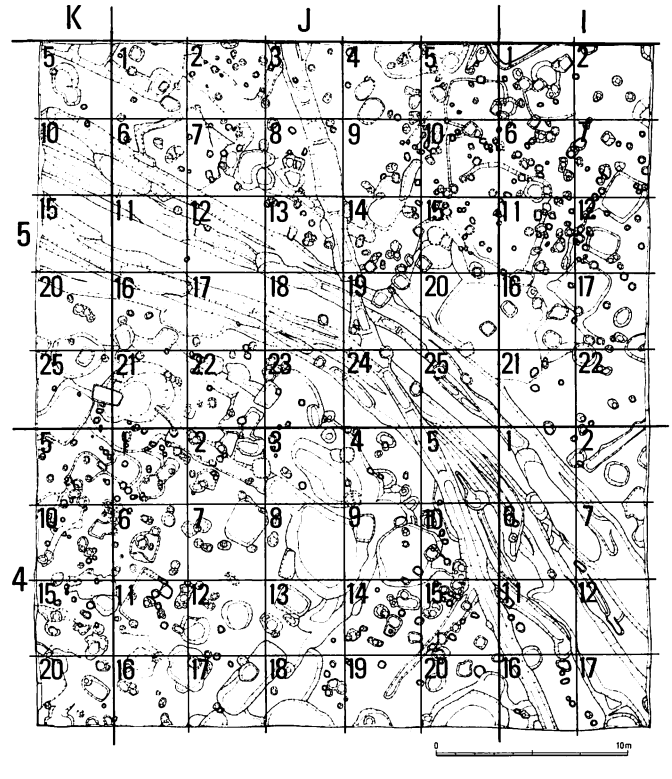
第７次調査区で確認された遺構には、奈良期の竪穴住居・溝・井戸、平安期の溝・掘立柱建物、中世前期の溝・掘立柱建物、中世後期の溝・掘立柱建物・井戸・土壙墓・墓地などがある。調査区が斎宮字中垣内と古里との字堺にあたり、そこには中世の道路遺構が見られる。また、その前身と考えられる奈良～平安期の溝（ＳＤ8736）は、奈良期に設定された伊勢道（通称「奈良古道」）の南部側溝と考えられるものである。

ここでは、30年近く前の記録を基に示すこととなる。そのため、あまり推測を交えてしまうと却って混乱を招く恐れがある。そのため、主立った遺構以外は遺構一覧表でのみ示すに止めた。

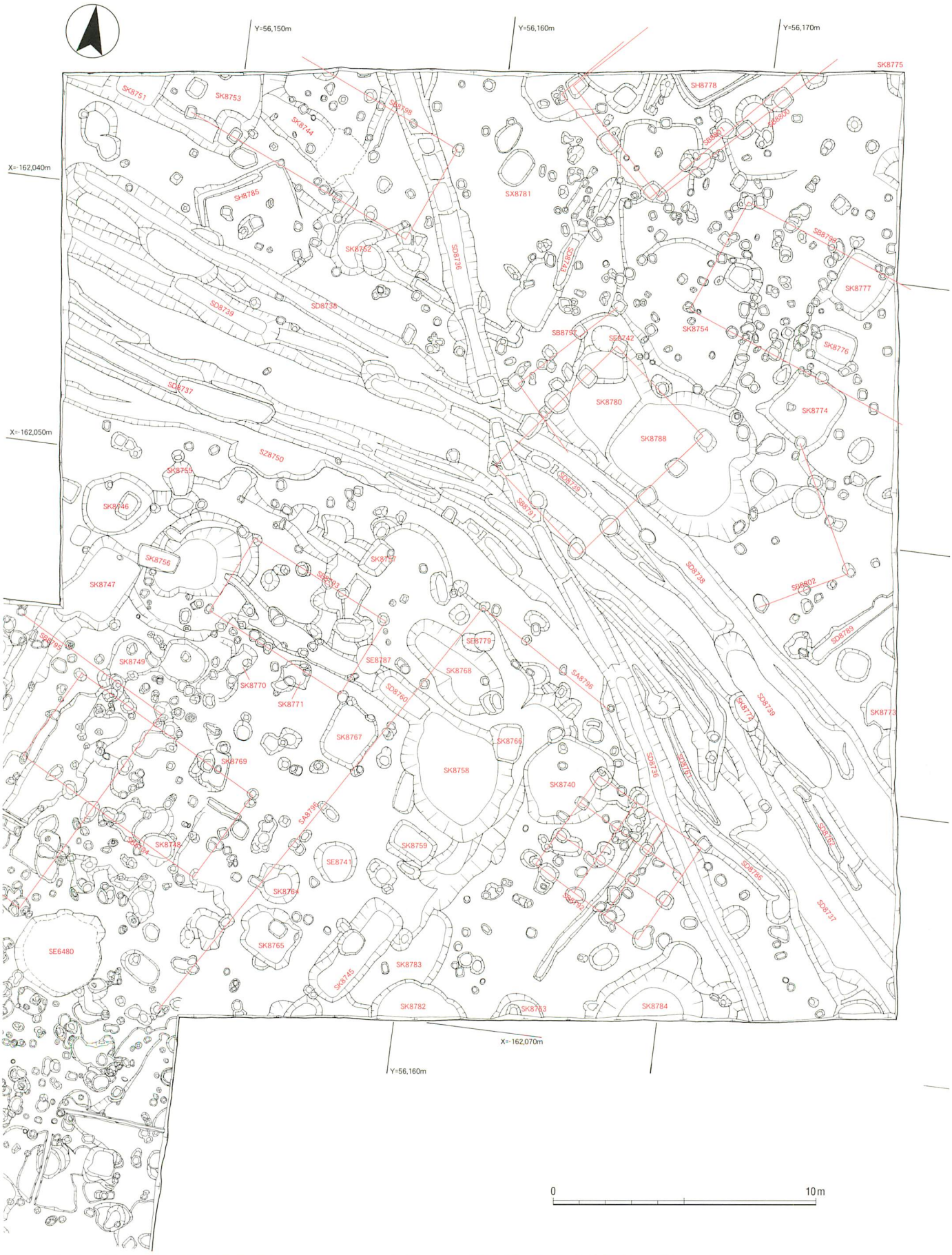
遺構として取り上げたものは、基本的には出土遺物が存在する遺構である。そのため、比較的大規模な遺構であっても、伴出する遺物が明確でない場合は遺構名を付加しなかった。

(2)建物跡

建物跡としては、竪穴住居２棟、掘立柱建物11棟、柱列１条がある。竪穴住居は、遺構の形態からそれと判断したが、出土遺物はほとんど無い。



第Ⅴ－１図　第７次調査区　地区割り図（1：400）



第Ⅴ－２図　第７次調査区　平面図（1：200）　※座標は日本測地系（旧国土座標第Ⅵ系）による

掘立柱建物は、それと判断するためには現地調査時点での観察が極めて重要であるが、今回の場合はそれを望むことができない。したがって、おおよそ次のような状況を満たす場合、柱列や掘立柱建物と認識した。

① 規模のほぼ等しいピットが４基（３間）以上等間隔に並ぶ場合、柱列と認識する。

② ①の状況が長方形ないしは正方形を形成する場合、掘立柱建物と認識する。

③ ①・②の要件には満たないが、同一規模のピットで列・直角を形成しているなど、それに準じると見られるもの。

なお、掘立柱建物や柱列の方位は、比較を容易にするために、東西棟の場合は90°分を加減し、座標北の近似値で示した。

ＳＢ8791 調査区中央部で確認した遺構である。東西２間、南北４間の南北棟側柱建物で、建物方位はN43°Ｅである。溝ＳＤ8736よりも新しい遺構である。柱穴から出土した土器から、斎宮Ｉ－４期以降の建物と考えられる。

ＳＢ8792 調査区南東部で確認した遺構である。東西３間、南北３間の東西棟総柱建物で、建物方位はN29°Ｅである。溝ＳＤ8736と重複するが、両者の先後関係は不明。柱穴から出土した土器には斎宮Ⅱ－３期のものがあるが、周囲には多くのピットが見られるので、それ以前の建物と重複している可能性もある。

ＳＢ8793 調査区中央西部で確認した遺構である。南北側柱列と考えられる３間分が揃っており、東西棟の側柱建物と判断した。建物方位はN25°Ｅである。梁間が明確ではないが、おそらくは２間で、後世の遺構により削平されたと考えられる。ピット内からは中世後期の遺物が出土しているが、重複していたものを認識できずに掘削した可能性もある。

ＳＡ8796 調査区中央南部で確認した柱列である。南北方向に10間分、東側に３間分がある。図上での判断になるが、柱間が一定であること、南北柱筋はそれとほぼ直交する方向に抜き取り痕状の拡がりが見えること、などから柱列とした。南北柱筋の方位はN32°Ｅである。ピット内には中世後期の土器を含むものもあるが、４Ｊ10グリットのピット６からは斎宮Ⅱ－２期に相当する良好な土師器杯が出土していることから、２時期の重複があると考えられる。

ＳＢ8800・8801 調査区北端部で確認した遺構である。２棟が重なっていると考えられ、ＳＢ8800と8801に分割したが、先後関係は分からない。いずれも南北棟の側柱建物と考えられ、建物方位は、ＳＢ8800がN45°Ｅ、ＳＢ8801がN43°Ｅである。いずれの建物も、そのピット内から斎宮Ｉ期頃の土器が出土している。

(3)井戸

第７次調査区からは５基の井戸が確認されている。このうち、ＳＥ6480は奈良時代後半のもので、第91次調査の概要報告段階で概ね報告されている。それ以外の４基はいずれも中世後期と考えられるものである。

(4)墓地・土壙墓

墓関係では、土壙墓が１基確認されている。また、調査区内からは一石五輪塔が出土しているので、中世後期にはこの付近に墓地が形成されていた可能性が高い。

ＳＸ8781 調査区北部で確認した遺構である。長さ約1.5m、幅約1.1mの隅丸長方形の土坑内から、和鏡（亀甲地双雀鏡）や土師器鍋・小皿などが出土している。調査時には木製横櫛の断片と鉄釘が伴っていた。出土土器から、概ね13世紀中葉頃の土壙墓ないしは木棺墓と考えられる。

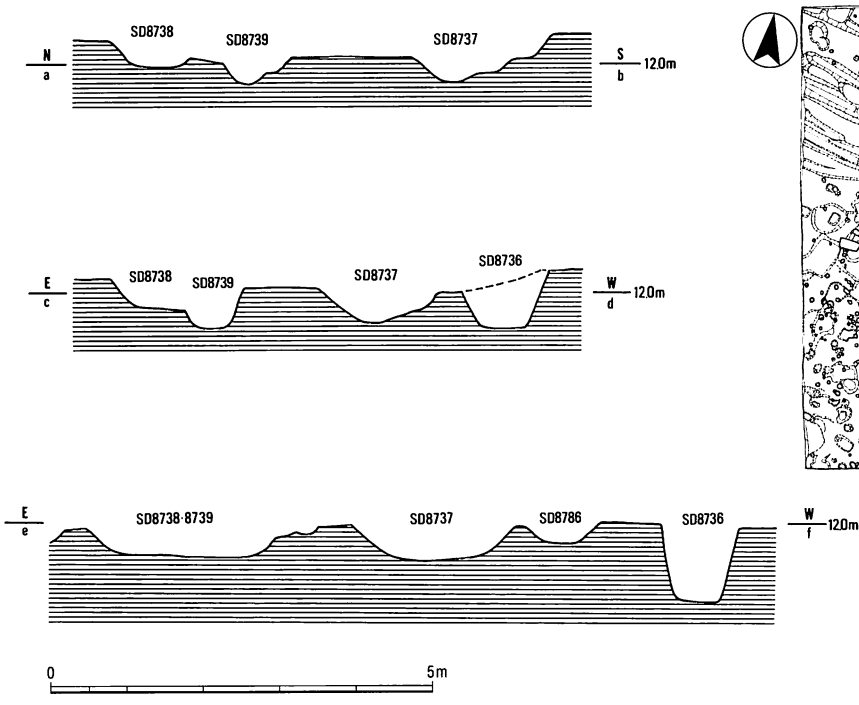
(5)土坑など

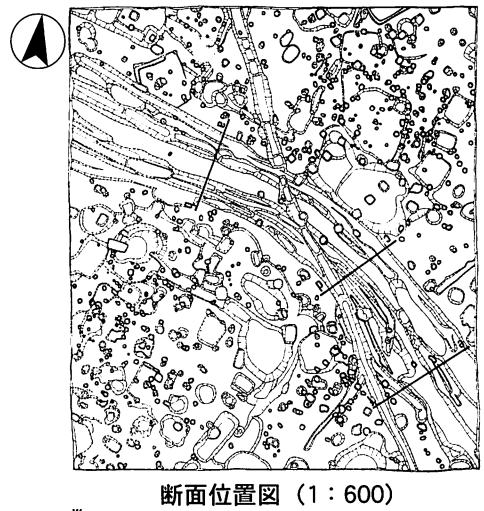
調査区内には数多くの土坑が見られる。この多くは中世後期の遺構と考えられる。

(6)道路側溝・道路遺構

ＳＤ8736 調査区を南北に縦断する幅１m前後の溝である。調査区中央部でやや湾曲するものの、調査範囲内では概ね直線的である。遺構検出面からの深さは、南部で80～100cm、北部で60cm前後で、北ほど浅くなっている。溝底の標高も、南部では10.9～11.2m、北端では11.8mほどである。溝底は部分的に深く掘られている。埋土中からは、奈良～平安前期の遺物が出土している。

ＳＤ8737～8739 調査区南東から北西にかけて湾曲しながら延びる溝である。大字竹川字中垣内と大字斎宮字古里の字堺にあたる。遺構は、溝間が周囲よ





断面位置図（1：600）

第Ｖ－３図　第７次調査区　道路遺構断面図（1：100）

りも20cmほど低くなっており、ここが路面に相当し、外側の溝が道路側溝に相当すると考えられる（第Ｖ－３図）。路面には砂礫が厚く堆積していたようである。道路側溝埋土中からの出土遺物は、ＳＤ8738は鎌倉期、ＳＤ8737・8739は室町・戦国期の土器類が出土している。したがって、この道路側溝は中世前期から後期にかけて断続的に掘削されたものと考えられる。道路面そのものは近代でも使用されているため、上記の土器類が示す時期とは、側溝が機能していた時期や、この道路周辺に集落が存在していた時期を示していると考えられる。

3　出土遺物

第７次調査区からの出土遺物は、整理箱に換算して約76箱である。内訳は大部分が土器類で、五輪塔・石臼・砥石などの石製品、少量の金属製品がある。

遺物実測図は1974～1975年頃に多くが作成されていた。今回の再整理にあたり、いくつかの図面を追加するとともに、既成図面の手直しを行った。なお、ＳＥ6480出土土器は平成３年度に調査した第91次調査で報告している[2]ので、今回は除外する。

a　古代の土器類

古代の土器に関する分類と年代観については、斎宮分類・編年[3]を基礎に、平城・長岡・平安京における編年（以下、「都城編年」と呼称）[4] を参照し、部分的に観察所見を交えて追加・変更している[5]。

ＳＤ8736下層出土土器（１～９）　調査段階で、「下層」あるいは「最下層」と記載されていた物を、ここではＳＤ8736下層遺物として報告する。土師器・須恵器がある。実測図掲載遺物以外にも土師器甕類が多く、この遺構出土土器の特徴といえる。

１は土師器杯で、都城分類杯Ｃに相当する。体部外面全体がヘラケズリで調整を終えている（外面Ｃ手法）。形態的には平城Ⅵすなわち長岡京期のものに近い。ただし、１以外の土器との年代差が大きいので、この土器は後述の上層が一部掘り残されていた中に含まれていた可能性も考慮しなければならない。２・３は須恵器で、２は杯Ｂ蓋、３は杯Ａである。４～７は土師器甕。４は小形のもので、口縁中央部の器壁が肉厚となるもの。６・７は大形の丸底甕である。４・６・７はいずれも体部内面下半をヘラケズリ、体部外面下半をハケメとするもので、斎宮ではＩ－２～３段階によく見られる手法である。５は長胴甕であるが、体部が直胴で頸部のあまり締まらない形態となっている。斎宮跡では珍しい形態といえるが、調整手法は通常のものと基本的に共通する。８・９は甑で、同一個体の可能性が高い。内外面ともに体部上半をハケメ、下半をヘラケズリし

ている。９の底部は一文字にケズリ残す。これらの土器類は、１を除き、斎宮編年では概ねＩ－２ないしは３(古)に相当する。１は都城編年の長岡京期でよく見られる手法である。

ＳＤ8736上層出土土器(10～34)　調査段階で、「上層」と記載されていた物を、ここではＳＤ8736上層遺物として報告する。土師器・須恵器があり、とくに土師器杯・皿類の出土が多い。

10～17は土師器杯Ｇであるが、古墳時代以来の系統上にあるもの(杯ＧＩ；10～12)と、律令期の杯Ａないしは杯Ｃの形態的影響をやや受けたと考えられるもの(杯ＧⅡ１；13～15)がある。いずれも、外面底部をオサエ・ナデ、口縁部にヨコナデを施すものである。16・17は、手法的には杯Ｇ２に拠るもので、形態的には杯Ａの影響を強く受けたものと考えられる（杯ＧⅡ２)。18～21は杯Ｃないしは杯Ａと融合した杯Ｃである。20・21は外面調整Ｃ手法で、ヨコナデ後にヘラケズリが施されている。

22～24は土師器杯Ａ。平安期のものである。外反する口縁部で、口縁端部は断面方頭状ないしは内側に若干突出する形態である。25・26は土師器杯Ｂ。いずれも剥落が著しいが、26は外面にヘラミガキが遺存する。27～30は土師器皿Ａ。30は内面に３単位の渦巻状暗文を三角形状に配置している。31は土師器で高杯脚部。外面をヘラケズリにより面取りする。32・33は須恵器杯Ｂ蓋と杯Ｂ。34は土師器平底鉢で、平安期のものである。35は土師器盤Ａ。口縁部内面には素地接合部にヨコナデを施すことにより発生した凹線状の段がある。36は須恵器長頸壺の体部。37は須恵器壷である。

上層土器群は、比較的時期幅が広い。10～21・25～30・35の遺物は、都城編年の長岡京期ないしはその直前に比定でき、斎宮Ｉ－３～４にあたる。22～24・34は、斎宮編年ではⅡ－２～３に相当する。

ＳＤ8736出土土器(10～34)　調査段階で、「上層・下層」の記載がされていない物をここにまとめた。

38～40は土師器杯ＧＩで、41は杯ＧⅡ２。38の口縁部には油煙痕が見られる。42～45は土師器杯Ｃないしはその影響を受けたもの。42は外面Ｃ手法、内面には螺旋状暗文を上下３段に施す。46は杯Ａ。47も杯Ａで、これは平安期のもの。48～51は土師器皿Ａで、51は平安期のものである。52・53は土師器高杯の脚部である。54は土師質で、土師器の形態をなす須恵器と考えられる。

55～60は土師器甕。口縁端部の外側に面を持つものを中心とする。60は口縁端部が内傾し、他よりも新しい要素を持つ。59は体部が開かず、底が平底となるもので、鉢に近い。61は土師器鍋、62は土師器把手付鍋である。63は須恵器壷で、口縁部には明確に開かない面とヨコナデによる凹線がめぐる。

これらの土器群は、概ね長岡宮期以前の特徴を備えているが、47・51・60などは、斎宮Ⅱ－２に相当するものである。

ＳＫ8740出土土器(64～78)　64は杯ＧＩ。口縁部がやや肥厚し、丸く納められる。65～68は杯Ａ１。いずれもヨコナデにより口縁部が外反し、口縁端部を摘み上げるもので、手法的にも共通する。69・70も杯Ａ１だが、杯底部が丸く、65～67よりも新しい要素を持つ。71は杯Ａ２。72は皿Ａ。73は高杯の杯部と考えられる。74は皿Ａ１。75～77は土師器甕。口縁部がわずかに内弯し、口縁端部に内傾する面をもつ。75の体部外面下半には、横方向の帯状ヘラケズリが見られる。77は長胴形をなすもの。78は須恵器皿Ａで、美濃須衛産と考えられる。

これらの土器は、概ね斎宮Ⅱ－１(新)に相当するが、69～71はⅡ－２に相当する可能性が高い。なお、65・72・73には同一のヘラ記号が見られる。

ＳＫ8782出土土器(79～87)　79～84は土師器。79は杯ＧⅡ１。底面以上にヨコナデがある。80・81は杯Ａ、82はやや大形の杯Ａである。83は杯Ｃで、外面にヘラミガキが見られる。84は皿Ａ。

85～87は須恵器。85は杯Ｂ蓋、86は皿Ｂ、87は深手の杯Ｂで、いずれも美濃須衛産と考えられる。

これらの土器は、概ね斎宮Ⅱ－１に相当する。なお、79・80・82～84には、ＳＫ8740と同様のヘラ記号が見られる。

ＳＫ8783出土土器(88～90)　図示したのは、いずれも土師器である。88は杯ＧⅡ。79は高杯と考えられる。90は甕。88には、ＳＫ8740・8782と同様のヘラ記号が見られる。時期的には斎宮Ⅱ－１に相当すると考えられる。

ＳＫ8758出土土器(91・92)　91は土師器杯ＧＩ、

92は須恵器杯Ａである。斎宮Ⅱ－１前後であろう。

ＳＫ8775出土土器(93)　土師器杯ＧⅡ１を図示した。斎宮Ⅰ後半～Ⅱ前半頃のものであろう。

ＳＫ8777出土土器(94)　須恵器長頸壺である。斎宮Ⅰ後半頃のものであろう。

ＳＫ8768出土土器(95)　土師器杯Ａである。斎宮Ⅱ－４頃のものであろう。

ＳＡ8796出土土器(96)　96は、４Ｊ10グリットのピット６から出土した。土師器杯Ａ１である。口縁部が外反するもので、斎宮Ⅱ－２頃のものであろう。

ＳＢ8792出土土器(97)　97は、４Ｊ14グリットのピット１から出土した。土師器で、杯Ｂの高台が欠如したような形態である。斎宮分類では「椀Ａ」としているが、系譜上は杯Ａ２にあると考えられるので、ここでは杯Ａ２とする。内面に粗雑な斜放射暗文を持つ。斎宮Ⅱ－３頃のものであろう。

その他のピット出土土器(98～101)　建物としてはまとまらなかったピット出土の土器である。98は４Ｊ10グリットｐｉｔ２出土の器杯ＧⅡで、斎宮Ⅰ期のものと考えられる。99は４Ｊ７グリットｐｉｔ３出土の土師器杯Ａ２で、斎宮Ⅱ－３頃のものであろう。100は４Ｊ３グリットｐｉｔ１出土の土師器皿Ａで、外面にはヘラケズリが見られる。斎宮Ⅰ－３頃のものであろう。101は４Ｊ13グリットｐｉｔ２出土の緑釉陶器椀で、洛北産と考えられるものである。

遺構外出土土器(102～136)　遺構に伴わない遺物をここに集めた。102～117は土師器の椀・杯・皿類で、斎宮Ⅰ－３～Ⅱ－２頃までのものが見られる。111は大形の杯Ａで、斎宮跡では出土例が少ない。形態的には飛鳥Ⅲ頃にまで遡るものかも知れない。120～122は須恵器の蓋で、斎宮ではⅠ－１、都城では、飛鳥Ⅳ～平城Ⅰ頃に併行するものであろう。

124は緑釉陶器で、猿投産と考えられる。125は陶器椀で、斎宮Ⅲ－２に相当するもの。第133次調査のＳＥ8391から多くの出土がある。126は土師器の香炉ないしは風炉と考えられるもの。２箇所の方形透かし孔が穿たれている。

ｂ　中世の土器類

ここで言う中世とは、斎宮Ⅲ－２期より後の段階に相当する。中世の時期区分にあたっては、これまでに試案を示している４期区分[6]とする。

ＳＤ8738出土土器（137～140）　137は土師器皿。口縁部外側に面を持つもの。138～140は東海系無釉陶器の椀（以下、「山茶椀」を「陶器椀」、「山皿」を「陶器小皿」と呼称）。138・139は渥美産、140は知多・猿投産のもである。藤澤良祐氏による山茶椀編年（以下、「藤澤山茶椀編年」と呼称）[7]の第４～６型式にあたる。

以上の土器類は、中世Ⅰｂ～Ⅱａ期に相当する。

ＳＤ8739出土土器(141～153)　141～143は土師器皿類。南伊勢系[8]のものである。144は常滑産陶器壷で、肩部にヘラ記号がある。145は知多半島産と考えられる陶器練鉢で、これは混入の可能性が高い。

146～153は南伊勢系の煮沸具。146は茶釜形。内傾する口縁部で、底部は平底をなす。147は鍔部の短い羽釜（以下、「短鍔羽釜」と呼称）。口縁部が方頭状になる。148～152は鍋で、148～150は小形の鍋Ａ、151は中形で鍋Ｂ１、152は大形で鍋Ｂ２である。南伊勢系の鍋としては、第３段階ａ～ｂのものが見られる。153は大形の羽釜である。

これらは、概ね中世Ⅲａ期を中心としている。

ＳＤ8737出土土器(154～163)　154は渥美産の陶器椀。「上」らしき墨書が底部に見られる。他の土器類との関係から、この個体は混入と考えられる。155は土師器でミニチュア鍋と考えられる。中世Ⅱ～Ⅲ期に稀に見られる。156・157は瀬戸産陶器で、緑釉小皿。156は褐色の釉、157は淡緑色の釉が口縁部付近に施される。いずれも古瀬戸後Ⅳ期新[9]に相当すると考えられる。158は灰釉陶器の瓶で、猿投産と考えられる。斎宮Ⅲ期ないしは中世Ⅰ期に相当するもので、混入と考えられる。

159は土師器の椀。外面にハケメを持つ粗製の椀で、南伊勢系とは別系統の土器。旧多気郡域で集中的に見られるが、どの遺跡からも出土量はそれほど多くないものである。160は南伊勢系の椀と考えられるもの。鍋では第４段階併行期のものと考えられるが、類例が無い。161～163は南伊勢系の煮沸具。161・162はいずれも鍋Ｂ１で、161は第３段階ａ、162は第４段階ｂにあたる。163は羽釜で、中世Ⅲ期に相当する。

以上の土器群は、概ね中世Ⅲｂ～Ⅳａ期に相当す

るものである。

ＳＤ8737南部一括出土土器(164～173)　ＳＤ8737の調査区南部から出土したもので、「４Ｉ11一括」と注記されている一群である。

164・165は南伊勢系の土師器皿で、Ｃ系統の小皿である。166～173は同じく南伊勢系の煮沸具。166は茶釜。167は体部がやや膨らむ鍋で、この時期のものとしては珍しい。雲出島貫遺跡（津市）に類例がある[10]。168～172は、体部が半球形を呈する鍋Ｃ。168は体部中央屈曲部付近にまでヘラケズリの及ぶもの。172は口縁部径が大きいもので、鍋Ｃとしては珍しい。173は鍋Ｂ２で、第４段階ｄに相当するが、焙烙形に近くなっている。

これらは、中世Ⅳｃ期に相当する一群である。

ＳＫ8745出土土器(174)　174は灰釉陶器椀で、斎宮Ⅲ－２～中世Ｉａ期頃のもの。出土遺物には中世Ⅳ期のものが多く、この資料は混入と考えられる。

ＳＫ8757出土土器(175)　染付椀を１点図示した。中国明代のもので、内面見込みに菊花文？、体部外面には草の文様が見える。高台畳付部はのみ無釉で、他は前面に施釉されている。染付は暗緑色を呈する。

ＳＫ8758出土土器(176)　南伊勢系の短鍔羽釜である。口縁部は内面にわずかに折り返す。素地粘土の状況から、南伊勢系鍋第３段階ｂ（中世Ⅲｂ期）に併行するものと考えられる。

ＳＫ8770出土土器(177)　常滑産練鉢である。赤羽一郎・中野晴久氏による常滑焼編年[11]の10型式に相当し、伊勢では中世Ⅳａ期によく見られる。

ＳＫ8780出土土器(178・179)　178は土師器で茶釜の蓋。南伊勢系のものである。179は青磁皿。内面には菊花文？がスタンプ押印で表現されている。中世Ⅳｃ期頃のものであろう。

ＳＫ8767出土土器(180・181)　180は瀬戸美濃産陶器で擂鉢の口縁部。大窯２後半頃[12]のもので、中世Ⅳｃ期頃にあたる。181は古瀬戸後Ⅳ期古に相当する尊式花瓶。

ＳＸ8781出土土器(182)　南伊勢系Ａ系統の土師器小皿である。中世Ⅱｂ期のもの。

ＳＥ8779出土土器(183)　南伊勢系の土師器椀。中世Ⅳｂ～ｃ期頃に見られるものである。

ＳＫ8777出土土器(184～186)　184は南伊勢系Ｂ系統の土師器小皿[13]。185は瀬戸美濃産陶器の稜皿で、大窯２後半のもの。全面に褐色の施釉が見られる。186は南伊勢系の土師器茶釜である。全体として、中世Ⅳｃ期に相当する。

ＳＫ8776出土土器(187)　瀬戸美濃産陶器の壷である。大窯１～２期頃のものであろう。

ＳＫ8784出土土器(188)　瀬戸美濃産陶器の擂鉢で、大窯２前半期のものである。

ＳＥ8741出土土器(189・190)　189は土師器の羽釜。小片のため、口径および傾きに不安が残るが、概ねこの状態と考えた。鍔部が短く、尾張地域で言われる「鍔付鍋」に類似したする。素地の状況は南伊勢系と見てよい。類例が今のところ無い。190は南伊勢系の鍋で、第４段階ｄに相当する。概ね中世Ⅳｂ期と考えられる。

ピット出土土器(191～196)　それぞれ別のピットから出土したもの。191は知多・猿投産の陶器椀で、藤澤山茶椀編年の第６型式にあたる。192は南伊勢系Ｂ系統の土師器小皿で、中世Ⅳｂ～ｃ期にあたる。193は南伊勢系の把手付丸鍋で、把手と垂直の位置関係となる口縁部に片口が付く。中世Ⅳｂ期頃のものである。194は瀬戸美濃産陶器の天目茶椀で、大窯２後半～３前半のもの。195も瀬戸美濃産陶器の丸椀で、外面には青磁椀模倣の蓮弁が表現されている。大窯１期のもの。196は南伊勢系の鍋Ｃで、中世Ⅳａ期のものであろう。

遺構外出土土器(197～221)　遺構外から出土したもののうち、主立ったものをここに図示した。

197～202は陶器椀類。藤澤山茶椀編年の第５・６型式が中心である。この他に、第７型式になるものも若干存在する。203は南伊勢系の土師器鍋で、第１段階ａにあたる。なお、図示していないが、南伊勢系の鍋は第２段階のものも少なからず認められる。

204は磁器小皿で染付。中国明代のもので、高台部分はいわゆる碁笥底である。高台畳付部分の釉は掻き取られている。内面には羯磨文、外面には牡丹唐草文が見られる。概ね15世紀後半以降に位置づけられる。205～207は瀬戸美濃産陶器。205は稜皿で、大窯２前半に相当する。206は水滴で、大窯１期前後か。207は天目茶椀で、大窯１後半頃のものであ

ろう。

208～221は南伊勢系の土師器類。中世Ⅳｂ期を中心としたものである。208はＣ系統小皿。209は小形の椀で、内面にはハケメが残る。210～213は茶釜の蓋、214は茶釜である。215は把手付丸鍋で、口縁部が内側に強く折り返されている。このような形態は類例が少ない。216は器種不明で、内側に焼成前の円孔を数個穿っているようなので、蒸器の底板のようにして使うものかも知れない。217～219は鍋で、217は小形（鍋Ａ）、218は鍋Ｃ、219は鍋Ｂ１にあたる。220は短鍔羽釜で、素地の状況から、鍋第４段階に併行するものと考えられる。221は壷で、生産地と目される旧有尓郷近隣で集中的に見られるものである。

ｃ　その他の遺物

埴輪（222～224）　遺構に伴わないが、埴輪が数点出土している。222・223は円筒埴輪。222は、タテハケの後に、継続するＢ種ヨコハケを施す。細片のため、どの程度の工具幅で突帯間を充填しているのかは不明である。223は基底部で、外面はタテハケのみ、内面はナデ上げで調整している。

224は家形埴輪の隅部と考えられる破片。床相当部分に突帯を巡らせている。なお、形象埴輪は、ここに図示したもの以外にも、家形埴輪かと思われる破片が見られる。

これらの埴輪は、近隣に存在する塚山古墳群に用いられていたものと考えられるが、具体的にどの古墳に相当するのかまでは分からない。

砥石（225）　ＳＤ8736から出土した泥岩製の仕上砥である。木口部分に原材（母岩）からの切り出し痕が残る。研磨面は、木口を除く４面である。

石臼（226）　直径約28cmの、粉挽き臼の上臼である。臼面は六分画で、「切線主溝型」にあたる[14]。芯棒孔が貫通しているのは、上臼の厚みが通常よりも薄いことから、かなり使い込まれたため、芯棒孔も貫通させざるを得なかったものと考えられる。原材は、緑色の火成岩である。

五輪塔（227・228）　調査区内北部を中心に、五輪塔が数点確認されている。第７次調査区での出土部位とその個数を第Ｖ－１表にまとめた。

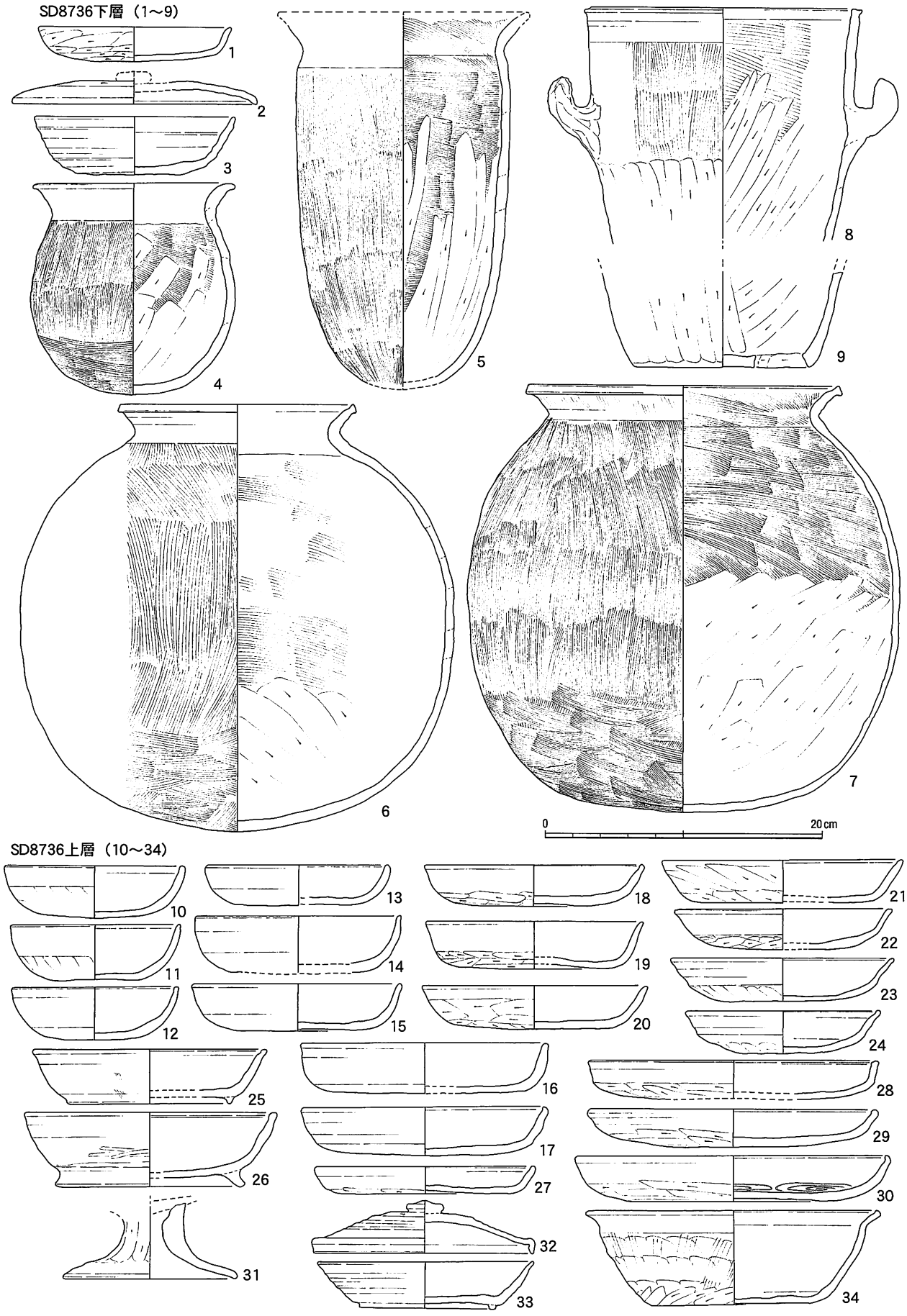
図示した２点を含め、確認出来たのは、全て一石五輪塔である。227は空風輪の残欠で、比較的本来の姿を止めている。228はほぼ完全な一石五輪塔であるが、空風輪が異様に大きさと比べて火輪が小さく、かなり抽象的で省略化された感じである。228の火輪下面が少し反り気味であることから、15世紀末～16世紀前半頃のものと考えられる。

五輪塔は、図示したものを含め、全て脆弱な砂岩製である。原材の質は、近隣では一志郡一志町井関で産出する井関石に近い。ただし、このような脆弱な砂岩は、地質的には中央構造線の北部一帯で産出されるとされており、生産地の限定は難しい。

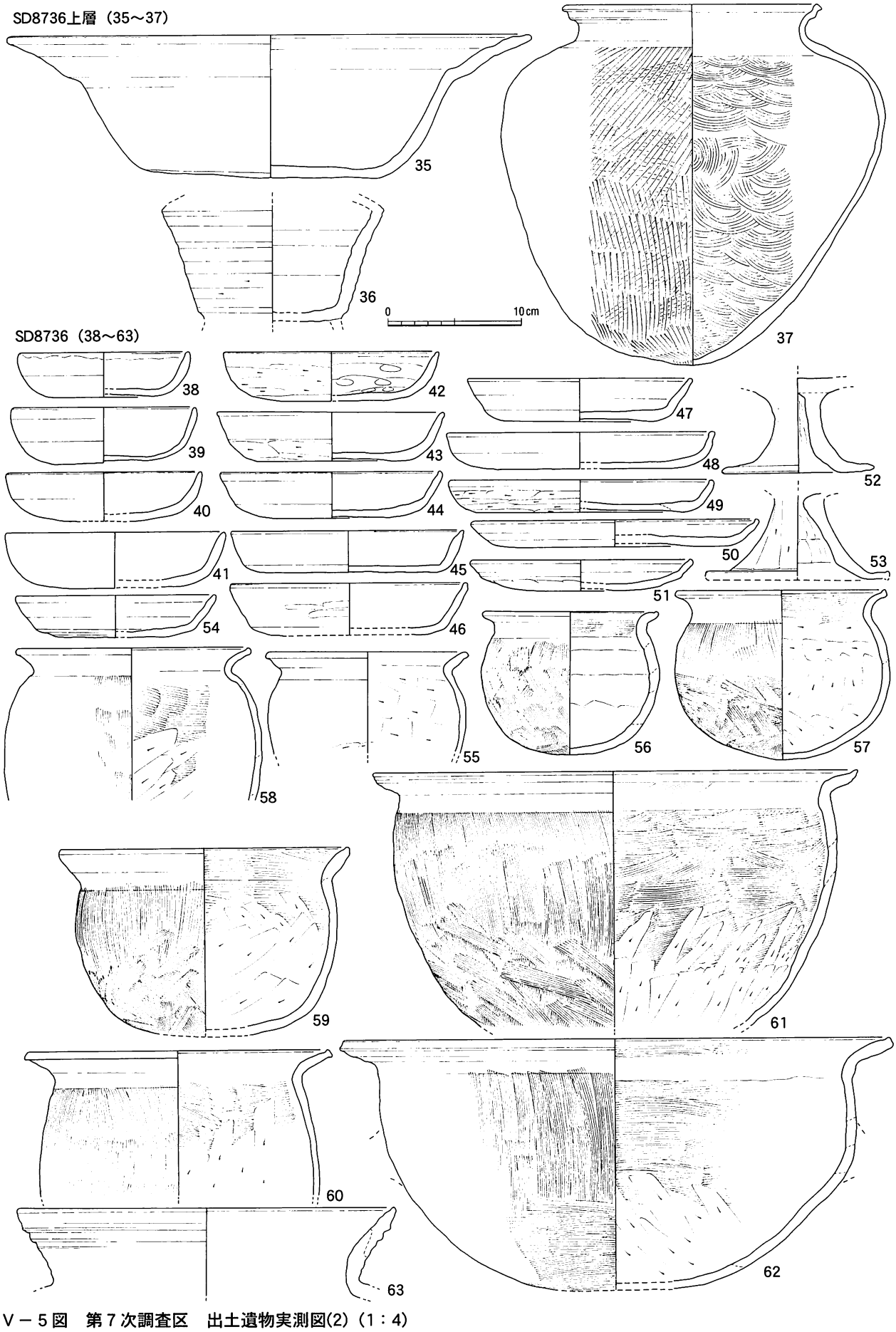
和鏡(229)　土壙墓ＳＸ8781から出土した。直径11.1cmの亀甲地双雀鏡である。縁は直角式の中縁で、高さ0.75cmである。外面の中央がやや膨らむ。界圏は中線単圏であるが、界圏を挟んだ内外に細い圏線がめぐり、その間は界圏に直交する細かな直線で埋めている。紐座は菊座の中隆紐である。亀甲文をあしらった地模様で、紐座の下方やや右寄りに二羽の雀が表現されている。鎌倉時代頃のものと考えられ、共伴する土器（第Ｖ－10図182）も中世Ⅱｂ期に相当するため、時期的にも一致する[15]。

部位	個数	備考
空	7	
空風	4	第Ｖ-11図　227
風	3	
火	4	
火水	6	
水	1	
水地	1	
火水地	3	
空風火水地	1	第Ｖ-11図　228
残片	46	
点数	76	

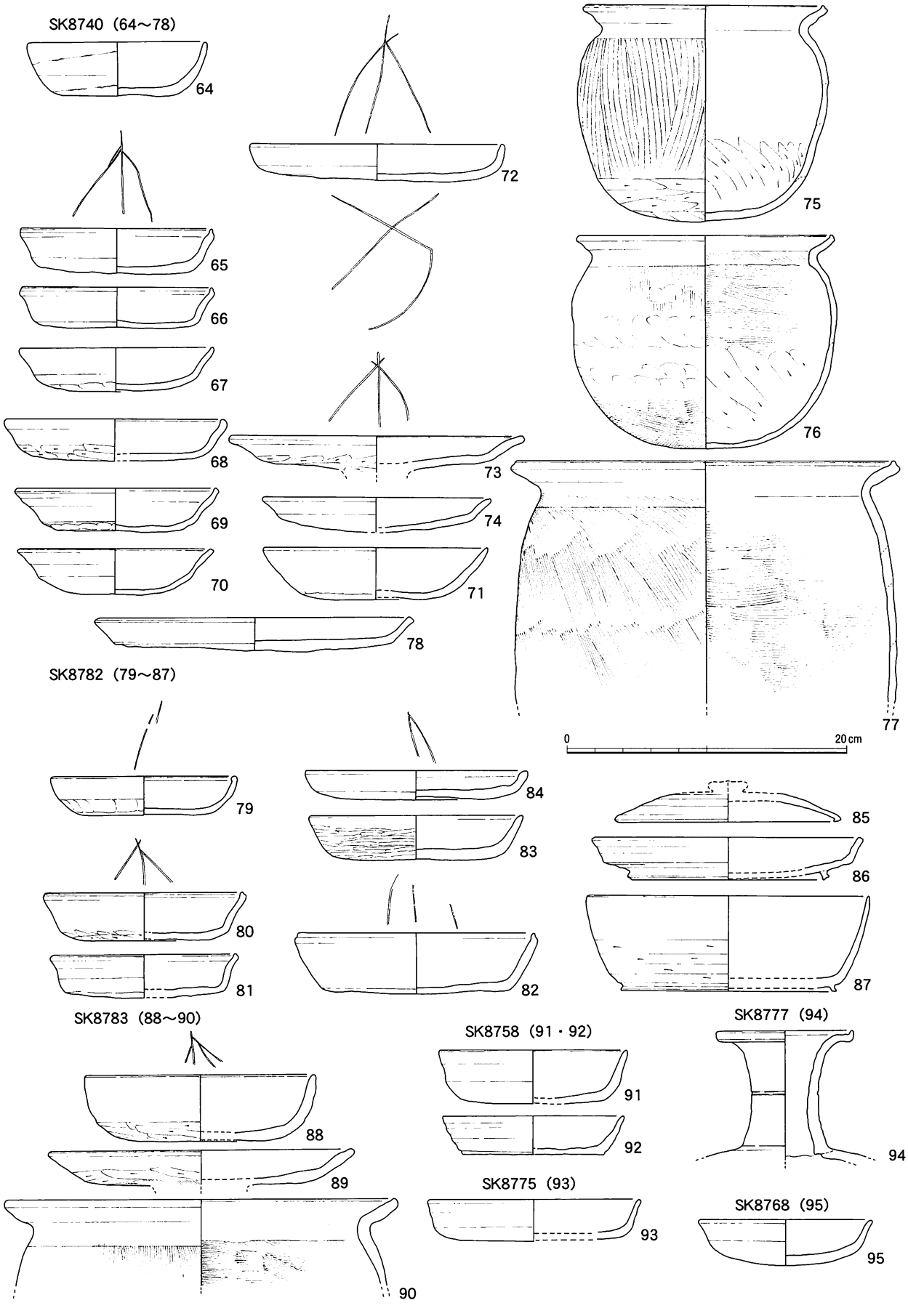
第Ｖ－１表　第７次調査区出土五輪塔一覧



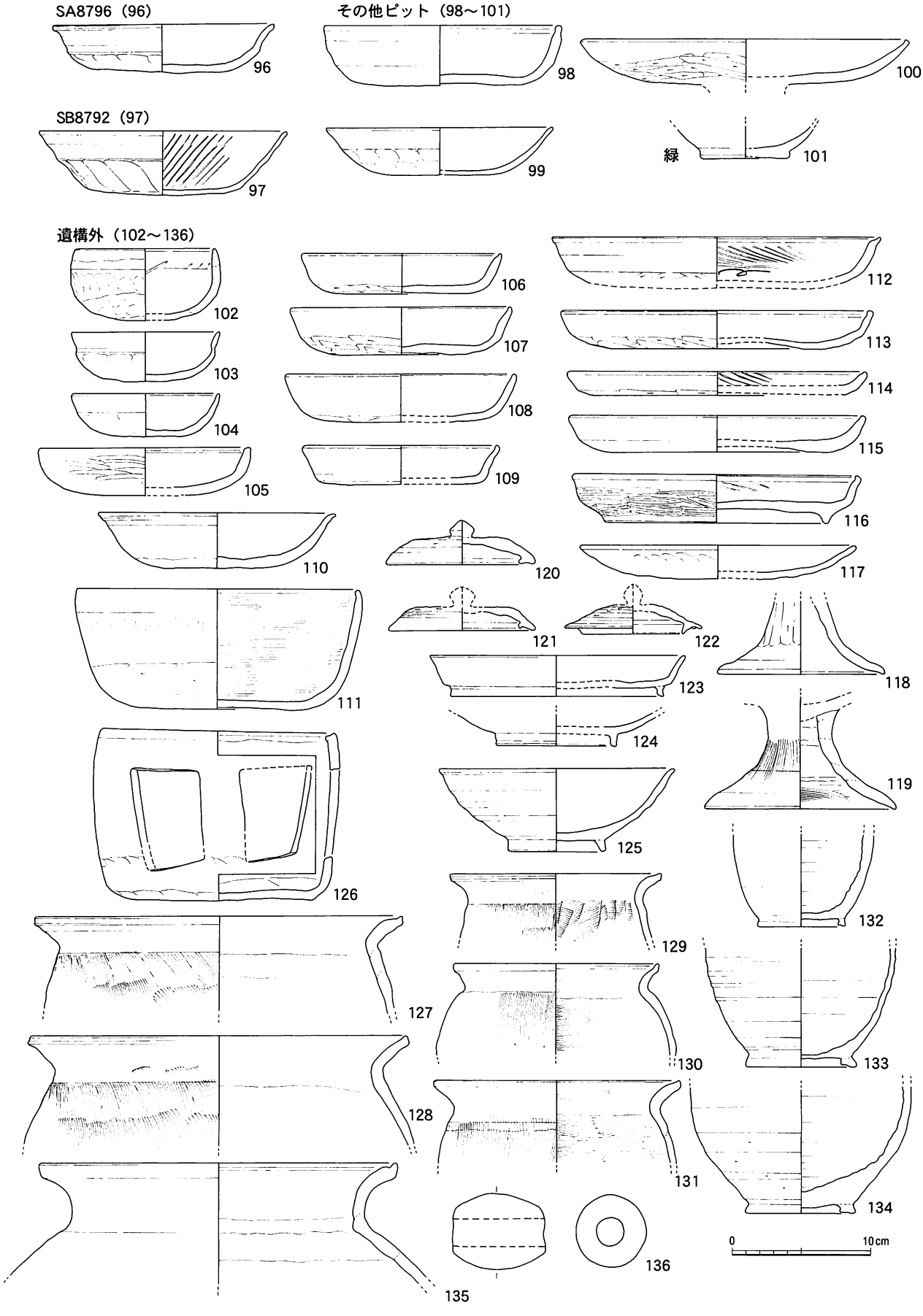
第Ⅴ－４図　第７次調査区　出土遺物実測図(1)（1：4）



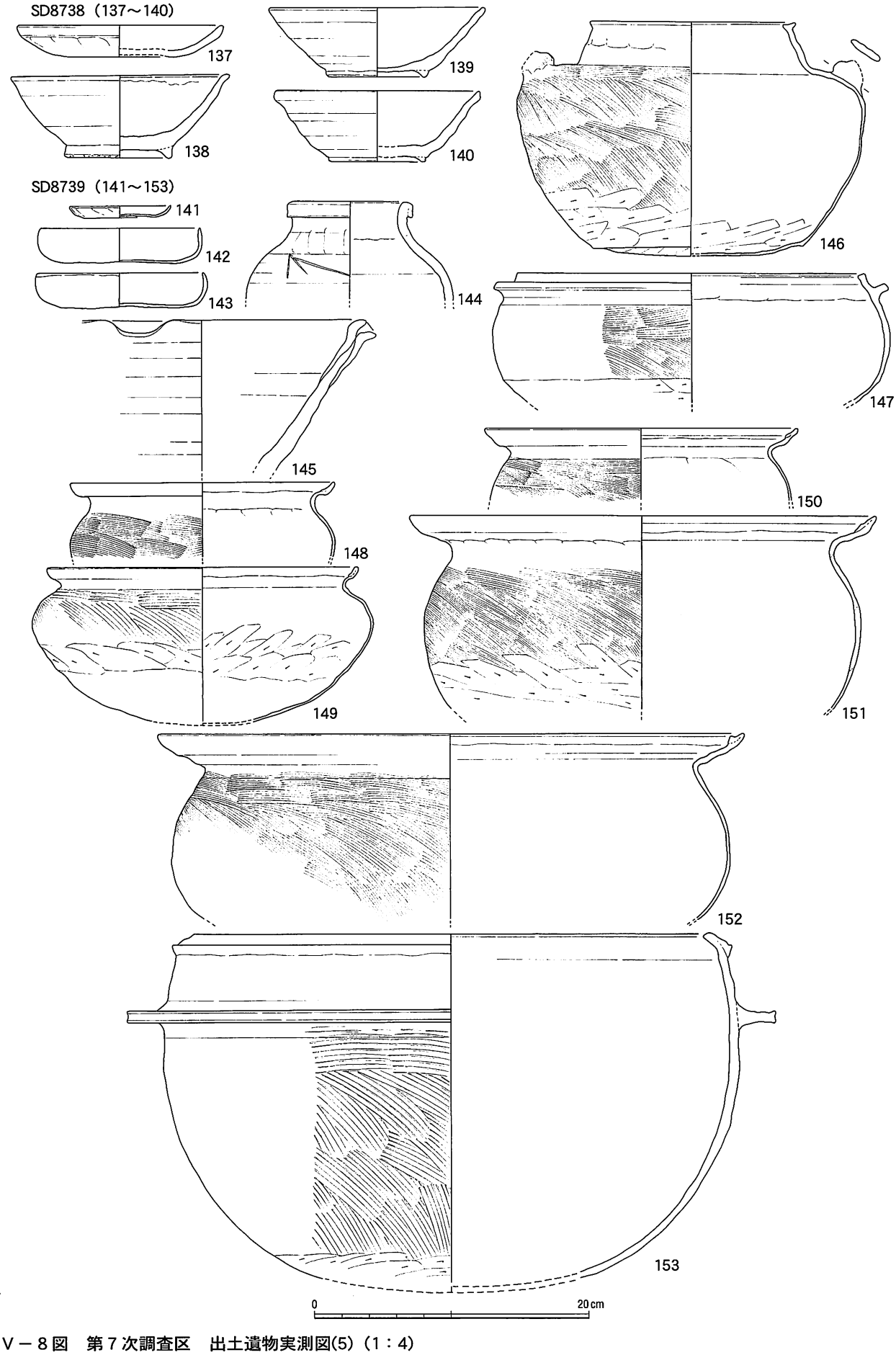
第Ⅴ－５図　第７次調査区　出土遺物実測図(2)（1：4）



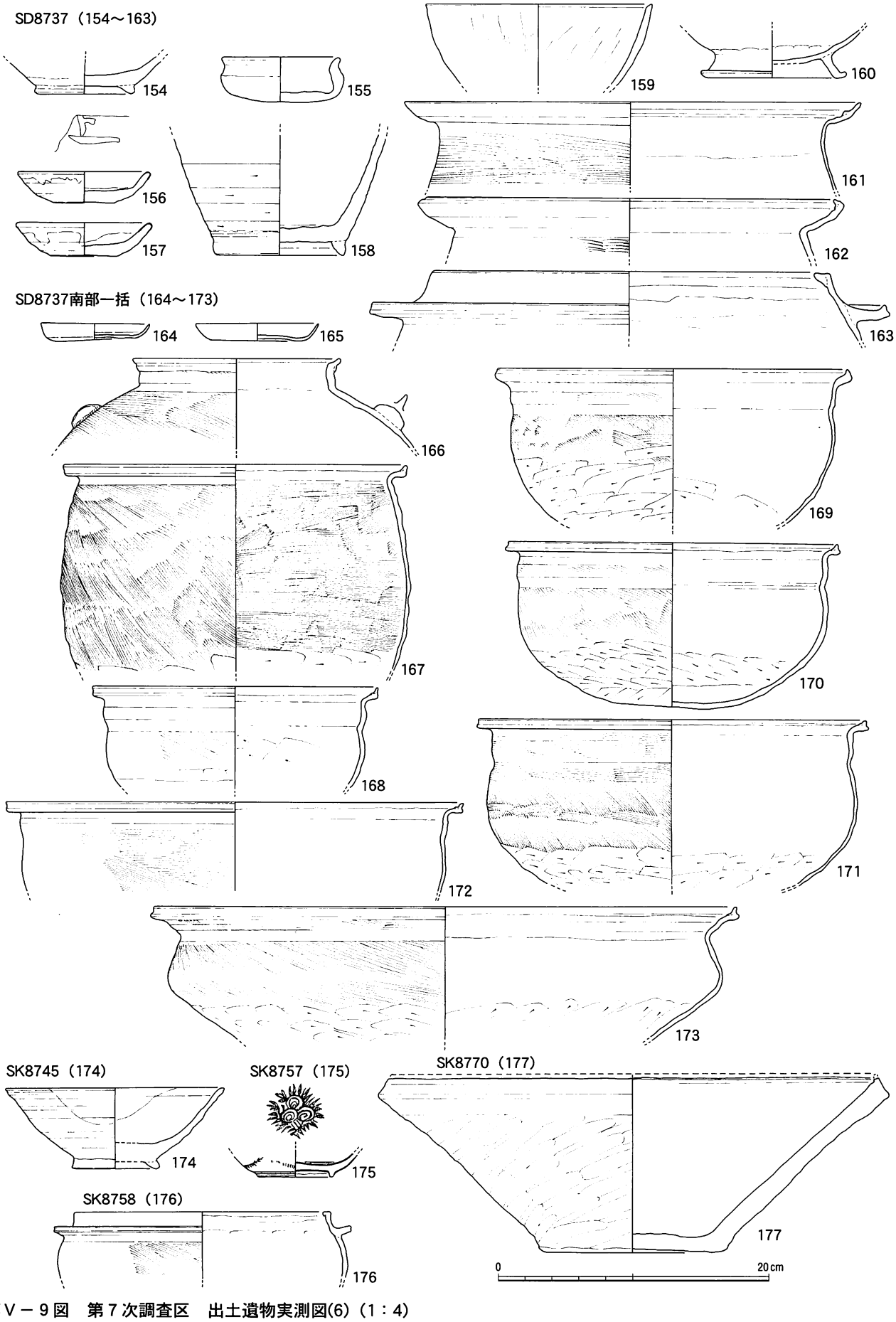
第Ⅴ－６図　第７次調査区　出土遺物実測図(3)（1：4）



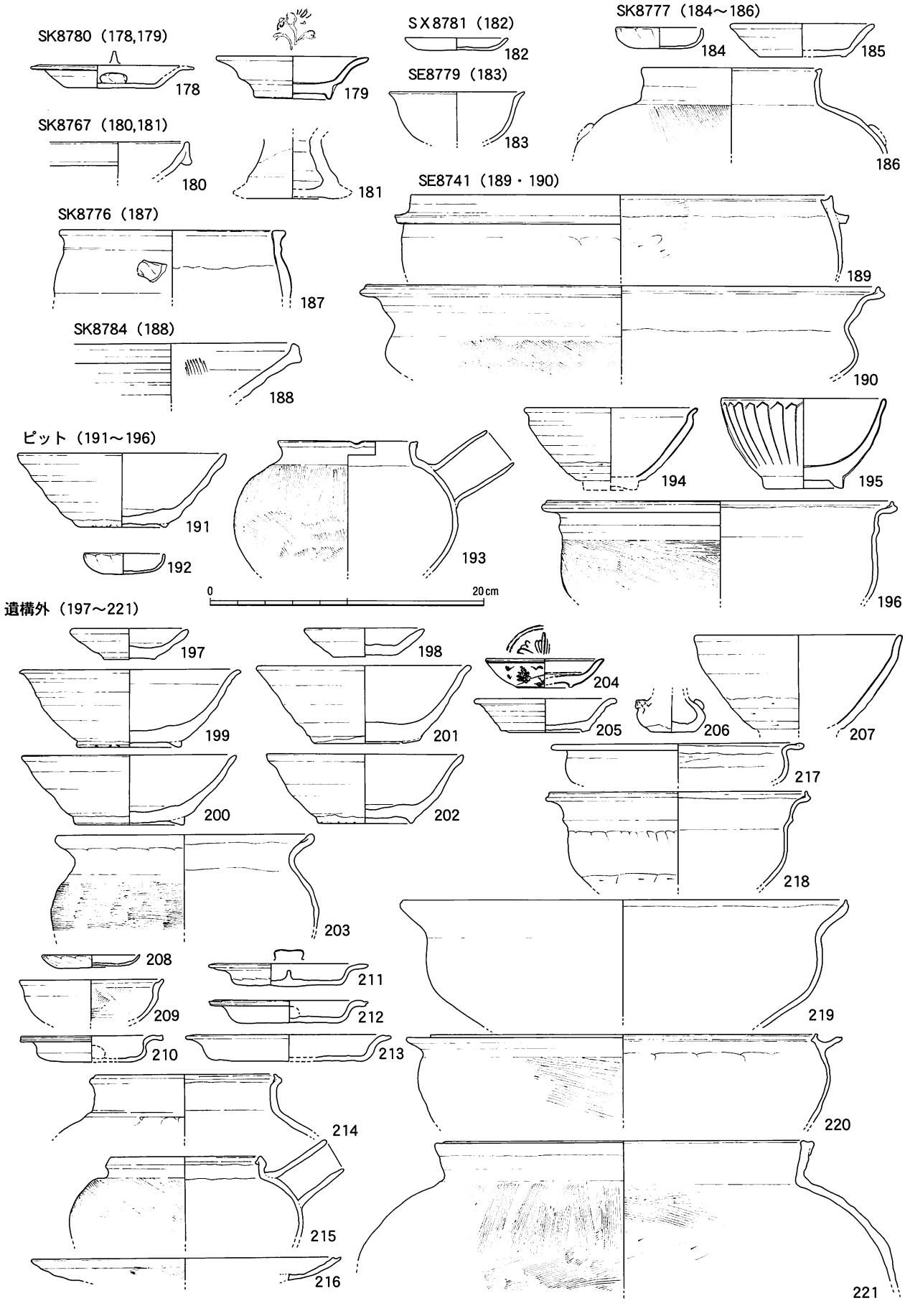
第Ⅴ－７図　第７次調査区　出土遺物実測図(4)（1：4）



第Ⅴ－８図　第７次調査区　出土遺物実測図(5)（1：4）

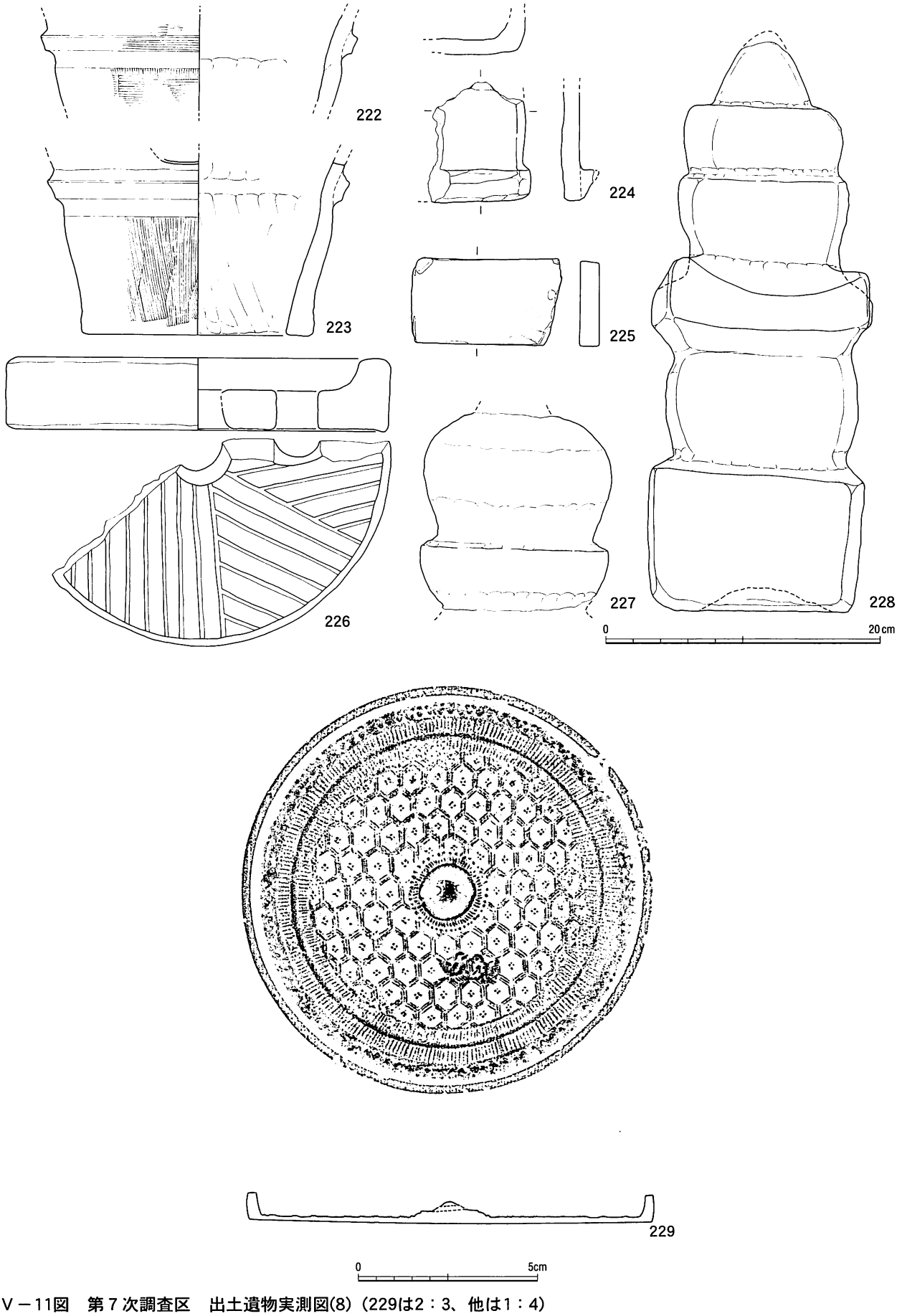


第Ⅴ－９図　第７次調査区　出土遺物実測図(6)（1：4）



第Ⅴ－10図　第７次調査区　出土遺物実測図(7)（1：4）

埴輪（222～224）、石製品（225～228）、鏡（229）



第Ⅴ－11図　第７次調査区　出土遺物実測図(8)（229は2：3、他は1：4）

4　まとめと検討

ここでは、第７次調査区の整理作業を進めるなかで明らかになったことや、改めて見出された検討課題を触れ、まとめとする。

ａ　ＳＤ8736と「奈良古道」の問題

「奈良古道」側溝　調査区を斜めに横切るＳＤ8736は、本書でも概要を記した第139次調査区からつながる、通称「奈良古道」の南側溝と考えられる。ＳＤ8736については、第91次調査の時点で「奈良古道」の側溝とされたが、ＳＤ8737～8739といった中世の道路遺構（以下、「中世古道」と呼称）をそれとする見解もある。そのため、ＳＤ8736の特徴を改めて見ておく。

①　ＳＤ8736は、幅約１ｍ、深さ１ｍ前後の逆台形を呈している。この形態は、第139次調査などで確認した溝ＳＤ0170の形態とほぼ符合する。

②　ＳＤ8736からの出土遺物は、古いものは斎宮Ｉ－２期～３期頃のものを中心としている。この状況も、ＳＤ0170と類似する。

③　第３次調査区（古里Ｂ地区）の溝と一連となり、同じく道路遺構とされる溝に接続している。

以上から、ＳＤ8736はＳＤ0170と連続する遺構と見るのが妥当であり、中世古道を奈良時代まで遡らせる必要はないと考えられる。

出土土器の問題　出土遺物の章で見たように、ＳＤ8736からは奈良～平安時代の土器類が出土している。編年上は、都城編年では平城Ⅲ～長岡宮併行期、斎宮編年ではＩ－２～Ⅱ－２期に相当するものが見られた。出土位置や層位的な問題が現状では明確にできないが、出土土器の状況からは、この溝は８世紀中葉以前に掘削されたが、その直後から土器の投棄が開始され、９世紀中葉頃にはほぼ埋没すると想定できる。

なお、第７次調査区と、前章第139次の調査成果を比較すると、同じ「奈良古道」側溝であっても、出土土器が示す時期幅が調査地点ごとで微妙に異なる。これは、「奈良古道」側溝の機能時期がまちまちなのではなく、廃棄された溝状遺構が完全に埋没する時期に微妙な差があることを示していると考える。いずれにしても、都城編年の平城Ⅲ併行期、斎宮編年のＩ－２期以降に土器が投棄されていることは、この溝設置時点に目された機能が、短期間で途絶していることを意味する。

ｂ　中世集落としての古里地区

中世古道　第７次調査区からは、第Ｖ－３図で示したように中世の古道が確認されている。中世古道の位置は、巨視的に見れば「奈良古道」に沿っているが、第７次調査区では、「奈良古道」ほど大きく北へ迂回することなく接続している。つまり中世古道は、古代に設定された地割を概ね踏襲するものの、その段階における利用状況に応じた改変を行ったものといえる。

中世古道は、当地の区画が改変される1970年頃まで道として機能し続けている。出土遺物を見る限り、13世紀前半頃と16世紀初頭頃の２時期に側溝の掘削を伴った改修を行うものの、現代も含めたそれ以外の時期では、大幅な改良事業の無いまま存続していると考えられる。道路側溝が掘削される時期では、その路面は２ｍ前後に保たれており、概ね１間幅（約1.8ｍ）を目したものと想定される。路面は、遺構検出面を見ても周囲より30㎝以上ほど低い。当時の地表面は現在の状況とそれほど変わらないと想定すれば、周囲よりも60㎝ほどは低くなっていたものと考えられる。これは、道路自身が「溝」状を呈していることを示しており、道路面が全体として排水溝としての機能を果たしていたと考えられる。なお、側溝の改修が無い時期にも、以上のような機能は想定できる。

集落　掘立柱建物がまとまらないものの、井戸・廃棄土坑の存在から見て、中世古道の両側に集落が形成されていたものと考えられる。出土遺物は12世紀後半頃から16世紀中葉頃までのものが見られるが、より濃く見られる時期は13世紀前半と15世紀後葉～16世紀前半にかけてである。これは、先述の中世古道の道路側溝が掘削される時期とも符合する。つまり、道路側溝は集落の存在と密接な関係があるといえる。

中世墓　ＳＸ8781からは和鏡が出土しており、13世紀中葉頃の土壙墓（木棺墓か？）と考えられる。また、調査区の北部を中心に五輪塔が出土している。五輪塔は出土状況が分からず、あまり明確にはし難

いが、この近隣に中世後期の墓地があったと想定できる。中世前期の土壙墓は、今回報告の第137次調査区のように、古里地区近隣でもいくつか確認されているが、これらは散在している。それに対し石塔を持つ墓地は、おそらくは群として存在していると考えられる。今のところ中世後期の墓地とその範囲を明確にできないものの、中世前期から後期に至る墓域の変遷をたどるうえでも、古里地区は興味深い資料を内包していると考えられる。

出土土器類　土師器類は、南伊勢系のものでほぼ占められているが、いくつか特徴的なものも存在する。147・220は、鍔の短い羽釜（以下、「短鍔羽釜」と呼称）で、素地の状況や調整手法からは南伊勢系の範疇で把握できるが、南伊勢地域ではこれまであまり出土例が無い。南伊勢系土師器生産の中心は有尓郷（現在の明和町有尓中・本郷付近）と考えられ、斎宮近隣はその主要な供給地である。今回の整理で当該土器が２個体以上確認できたことは、当該土器が南伊勢系土師器に含まれることを示す明確な材料といえる[16]。

貿易陶磁器類では、175・204の明代染付皿（青花）が注目できる。いずれも15世紀後半以降のものである。それほどの優品ではないが、史跡斎宮跡地内としては初めての報告例となる。

中世斎宮の解明　斎宮跡では、調査の中心が古代であったため、中世以降の遺構・遺物には、これまであまり関心を払ってこなかった。しかし、中世前期については、まがりなりにも斎王制度は残存するのであり、その存在は軽視できない。古代における斎宮の位置づけを相対化するためにも、今後は中世以降の遺構・遺物にも注目していく必要があろう。

（伊藤裕偉）

＜註＞

（１）三重県教育委員会『多気郡明和町古里遺跡・斎王宮跡』（1975年）

（２）大川勝宏「第91次調査」（『史跡斎宮跡平成３年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館　1992年）

（３）斎宮歴史博物館『斎宮の土器・みやこの土器』（国史跡斎宮跡発掘30周年記念特別展「器は語る700年」記念シンポジウム資料　2000年）および講演記録（『斎宮歴史博物館研究紀要』10　2001年）、駒田利治・泉雄二・倉田直純「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ　斎宮歴史博物館　2001年）

（４）都城編年については、奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』ⅩⅣ（1993年）のほか、古代の土器研究会編『古代の土器１　都城の土器集成』（1992年）を参照した。

（５）前掲註(3)の斎宮土器編年には、土器の形式分類や実年代比定に問題が大きい。とくに斎宮第Ⅰ期第３段階の資料的位置づけには、土器編年としても大きな問題を持っている。当報告では前掲註(3)での実年代観と土器編年とを切り離す目的で、「第□期第○段階」を「□－○段階」と表現していく。

（６）伊藤裕偉『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第３分冊　楠ノ木遺跡（三重県埋蔵文化財センター　1991年）

（７）藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994年）

（８）南伊勢系鍋の分類と編年に関しては、伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム　1996年）

（９）古瀬戸編年は、藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」（『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集　（財）瀬戸市埋蔵文化財センター　1996年）に拠る。

(10)伊藤裕偉・川崎志乃『鳴抜』第１次調査（三重県埋蔵文化財センター　1998年）

(11)永原慶二編『常滑焼と中世社会』（小学館　1995年）に所収。

(12)瀬戸大窯期の編年は、藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」（『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯　2002年）に拠る。

(13)南伊勢系の土師器皿類分類については、伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1993年）

(14)石臼の名称と分類については、三輪茂雄『臼』（ものと人間の文化史25　法政大学出版局　1978年）、桐山秀穂「日本における茶臼の研究」（『古代學研究所研究紀要』第６輯　1996年）を参照した。

(15)和鏡については、広瀬都巽『和鏡の研究』（角川書店　1974年）、中野政樹編『日本の美術』42　和鏡（至文堂　1969年）を参照した。

(16)伊藤裕偉「戦国期の煮沸用土器から見た地域構造」（『戦国時代の考古学』高志書院　2003年）

通番遺構名	遺構の性格	次数	調査時遺構名	地区	グリット	時期	斎宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SD 8736	区画溝（道路側溝）	7	奈溝上層	4I	16	奈良～平安	～Ⅲ－1～	斎宮Ⅲ－1頃の土師質土器椀あり
			奈溝	4J	10	奈良	Ⅰ－3～	
			南北溝	5J	3	奈良～	Ⅰ－3	奈良古道側溝
			南北溝	5J	8	奈良～	Ⅰ－3～	
			南北溝	5J	13	奈良～平安	Ⅰ－3～Ⅱ－1	
			南北溝	5J	19	中世Ⅳ		鍋4c（SD4の掘り残し）
			溝	5J	24		Ⅰ－3	
SD 8737	道路側溝	7	一括	4I	11	中世Ⅳ		鍋4b~d　4c頃多量
			鎌溝東	4I	12	中世Ⅳ		鍋・焙烙形4d~
			鎌溝	4I	17	中世Ⅳ		鍋4b多い
			鎌溝	4J	5	中世Ⅱ～		常滑15世紀後半あり
			溝	5J	16	中世Ⅲ		鍋3a~b、3aが中心
			溝	5J	17	中世Ⅲ・Ⅳ		鍋3b~4b
			溝下層	5J	18	中世Ⅱ		鍋2c
			溝	5J	18	中世Ⅱ・Ⅳ		山茶椀4・5型式　鍋4b
			溝	5J	24・25			斎宮Ⅲ－2並行　陶器筒形あり
			溝	5K	15	中世Ⅲ～		鍋3b
SD 8738	道路側溝	7	鎌溝	4I	1	中世Ⅰ		
			溝	5J	6	中世Ⅳ		鍋4d
			溝2	5J	25			山茶椀4型式
			溝（北）	5J	25	中世Ⅱ・Ⅳ		鍋1b・4b
			溝	5K	10	中世Ⅳ		鍋4c
SD 8739	道路側溝	7	鎌溝下層	4I	1	中世Ⅱ・Ⅲ		鍋2c~3a　2c多い
			鎌溝最下層	4I	1	中世Ⅱ・Ⅲ		鍋2c~3a
			鎌溝上層東	4I	6	中世Ⅲ		鍋3b
			鎌溝	4I	7	中世Ⅲ		鍋3b
			鎌溝下層東	4I	6・7	中世Ⅲ		鍋3b~4a
			溝2	5J	11	中世Ⅱ～Ⅲ		鍋2b~3a
			溝	5J	12	中世Ⅱ		鍋2b
			溝	5J	19	中世Ⅱ・Ⅳ		鍋4b、山茶椀4・5型式　アワビの貝殻
			溝	5J	20	中世Ⅱ		鍋2c
			溝	5J	25	中世Ⅱ・Ⅳ		鍋2c・4b

第Ⅴ－2表　第7次調査区遺構一覧(1)

通番遺構名	遺構の性格	次数	調査時遺構名	地区	グリット	時期	斎宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SK 8740	土坑	7	黒色土	4J	9		Ⅱ－1	
			土坑	4J	9・10		Ⅱ－2	須恵器
SE 8741	井戸	7	井戸	4J	12	中世Ⅳ		鍋 4d、異形羽釜
SE 8742	井戸	7	礫内井戸	5J	15	中世Ⅳ		鍋 4b
SD 8743	溝	7	溝	5J	9	中世Ⅳ		斎宮Ⅰ－4~　鍋 4b
SK 8744	土坑	7	溝	5J	2	中世Ⅲ~		鍋 3b 以降
SK 8745	土坑	7	溝	4J	17・18	中世Ⅳ		鍋 4b~d、灰釉・山茶椀混入
			土坑	4J	17・18	中世Ⅳ		鍋 4c~d
SK 8746	土坑	7	土坑	5K	25	中世Ⅳ		鍋 4c~d
SK 8747	土坑	7	土坑	4K	5	中世Ⅳ		鍋 4d
			土坑 2	5K	25	中世Ⅳ		鍋 4d
SK 8748	土坑	7	土坑	4J	11	中世Ⅳ		鍋 4d
			土坑	4J	11	中世Ⅱ~		山皿第 5 型式あり
			土坑	4K	15	中世Ⅳ		鍋 4d
SK 8749	土坑	7	土坑 2	4K	5	中世Ⅳ		鍋 4c 以降
SZ 8750	落ち込み	7	土坑	5J	16・17	中世Ⅳ		常滑ねり鉢　15 世紀後半~
SK 8751	土坑	7	土坑	5J	5	中世Ⅲ		鍋 3b
SK 8752	土坑	7	土坑	5J	7	中世Ⅱ		鍋 1b、2 基重複か
SZ 8753	落ち込み	7	土坑	5J	1	中世Ⅲ		鍋 3b~
SK 8754	土坑	7	土坑	5J	10	中世Ⅳ		鍋 4c
SK 8755	土坑	7	土坑	5J	16	中世Ⅲ~		鍋 3b~
SK 8756	土坑	7	土坑	5J	21	中世Ⅳ		鍋 4c~
SK 8757	土坑	7	土坑	5J	22	中世Ⅳ		鍋 4c、明代染付
			黒色土坑	5J	23	中世Ⅳ		鍋 4d~
SK 8758	土坑	7	土坑	4J	13	中世Ⅳ		鍋 4c~
SK 8758	土坑	7	暗褐色土坑	4J	14	奈良・中世Ⅳ		須恵器、鍋 4b~c、2 時期の遺構重複か？
SK 8759	土坑	7	土坑 2	4J	13	中世Ⅳ		鍋 4d~
SD 8760	溝	7	溝	4J	2	中世Ⅳ		鍋 4c~
			溝	4J	3~8	中世Ⅳ		鍋 4d
SD 8761	溝	7	溝 2	4J	10	奈良？		
SD 8762	溝	7	溝 2	4I	12	平安？	Ⅱ－1~	
SK 8763	土坑	7	土坑	4J	19	奈良	Ⅰ－3~4	

第Ⅴ－3表　第7次調査区遺構一覧(2)

通番遺構名	遺構の性格	次数	調査時遺構名	地区	グリット	時期	斎宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SK 8764	土坑	7	土坑	4J	12	中世Ⅱ		鍋 1a　山茶椀 5 型式
SK 8765	土坑	7	土坑	4J	16・17	奈良？	Ⅰ-4?	
SK 8766	土坑	7	土坑	4J	9	中世Ⅳ		鍋 4b 以前
SK 8767	土坑	7	土坑	4J	7	中世Ⅳ		鍋 4c、大窯 2 後
SK 8768	土坑	7	土坑・土坑 2	4J	3	平安・中世Ⅳ		平安の遺構が重複？、鍋 4b~c
SK 8769	土坑	7	土坑	4J	6	中世Ⅳ		鍋 4d
SK 8770	土坑	7	土坑	4J	1	中世Ⅳ		常滑ねり鉢
SK 8771	土坑	7	土坑	4J	2	中世Ⅳ		鍋 4d　明代染付
SK 8772	土坑	7	土坑	4I	6	中世Ⅳ		鍋 4b 併行の皿
SK 8773	土坑	7	土坑	4I	2・7	中世Ⅱ		鍋 2c
SK 8774	土坑	7	土坑	5I	17	中世Ⅲ		鍋 3a
SK 8775	土坑	7	土坑	5I	2	奈良・平安	Ⅰ ~ Ⅱ	
SK 8776	土坑	7	土坑	5I	12	中世Ⅳ		鍋 4c
SK 8777	土坑	7	土坑	5I	7	中世Ⅳ		鍋 4c
SH 8778	竪穴住居	7	土坑	5I	1	奈良	Ⅰ-4	上層に一部鍋 4c あり（掘り残しか？）
SE 8779	井戸	7	礫内	4J	4	中世Ⅳ		土師器椀　鍋 4c~
SK 8780	土坑	7	一括	5J	19・20	中世Ⅳ		
SX 8781	土壙墓	7	土坑	5J	4	中世Ⅱ		土師器小皿　鍋 1b 併行　和鏡
SK 8782	土坑	7	黒色土坑 2	4J	18	奈良		
SK 8783	土坑	7	黒色土坑	4J	18	奈良		
SK 8784	土坑	7	土坑	4J	20	中世Ⅳ		大窯 2 前
SH 8785	竪穴住居	7		5J	6・7	奈良？		出土遺物なし？
SD 8786	溝	7	溝 3	4J	10	平安？	Ⅱ-1~	
SE 8787	井戸	7	井戸	4J	2	中世Ⅳ		鍋 4d
SK 8788	土坑	7	茶褐色土	5J	20	中世Ⅳ		鍋 4d
			茶褐色土	5I	21	中世Ⅳ		
			茶褐色土	5I	16	中世Ⅳ		
SD 8789	溝	7	溝	4I	2	中世Ⅳ		鍋 4b~
8790	欠番		欠番					
SE 6480	井戸	7	土坑・黒色土坑	4K	20	奈良		上層に一部鍋 4b あり（掘り残し？）

第Ⅴ－４表　第７次調査区遺構一覧(3)

通番遺構名	次数	グリット	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模 (東西間・m×南北間・m)	主軸	方位 (N 基準)	備　　考
SB8791	7	5J15	p1	p1 ‥‥Ⅰ－4~	Ⅰ－4~	4(6.6)×2(4.6)	南北	N43°　E	SD8736 より新
		5J16	p2						
		5J19	p1						
		5J20	p1						
		5J25	p1						
SB8792	7	4J10	p1・p4	p4 ‥‥Ⅰ－4~	Ⅱ－2～Ⅱ－3	3(4.9)×3(4.4)	東西	N29°　E	総柱建物　重複がある可能性が高い
		4J14	p1・p3・p4	p1 ‥‥Ⅱ－3、p4 ‥‥Ⅱ－1、p3 ‥‥Ⅱ－2					
		4J15	p1・p4	p1 ‥‥Ⅰ－4					
		4J20	p3	p3 ‥‥Ⅱ－1					
SB8793	7	4J2	p5	p5 ‥‥中世Ⅳ	中世Ⅳ	3?(6.0)×2?(3.2)	東西	N25°　E	
		5J21	p1						
SB8794	7	4J6	p1・p6・p13	p6 ‥‥Ⅲ－2・中世Ⅲ	中世Ⅲ	4(8.0)×2(3.8)	東西	N28°　E	
		4J11	p2・p9						
		4K15	p2						
SB8795	7	4J6	p2	p2 ‥‥Ⅲ－2	中世Ⅳ	4(9.2)×2?(5.8)	南北	N28°　E	
		4K5	p6	p6 ‥‥中世Ⅳ					
		4K15	p1	p1 ‥‥中世Ⅰ					
SA8796	7	4J3	p4		Ⅱ－2 (中世Ⅳ)	3?(7.2)×10(19.8) 以上	南北	N32°　W	中世と斎宮Ⅱ期のピットが重複か？
		4J4	p1・p4	p4 ‥‥中世Ⅳ					
		4J7	p5・p6	p6 ‥‥中世Ⅳ					
		4J8	p1						
		4J10	p6	p6 ‥‥Ⅱ－2					
		4J12	p2						
		4K20	p6						
SB8797	7	5J14	p1・p3		Ⅰ後半	3(5.1)×1(1.8) 以上	東西	N45°　E	
		5J15	p2	p2 ‥‥Ⅰ後半					
SB8798	7	5J2	p1・p2・p3	p1・2 ‥‥中世Ⅳ、p3 ‥‥中世Ⅲ	中世Ⅳ	5(9.4)×2?(3.8)	東西	N24°　E	
		5J3	p2	p2 ‥‥中世Ⅳ					
		5J7	p3	p3 ‥‥中世Ⅳ					
		5J8	p2						
SB8799	7	5I6	p2	p2 ‥‥中世Ⅲ	中世Ⅳ	4?(8.0)×2(4.6)	東西	N22°　E	
		5I7	p1・p9・p10	p1 ‥‥中世Ⅲ、p9 ‥‥中世Ⅳ					
		5I17	p1	p1 ‥‥中世Ⅲ（別遺構？）					
SB8800	7	5I1	p2・p3・p4	p3 ‥‥中世Ⅲ、p4 ‥‥Ⅰ－4	Ⅰ－4~	2?(5.2)×4(8.0)	南北	N45°　E	
		5I2	p1						
		5J4	p1						
		5J5	p1	p1 ‥‥Ⅰ－4					
		5J10	p1	p1 ‥‥Ⅰ－4（建物 11 と共通）					
SB8801	7	5I1	p1	p1 ‥‥Ⅰ後半	Ⅰ後半	2(5.0)×3?(6.0)	南北	N43°　E	
		5J10	p1	（建物 10 と共通）					
SB8802	7	4I1	p1	p1 ‥‥中世Ⅰ		2?(3.6)×3(5.4)	南北	N28°　W	
		5I17	p6	p6 ‥‥Ⅰ～Ⅱ					
		5I22	p2・p4	p4 ‥‥Ⅰ					

第Ⅴ－5表　第7次調査区掘立柱建物一覧

No.	出土地区 層位・遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
1	4J10 SD8736 下層	土師器 杯	口縁 器高	14.0 2.5	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	小石少含	やや軟	橙 7.5YR7/6	完存		R066
2	5J3 SD8736 下層	須恵器 蓋	口縁	17.8	外：回転ナデ→回転ケズリ 内：回転ナデ	白色小石含	堅緻	灰 6/0	口縁 6/12		R087-1
3	4I16 SD8736 下層	須恵器 杯	口縁	14.7	外：回転ナデ→ヘラ起こし 内：回転ナデ	密 ~3 mm小石含	堅緻	灰 6/0	口縁 9/12	底部外面は生焼け	R229
4	4J15 SD8736 下層	土師器 甕	口縁 器高	14.8 15.3	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ	砂粒含	良	淡黄 2.5YR8/3	口縁 10/12	外面に煤（薄い）、内面に炭化物	R003
5	4J15 SD8736 下層	土師器 長胴甕	頸部	14.6	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ	砂粒含	並	にぶい黄橙 10YR7/4	頸 12/12	口縁端部のみ全周が欠損する	R005
6	4J10 SD8736 下層	土師器 甕	口縁 器高	17.2 31.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ	砂粒含	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁 7/12		R001
7	4J10 SD8736 下層	土師器 甕	口縁 器高	22.9 31.0	外：ハケメ→ヨコナデ 内：ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ	密 砂粒含	良	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁 3/12		R002
8	4I16 SD8736 下層	土師器 甑	口縁	20.1	外：ハケメ→把手部挿入付加→ヨコナデ・ケズリ 内：ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	粗 ~2 mm小石含	良	浅黄 2.5Y7/3	口縁 3/12	9と同一個体と思われる	R231
9	4I16 SD8736 下層	土師器 甑	底径	12.7	外：ナデ→ケズリ→底部に穿孔（一文字に残す） 内：ナデ→ケズリ	粗 ~2 mm小石含	良	浅黄 2.5Y7/3	底 4/12	8と同一個体と思われる	R232
10	4J15 SD8736 上層	土師器 杯G	口縁 器高	13.1 3.8	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	脆弱	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 4/12	外面に螺旋形の巻き上げ痕	R051
11	4J10 SD8736 上層	土師器 杯G	口縁 器高	12.4 4.0	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	やや脆弱	橙 7.5YR7/6	口縁 3/12		R067
12	4J10 SD8736 上層	土師器 杯G	口縁 器高	12.2 3.8	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密	脆弱	橙 7.5YR7/6	口縁 2/12		R068
13	4J10 SD8736 上層	土師器 杯G	口縁 器高	13.4 2.9	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	砂粒含	脆弱	にぶい橙 5YR7/4	口縁 6/12		R070
14	4I16 SD8736 上層	土師器 杯A	口縁	(15.0)	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ~1 mm小石含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 1/12	外面に煤	R226
15	4I16 SD8736 上層	土師器 杯A	口縁	15.2	全体が剥離につき不明	密 ~2 mm小石含	やや軟	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 10/12		R225
16	4I11 SD8736 上層	土師器 杯A	口縁	18.0	全体が剥離につき不明	密 ~1 mm小石含	良	橙 5YR7/6	口縁 4/12		R222
17	4I16 SD8736 上層	土師器 杯A	口縁	18.0	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小石含	やや軟	黄橙 7.5YR7/8	口縁 11/12		R221
18	4I16 SD8736 上層	土師器 杯A	口縁	16.0	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	密	やや軟	橙 5YR7/8	口縁 10/12		R139
19	4I16 SD8736 上層	土師器 杯C	口縁	15.8	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	粗 ~2 mm小石含	良	橙 5YR7/8	口縁 3/12		R224
20	4I16 SD8736 上層	土師器 杯A	口縁	16.4	外：ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	粗 ~2 mm小石含	軟	橙 5YR6/8	口縁 7/12		R227
21	4J10 SD8736 上層	土師器 杯A	口縁 器高	17.4 3.0	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	密	やや脆弱	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁 1/12		R069
22	4I16 SD8736 上層	土師器 杯A	口縁 器高	15.7 2.9	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/6	口縁 4/12		R061
23	4J15 SD8736 上層	土師器 杯A	口縁 器高	16.2 3.1	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	小石少含	良	橙 7.5YR7/6	口縁 8/12		R054
24	4J15 SD8736 上層	土師器 杯A	口縁 器高	14.1 3.1	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	小石少含	良	橙 5YR6/6	口縁 9/12		R053
25	4I16 SD8736 上層	土師器 杯B	口縁	15.0	外：オサエ・ハケメ→ヨコナデ→高台貼付ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ~1 mm小石含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 2/12 高台 3/12		R228
26	4J15 SD8736 上層	土師器 杯B	口縁 器高	18.3 5.4	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ・高台貼付ヨコナデ→ミガキ内：ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小石含	軟	明赤褐 5YR5/8	口縁 10/12 高台 11/12		R073
27	4J15 SD8736 上層	土師器 皿A	口縁 器高	16.1 2.0	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	密	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁 7/12		R055
28	4J10 SD8736 上層	土師器 皿A	口縁 器高	21.0 2.9	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	砂粒含	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁 4/12		R065
29	4J10 SD8736 上層	土師器 皿A	口縁 器高	21.0 2.8	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	密	やや脆弱	橙 5YR6/8	口縁 6/12		R074
30	4J15 SD8736 上層	土師器 皿A	口縁 器高	22.8 3.4	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ→暗文	良	良	橙 5YR6/8	口縁 10/12	内面に分離した渦巻状暗文3単位あり	R057
31	4J15 SD8736 上層	土師器 高杯	脚裾	13.6	外：ヨコナデ・縦方向ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	細砂粒少含	軟	橙 5YR6/8	脚裾 11/12		R058
32	4J16 SD8736 上層	須恵器 蓋	口縁 器高	16.3 3.9	外：回転ナデ→回転ケズリ→摘付加 内：回転ナデ	小石少含	堅緻	灰白 7/0	口縁 6/12		R064
33	4J10 SD8736 上層	須恵器 杯B	口縁	15.7	外：回転ナデ→回転ケズリ→高台貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	砂粒含	堅緻	灰 6/0~7/0	口縁 11/12 高台 12/12		R143
34	4J15 SD8736 上層	土師器 鉢	口縁	21.3	外：オサエ・ナデ→ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小石含	良	橙 7.5YR6/6	口縁 9/12		R144
35	4I11 SD8736 上層	土師器 盤A	口縁	33.7	外：オサエ・ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小石含	やや軟	橙 5YR6/8	口縁 11/12	底部外面にヘラ記号？	R142
36	4J10 SD8736 上層	須恵器 長頸壺	体部	16.2	外：回転ナデ→回転ケズリ→高台貼付ヨコナデ 内：回転ナデ	白色小石含	並	灰 6/0	体部 5/12	底部内面に自然釉	R141
37	4J15 SD8736 上層	須恵器 甕	口縁 器高	19.1 26.4	外：平行タタキ→ヨコナデ 内：同心円あて具痕→ナデ→ヨコナデ	砂粒含	堅緻	灰白 7/0	口縁 4/12	歪み大	R012
38	5J13 SD8736	土師器 杯G	口縁 器高	12.8 3.3	外：ナデ→ヨコナデ 内：ナデ→ヨコナデ	粗 ~2 mm小石含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 5/12	口縁部に油煙痕	R040

第Ⅴ－6表　第7次調査区出土遺物観察表(1)

No.	出土地区 層位・遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
39	4J5 SD8736	土師器 杯G	口縁 器高	13.6 3.9	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	脆弱	灰白 10YR8/2	口縁 10/12		R059
40	5J24 SD8736	土師器 杯C	口縁 器高	14.4 3.6	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	砂粒含	良	橙 7.5YR7/6	口縁 9/12		R038
41	4I11 SD8736	土師器 杯A	口縁	16.2	全体が剥離につき不明	密	やや軟	橙 5YR7/8	口縁 3/12		R223
42	5J8 SD8736	土師器 杯C	口縁 器高	15.9 3.6	外;ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内;ナデ→ヨコナデ→螺旋状暗文	密	良	黄橙 7.5YR7/8	口縁 7/12	内面に炭化物	R035
43	5J8 SD8736	土師器 杯A	口縁 器高	16.8 3.6	外;ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内;ナデ→ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/6	口縁 7/12		R036
44	5J3 SD8736	土師器 杯A	口縁 器高	16.4 3.4	外;ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内;ナデ→ヨコナデ	密	軟	橙 7.5YR7/6	口縁 4/12		R037
45	4J5 SD8736	土師器 杯A	口縁 器高	17.2 3.0	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	軟	橙 5YR7/6	口縁 5/12		R071
46	4J4 SD8736	土師器 杯A	口縁 器高	17.6 (3.8)	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内;ナデ→ヨコナデ→螺旋状暗文	密	良	橙 5YR6/6	口縁 2/12		R060
47	4J5 SD8736	土師器 杯A	口縁 器高	16.6 3.1	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	やや軟	橙 5YR6/6	口縁 12/12		R062
48	4J5 SD8736	土師器 皿A	口縁 器高	19.8 2.7	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	軟	橙 5YR6/8	口縁 3/12		R072
49	4J5 SD8736	土師器 皿A	口縁 器高	19.62.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内;ナデ→ヨコナデ	密	良	橙 5YR7/8	口縁 4/12	内面は螺旋状暗文がある可能性あり(見えず)	R056
50	4J4 SD8736	土師器 皿A	口縁 器高	19.8 2.0	外;ナデ・ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/6	口縁 3/12		R063
51	5J13 SD8736	土師器 皿A	口縁 器高	16.5 2.3	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁 5/12		R039
52	5J8 SD8736	土師器 高杯	脚裾	11.2	外;縦方向板ナデ→ヨコナデ 内;シボリ目→ヨコナデ	密	やや軟	橙 5YR6/6	脚柱 12/12		R027
53	4J10 SD8736	土師器 高杯	脚柱	3.7	外;ヨコナデ・縦方向ケズリ(11面) 内;ナデ→ヨコナデ	密 ~2㎜小石含	良	橙 7.5YR7/6	脚柱 12/12		R151
54	4J5 SD8736	土師質土器 杯	口縁 器高	14.8 3.1	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	精良 小石含	やや脆弱	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁 4/12	土師器の形態をなす須恵器か?	R052
55	4J5 SD8736	土師器 甕	口縁	15.0	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	砂粒少含	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁 6/12	外面に煤	R077
56	5J24 SD8736	土師器 甕A	口縁 器高	13.0 10.5	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ	細砂粒含	やや粗	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁 4/12	煤付着なし	R008
57	4J10 SD8736	土師器 甕A	口縁 器高	15.6 12.4	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ	細砂粒含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁 1/12	外面に煤	R009
58	4I16 SD8736	土師器 甕A	口縁	17.3	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ→ケズリ	粗 ~2㎜小石含	良	橙 7.5YR7/6	口縁 3/12	外面に煤付着	R230
59	5J24 SD8736	土師器 鍋	口縁 器高	21.4 (13.8)	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ	砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 5/12	煤付着なし	R006
60	4J5 SD8736	土師器 甕	口縁	22.6	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	砂粒含	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁 3/12		R075
61	4I16 SD8736	土師器 鍋	口縁	35.8	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 4/12	把手付か	R130
62	4J5 SD8736	土師器 把手付鍋	口縁 器高	41.0 18.5	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ→把手挿入	砂粒含	良	橙 7.5YR7/6	口縁 4/12		R004
63	5J13 SD8736	須恵器 壺	口縁	28.0	外;回転ナデ 内;回転ナデ	小石多含	堅緻	灰 6/0	口縁 2/12		R085
64	4J9 SK8740	土師器 杯G	口縁	13.0	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	粗 ~2㎜小石含	やや軟	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁 6/12	外面に螺旋状の接合痕残る	R147
65	4J9・10 SK8740	土師器 杯A	口縁	14.0	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密 ~1㎜小石含	良	橙 5YR6/6	口縁 8/12	内面に焼成前のヘラ記号	R220
66	4J9 SK8740	土師器 杯A	口縁 器高	14.0 3.0	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/6	口縁 7/12	内面に焼成後のキズ	R119
67	4J9 SK8740	土師器 杯A	口縁 器高	14.0 3.1	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	軟	橙 5YR6/6	口縁 5/12		R104
68	4J10 SK8740	土師器 杯A	口縁 器高	16.1 3.0	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内;ナデ→ヨコナデ	密	並	橙 5YR6/8	口縁 5/12		R115
69	4J9 SK8740	土師器 杯A	口縁	14.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密 ~1㎜小石含	やや軟	橙 7.5YR6/6	口縁 11/12		R146-2
70	4J10 SK8740	土師器 杯A	口縁 器高	14.2 3.3	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	砂粒含	やや脆弱	橙 7.5YR7/6	口縁 5/12		R114
71	4J9 SK8740	土師器 杯A2	口縁 器高	16.2 3.7	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	精良	軟	橙 5YR6/6	口縁 3/12	内面摩滅	R126
72	4J9・10 SK8740	土師器 皿A	口縁	18.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密 ~2㎜小石含	良	橙 5YR6/6	口縁 10/12	内外面に焼成前ヘラ記号	R218
73	4J9 SK8740	土師器 高杯	口縁	21.2	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内;ナデ→ヨコナデ	細砂粒含	良	橙 5YR6/8	口縁 2/12	内面にヘラ記号	R098
74	4J9 SK8740	土師器 皿A	口縁 器高	16.5 2.5	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	やや脆弱	橙 5YR6/6	口縁 4/12		R097
75	4J9 SK8740	土師器 甕A	口縁	17.6	外;ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内;ナデ→ヨコナデ・ケズリ	粗 ~2㎜小石含	良	明黄褐 10YR7/6	口縁 11/12	外面に煤、内面に炭化物	R176
76	4J9・10 SK8740	土師器 甕A	口縁	18.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ・ハケメ 内;ナデ→ヨコナデ→ケズリ	粗 ~2㎜小石含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 1/12 頸 3/12	外面に煤、内面に炭化物	R177

第Ⅴ－7表　第7次調査区出土遺物観察表(2)

No.	出土地区 層位・遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
77	4J9 SK8740	土師器 甕	口縁	27.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	0.5~2 mm 小石含	やや軟	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 4/12	ハケメは頸部から始め、下半ほど後に施す	R137
78	4J9~10 SK8740	須恵器 皿A	口縁	23.0	外；回転ナデ・ナデ 内；回転ナデ	密 ~2 mm小 石含	堅緻	灰 7/0	完存	歪み、一部生焼け	R194
79	4J18 SK8782	土師器 杯C	口縁 器高	13.4 2.7	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	やや軟	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 3/12	内面にヘラ記号	R108
80	4J18 SK8782	土師器 杯A	口縁 器高	14.6 3.4	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/6	口縁 2/12	内面にヘラ記号	R118
81	4J18 SK8782	土師器 杯A	口縁 器高	13.6 3.1	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR6/6	口縁 3/12		R106
82	4J12 SK8782	土師器 杯A	口縁 器高	17.5 4.4	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	並	橙 5YR6/6	口縁 4/12	内面にヘラ記号	R120
83	4J18 SK8782	土師器 杯A	口縁 器高	15.4 3.2	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内；ナデ→ヨコナデ	密	やや脆弱	橙 5YR6/8	口縁 4/12	内；ヘラ記号	R110
84	4J18 SK8782	土師器 皿A	口縁 器高	16.0 2.0	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	良	やや脆弱	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 2/12	内面にヘラ記号	R096
85	4J18 SK8782	須恵器 蓋	口縁	16.2	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	小砂粒 少含	堅緻	灰 6/0	口縁 2/12	外面に自然釉	R095
86	4J18 SK8782	須恵器 皿B	口縁 器高	19.4 3.1	外；回転ナデ→回転ケズリ→高台貼付ヨコナデ 内；回転ナデ	細砂粒 含	並	浅黄 2.5Y7/3	口縁 1/12 高台 1/12		R093
87	4J18 SK8782	須恵器 杯B	口縁	20.2	外；回転ナデ→回転ケズリ→高台貼付ヨコナデ 内；回転ナデ	密 ~2 mm小 石含	堅緻	灰 6/0	口縁 1/12 高台 2/12	外面に自然釉	R154
88	4J18 SK8783	土師器 杯A	口縁 器高	16.6 4.8	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	精良	脆弱	黄橙 7.5YR7/8	口縁 3/12	内面にヘラ記号	R109
89	4J18 SK8783	土師器 高杯	口縁	22.0	外；ハケメ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	砂粒少 含	良	橙 5YR6/6	口縁 2/12		R099
90	4J18 SK8783	土師器 甕	口縁	28.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 2/12	外面に煤	R136
91	4J14 SK8758	土師器 杯A	口縁 器高	13.5 3.8	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	良	橙 5YR6/6	口縁 2/12		R107
92	4J14 SK8758	須恵器 杯A	口縁 器高	13.0 2.8	外；回転ナデ→ヘラ起こし 内；回転ナデ	砂粒含	並	褐灰 10YR5/1	口縁 2/12 底 3/12		R092
93	5I2 SK8775	土師器 杯A	口縁	15.3	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小 石含	軟	橙 5YR7/6	口縁 6/12		R148
94	4J18 SK8777	須恵器 長頸壺	口縁	9.8	外；回転ナデ（体部・口頸部）→頸部擬口縁形成→口頸部付加 内；回転ナデ	小石含	堅緻	褐灰 5YR5/1	口 5/12 頸 12/12	擬口縁成形の後、頸部を貼り付ける手法	R050
95	4J3 SK8768	土師器 杯	口縁	12.5	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小 石含	やや軟	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 3/12 体部 12/12		R146-1
96	4J10 pit6(SA8796)	土師器 杯	口縁	15.9	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小 石含	やや軟	橙 5YR6/6	口縁 9/12		R214
97	4J14 pit1(SB8792)	土師器 杯A2	口縁	17.8	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ→斜放射状暗文	密 ~1 mm小 石含	良	橙 5YR6/6	口縁 7/12		R213
98	4J10 pit2	土師器 杯A	口縁	16.8	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小 石含	良	橙 5YR6/6	口縁 9/12		R212
99	4J7 pit3	土師器 杯A	口縁 器高	16.4 3.5	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	細砂粒 少含	並	橙 5YR6/6	口縁 2/12		R105
100	4J3 pit1	土師器 高杯	口縁	23.7	外；ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小 石含	良	橙 5YR6/8	口縁 6/12		R149
101	4J13 ピット	緑釉陶器 椀	高台	6.4	外；ロクロナデ→ククロクズリ→施釉 内；ロクロナデ→施釉	粗	軟	白 9/0 釉；淡緑	高台 3/12	洛北産	R216
102	5J4 遺構外	土師器 杯G	口縁	10.2	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	細砂粒 少含	やや軟	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 6/12		R133
103	5J5 遺構外	土師器 杯	口縁 器高	10.6 3.5	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	砂粒含	やや脆弱	明黄褐 10YR7/6	口縁 2/12		R112
104	5J4 遺構外	土師器 杯	口縁 器高	11.2 3.1	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	良	脆弱	浅黄橙 10YR8/4	口縁 4/12		R129
105	5J17 黒色土	土師器 杯A	口縁 器高	15.2 3.4	外；ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ	密	やや軟	橙 5YR6/8	口縁 2/12		R116
106	5J13 遺構外	土師器 杯A	口縁 器高	14.5 2.9	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	精良	軟	橙 5YR6/8	口縁 4/12		R127
107	4J12 遺構外	土師器 杯A	口縁 器高	16.0 3.4	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	砂粒少 含	軟	黄橙 7.5YR7/8	口縁 1/12		R128
108	5I17 遺構外	土師器 杯A	口縁 器高	16.7 3.5	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	密	やや脆弱	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 2/12		R113
109	4J14 遺構外	土師器 杯A	口縁 器高	14.3 2.8	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	細砂粒 少含	やや脆弱	橙 7.5YR6/6	口縁 2/12		R117
110	4J3P 遺構外	土師器 杯A	口縁	16.9	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小 石含	良	橙 5YR6/6	口縁 7/12		R145
111	5K5 遺構外	土師器 杯A	口縁	20.6	外；ナデ・ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密 ~2 mm小 石含	やや軟	橙 2.5YR6/8	口縁 3/12		R219
112	4J12 遺構外	土師器 皿A	口縁 器高	23.6 (4.7)	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ→螺旋状・斜放射状暗文	精良	良	明赤褐 2.5YR5/8	口縁 2/12		R122
113	5I17 遺構外	土師器 皿A	口縁 器高	22.2 2.8	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	精良	良	橙 5YR6/8	口縁 3/12		R121
114	4J14 遺構外	土師器 皿A	口縁 器高	(21.4) (1.7)	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ→ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ→斜放射状暗文	精良	良	明赤褐 5YR5/8	口縁 1/12		R125

第Ⅴ－８表　第７次調査区出土遺物観察表(3)

No.	出土地区 層位・遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色　調	残存度	備　考	登録No.
115	5I17 遺構外	土師器 皿A	口縁 器高	21.2 2.6	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	精良	脆弱	橙 7.5YR6/8	口縁 2/12	摩滅	R124
116	4I2 遺構外	土師器 皿B	口縁	20.8	外；ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→ミガキ（暗文?）	密 ~2㎜小石含	良	橙 5YR6/6	口縁 4/12 高台 5/12		R150
117	5I17 遺構外	土師器 皿A	口縁 器高	19.8 2.4	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	砂粒少含	脆弱	橙 7.5YR7/6	口縁 3/12		R123
118	5J7 遺構外	土師器 高杯	脚裾	12.0	外；縦方向ケズリ・ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	白色小石少含	やや脆弱	にぶい黄橙 10YR7/4	脚裾 6/12		R132
119	4J17 遺構外	土師器 高杯	脚裾	13.7	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ・ナデ→ヨコナデ	密	並	橙 5YR7/8	脚裾 2/12 脚柱 12/12	粗雑な作り	R103
120	5J17 遺構外	須恵器 蓋	口縁 器高	10.6 3.2	外；回転ナデ→回転ケズリ→摘付加 内；回転ナデ	小石・黒色粒含	並	赤灰 2.5YR5/1	口縁 12/12	外面に自然釉	R089
121	4J2 遺構外	須恵器 蓋	口縁	10.6	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	小石含	並	灰 7/0	口縁 3/12	外面に自然釉	R090
122	5J9 遺構外	須恵器 壺蓋	口縁	7.4	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	砂粒含	良	灰白 7/0	口縁 2/12		R091
123	4J11 遺構外	須恵器 皿B	口縁 器高	18.5 2.9	外；回転ナデ→回転ケズリ→高台貼付ヨコナデ 内；回転ナデ	細砂粒含		灰 6/0	口縁 1/12 高台 2/12	外面に自然釉	R094
124	4I17 遺構外	緑釉陶器 椀	高台	8.7	外；ロクロナデ→糸切り？→高台貼付ヨコナデ 内；ロクロナデ	密	堅緻	灰 7/0	高台 1/12	猿投？釉は薄い	R026
125	4J6 遺構外	陶器 椀	口縁 器高	17.0 5.9	外；ロクロナデ→糸切り→高台貼付ヨコナデ 内；ロクロナデ	密 ~4㎜小石含	堅緻	灰褐 5YR5/2	口縁 1/12 高台 9/12	灰釉陶器併行期　産地不明	R159
126	5J8 遺構外	土師器 香炉	口縁	16.8	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 7/12 底 10/12	透かし部２ヶ所遺存	R178
127	5J5 遺構外	土師器 甕	口縁	26.5	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	細砂粒少含	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 2/12		R102
128	5J5 遺構外	土師器 甕	口縁	27.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	並	淡黄 2.5YR8/3	口縁 3/12		R101
129	5J7 遺構外	土師器 甕	口縁	15.3	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	細砂粒含	良好	橙 5YR6/6	口縁 4/12		R131
130	4J13 遺構外	土師器 甕	口縁	14.8	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内；ハケメ→ヨコナデ	細砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 2/12		R088
131	5J21 遺構外	土師器 甕	口縁	17.9	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	やや脆弱	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 3/12		R135
132	4J15 遺構外	須恵器 瓶	高台	6.4	外；回転ナデ→高台貼付ナデ 内；回転ナデ	密 ~2㎜小石含	堅緻	暗赤褐 10R3/3	高台 7/12		R168
133	4I11 遺構外	須恵器 瓶	高台	7.9	外；回転ナデ→回転ケズリ→高台貼付ナデ 内；回転ナデ	密	堅緻	黄灰 2.5Y5/1	高台 6/12		R167
134	S25 遺構外	灰釉陶器 瓶	高台	7.9	外；回転ナデ→回転ケズリ→高台貼付ヨコナデ 内；回転ナデ	密 ~2㎜小石含	堅緻	灰白 7/0	高台 12/12	内面に自然釉落ちる	R162
135	5J20 遺構外	須恵器 甕	口縁	25.8	外；ナデ→ヨコナデ 内；オサエ・ナデ→ヨコナデ	砂粒含	堅緻	灰 7/0	口縁 1/12	外面に厚い自然釉（灰緑色）	R014
136	5J19 遺構外	土錘	長さ 幅	6.7 5.4	ナデ、棒状工具による貫通孔	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	ほぼ完存		R198
137	4I1 SD8738	土師器 皿	口縁 器高	15.0 2.3	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	小石含	やや脆弱	浅黄橙 10YR8/4	口縁 3/12	中世南伊勢系	R034
138	4I1 SD8738	陶器 椀	口縁 器高	15.9 6.0	外；ロクロナデ→ヘラ切り→高台貼付ヨコナデ 内；ロクロナデ	白・黒色小石含	良好	灰 7/0	口縁 4/12 高台 12/12	山茶椀　渥美高台に籾殻痕 口縁部に煤（油煙痕か?）	R023
139	4I1 SD8738	陶器 椀	口縁 器高	15.8 5.0	外；ロクロナデ→ヘラ切り→高台貼付ヨコナデ 内；ロクロナデ	黒・白色等小石含	堅緻	灰 7/0	口縁 5/12 高台 5/12	山茶椀　渥美	R024
140	4I1 SD8738	陶器 椀	口縁 器高	15.1 5.6	外；ロクロナデ→糸切り→高台貼付ヨコナデ 内；ロクロナデ	砂粒含	堅緻	灰 7/0	口縁 3/12 高台 1/12	山茶椀　知多・猿投	R025
141	4I6・7 SD8739	土師器 小皿	口縁 器高	7.4 0.8	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	砂粒多含	良	浅黄 2.5Y8/3	口縁 5/12	中世南伊勢系	R046
142	5J12 SD8739	土師器 皿	口縁 器高	11.6 2.5	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	小石含	良	淡黄 2.5Y8/3	口縁 5/12	中世南伊勢系	R048
143	4I1 SD8739	土師器 皿	口縁 器高	12.1 2.6	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	小石多含	良	淡黄 2.5Y8/3	口縁 12/12	中世南伊勢系	R044
144	4I6・7 SD8739	陶器 壺	口縁	9.2	外；ナデ→ヨコナデ→ヘラ記号 内；ナデ→ヨコナデ	小石含	良	暗赤褐 2.5YR3/2（釉）	口縁 5/12	知多（常滑）　外面にヘラ記号	R018
145	4I6・7 SD8739	陶器 ねり鉢	口縁	–	外；回転ナデ 内；回転ナデ	長石・石英・黒小石	堅緻	にぶい橙 2.5YR6/4	口縁 1/12	知多	R021
146	4I6 SD8739	土師器 茶釜	口縁	14.8	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ・両耳付加 内；ナデ→ヨコナデ・ケズリ	砂粒含	良	淡黄 2.5Y8/4	口縁 10/12	中世南伊勢系外面に煤	R029
147	4I6・7 SD8739	土師器 羽釜	口縁	25.1	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~2㎜小石含	良	浅黄 2.5Y8/3	口縁 1/12 鍔部 2/12	中世南伊勢系	R049
148	4I1 SD8739	土師器 鍋	口縁	19.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	砂粒多含	良好	灰白 2.5Y8/2	口縁 7/12	中世南伊勢系　外面に煤	R045
149	4I6・7 SD8739	土師器 鍋	口縁 器高	22.6 11.6	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ・ケズリ	砂粒含	良	淡黄 2.5Y8/3	口縁 3/12	中世南伊勢系　外面に煤	R028
150	4I7 SD8739	土師器 鍋	口縁	22.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	砂粒多含	良	灰白 2.5Y8/2	口縁 2/12	中世南伊勢系　外面に煤	R032
151	4I1 SD8739	土師器 鍋	口縁	33.8	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	砂粒・小石含	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁 10/12	中世南伊勢系　外面に煤	R022
152	4I6 SD8739	土師器 鍋	口縁	42.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	砂粒多含	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁 5/12	中世南伊勢系　内面に炭化物	R017

第Ⅴ－９表　第７次調査区出土遺物観察表(4)

No.	出土地区 層位・遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
153	4I6・7 SD8739	土師器 羽釜	口縁	40.8	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	粗 ~3㎜小石含	良	浅黄 2.5Y7/3	口縁 3/12 鍔部 3/12	中世南伊勢系	R175
154	5J17 SD8737	陶器 椀	高台	7.4	外；ロクロナデ→糸切り→高台貼付ヨコナデ 内；ロクロナデ	砂粒多含	堅緻	灰 7/0	底 6/12	山茶椀　渥美　底に墨書「上」	R019
155	5J16 SD8737	土師器ミニチュア鍋	口縁 器高	8.6 3.3	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	やや脆弱	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁 5/12	中世？	R043
156	5K15 SD8737	陶器 小皿	口縁	9.8	外；ロクロナデ→糸切り→施釉 内；ロクロナデ→施釉	密	堅緻	灰白 2.5Y8/2 釉；暗褐 7.5YR3/3	口縁 2/12 底 11/12	古瀬戸縁釉小皿（鉄釉）	R245
157	5J16 SD8737	陶器 小皿	口縁	10.1	外；ロクロナデ→糸切り→施釉 内；ロクロナデ→施釉	密	堅緻	灰白 2.5Y8/2 釉；淡緑	口縁 2/12 底 10/12	古瀬戸縁釉小皿 内面にトチン跡２ヶ所残存	R244
158	4I17 SD8737	陶器 瓶	高台	9.8	外；回転ナデ→回転ケズリ→糸切り→高台貼付ヨコナデ 内；回転ナデ	密	堅緻	灰 6/0 釉；暗緑	底 4/12 高台 2/12	内面底に自然釉	R020
159	5J16 SD8737	土師器 椀	口縁	16.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；板ナデ→ヨコナデ	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 4/12	中世南伊勢	R033
160	4I17 SD8737	土師器 台付椀	高台	10.7	外；オサエ・ナデ→高台貼付ヨコナデ 内；ナデ	密 ~1㎜小石含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	高台 11/12	中世南伊勢系	R047
161	5J16 SD8737	土師器 鍋	口縁	(33.6)	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	小石含	良	淡黄 2.5Y8/3	口縁 1/12	中世南伊勢系　外面に煤	R031
162	4I17 SD8737	土師器 鍋 B	口縁	31.4	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~1㎜小石含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 2/12	中世南伊勢系　外面に煤付着	R257
163	5J16 SD8737	土師器 羽釜	口縁	29.3	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	小石黒色砂粒多含	並	淡黄 2.5Y8/3	口縁 2/12	中世南伊勢系	R030
164	4I11 SD8737 南部一括	土師器 小皿	口縁	8.0	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~1㎜小石含	良	浅黄橙 10YR8/4	口縁 12/12	中世南伊勢系	R182-2
165	4I11 SD8737 南部一括	土師器 小皿	口縁	9.0	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~1㎜小石含	やや軟	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁 10/12	中世南伊勢系	R183-1
166	4I11 SD8737 南部一括	土師器 茶釜	口縁	15.4	外；ハケメ→ヨコナデ・両耳付加 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~3㎜小石含	良	橙 7.5YR7/6	口縁 4/12	中世南伊勢系	R180
167	4I11 SD8737 南部一括	土師器 鍋	口縁	25.4	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 2/12	中世南伊勢系	R134
168	4I11 SD8737 南部一括	土師器 鍋 C	口縁	21.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ	密 ~2㎜小石含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 3/12	中世南伊勢系　外面に煤付着	R179
169	4I11 SD8737 南部一括	土師器 鍋 C	口縁	26.3	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ・ケズリ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 11/12	中世南伊勢系　外面に煤	R138
170	4I11 SD8737 南部一括	土師器 鍋 C	口縁	24.6	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ・ケズリ	密 ~2㎜小石含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 10/12	中世南伊勢系　外面に煤付着	R260
171	4I11 SD8737 南部一括	土師器 鍋	口縁	28.8	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ・ケズリ	良	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 12/12	中世南伊勢系　外面に煤（厚い）	R140
172	4I11 SD8737 南部一括	土師器 鍋 C	口縁	33.8	外；ハケメ→ヨコナデ 内；板ナデ→ヨコナデ	密 ~1㎜小石含	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁 2/12	中世南伊勢系　外面に煤	R165
173	4I11 SD8737 南部一括	土師器 鍋	口縁	43.6	外；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ 内；板ナデ→ヨコナデ・ヘラケズリ	細砂粒多含	良	浅黄 2.5Y7/3	口縁 2/12	中世南伊勢系　外面に煤	R007
174	4J17・18 SK8745	陶器 椀	口縁 器高	16.1 5.9	外；ロクロナデ→糸切り→高台貼付ヨコナデ→漬け掛け釉 内；ロクロナデ	密 ~2㎜小石含	堅緻	灰白 8/0	口縁 3/12 高台 2/12	灰釉陶器の系統渥美	R160
175	5J22 SK8757	磁器 皿	高台	5.4	外；草花文＋圏線２条 内；牡丹文＋圏線２条ケズリ出し高台，高台畳付きは無釉	密	堅緻	白 N8/0 釉；白，暗緑	高台 12/12	明代青花（染付）	R254
176	4J13 SK8758	土師器 羽釜	口縁	18.9	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~1㎜小石含	良	淡黄 2.5Y8/3	口縁 2/12	中世南伊勢系外面に煤付着	R258
177	4J1 SK8770	陶器 ねり鉢	口縁	37.7	外；指タタキ・オサエ→ヨコナデ 内；摩耗	粗 ~3㎜小石含	堅緻	灰黄褐 10YR6/2	口縁 4/12 底 12/12	常滑口縁端部を意図的に除去・研磨 底部外面にハナレ砂付着	R259
178	5T19 SK8780	土師器 茶釜蓋	口縁	12.0	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ・摘部付加	密 ~2㎜小石含	良	橙 7.5YR7/6	口縁 2/12	中世南伊勢系　外面に煤	R187
179	5J19 SK8780	青磁 皿	口径 器高	11.1 3.1	外；ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉 内；ロクロナデ→スタンプ花文→施釉	密	堅緻	灰白 8/0 釉；淡緑	口縁 6/12 高台 12/12	青磁外反口縁皿　高台内面は一部露胎	R200
180	4J7 SK8767	陶器 擂鉢	口縁	–	外；回転ナデ→施釉 内；回転ナデ→施釉	密	堅緻	浅黄橙 10YR8/4 釉；暗赤灰 7.5R3/1	口縁 1/12	瀬戸大窯期	R249
181	4J7 SK8767	陶器 尊式花瓶	底	(8.6)	外；回転ナデ→糸切り→施釉 内；シボリ目・ナデ	密	堅緻	灰白 8/0	底 3/12	古瀬戸後期	R166
182	5J4 SK8781	土師器 小皿	口縁	8.6	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	粗 ~1㎜小石含	やや軟	灰白 10YR8/1	口縁 11/12	中世南伊勢系	R190
183	4J4 SE8779	土師器 台付椀	口縁	10.0	外；オサエ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密 ~1㎜小石含	良	にぶい橙 10YR7/4	口縁 3/12	中世南伊勢系	R185
184	5I7 SK8777	土師器 小皿	口縁	6.3	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	密 ~1㎜小石含	良	淡橙 5YR8/4	口縁 4/12	中世南伊勢系	R183-2
185	5I7 SK8777	陶器 小皿	口縁	10.5	外；ロクロナデ→ケズリ→施釉 内；ロクロナデ→施釉	密	堅緻	灰白 2.5Y8/2 釉；にぶい赤褐 5YR4/3	口縁 4/12 底 4/12	瀬戸大窯期全面施釉 底外；輪トチン跡 内；トチン跡３ヶ所	R246
186	5I7 SK8777	土師器 茶釜	口縁	13.1	外；ハケメ→ヨコナデ→両耳部付加 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~1㎜小石含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 4/12	中世南伊勢系　外面に煤	R172
187	5I12 SK8776	陶器 壺	口縁	16.4	外；ロクロナデ→施釉 内；ロクロナデ→施釉	密	堅緻	灰白 2.5Y8/2 釉；暗褐 7.5R3/4	口縁 2/12	瀬戸大窯期	R252
188	4J20 SK8784	陶器 擂鉢	口縁	–	外；回転ナデ→櫛目→施釉 内；回転ナデ→施釉	密	堅緻	灰白 2.5Y8/2 釉；暗赤灰 7.5R3/1	口縁 1/12	瀬戸大窯期	R248
189	4J12 SE8741	土師器 羽釜	口縁	30.6	外；ナデ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ・ケズリ	密 ~1㎜小石含	良	橙 10YR7/6	口縁 1/12	中世南伊勢系　外面に煤付着	R261
190	4J12 SE8741	土師器 鍋 B	口縁	38.2	外；ハケメ→ヨコナデ 内；板ナデ→ヨコナデ	密 ~1㎜小石含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 2/12	中世南伊勢系　外面に煤（厚い）	R010

第Ⅴ－10表　第７次調査区出土遺物観察表(5)

No.	出土地区 層位・遺構	器種	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
191	5J10 pit3	陶器 椀	口縁 器高	15.3 5.4	外；ロクロナデ→糸切り→高台貼付ヨコナデ 内；ロクロナデ	粗	堅緻	灰白 8/0	口縁 2/12 高台 12/12	山茶椀　知多・猿投　高台に籾殻痕	R158
192	4J1 pit2	土師器 小皿	口縁	5.9	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	密 ~2 mm小 石含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁 11/12	中世南伊勢系	R181
193	4J13 pit2	土師器 把手付丸鍋	口縁	10.2	外；ハケメ→ヨコナデ→把手部付加 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小 石含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 9/12 把手 6/12	中世南伊勢系　外面に煤	R169
194	5I7 ピット	陶器 天目茶椀	口縁	12.6	外；ロクロナデ→ケズリ→施釉 内；ロクロナデ→施釉	密	堅緻	灰白 10YR8/2 釉；黒 10YR2/1	口縁 1/12	瀬戸大窯期	R250
195	4J1 pit1	陶器 椀	口縁	12.0	外；ロクロナデ→鎬連弁文→施釉 内；ロクロナデ→施釉	密	堅緻	灰白 10YR8/2 釉；淡緑	口縁 5/12 高台 12/12	瀬戸大窯　貼付高台か？　高台内面にトチン跡	R197
196	4J6 ピット	土師器 鍋	口縁	25.7	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	細砂粒 含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 3/12	中世南伊勢系　外面に煤	R013
197	4I6 遺構外	陶器 小皿	口縁	8.6	外；ロクロナデ→糸切り 内；ロクロナデ	密 ~2 mm小 石含	堅緻	灰白 7/0	口縁 4/12 底 12/12	山皿　渥美	R192
198	5K5 遺構外	陶器 小皿	口縁	8.8	外；ロクロナデ→糸切り 内；ロクロナデ	密 ~3 mm小 石含	良	灰白 7/0	口縁 9/12 底 12/12	山皿知多・猿投　内面に漆付着、外面に煤	R193
199	4J11 遺構外	陶器 椀	口縁 器高	16.2 5.6	外；ロクロナデ→糸切り→高台貼付ヨコナデ 内；ロクロナデ	密 ~4 mm小 石含	堅緻	灰白 7/0	口縁 1/12 高台 12/12	山茶椀　渥美　高台に籾殻痕	R156
200	4J11 遺構外	陶器 椀	口縁 器高	15.6 5.1	外；ロクロナデ→糸切り→高台貼付ヨコナデ 内；ロクロナデ	密 ~2 mm小 石含	堅緻	灰白 7/0	口縁 2/12 高台 12/12	山茶椀　渥美	R155
201	5J8 遺構外	陶器 山茶椀	口縁 器高	15.8 5.7	外；ロクロナデ→糸切り→高台貼付ヨコナデ 内；ロクロナデ	粗 ~2 mm小 石含	堅緻	灰白 8/0	口縁 5/12 高台 12/12	山茶椀　渥美	R161
202	5J13 遺構外	陶器 椀	口縁 器高	14.4 5.1	外；ロクロナデ→糸切り→高台貼付ヨコナデ 内；ロクロナデ	密 ~1 mm小 石含	堅緻	灰白 8/0	口縁 2/12 高台 12/12	山茶椀知多・猿投高台に籾殻痕	R157
203	5J4 遺構外	土師器 鍋	口縁	19.0	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	砂粒多 含	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 6/12	中世南伊勢系　外面に煤	R087 － 2
204	5I16 遺構外	磁器 小皿	口縁	8.6	外；草花文＋圏線２条 内；渦摩文＋圏線２条ケズリ出し高台、高台畳付きは無釉	密	堅緻	白 N8/0 釉；青、白青	口縁 2/12 高台 3/12	明代青花（染付）	R253
205	5K25 遺構外	陶器 小皿	口縁	10.4	外；ロクロナデ→ケズリ→施釉 内；ロクロナデ→施釉	密	堅緻	灰白 2.5YR/2 釉；にぶい赤褐 5YR4/3 黒褐 5YR2/1	口縁 3/12 高台 4/12	瀬戸大窯期　全面施釉	R247
206	5I6 遺構外	陶器 水滴	底	3.3	外；ロクロナデ→糸切り→施釉 内；ロクロナデ	密	堅緻	釉；赤灰 2.5YR4/1	底 12/12	注口部と摘部取り付く	R196
207	5J10 4J2 遺構外	陶器 天目茶椀	口縁	15.1	外；ロクロナデ→ケズリ→施釉 内；ロクロナデ→施釉	密	堅緻	灰白 10YR8/2 釉；褐 7.5YR4/3	口縁 1/12	瀬戸大窯期	R251
208	4I6 遺構外	土師器 小皿	口縁	7.2	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	粗 ~2 mm小 石含	良	淡黄 2.5Y8/3	口縁 5/12	中世南伊勢系	R184
209	5J8 遺構外	土師器 台付椀	口縁	10.6	外；オサエ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密	良	灰黄褐 10YR6/2	口縁 2/12	中世南伊勢系	R182 － 1
210	5I17 遺構外	土師器 茶釜蓋	口縁	10.6	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~1 mm小 石含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 2/12	中世南伊勢系	R188
211	4J6 pit1	土師器 茶釜蓋	口縁	11.6	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ・摘部付加	密 ~1 mm小 石含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 4/12	中世南伊勢系	R186
212	5K10 遺構外	土師器 茶釜蓋	口縁	11.5	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ・摘部付加	密 ~1 mm小 石含	良	橙 7.5YR7/6	口縁 3/12	中世南伊勢系	R189
213	5J20 遺構外	土師器 茶釜蓋	口縁	14.8	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁 4/12	中世南伊勢系	R191
214	4J13 遺構外	土師器 茶釜	口縁	14.2	外；ナデ→ヨコナデ 内；板ナデ→ヨコナデ	密 ~1 mm小 石含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 4/12	中世南伊勢系	R173
215	5I16 遺構外	土師器 把手付丸鍋	口縁	11.6	外；ハケメ→ヨコナデ→把手部付加 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小 石含	良	明黄褐 10YR7/6	口縁 9/12 把手 12/12	中世南伊勢系　外面に煤	R170
216	4J9 遺構外	土師器 不明	口縁	22.6	外；オサエ→ハケメ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR7/6	口縁 1/12	中世南伊勢系 穿孔が 2.4 cm間隔で２個残る	R111
217	5I2 遺構外	土師器 鍋Ａ	口縁	18.3	外；ナデ→ヨコナデ 内；板ナデ→ヨコナデ	密 ~1 mm小 石含	良	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁 2/12	中世南伊勢系	R174
218	5K10 遺構外	土師器 鍋Ｃ	口縁	19.1	外；ナデ→ヨコナデ・ケズリ 内；ナデ→ヨコナデ	密 ~2 mm小 石含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁 3/12	中世南伊勢系	R171
219	4I11 遺構外	土師器 鍋Ｂ	口縁	32.6	外；ナデ→ヨコナデ 内；板ナデ→ヨコナデ・ケズリ	密 ~2 mm小 石含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 2/12	中世南伊勢系　外面に煤	R163
220	5I17 遺構外	土師器 羽釜	口縁 鍔部	28.2 31.7	外；ハケメ→ヨコナデ 内；板ナデ→ヨコナデ	密 ~1 mm小 石含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁 2/12	中世南伊勢系　短鍔羽釜 外面に煤	R164
221	5J19 遺構外	土師器 壺	口縁	27.6	外；ハケメ→ヨコナデ 内；ハケメ→ヨコナデ	密 ~2 mm小 石含	良	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁 2/12	中世南伊勢系	R011
222	5I1 遺構外	円筒埴輪	突帯	23.1	外；タテハケ→突帯付加ヨコナデ→ヨコハケ 内；オサエ・ナデ	粗 ~3 mm小 石含	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	突帯 2/12	土師質	R241
223	5J15 礫内 (SE8742)	円筒埴輪	基底	17.0	外；タテハケ→突帯付加ヨコナデ→円形透かし孔 内；オサエ・ナデ	粗 ~3 mm小 石含	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	底 4/12	円形透かし孔１ヶ所残存	R242
224	5I12 遺構外	家形埴輪	基部	－	剥離のため調整不明外面には基部付近に突帯がめぐる	粗 ~1 mm小 石含	軟	黄橙 10YR8/6	基部片		R243
225	5J3 遺構外	石製品 砥石	残長	11.1	研磨面４面木口部分に原石からの切り出し痕残る			浅黄 2.5Y7/3	ほぼ完存	泥岩	R041
226	表採 遺構外	石臼	直径	28.0	擂面は８分割				3/8	火成岩質（ヘンマ岩？）	R153
227	5K10 SD8738	一石五輪 塔	幅	13.9	空輪の一部と風輪のみ残存				上部片	軟質の砂岩製	R256
228	5J1~2 SK8744	一石五輪 塔	残長	41.5	石材は 15.4 cm× 16.7 cm× 41.5 cm調整は粗雑				ほぼ完存	軟質の砂岩製 水・地輪破断面の地輪側に煤付着	R255
229	5J4SX8781	和鏡	直径 高	11.1 0.75	直角式中縁、中線単圏、菊座中隆紐、亀甲地、双雀				良好	亀甲地双雀鏡	R261

第Ⅴ－11表　第７次調査区出土遺物観察表(6)

全景（北から）

南部（西から）

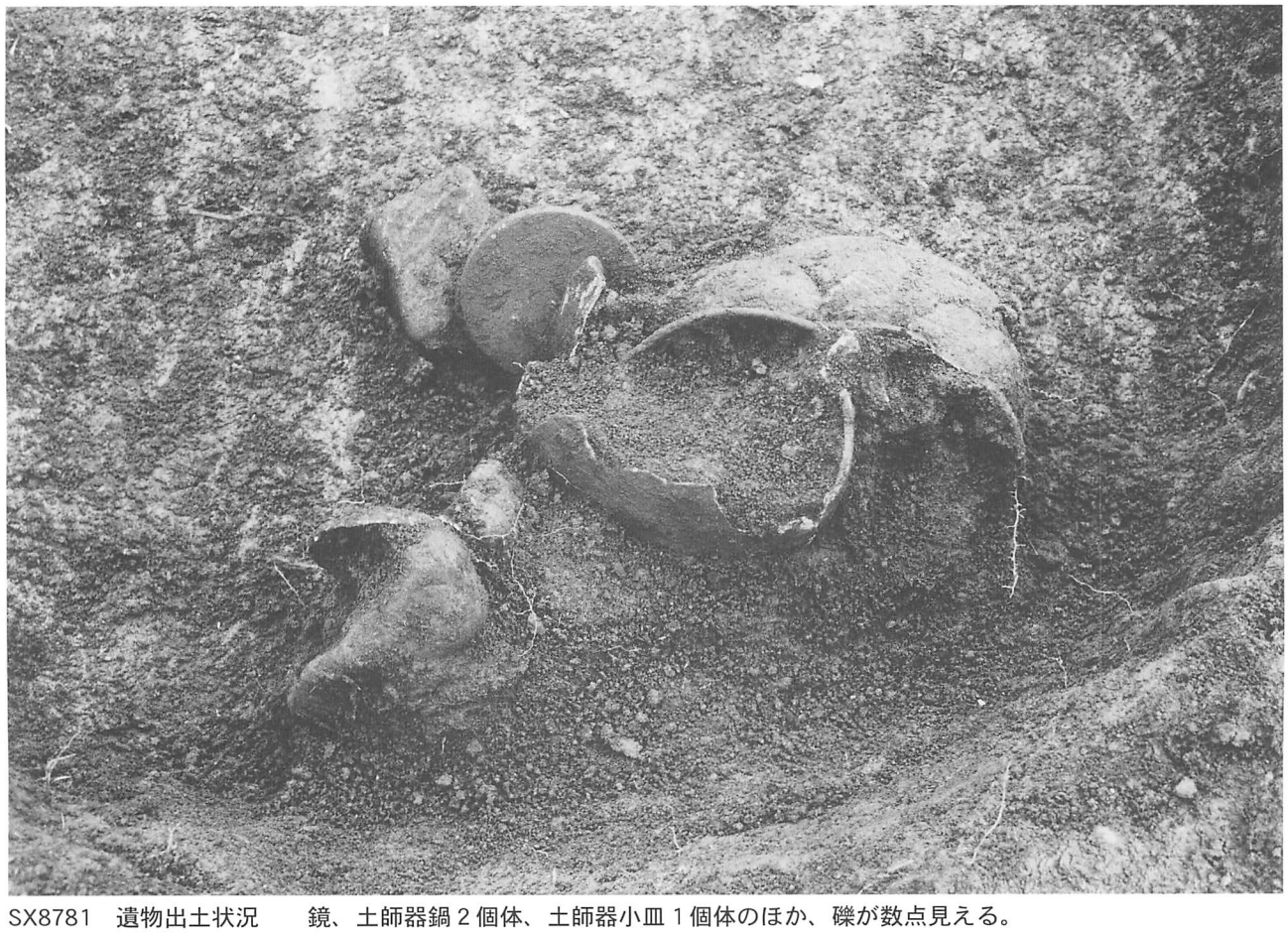
SB8791（北から）

SD8736北部（南から）

中世古道（SD8737～39）（西から）

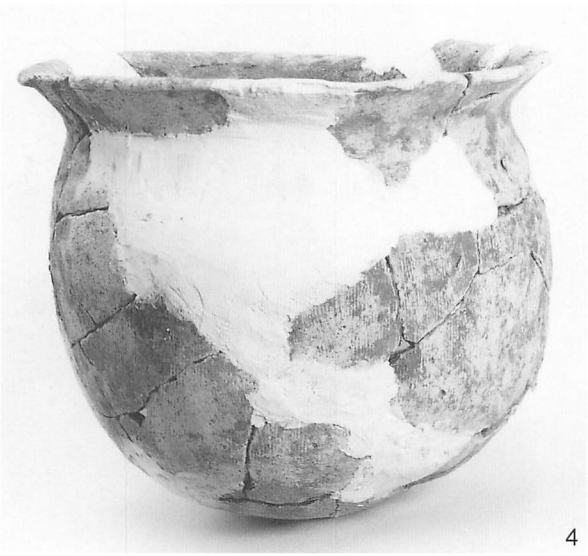
SD8736～8739（北から）

南部（北から）



SX8781　遺物出土状況　　鏡、土師器鍋２個体、土師器小皿１個体のほか、礫が数点見える。

3

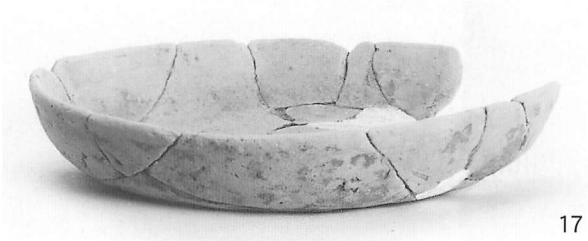

4

5

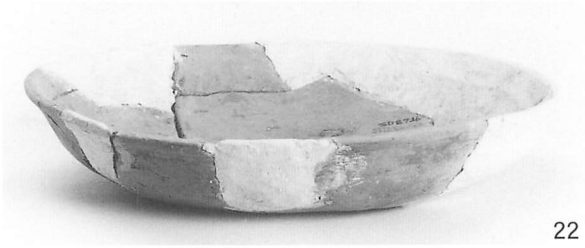
6

7

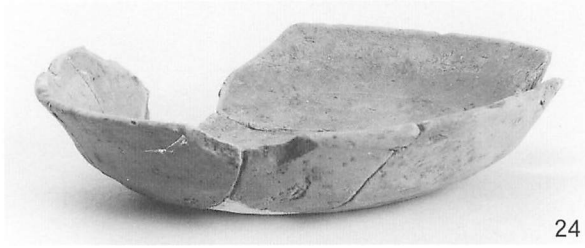
15

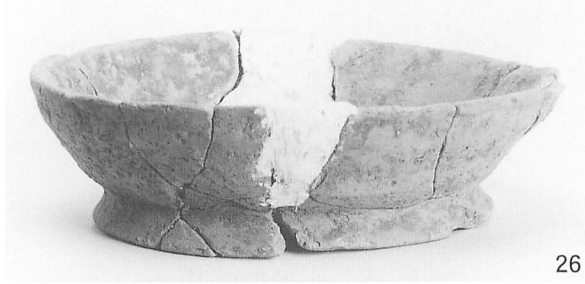

17

18


22

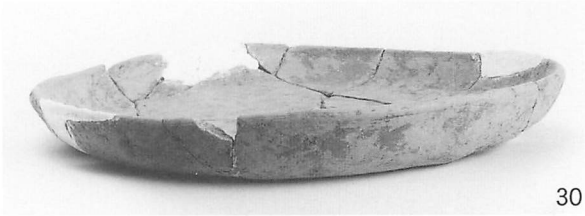
23


24


26

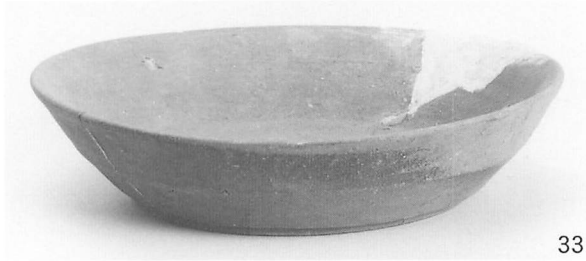
27

29


30

31

32


33

34

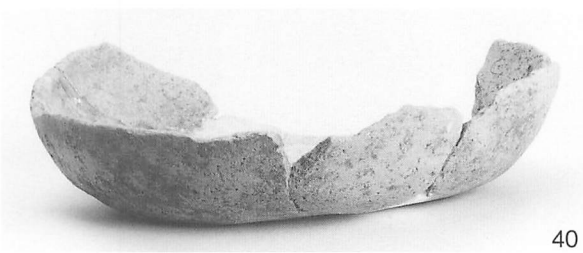
35

37

64

39

52

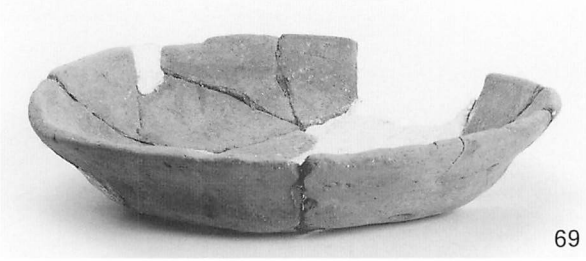

40

56

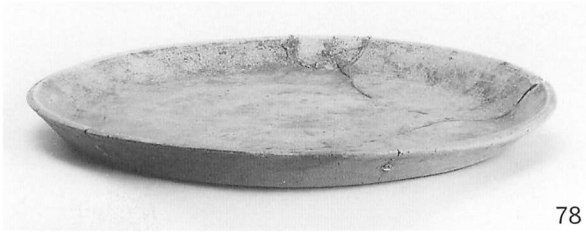
43

47

59

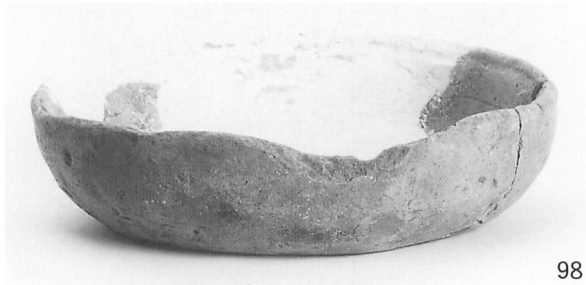

69

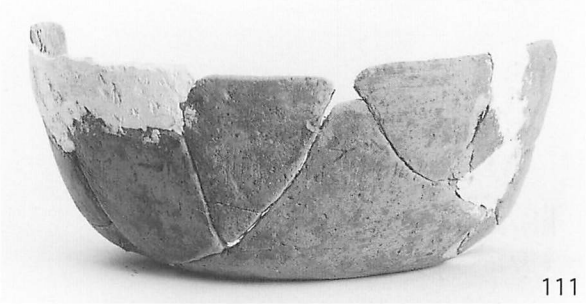
75

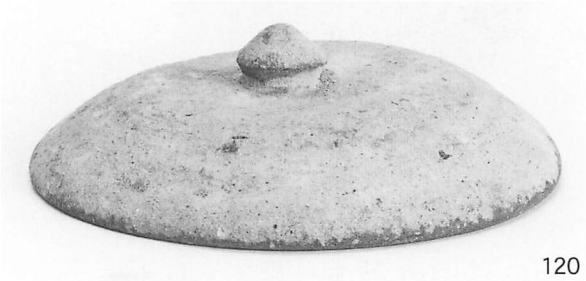

78

96

97


98


111


120

126

132

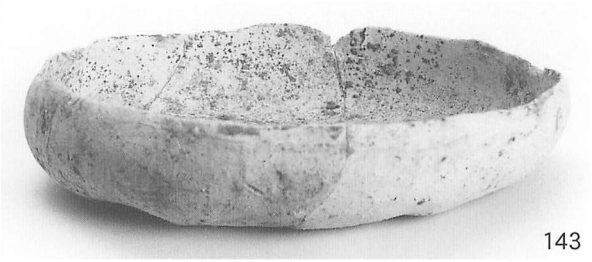
138

146

167

169

170


143

171

193

215

220

223

229

1：2

227

228

Ⅵ　史跡斎宮跡出土資料の保存処理と自然科学的調査

はじめに

斎宮歴史博物館より史跡斎宮跡出土資料７点を保存処理・分析業務委託としてお預かりし、調査を行う機会を得たので報告する。対象資料は以下のとおりである。

・№.１　釦(133次出土)
・№.２　馬具(５次出土)
・№.３　毛彫馬具(137次出土)
・№.４～７　銅銭４点(130次出土)

保存処理及びそれに伴う観察・調査は山岡奈美恵が、機器分析調査は菅井裕子と渡辺智恵美が実施した。

１　保存処理作業

保存処理の工程とその概要は次のとおりである。

（１）処理前調査

写真撮影ならびにＸ線透過試験を実施した。この結果、№.４～７の銅銭は「和同開珎」であること、そのうち№.６は他の３点よりも腐蝕が進行し脆弱な状態であることが確認できた。また、肉眼観察より、№.１には両面に装飾が施されていることも確認できた。なお、Ｘ線透過試験は以下の条件で出力〈電圧〉を調整しながら実施した。

・装置：Ｘ線透過試験装置ＭＧ225型（フィリップス社）
・フィルム：Fuji－X-ray　film　Ix100
・増感紙：鉛増感紙　LF0.03
・焦点フィルム間距離：100cm
・電流：２mA

（２）第１次クリーニング

１～３は地金の銅の劣化が激しくかなり脆い状態だったため、第１次クリーニングは殆ど行っていない。４～７は、表面にこびりついた土を、エタノールを染み込ませて軟らかくしながら、竹串や筆を使って除去した。

（３）洗浄

ポリエチレン製のネット（ダイオネット：ダイオ化成）で遺物を包んで養生し、有機溶剤（キシレン・アセトン・酢酸エチルの混合液）の中に浸漬して表面に付着する油脂分や土等の不純物を除去した。

（４）ＢＴＡ処理

今回保存処理した遺物は全て銅製品であったため、銅の安定化処理法であるＢＴＡ処理を実施した。これは、化学反応により錆の進行を抑える方法である。ＢＴＡ溶液（ベンゾトリアゾール・３％アルコール溶液：片山化学）に浸漬した状態で減圧含浸を実施した。

（５）樹脂含浸

遺物強化と防錆のために、フッ素系アクリル樹脂（Ｖフロン・Ｌ559溶液/大日本塗料(株)）による減圧含浸を３回実施した。

この工程の終了した時点で、№.６が数点の破片に分割されていることが判明した。Ｘ線写真を見ても脆弱であることは予想されたため、充分に養生を施した上で処理作業を行ったのだが想定していた以上に脆く、とくに縁部分が細かく割れてしまった。文字部分は地金が他よりも分厚い構造であったため、ほぼ状態を保った状態であった。今後このような事がないよう、遺物の状態にはさらに注意を配り、養生の方法について改善を図らなければならない。

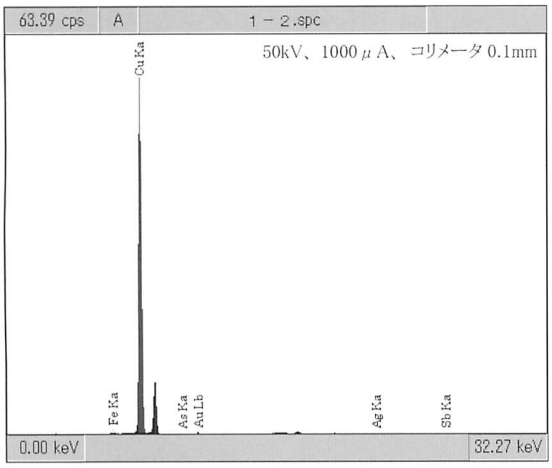
（６）第２次クリーニング

第１次クリーニングで除去しきれなかった錆･土の除去と、№.１、３については鍍金面の表出を行った。ただし、地金の強度が充分でない箇所については欠損する恐れがあったので、鍍金面の表出を行わなかった。

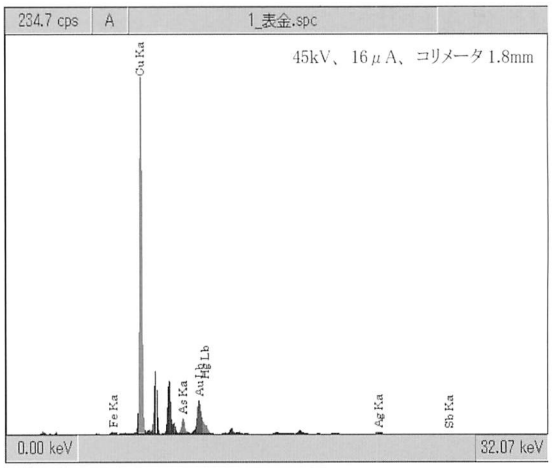
鍍金面の表出は、実体顕微鏡を覗きながら、電子工具（ＥＮＧＲＡＶＥＲ／ＤＲＥＭＥＬ社）や竹串、筆を用いて慎重にクリーニングを行った。その結果、№.１の表面は表が金、裏が銀による装飾であることが判明した。また№.３については、線刻を施した鏨の痕跡が詳細に分かるようになった。これらの分析調査については後述する。

（７）樹脂塗布

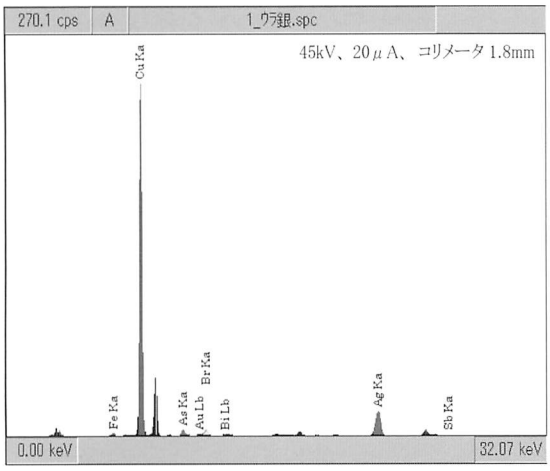
防錆効果を上げ遺物を保護するために、含浸時の２倍に希釈した樹脂を２回遺物に塗布した。



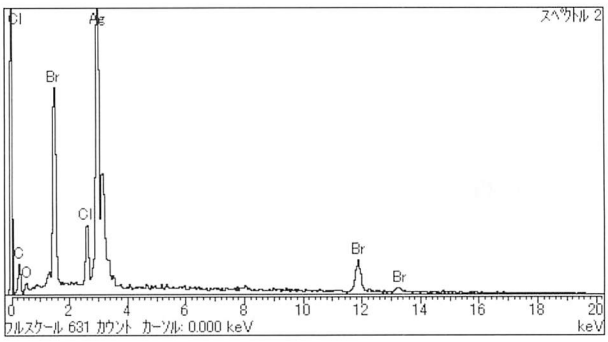
第VI－1図　分析結果(1)



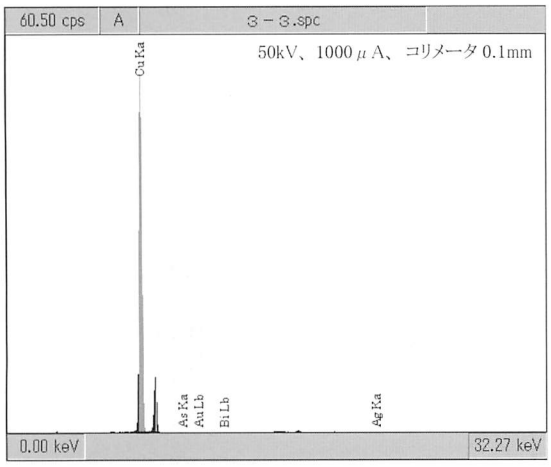
第VI－2図　分析結果(2)



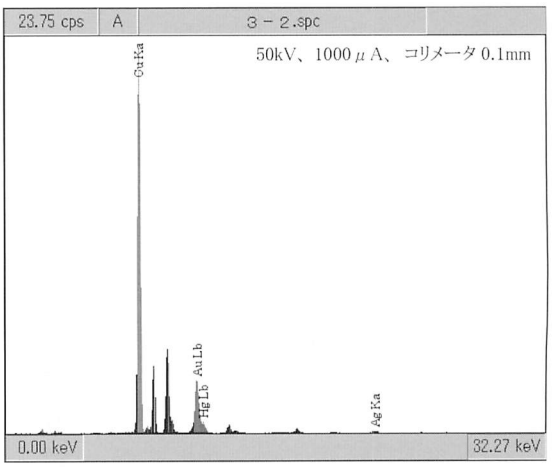
第VI－3図　分析結果(3)



第VI－4図　分析結果(4)



第VI－5図　分析結果(5)



第VI－6図　分析結果(6)

（8）復元・整形

No.6の接合は、シアノアクリレート系接着剤（1781/スリーボンド社）を用いて行い、No.３・６の空隙部分や欠損部にはエポキシ系樹脂（アラルダイトXNR/H6504）を充填して復元・整形を行った。

（9）樹脂塗布

樹脂塗布を１回行った。

（10）仕上げ

樹脂含浸や樹脂塗布による光沢を、艶消し剤（ヒットスプレー/㈱カンペハピオ）を用いて抑え、復元部には水溶性アクリル絵の具（アクリラ/ホルベイン社）を用いて周囲と違和感の無い程度に彩色を施し、処理後の状態を写真撮影して処理を完了した。

3　自然科学的調査

（1）分析対象と内容

・No.1　第133次出土釦、表面装飾技法

・No.3　第137次出土毛彫馬具、表面装飾技法、線刻観察

（2）分析

分析に用いた装置は以下の通りである。

・走査型電子顕微鏡

（以下SEM、日立製作所㈱　S-3500N）

・電子線マイクロアナライザー

（以下EPMA、㈱堀場製作所製 EX-300）

条件：加速電圧25kV　真空度１～５Pa

・エネルギー分散型ケイ光Ｘ線分析装置

（以下ＸＲＦ、セイコーインスツルメンツ㈱製　ＳＥＡ5230）条件は各スペクトルに記載

XRF分析で照射するＸ線は透過力が強いため、試料の厚みによっては最表層に加え下層の情報も得られる。今回の測定条件はカリウム（K）より重い元素をみることを目的にしている。一方、EPMAでは電子線を当てるため、XRFに比べて表層の情報が得られる。軽元素および低エネルギー側の特性Ｘ線の検出に適している。

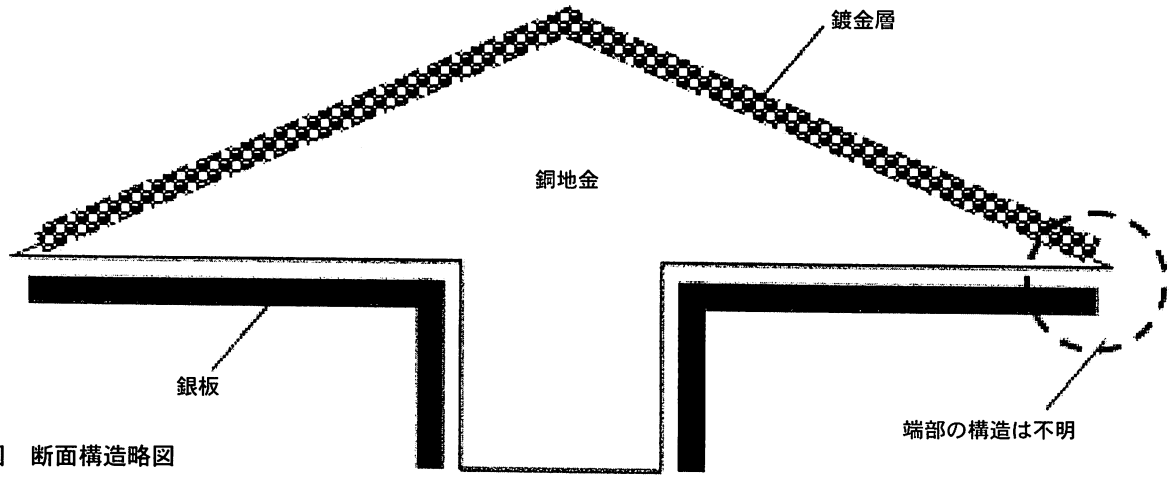
今回の分析では、試料の状態に応じて２つの手法を使い分けて調査した。

（3）結果と考察

第133次出土資料（No.1）　　表面は金色を呈しており、裏面は部分的に銀白色である。地金と考えられる部分①は緑色の腐食生成物に覆われており、この部位からはXRFで主に銅（Cu）を検出した（第Ⅵ－１図）。このことから地金は銅製であると考えられ、他にヒ素（As）、ビスマス（Bi）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）を含む。

表面の金色部分②からは金（Au）、水銀（Hg）を検出した（第Ⅵ－２図）。SEM観察およびEPMA分析の結果では、銅の上に金と水銀を含む層が存在していた。この層の表面は平らであり、平滑に磨かれたような状態を呈していたが（ＳＥＭ１）、部分的にアマルガム粒子とみられる箇所（ＳＥＭ２）を確認した。[1]このことから、銅の上に金アマルガムを用いた鍍金で装飾しているものと考える。

一方裏面③は銀（Ag）を顕著に含んでおり、金（Au）と水銀（Hg）は検出されなかった（第Ⅵ－３図）。この部位の表層からは銀（Ag）、塩素（Cl）、臭素（Br）を検出し（第Ⅵ－４図）、立方体が重なり合ったような結晶様であったため（ＳＥＭ３）、臭化銀や塩化銀などのハロゲン化銀であるとみられる。本来は



Ⅵ－７図　断面構造略図

銀であったものが、土中のハロゲンと結合したと考えられる。加えて、④の部分には銅の腐食生成物に覆われた銀を含む層が存在する（ＳＥＭ４）ことからみて、この資料の裏面は銀の板（又は箔）により装飾されたと考える。但し、銀板の末端の様子は明瞭ではなく、当初から裏面のみ銀板を付けたのか、表面の縁まで巻き込んでいたのかは不明である（第Ⅵ－７図）。

第137次出土資料（№.３）　地金①は主に銅（Cu）を含み、銅製である（第Ⅵ－５図）。他にヒ素（As）、ビスマス（Bi）、銀（Ag）を含む。表面の金色部分②からは金（Au）と水銀（Hg）とを検出した（図６）。SEM観察とEPMA分析では銅の地金の上に金の層が存在することは確認できたが、今回の観察では№.１のようなアマルガム粒子はみられなかった（ＳＥＭ６）。四隅の鋲の周囲の凹部③では金箔が重なっているような状況（ＳＥＭ７、８）であり、この資料は銅地金の上に水銀（又はアマルガム）を用いて金箔を貼り付けたものである可能性が想定される。

金具周囲の線刻文様の溝④には鏨痕とみられる条痕があり（カラー図版）、実体顕微鏡による観察では断面構造はU字型で幅は約0.6mm、条痕のピッチは約0.3mmであった。また、溝は３～５回の鏨打ちで彫られていることがわかった。

（山岡奈美恵・菅井裕子・渡辺智恵美
財団法人　元興寺文化財研究所）

４　分析結果をうけて

第133次出土資料については、表面が銅地金に金メッキを施していた。一方、裏面は銀の板か箔での装飾が施された入たことが確認できた。当初から裏面のみに銀板を付けたのか、表面の縁まで巻き込んでいたのかは不明という結果であった。

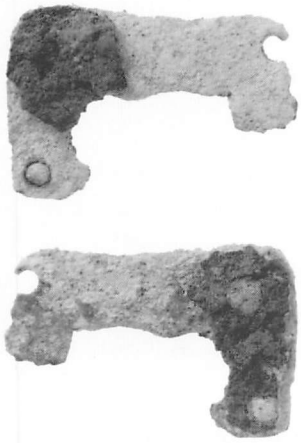
第137次出土資料については、銅地金に金箔を貼りつけた金メッキであることが判明した。実体顕微鏡の観察から表面に施されているキザミは３～５回の鏨打ちで彫られたものであることが判明した。材質もさることながら、肉眼では確認できない製作技法の復原まで、踏み込むことができたのは大きな成果であると考える。

文末ではあるが、協力をいただいた山岡奈美恵・菅井裕子・渡辺智恵美（ともに財団法人　元興寺文化財研究所）の各氏にお礼申し上げる。

（小濵　学）

註

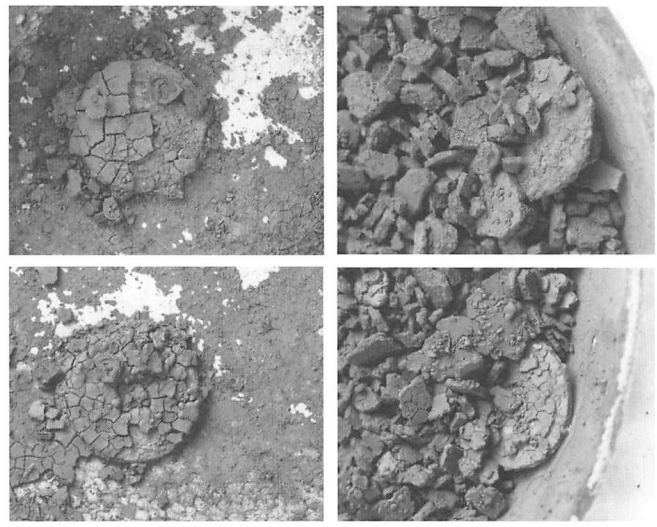
(1)村上　隆、新山　栄：古文化財の科学、38、45-54（1993）



No.2　馬具　処理前

No.2　馬具　処理後

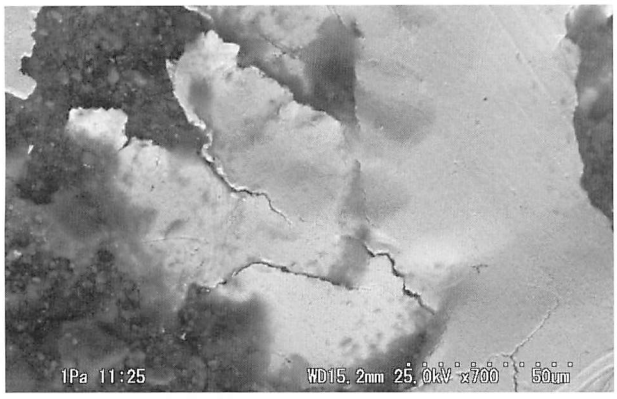
No.4～7　銅銭　処理前



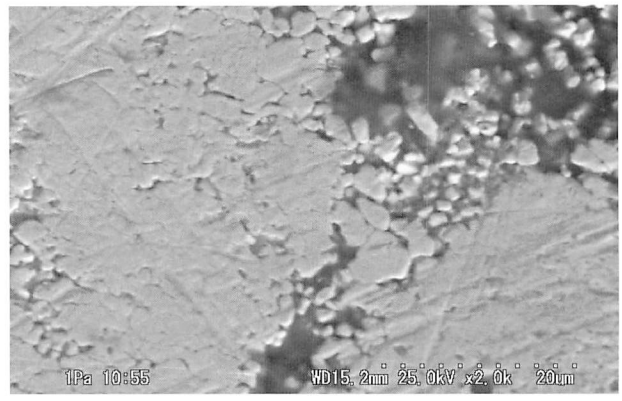
No.4～7　銅銭　処理前（拡大）

No.6　銅銭　処理中

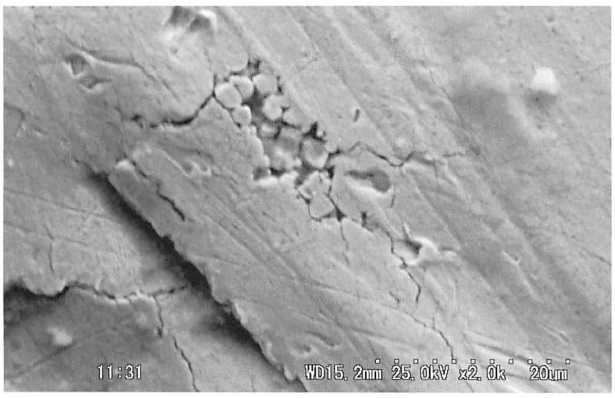
No.4～7　銅銭　処理後



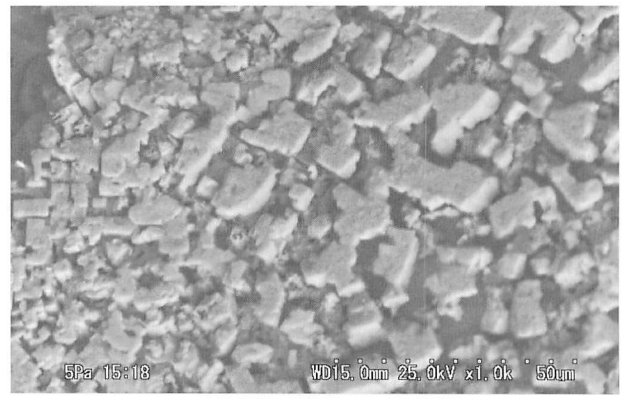
ＳＥＭ１



ＳＥＭ２



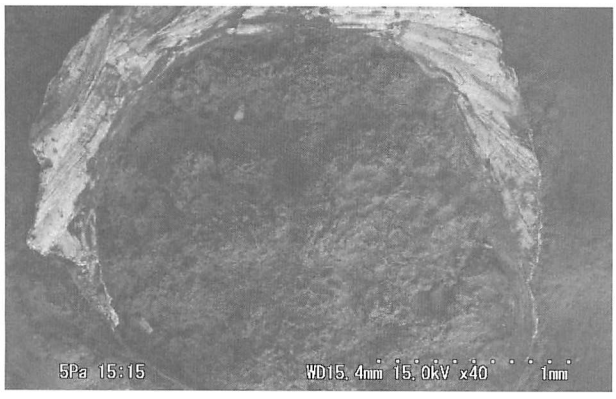
ＳＥＭ３



ＳＥＭ４

ＳＥＭ５

ＳＥＭ６



ＳＥＭ７

ＳＥＭ８

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせきさいくうあと　へいせい14ねんどはっくつちょうさがいほう
書名	史跡斎宮跡　平成14年度発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	泉雄二・伊藤裕偉・小濵学・水橋公恵
編集機関	斎宮歴史博物館
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL0596－52－7027
発行年月日	西暦　2004年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯　°′″	東経　°′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
斎宮跡	多気郡明和町 斎宮・竹川	24442	210	34°31′55″ ~34°32′30″	136°36′16″ ~136°37′37″	20020401 ~20030331	460㎡ (第136次) 700㎡ (第137次) 92㎡ (第139次)	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斎宮跡第136次	官衙	奈良　平安	掘立柱建物 土坑 区画溝	土師器 須恵器 緑釉陶器	寮庫と類似する遺構配置
斎宮跡第137次	官衙・集落	奈良　平安　鎌倉 室町以降	竪穴住居 掘立柱建物 土坑　土壙墓 地鎮遺構	弥生土器　土師器 須恵器　緑釉陶器 陶器(山茶椀・山皿) 馬具(帯飾金具・轡)	大型掘立柱建物(東西6間、南北2間以上)を検出。初期斎宮関連か。
斎宮跡第139次	官衙	奈良～鎌倉	竪穴住居 道路(側溝) 井戸	土師器 須恵器	奈良古道の道路側溝検出。
斎宮跡第7次	官衙・集落	奈良　平安 鎌倉　室町 以降	竪穴住居 掘立柱建物 土坑　道路跡	土師器 須恵器 中世陶磁器・和鏡	奈良古道の道路側溝検出。

＊VIは、(財)元興寺文化財研究所山岡奈美恵・菅井裕子・渡辺智恵美各氏の協力をえた。

史 跡 斎 宮 跡

平成14年度

発 掘 調 査 概 報

平成16(2004)年3月

編集・発行　斎 宮 歴 史 博 物 館
印　　刷　千巻印刷産業株式会社